
久喜市

栗橋宿跡 VI

首都圏氾濫区域堤防強化対策における
埋蔵文化財発掘調査報告
(第1分冊)

2022

国土交通省 関東地方整備局
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



1 第 497 号土壙出土遺物 陶磁器



2 第 497 号土壙出土遺物 土器



1 鍛冶関連遺物



2 栗橋宿跡第8地点出土遺物 石製品

序

埼玉県北部の県境を流れ下る利根川は、坂東（関東）にある大河であり、河川の長男に指定され「坂東太郎」とも呼ばれています。その流域に育まれた肥沃で広大な大地には、1,280万人にもおよぶ人々が生活を営んでいます。

また、万葉集の東歌に「刀祢河泊」と詠まれるなど、いにしえからその脅威と恵みに対し、人々は畏怖と親愛の想いを持ってきました。滔々たる流れは交通路として、また農業・生活・工業用水の源として、限りない恩恵をもたらしています。一方、過去にはたびたび恐ろしい水害を引き起こしてきました。

そのため国土交通省では災害を未然に防ぎ、首都圏の安全性を確保するため、氾濫区域の堤防強化対策事業を実施しています。

この事業地に含まれる加須・羽生・久喜地区には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。久喜市の栗橋宿跡はその一つであり、当該事業に伴う事前調査として、国土交通省関東地方整備局の委託を受け、発掘調査を当事業団が実施しました。

江戸時代に日光道中の宿場であり、商人や職人の住まいが立ち並んでいた栗橋宿は、利根川を船で越える房川の渡しに関所が置かれ、交通の要衝として栄えました。今回の調査では、宿場の町屋に立ち並ぶ建物跡や敷地境の区画施設、廃棄土壌を中心に、埋設桶や小鍛冶遺構、畠跡などが発見されたほか、江戸時代中期の火災跡の一部が見つかりました。また、鞆の羽口や鉄滓といった鍛冶関連遺物をはじめ、多くの陶磁器類、木製品、石製品など、当時の生活をうかがうことができる貴重な発見がありました。

本書は、これらの発掘調査結果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に御活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、御尽力を賜りました国土交通省関東地方整備局、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、久喜市教育委員会、地元関係者等の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和4年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 依 田 英 樹

例 言

- 1 本書は久喜市に所在する栗橋宿跡第8地点の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
栗橋宿跡第8地点（第1次）
久喜市栗橋中央2丁目3517-3他
平成28年5月10日付教生文第2-2号
栗橋宿跡第8地点（第2次）
久喜市栗橋中央2丁目3517-3他
平成29年5月8日付教生文第2-3号
- 3 発掘調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策に先立つ埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課（当時）が調整し、国土交通省関東地方整備局利根川上流事務所の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。
発掘調査事業（平成28年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成28年度埋蔵文化財発掘調査」
発掘調査事業（平成29年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策（加須・久喜地区）における平成29年度埋蔵文化財発掘調査」
整理・報告書作成事業（令和元～3年度）
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における平成31年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和2年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
「首都圏氾濫区域堤防強化対策における令和3年度埋蔵文化財発掘調査（整理）」
- 5 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3

に示した組織により実施した。

第1次調査は平成28年4月1日から平成29年3月31日まで実施し、赤熊浩一、山本禎、大屋道則、矢部瞳、宮村誠二、浅海莉絵、宮井英一が担当した。

第2次調査は平成29年4月1日から平成29年9月30日まで実施し、岩瀬譲、大屋道則、魚水環、田續良太が担当した。

整理報告書作成事業は、令和元年8月1日から令和4年3月31日まで実施し、令和元年8月1日から令和4年3月31日まで水村雄功、令和元年10月1日から12月31日まで青木弘、令和2年1月1日から3月31日まで福田聖、令和2年4月1日から6月31日・令和3年2月1日から3月31日まで魚水環、令和2年7月1日から令和3年3月31日まで上野真由美が担当した。

報告書は、令和4年3月22日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第473集として印刷・刊行した。

- 6 発掘調査における基準点測量は（株）中央航業に委託した。空中写真撮影は（株）新日本エグザに委託した。写真測量は（株）東京航業研究所に委託した。
- 7 発掘調査における自然科学分析は（株）パリーノ・サーヴェイに委託した。
- 8 発掘調査における写真撮影は赤熊、山本、大屋、矢部、宮村、浅海、宮井、岩瀬、魚水、田續が行い、出土遺物の写真撮影は水村が行った。巻頭写真用の遺物撮影は、小川忠弘氏に委託した。
- 9 文字資料の釈文は、久喜市教育委員会・久喜市立郷土資料館の協力を得た。
- 10 出土品の整理・図版作成は水村、魚水、青木、福田、上野が行い、木製品は矢部瞳、

金属製品は瀧瀬芳之・井上真帆、羽口・鉄淳は魚水環、古代以前の遺物は大谷徹・滝澤誠の協力を得た。また、町並みの復元、文献調査にあたっては、劔持和夫の協力を得た。

- 11 文献調査に際して、久喜市立郷土資料館より『栗橋宿往還絵図』に関する資料提供を受けた。
- 12 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課、IV-2・3の羽口・鉄淳、VI-4を魚水環、その他を水村が行っ

た。

- 13 本書の編集は水村が行った。
- 14 本書にかかる諸資料は令和4年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
- 15 発掘調査と本書の作成にあたり、下記の関係機関の方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。
久喜市市教育員会 池尻篤 岩浪雛子
鈴木裕子 富元久美子 中野貴久
中村和夫 堀内謙一 巻島千明 丸山謙司

凡例

- 1 遺跡全体におけるX・Yの数値は、世界測地系、国家標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00′ 00″、東経139° 50′ 00″）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は全て座標北を指す。

F7-C7グリッド北西杭の座標は、 $X = 15480.000\text{ m}$ ・ $Y = -11640.000\text{ m}$ 、北緯36° 08′ 22.0325″・東経139° 42′ 14.3778″である。

F7-F8グリッド北西杭の座標は、 $X = 15450.000\text{ m}$ ・ $Y = -11630.000\text{ m}$ 、北緯36° 08′ 21.0596″・東経139° 42′ 14.7794″である。

F7-G8グリッド北西杭の座標は、 $X = 15440.000\text{ m}$ ・ $Y = -11630.000\text{ m}$ 、北緯36° 08′ 20.7351″・東経139° 42′ 14.7799″である。

- 2 調査に際して使用したグリッド名称は、事業地内の全体を覆うように設定した。座標値 $X = 16000.000\text{ m}$ 、 $Y = -12300.000\text{ m}$ を北西の原点（A1-A1グリッド）とし、100×100mの大グリッドを設定し、さらにその中を10×10mの小グリッドに細分した。

- 3 グリッドの名称は、北西原点を基点に北から南にアルファベット（A・B・C…）、

西から東に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。同様に、小グリッドは各大グリッドの北西隅を基点に、北から南にA～J、西から東に1～10とし、グリッド内を100に区分した。これらを合わせた呼称は、ハイフォン（-）をはさみ、大グリッドを左に、小グリッドを右に表記した。（大グリッド）-（小グリッド）

- 4 本書の本文・挿図・表・写真図版に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

S B…建物跡 基礎…基礎状遺構
甕…埋設甕 桶…埋設桶 S E…井戸跡
S D…溝跡 焼土…焼土遺構 畝…畝跡
小鍛冶…小鍛冶跡 P…ピット・柱穴
S K…土壇 S X…性格不明遺構

- 5 本書における挿図は、一部の例外を除き以下の縮尺を原則とした。

全測図 1/400
遺構図 1/80・1/60・1/30
遺物実測図・拓影図
1/2・1/3・2/3・1/4・1/6

建物跡の遺構図は原則、日光道中側を上にして示した。

- 6 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。遺構の一覧表の

計測値単位は全てmである。

7 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。

遺物計測値は、陶磁器・土器等cm、銭貨mm、重さをg単位とした。

計測値の（ ）は復元推定値、[]は既存値を示す。陶磁器の計測値の内、口径は口縁上端部、底径は畳付下端部の径を示した。蓋は底径欄に下端の径を示した。輪高台状のつまみが付く蓋は底径欄に下端部の径、口径欄につまみ上端部の径を示した。また、備考欄に適宜最大径を示した。

瓦の計測値は、「長さ」に瓦当面からの長さ（奥行）、「幅」に全幅、「厚さ」に平瓦部の厚さ、「高さ」に接地面からの高さ、「径」に瓦当径を記載した。

胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石

D：長石 E：石英 F：軽石

G：砂粒子 H：赤色粒子 I：白色粒子

J：針状物質 K：黒色粒子 L：その他

M：チャート

焼成は良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

残存率は図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

備考には出土位置、推定生産地、文様等

の特徴、その他特筆事項を記した。

8 遺物実測図の網掛けは、漆、被熱、タール付着の範囲を基本とした。網掛けの濃度によって種類を区分し、図中に例示した。

主な網掛けは以下のとおりである。

赤漆 20%、茶漆 30%、黒漆 35%

炭化 50%

羽口（還元）10%、羽口（酸化）20%

羽口（滓化）30%

銭貨のうち、拓本で表現できないものについては、X線撮影を行い、線画で表現した。

9 本書に掲載した地形図類は国土地理院発行の1/50000地形図、久喜市発行の1/2500都市計画図を編集のうえ、使用した。

10 遺構番号は原則、調査時のものを用いた。調査の都合上、遺構番号に欠番が生じているが、これらについても欠番のまま扱った。また、遺構番号が重複しているものについては、番号の振替を行った。欠番遺構及び遺構番号を変更したものは下記の表に示した。

また、第二面下層遺構については、第三面として扱い、遺構番号は調査時のものを用いた。

11 文中の引用文献等は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に掲載した。

遺構番号振替・欠番一覧表

第一面

新	旧	備考
SB6	SD3(旧 K126) SK130・136・ 297	
基礎 1	SK298	
基礎 2	SK142	
基礎 3	SK201	
基礎 4	SK198	
基礎 5	SK232	
基礎 6	SK217	
桶 6	SK111・P14	
桶 23	枘 1	
欠番	桶 13	
欠番	桶 14	
欠番	杭列 4	SD2 に統合
SD32	杭列 2	
焼土 1	SK209・210	
焼土 2a	SK17	
焼土 2b	SK16	
焼土 3	SK27	

新	旧	備考
焼土 4	SK33	
焼土 5a	SK77	
焼土 5b	SK68	
焼土 5c	SK67	
焼土 6	SK315	
SK129	SK273	
欠番	SK55	
欠番	SK61	
欠番	SK74	
欠番	SK79	桶 3・4・7 掘り方
欠番	SK81	SK80 に統合
欠番	SK82	SK80 に統合
欠番	SK162	SK161 に統合
欠番	SK196	SK264 に統合
欠番	SK197	SK264 に統合
欠番	SK200	SK228 に統合
欠番	SK205	SK264 に統合
欠番	SK206	SK203 に統合

新	旧	備考
欠番	SK207	SK256 に統合
欠番	SK211	SK264 に統合
欠番	SK212	SK264 に統合
欠番	SK215	
欠番	SK230	
欠番	SK238	
欠番	SK239	SK228 に統合
欠番	SK258	
欠番	SK274	
欠番	SK279	SK203 に統合
欠番	SK287	
欠番	SK290	SK203 に統合
欠番	SK301	
欠番	SK316	
欠番	SK326	SK203 に統合
欠番	SK327	SK203 に統合
欠番	SK330	

第二面

新	旧	備考
SB5	SD15	
SB4	SB4	三面に移動
SE2	SK393	
SE3	SK390	
SE5	SK433	
SE8	桶 18	
SD19	SD19	三面に移動
SD20	SD20	三面に移動
SD23~29・ 31	SD23~29・31	三面に移動
欠番	SD22	
SK407	SK483	
欠番	SK363	
欠番	SK366	
欠番	SK380	
欠番	SK389	
欠番	SK397	SK497(三面)に統合
欠番	SK423	
欠番	SK439	
欠番	SK446	
欠番	SK475	SK495(三面)に統合
欠番	SK478	SK407 に統合

新	旧	備考
欠番	SK493	SD20(三面)に統合
欠番	SK501	
欠番	SK502	
欠番	SK503	
欠番	SK504	
欠番	SK508	
欠番	SK519	SK500(三面)に統合
SK473	SK473	三面に移動
SK480	SK480	三面に移動
SK490	SK490	三面に移動
SK494	SK494	三面に移動
SK495	SK495	三面に移動
SK496	SK496	三面に移動
SK497	SK497	三面に移動
SK499	SK499	三面に移動
SK500	SK500	三面に移動
SK514	SK514	三面に移動
SK515	SK515	三面に移動
SK516	SK516	三面に移動
SK517	SK517	三面に移動
SK518	SK518	三面に移動
欠番	P39	

第三面

新	旧	備考
SK554	SD30	
欠番	SK543	

目次

(第1分冊)

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

I 発掘調査の概要	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 発掘調査・報告書作成の経過	2
(1) 発掘調査	2
(2) 整理・報告書の作成	2
3 発掘調査・報告書作成の組織	3
II 遺跡の立地と環境	5
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
(1) 中世の栗橋とその周辺	7
(2) 近世の栗橋とその周辺	11
(3) 栗橋宿の様子	14
(4) 近世から近代への栗橋	17
III 遺跡の概要	19
IV 遺構と遺物	39
1 第一面の遺構と遺物	
(1) 建物跡	39
(2) 基礎状遺構	65
(3) 埋設桶	70
(4) 埋設甕	84
(5) 杭列	85
(6) 木樋	92
(7) 溝跡	92
(8) 焼土遺構	109
(9) 土壇	115
①区画 AA の土壇	115
②区画 AB の土壇	115
③区画 AC の土壇	148
④区画 AD の土壇	205

(第2分冊)

⑤区画 AE の土壇	255
⑥区画 AF の土壇	360
⑦区画 AG の土壇	441
(10) ピット	500
(11) 遺構外出土遺物	502
2 第二面の遺構と遺物	
(1) 建物跡	516
(2) 埋設桶	517
(3) 井戸跡	525
(4) 溝跡	547
(5) 性格不明遺構	550

(第3分冊)

(6) 土壇	551
①区画 AA の土壇	551
②区画 AB の土壇	572
③区画 AC の土壇	631
④区画 AD の土壇	669
⑤区画 AE の土壇	677
⑥区画 AF の土壇	699
⑦区画 AG の土壇	710
(7) ピット	715
(8) 遺構外出土遺物	719
3 第三面の遺構と遺物	
(1) 建物跡	733
(2) 溝跡	734
(3) 畝跡	743
(4) 小鍛冶跡	745
(5) 土壇	746

①区画 AA の土壌	746	V 自然科学分析	997
②区画 AB の土壌	756	1 堆積物微細構造軟X線分析 (1)	997
③区画 AC の土壌	759	2 砂粒組成分析・粒度分析 (1)	1003
④区画 AD の土壌	766	3 堆積物微細構造軟X線分析 (2)	1008
⑤区画 AE の土壌	894	4 砂粒組成分析・粒度分析 (2)	1012
⑥区画 AF の土壌	904	5 火山灰分析	1017
⑦区画 AG の土壌	920	6 寄生虫卵分析	1019
(6) ピット	925	7 花粉分析	1025
(7) 遺構外出土遺物	925	VI 調査のまとめ	1027
4 文字資料	933	(第4分冊)	
5 出土遺物一覧表と遺構の時期	941	写真図版	

挿図目次

(第1分冊)

第1図	埼玉県 の地形	5	第35図	第6号建物跡出土遺物(2)	62
第2図	栗橋宿跡周辺 の地形	6	第36図	第6号建物跡出土遺物(3)	63
第3図	周辺 の遺跡	8	第37図	基礎状遺構	66
第4図	遺跡位置図	20	第38図	基礎状遺構出土遺物(1)	67
第5図	基本土層西壁(1)	22	第39図	基礎状遺構出土遺物(2)	68
第6図	基本土層西壁(2)	23	第40図	埋設桶(1)	71
第7図	基本土層西壁(3)	24	第41図	埋設桶(2)	72
第8図	基本土層下層	24	第42図	埋設桶(3)	73
第9図	調査区第一面全体図	27	第43図	埋設桶出土遺物(1)	76
第10図	調査区第一面分割図(1)	28	第44図	埋設桶出土遺物(2)	77
第11図	調査区第一面分割図(2)	29	第45図	埋設桶出土遺物(3)	78
第12図	調査区第二面全体図	30	第46図	埋設桶出土遺物(4)	79
第13図	調査区第二面分割図(1)	31	第47図	第1号埋設甕	83
第14図	調査区第二面分割図(2)	32	第48図	第1号埋設甕出土遺物	84
第15図	調査区第三面全体図	33	第49図	第1号杭列	86
第16図	調査区第三面分割図(1)	34	第50図	第3号杭列	87
第17図	調査区第三面分割図(2)	35	第51図	第5号杭列	88
第18図	第8地点区割図案	36	第52図	第6号杭列	89
第19図	第1号建物跡(1)	40	第53図	第1号木樋	91
第20図	第1号建物跡(2)	41	第54図	第1号溝跡	94
第21図	第1号建物跡出土遺物(1)	42	第55図	第2号溝跡	95
第22図	第1号建物跡出土遺物(2)	43	第56図	第32号溝跡	96
第23図	第1号建物跡出土遺物(3)	44	第57図	第4~12号溝跡	97
第24図	第1号建物跡出土遺物(4)	45	第58図	溝跡出土遺物(1)	99
第25図	第1号建物跡出土遺物(5)	46	第59図	溝跡出土遺物(2)	100
第26図	第1号建物跡出土遺物(6)	47	第60図	溝跡出土遺物(3)	101
第27図	第2号建物跡(1)	52	第61図	溝跡出土遺物(4)	102
第28図	第2号建物跡(2)	53	第62図	溝跡出土遺物(5)	103
第29図	第2号建物跡出土遺物	54	第63図	溝跡出土遺物(6)	104
第30図	第3号建物跡	56	第64図	焼土遺構(1)	110
第31図	第3号建物跡出土遺物(1)	57	第65図	焼土遺構(2)	111
第32図	第3号建物跡出土遺物(2)	58	第66図	焼土遺構出土遺物(1)	112
第33図	第6号建物跡	60	第67図	焼土遺構出土遺物(2)	113
第34図	第6号建物跡出土遺物(1)	61	第68図	区画AB土壇(1)	117

第69回	区画 AB 土壙 (2) ……………	118	第106回	区画 AC 土壙 (4) ……………	168
第70回	区画 AB 土壙 (3) ……………	119	第107回	区画 AC 土壙出土遺物 (1) ……	169
第71回	区画 AB 土壙 (4) ……………	120	第108回	区画 AC 土壙出土遺物 (2) ……	170
第72回	区画 AB 土壙出土遺物 (1) ……	121	第109回	区画 AC 土壙出土遺物 (3) ……	171
第73回	区画 AB 土壙出土遺物 (2) ……	122	第110回	区画 AC 土壙出土遺物 (4) ……	172
第74回	区画 AB 土壙出土遺物 (3) ……	123	第111回	区画 AC 土壙出土遺物 (5) ……	173
第75回	区画 AB 土壙出土遺物 (4) ……	124	第112回	区画 AC 土壙出土遺物 (6) ……	174
第76回	区画 AB 土壙出土遺物 (5) ……	125	第113回	区画 AC 土壙出土遺物 (7) ……	175
第77回	区画 AB 土壙出土遺物 (6) ……	126	第114回	区画 AC 土壙出土遺物 (8) ……	176
第78回	区画 AB 土壙出土遺物 (7) ……	127	第115回	区画 AC 土壙出土遺物 (9) ……	177
第79回	区画 AB 土壙出土遺物 (8) ……	128	第116回	区画 AC 土壙出土遺物 (10) ……	178
第80回	区画 AB 土壙出土遺物 (9) ……	129	第117回	区画 AC 土壙出土遺物 (11) ……	179
第81回	区画 AB 土壙出土遺物 (10) ……	130	第118回	区画 AC 土壙出土遺物 (12) ……	180
第82回	区画 AB 土壙出土遺物 (11) ……	134	第119回	区画 AC 土壙出土遺物 (13) ……	181
第83回	区画 AB 土壙出土遺物 (12) ……	135	第120回	区画 AC 土壙出土遺物 (14) ……	182
第84回	区画 AB 土壙出土遺物 (13) ……	136	第121回	区画 AC 土壙出土遺物 (15) ……	183
第85回	区画 AB 土壙出土遺物 (14) ……	137	第122回	区画 AC 土壙出土遺物 (16) ……	184
第86回	区画 AB 土壙出土遺物 (15) ……	138	第123回	区画 AC 土壙出土遺物 (17) ……	185
第87回	区画 AB 土壙出土遺物 (16) ……	140	第124回	区画 AC 土壙出土遺物 (18) ……	186
第88回	区画 AB 土壙出土遺物 (17) ……	141	第125回	区画 AC 土壙出土遺物 (19) ……	187
第89回	区画 AB 土壙出土遺物 (18) ……	143	第126回	区画 AC 土壙出土遺物 (20) ……	188
第90回	区画 AB 土壙出土遺物 (19) ……	144	第127回	区画 AC 土壙出土遺物 (21) ……	193
第91回	区画 AB 土壙出土遺物 (20) ……	145	第128回	区画 AC 土壙出土遺物 (22) ……	194
第92回	区画 AC 土壙 (1) ……………	148	第129回	区画 AC 土壙出土遺物 (23) ……	195
第93回	第 64 号土壙出土遺物 ……………	149	第130回	区画 AC 土壙出土遺物 (24) ……	196
第94回	第 89 号土壙出土遺物 (1) ……	150	第131回	区画 AC 土壙出土遺物 (25) ……	197
第95回	第 89 号土壙出土遺物 (2) ……	151	第132回	区画 AC 土壙出土遺物 (26) ……	198
第96回	第 89 号土壙出土遺物 (3) ……	152	第133回	区画 AC 土壙出土遺物 (27) ……	199
第97回	第 101 号土壙出土遺物 (1) ……	155	第134回	区画 AC 土壙出土遺物 (28) ……	201
第98回	第 101 号土壙出土遺物 (2) ……	156	第135回	区画 AC 土壙出土遺物 (29) ……	202
第99回	第 101 号土壙出土遺物 (3) ……	157	第136回	区画 AC 土壙出土遺物 (30) ……	203
第100回	第 101 号土壙出土遺物 (4) ……	158	第137回	区画 AD 土壙 (1) ……………	205
第101回	第 320 号土壙出土遺物 ……………	162	第138回	第 52 号土壙出土遺物 (1) ……	206
第102回	第 322 号土壙出土遺物 (1) ……	164	第139回	第 52 号土壙出土遺物 (2) ……	207
第103回	第 322 号土壙出土遺物 (2) ……	165	第140回	第 52 号土壙出土遺物 (3) ……	208
第104回	区画 AC 土壙 (2) ……………	166	第141回	第 52 号土壙出土遺物 (4) ……	209
第105回	区画 AC 土壙 (3) ……………	167	第142回	第 52 号土壙出土遺物 (5) ……	210

第143図	第52号土壙出土遺物(6) ……	211	第161図	区画AD土壙出土遺物(10) ……	233
第144図	第52号土壙出土遺物(7) ……	212	第162図	区画AD土壙出土遺物(11) ……	234
第145図	第52号土壙出土遺物(8) ……	213	第163図	区画AD土壙出土遺物(12) ……	235
第146図	第52号土壙出土遺物(9) ……	214	第164図	区画AD土壙出土遺物(13) ……	236
第147図	第52号土壙出土遺物(10) ……	215	第165図	区画AD土壙出土遺物(14) ……	237
第148図	区画AD土壙(2) ……	220	第166図	区画AD土壙出土遺物(15) ……	241
第149図	区画AD土壙(3) ……	221	第167図	区画AD土壙出土遺物(16) ……	242
第150図	区画AD土壙(4) ……	222	第168図	区画AD土壙出土遺物(17) ……	243
第151図	区画AD土壙(5) ……	223	第169図	区画AD土壙出土遺物(18) ……	244
第152図	区画AD土壙出土遺物(1) ……	224	第170図	区画AD土壙出土遺物(19) ……	245
第153図	区画AD土壙出土遺物(2) ……	225	第171図	区画AD土壙出土遺物(20) ……	246
第154図	区画AD土壙出土遺物(3) ……	226	第172図	区画AD土壙出土遺物(21) ……	247
第155図	区画AD土壙出土遺物(4) ……	227	第173図	区画AD土壙出土遺物(22) ……	248
第156図	区画AD土壙出土遺物(5) ……	228	第174図	区画AD土壙出土遺物(23) ……	250
第157図	区画AD土壙出土遺物(6) ……	229	第175図	区画AD土壙出土遺物(24) ……	251
第158図	区画AD土壙出土遺物(7) ……	230	第176図	区画AD土壙出土遺物(25) ……	252
第159図	区画AD土壙出土遺物(8) ……	231	第177図	区画AD土壙出土遺物(26) ……	252
第160図	区画AD土壙出土遺物(9) ……	232	第178図	区画AD土壙出土遺物(27) ……	254

表目次

第1表	周辺の遺跡一覧 ……	9	第18表	区画AB土壙出土遺物観察表(1) ……	131
第2表	第一面建物跡一覧表 ……	39	第19表	区画AB土壙出土遺物観察表(2) ……	134
第3表	第1号建物跡出土遺物観察表 ……	48	第20表	区画AB土壙出土遺物観察表(3) ……	135
第4表	第2号建物跡出土遺物観察表 ……	54	第21表	区画AB土壙出土遺物観察表(4) ……	139
第5表	第3号建物跡出土遺物観察表 ……	59	第22表	区画AB土壙出土遺物観察表(5) ……	142
第6表	第6号建物跡出土遺物観察表 ……	64	第23表	区画AB土壙出土遺物観察表(6) ……	143
第7表	第一面基礎状遺構一覧表 ……	65	第24表	区画AB土壙出土遺物観察表(7) ……	144
第8表	基礎状遺構出土遺物観察表 ……	68	第25表	区画AB土壙出土遺物観察表(8) ……	145
第9表	第一面埋設桶一覧表 ……	70	第26表	第一面区画AC土壙一覧表 ……	147
第10表	埋設桶出土遺物観察表 ……	80			
第11表	埋設甕出土遺物観察表 ……	84			
第12表	第一面杭列一覧表 ……	85			
第13表	第一面溝跡一覧表 ……	93			
第14表	溝跡出土遺物観察表 ……	105			
第15表	第一面焼土遺構一覧表 ……	110			
第16表	焼土遺構出土遺物観察表 ……	114			
第17表	第一面区画AB土壙一覧表 ……	116			

第 27 表	第 64 号土壙出土遺物觀察表……	149	第 40 表	第一面区画 AD 土壙一覽表……	204
第 28 表	第 89 号土壙出土遺物觀察表……	153	第 41 表	第 52 号土壙出土遺物觀察表……	216
第 29 表	第 101 号土壙出土遺物觀察表 …	159	第 42 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (1)	238
第 30 表	第 320 号土壙出土遺物觀察表 …	163		……………	
第 31 表	第 322 号土壙出土遺物觀察表 …	165	第 43 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (2)	241
第 32 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (1)	189		……………	
第 33 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (2)	193	第 44 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (3)	241
	……………			……………	
第 34 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (3)	193	第 45 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (4)	243
	……………			……………	
第 35 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (4)	195	第 46 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (5)	249
	……………			……………	
第 36 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (5)	200	第 47 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (6)	253
	……………			……………	
第 37 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (6)	202	第 48 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (7)	253
	……………			……………	
第 38 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (7)	202	第 49 表	区画 AD 土壙出土遺物觀察表 (8)	254
	……………			……………	
第 39 表	区画 AC 土壙出土遺物觀察表 (8)	203			
	……………				

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所では「利根川水系利根川・江戸川河川整備計画【大臣管理区間】」に基づき、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業として、利根川右岸の堤防を拡幅し、強化する事業を進めている。

埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では、国が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係機関と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、利根川上流河川事務所長から平成 17 年 1 月 20 日付け利上沿第 18 号で、埼玉県教育委員会教育長宛て、埋蔵文化財の所在及びその取扱いについて照会がなされた。

事業予定区域については埼玉県指定旧跡や周知の埋蔵文化財包蔵地が所在すること、埋蔵文化財の詳細な状況等を把握するための確認調査を実施する必要がある旨を、平成 17 年 3 月 17 日付け教生文第 1780 号で回答した。

当該箇所については、近世絵図等から栗橋宿の範囲であることは明らかであったが、遺構の状況等を把握するために平成 23 年 12 月に試掘調査を実施した。その結果、近世の遺構、遺物が多量に検出され、「栗橋宿跡」(No.86-011)として埋蔵文化財包蔵地として登載した。

上記の埋蔵文化財の所在が明確になったことから、利根川上流河川事務所長宛てに、計画上やむ

を得ず現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査が必要な旨を回答し、取扱いについて協議を重ねたが、現状保存が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所、生涯学習文化財課（当時）の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて定期的に会議を開催し、各種の調整を行った。

文化財保護法第 94 条の規定による埋蔵文化財発掘通知が利根川上流河川事務所長から平成 24 年 2 月 9 日付け国関利上沿第 27 号で、埼玉県教育委員会教育長宛て提出された。それに対する埼玉県教育委員会教育長からの発掘調査が必要な旨の勧告は下記のとおりである。

平成 24 年 2 月 9 日付け教生文第 4 - 1337 号

また、同法第 92 条の規定により公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は下記のとおりである。

[1次調査]

平成 28 年 5 月 10 日付け教生文第 2 - 2 号

[2次調査]

平成 29 年 5 月 8 日付け教生文第 2 - 3 号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

栗橋宿跡第8地点の調査は首都圏氾濫区域堤防強化対策工事に伴って、平成28年度(第1次)、29年度(第2次)の2回実施した。調査面積は5,226.00㎡(第1次調査2,613.00㎡、第2次調査2,613.00㎡)である。

第1次調査は平成28年4月1日から平成29年3月31日まで実施した。

4月1日に発掘調査届等の事務手続きを行った後、発掘調査事務所の設置、囲柵の設置工事等の調査準備を行った。

4月13日から5月19日まで、重機による表土掘削を行い、第一面の検出を行った。5月23日に基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。続いて、補助員作業を開始し、遺構確認作業を行った。

遺構確認作業の結果、近世の建物跡、埋設桶、区画施設、土壇等の遺構が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次手書きによる土層断面図とトータルステーションによる平面図の作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。

10月26日に空中写真撮影委託、11月22日に自然科学分析委託を実施した。11月28日に高所作業車による写真撮影を行い、第一面の調査を終了した。

11月30日から12月27日まで、重機による掘削を行い、第二面の検出作業を行った。平成29年1月5日に基準点測量及びグリッド杭打設作業委託を実施した。

続いて遺構確認作業を行い、第二面からは近世の建物跡、埋設桶、井戸跡、溝跡、畠跡、小鍛冶遺構、土壇等が検出された。確認された遺構は掘削・精査を行い、順次手書きによる土層断面図とトータルステーションによる平面図の作成、写真撮影等の記録作成作業を行った。

1月24日、2月28日に高所作業車による写

真撮影を行った。3月前半に補助員作業を終了し、3月16日に発見届(幸手警察署長宛)と保管証(埼玉県教育委員会宛)を提出した。

第2次調査は平成29年4月1日から平成29年9月30日まで実施した。

4月3日に発掘調査届等の事務手続きを行った後、4月前半から補助員作業を開始した。

前年度に引き続き第二面の遺構を掘削・精査した。その後、手書きによる土層断面図の作成、トータルステーションを用いた平面図の作成、写真撮影等の記録を行った。

8月10日には自然科学分析委託を実施した。9月13日には空中写真撮影委託の実施と高所作業車による写真撮影を行った。

9月後半に補助員作業を終了し、埋め戻しを行い、9月25日に発見届(幸手警察署長宛)と保管証(埼玉県教育委員会宛)を提出した。

平成29年9月30日に遺物、器材を撤収し、現地調査を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理報告書の作成作業は令和元年8月1日から令和4年3月31日まで実施した。令和元年度は、第一次調査第一面の遺構と出土遺物、令和2年度は第一次調査第一面と第二次調査第二面の遺構と出土遺物、令和3年度は第二次調査第二面の遺構と出土遺物の整理を行った。

各年度の作業は出土遺物の水洗・注記から開始し、順次、接合・復元作業に着手した。復元を終了した遺物は、実測、トレース、採拓を経て遺構ごとにパソコンで印刷用の挿図を作成した。実測には磁気式3次元位置計測装置、正射投影画像撮影機を活用した。掲載遺物の一部は写真を撮影し、写真図版の版下データを作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等の照合作業を行い、修正を加えた第二原図を作成した。第二原図は仮版組を行った上で、ス

キャナでパソコンに取り込み、画像編集ソフトを用いてデジタルトレースと編集作業を進め、印刷用の挿図版下データを作成した。

発掘調査で撮影された遺構写真は、選別を行い、写真図版用の版下データを作成した。

口絵写真は、特徴的な遺物を対象に、令和3年11月に撮影を委託した。

作成した遺構・遺物のデータ、自然科学分析結果等をもとに、原稿を執筆した。また、遺構・遺

物の挿図と写真図版等を組み合わせて、報告書の割付・編集を行った。入稿後、3回の校正を経て、令和4年3月22日に、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第473集『栗橋宿跡VI』（本書）を刊行した。

遺物及び図面類・写真類・データ類等の諸資料は、令和4年2・3月に整理分類の上、埼玉県埋蔵文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成28年度（発掘調査）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	金 子 直 行
総務部		調 査 部 副 部 長	赤 熊 浩 一
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼調査第一課長	田 中 広 明
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 査	山 本 禎
		主 査	大 屋 道 則
		主 事	矢 部 瞳
		主 事	宮 村 誠 二
		主 事	浅 海 莉 絵
		専 門 員	宮 井 英 一

平成29年度（発掘調査）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	
常務理事兼総務部長	川 目 晴 久	調 査 部 長	赤 熊 浩 一
総務部		調 査 部 副 部 長	田 中 広 明
総 務 部 副 部 長	黒 坂 禎 二	主幹兼調査第一課長	山 本 靖
総 務 課 長	曾 川 浩 二	主 査	岩 瀬 讓
		主 査	大 屋 道 則
		主 事	魚 水 環
		主 事	田 續 良 太

令和元年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調 査 部 長	黒 坂 禎 二
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上 野 真由美
総 務 部 副 部 長	山 本 靖	主 幹 兼 整 理 第 二 課 長	福 田 聖
総 務 課 長	新 井 了 悟	主 任	青 木 弘
		主 事	水 村 雄 功

令和2年度（報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	吉 田 稔
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	上 野 真由美
総 務 部 副 部 長	山 本 靖	主 任	魚 水 環
総 務 課 長	鈴 木 裕 一	主 事	水 村 雄 功

令和3年度（報告書作成）

理 事 長	依 田 英 樹	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調 査 部 長	田 中 広 明
総務部		調査部副部長兼整理第一課長	福 田 聖
総 務 部 副 部 長	上 野 真由美	主 事	水 村 雄 功
総 務 課 長	鈴 木 裕 一		

ようになる。沈降運動の進行とともに、熊谷から南方の川越方面へ流下していた利根川は、やがて東方の加須(低地)方面へ大きく流向を転ずる。結果、大宮・館林台地は南北に分断され、沿川部は埋没して漸次低地化していく。

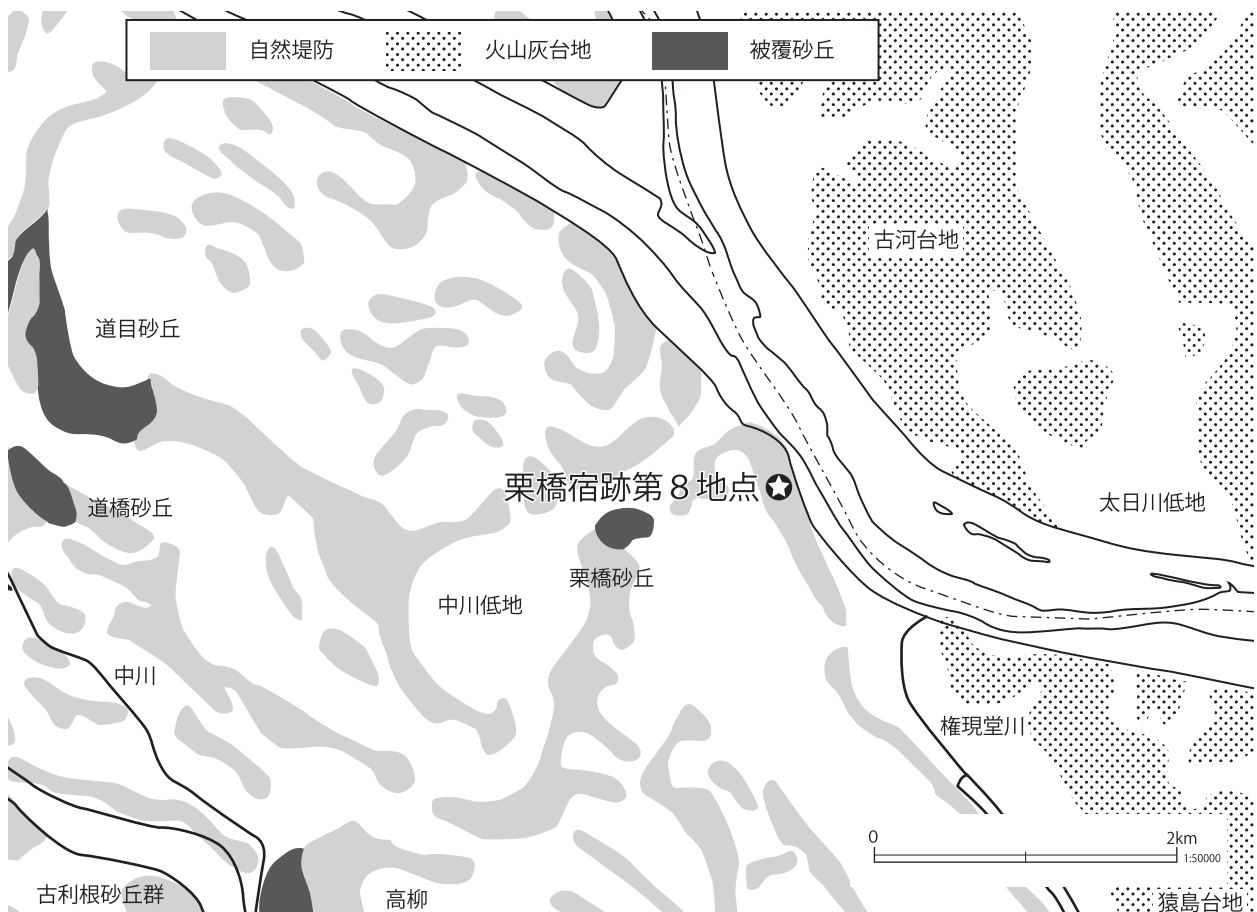
この現象は古墳の調査でも確認されており、行田市の真名板高山古墳(堀口1992)や羽生市の小松1号墳(矢口・瀧瀬1996)などは、地表下3m程に埋没した状態であった。

奈良時代から平安時代になると、加須低地(中川低地)では河川の氾濫が広域化し、関東造盆地運動に伴う地盤沈降と相俟って、利根川や渡良瀬川など、大河川が集中して流れ下る大規模な河成平野が形成されていく。栗橋宿跡第8地点の所在する栗橋地区では、表層約20mが河川堆積による沖積層となっている。

両河をはじめ、会の川、合の川、北川辺蛇行流路、島川、浅間川、大落古利根川、庄内古川の自然流下は加須低地に多くの砂礫を供給し、諸河川の両岸に自然堤防や後背湿地を発達させた。また、浅間川と会の川が大落古利根川に合流する久喜市栗橋町高柳には、大河の証しである河畔砂丘が形成された(埼玉県1993)。

こうした低地部に対する人為的な改変は、徳川家康が関東を領有するようになると急速に進められることになる。所謂「利根川東遷」と呼ばれる、利根川流路の改修工事である。

東遷事業は流路そのものを新たに開削し、それまでの自然流下の道筋を締め切るなど、非常に大掛かりな工事であった。事業の進捗とともに、栗橋地区は北西側の古利根川(後に廃川)、東側の利根川(渡良瀬川・権現堂川)、南西側の中川



第2図 栗橋宿跡周辺の地形

(島川) で画され、各堤防が接続して「輪中」の地となっていく。江戸時代には島中川辺領(しまじゅうかわべりょう)と称され、北西の向川辺領、古河川辺領、東の関宿藩領とともに、利根川に沿った輪中地帯を形作った。

とはいえ、栗橋宿は低い自然堤防上に立地すること、河川に取り囲まれた町であること、人工的な流路変更で河流が不安定だったことなどから、大規模な改修や築堤工事を重ねてもなお、洪水の害や排水の難からは逃れきれなかった。実際、堤防上に構えられた日光道中栗橋関所も元禄三年(1690)、同八年、宝永元年(1704)、寛保二年(1742)の四度、利根川の氾濫で流失している。

洪水の被害は現代にまで及び、昭和二十二年(1947)のカスリーン台風では、加須市大利根地区において利根川の堤防が決壊し、栗橋地区も一面湖沼化するほどの災害に見舞われた。

2. 歴史的環境

(1) 中世の栗橋とその周辺

栗橋宿跡の所在する中川低地周辺の地表は、地形の沈降と河川の乱流による堆積土に厚く覆われている。そのため遺跡の分布は未だ不明な部分が多く、現在検出されているよりも多くの遺跡の存在が予想される。

栗橋地区では、古代以前に遡る遺跡は確認されていないが、後述するように、栗橋宿跡関連の発掘調査では、縄文土器・石器・土師器などの出土がある。縄文時代前期(約6000年前)の海進時には栃木市藤岡付近まで海が入り込み、栗橋地区は海底であった。海退後は河川が乱流し、付近は湿地のような状態が長く続いた。

当地は、平安時代には下総国葛飾郡新居郷に属したものと考えられる。12世紀には撰津源氏源頼政の郎党下河辺氏が関与して八条院領下河辺庄が立荘される。下河辺庄の成立の経緯ははっきり

利根川改修は江戸時代初期に本格化した。決して完遂された訳ではなく、400年以上を経た今日にあっても、それは国土交通省の「首都圏氾濫区域堤防強化対策事業」に継承されているのである。

栗橋宿跡第9地点を含む日光道中栗橋宿は、その成立以前に渡良瀬川が形成した北西-南東方向の長さ約300m、幅120m程の自然堤防上に立地している。土質はシルト質、あるいは砂質である。遺跡付近の標高は11~12mを測り、南側の後背湿地に営まれる水田との比高差は約1.0mである。

明治十年(1877)頃の町や村の様子を記録した『武蔵國郡村誌』栗橋宿の項には、地味として「色赤真土に少しく砂を混す質美にして稲梁菽麦に宜しく桑茶に適せず水利不便にして時々水旱に苦しむ」とある(埼玉県1955)。作物に挙げる梁は粟、菽は豆のことである。

しないが、安元二年(1176)の八条院領目録にはみえないので、それ以後、下河辺行平が下河辺庄の荘司を安堵される治承四年(1180)までの間に成立したと考えられる。下河辺行平が荘司を安堵された記録は『吾妻鏡』にみられ、このことから、寄進者も下河辺氏である可能性が高い。

下河辺氏の本拠地もはっきりしないが、12世紀後半~13世紀前半の遺跡・文化財の伝来状況から、古河市大生郷周辺の可能性が指摘されている。下河辺氏のその後については良く分かっていない。『吾妻鏡』の建長二年(1250)の記事に下河辺左衛門尉が見えるのを最後に動向は追えなくなる。

また、『吾妻鏡』には大河戸兄弟に関する記事があり、三郎行元は地区内の高柳が本貫地とされている。高柳から伊坂にかけては、鎌倉街道に比定される古道が今も一部残っている。近くには静



第3図 周辺の遺跡

第1表 周辺の遺跡一覧（第3図）

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	栗橋宿本陣跡・栗橋宿跡	21	本田山遺跡	a	田宮町
2	佐間小草原遺跡	22	蔵王遺跡	b	小手指宿
3	栗橋城址	23	東の門西の門遺跡	c	徳淑院
4	宿北・宿東遺跡	24	北山田北久保遺跡	d	幸手宿
5	釈迦新田遺跡	25	御領遺跡	e	道標
6	同所新田遺跡	26	大膳屋敷跡	f	一里塚
7	新田遺跡	27	関根豪族屋敷跡	g	勘平の渡し
8	桜井前遺跡	28	諸川西門城址	h	川妻の渡し
9	瀬沼遺跡	29	本田遺跡	i	下河岸跡
10	関宿城址	30	上原遺跡	j	栗橋河岸
11	天神島城址	31	殿山塚	k	房川の渡し
12	幸手城址	32	倚井陣屋遺跡	l	中田宿
13	渡辺氏屋敷跡	33	城地遺跡	m	本郷渡し
14	古河城址	34	石行塚遺跡	n	中渡し
15	鴻巣館跡	35	羽黒遺跡	o	鈴木の渡し
16	磯部館跡	36	釈迦才仏遺跡	p	古河の渡し
17	香取東遺跡	37	清水遺跡	q	旗井小学校
18	水海城址	38	新屋敷遺跡	r	境宿
19	向坪B遺跡	39	大塚遺跡		
20	円満寺城址（小堤城址）	40	野木宿遺跡		

御前終焉の地も伝承されている。

下河辺庄は13世紀後半には、北条氏一門の金沢氏の手へ渡っており（建治元年『金沢実時讓状』金沢文庫古文書）、金沢氏が庇護した称名寺（神奈川県横浜市金沢区）の所領となる。その荘域は極めて広大で、古河市周辺や埼玉県東部地域から、現在の千葉県野田市にまで及んでいた。

下河辺庄は大きく3つの地域に分かれており、北から「野方」（茨城県古河市周辺）・「河辺」（埼玉県幸手市・杉戸町・吉川市・三郷市など）・「新方」（埼玉県春日部市・越谷市・松伏町など）と呼ばれている。13世紀後半以降に下河辺庄を支配した金沢称名寺の諸史料には、新方のエリアが頻繁に登場する。栗橋周辺の様子を伝える史料は少ないが、栗橋地区に当たる狐塚、高柳の両郷は金沢氏の支配を受けていたとされる。

その一部は南北朝期以降も金沢称名寺の所領として伝えられていくが、南北朝期には、小山氏の所領となっていた地域もあったようで（年不詳『小山氏所領注文案』小山文書）、小山政義の乱

を経て、14世紀後半には鎌倉府・鎌倉公方の御料所となっらしい（『頼印僧正行状絵詞』）。小山義政の乱後は隣接する太田庄も御料所となっており、こういった経緯から、足利成氏も下河辺庄の北部である古河を拠点としたとみられる。

旧大利根町や旧栗橋町などの地域では、中世の遺跡はほとんど検出されていない。唯一、旧栗橋町の佐間小草原遺跡（2）が知られるのみである。中世墓を中心とした遺跡で、板碑37基、古瀬戸の瓶子、常滑の大甕などが工事中に出土した。板碑の年代は、文和三年（1354）から明応七年（1498）に及んでいるが、特に15世紀代の板碑が主体を占める状況である。平成十七年の調査では、溝跡や土壇などが検出され、板碑、漆塗り椀などが出土した。留意されるのは、出土遺物のなかに中世瓦が数点含まれている点であり、墓域に伴う仏堂などの施設が存在した可能性が高い（久喜市教育委員会2008）。

中世段階の利根川は、羽生市川俣で会の川、加須市大越で北川辺蛇行流路跡、浅間川に分流して

いた。栗橋地区周辺では、洪水による大量の土砂の堆積と、関東造盆地運動による地盤の沈降が進み、遺跡の存在は定かではない。

ただし、これまでの栗橋宿跡関連の発掘調査では、縄文時代から中世の遺物が若干ながら出土している。

縄文時代の土器類は摩耗したものが僅かに認められるに過ぎず、遺跡の存在を想定できるほどのものではない。栗橋宿本陣跡で出土した縄文時代の石器類も、近世以降の好事家によって蒐集されたものである可能性が高い。一方、古墳時代前期の土師器は、各調査地点から複数の破片資料が得られており、近隣の微高地上に遺跡が存在する可能性は充分にある。

栗橋宿跡では、古墳時代後期から奈良平安時代の土器類の出土も少量認められる。さらに、中世段階の舶載磁器（青磁・白磁）・古瀬戸・常滑なども各地点から出土しており、長期の利用ではないかもしれないが、周辺域での断続的な土地利用が想定できる。

一方、渡良瀬川（太日川）の左岸、および権現堂川の左岸では、栗橋城址、古河城址をはじめとする数多くの遺跡が知られている。

近世初期までの「栗橋」といえば、現在の茨城県猿島郡五霞町の元栗橋を指す。享徳四年（1455）の享徳の乱後、御座所を古河に移した鎌倉公方足利成氏が古河公方と称して以降、元栗橋にはその支城の栗橋城（3）が置かれた。

鎌倉街道中ツ道（奥州道）の利根川の渡河点があった栗橋城は、水陸の要衝として後北条氏の関宿城（10）攻略の拠点となった。天正二年（1574）に関宿城開城後は北関東攻略の起点となったが、豊臣秀吉の小田原攻めにより天正十八年（1590）に開城する。『鷲宮町史』、『町史五霞の生活誌』によれば、栗橋城の城下町は城の東側に広がり、古河方面への道と関宿方面への道が分岐していたという。また、南側には鎌倉街道

中ツ道・奥州街道の渡船場があったとされている。遺跡の分布は、その街道沿い、および東側の福田近辺の関宿・古河を結ぶと考えられる道沿いに分布している。

古河城（14）も栗橋城同様に、後北条支配下の足利氏によって戦国城郭として整えられたが、やはり天正十八年の小田原攻めによって破却された。

その後、徳川家康に従っていた小笠原秀征が古河城を修復し、近世以降も幕閣を含む歴代の城主によって拡張され、古河は城下町として栄えていく（古河市史編さん委員会1985、茨城県古河市教育委員会2004）。

古河城南の御所沼の奥に舌状に突出した台地上には、古河公方の御所として知られる鴻巣館跡（15）がある。初代古河公方足利成氏によって、享徳四年（1455）に築造された連郭式の城郭で、最後の古河公方足利義氏の娘氏姫の居館として知られている。足利氏の後裔、喜連川氏の尊信が寛永七年（1630）に古河を離れた後は、時宗十念寺の寺域となった。

渡良瀬川、利根川の左岸には、現在大小の沼沢地が多く認められる。その多くは利根川改修以後の赤堀川の開削によって形成されたもので、本来は猿島台地を開析した中小河川による支谷であった。その縁辺部に古河公方入府とともに、足利成氏の重臣たちの城や館が造られたと考えられる。小堤城跡（20）、磯部館跡（16）、水海城址（18）等が知られるが、詳細についてはほとんど明らかでない。茨城県側の城館跡や周辺の中世遺跡については、既刊の『栗橋関所番士屋敷跡』や『栗橋宿跡Ⅰ』（ともに埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）に詳しいので参照されたい。なお、近年では古河市東の門西の門遺跡（23）で調査がおこなわれており、大規模な堀が巡らされた城跡が検出されている（古河市教育委員会ほか2021）。瀬戸美濃系陶器は、大窯第3～4段

階のものを中心とした組成で、栗橋宿成立直前の当該地域の遺物様相を考える上で注目される成果である。

（２）近世の栗橋とその周辺

利根川の改修

中世の古河を中心とした栗橋周辺の様相は、徳川家康の江戸入府によって一変する。

特に大きな影響を与えたのが、利根川改修事業、所謂利根川の東遷である。徳川幕府は、家康の関東入府後早々に利根川の改修に着手した。それまでの本流であった浅間川、会の川、古利根川の川筋から、新川通、赤堀川を開削して常陸川に結び、合わせて権現堂川を介して江戸川とつなぐ大規模な流路変更で、利根川東遷事業と言われるものである。その目的は、江戸を水害から守るためという治水が第一義とされてきた。また、古河城を合わせた江戸の北の防衛線とする説も重視されている。また、「内川廻し」と呼ばれる内陸航路の確保、水田開発目的とする説も有力である。

栗橋周辺では、文禄三年（1594）忍城主松平忠吉の命を受けた忍藩家老小笠原三郎左衛門が羽生市上新郷で会の川を締め切ったのに端を発する。元和七年（1621）には、利根川と常陸川を結びつける意図のもとに旧大利根町佐波から旧栗橋町中渡までの新川通、五霞町川妻から境町長井戸への赤堀川が開削された。しかし、当初の赤堀川の掘削は失敗に終わり猿島郡釈迦沼にまでしか至らず、現在の五霞町域に甚大な被害をもたらした。その後、2度の拡幅、増掘（二番堀、三番堀）を経て、漸く承応三年（1654）に通水に成功した。銚子へ至る新たな利根川の主流路が形成されたのである。更に、天保九年（1838）に会の川と浅間川が完全に締め切られ、利根川の流れは新川通の流路へと一本化され、現在に至っている。

利根川本流の開削、整備とは別に、天正四年（1576）の権現堂堤の築堤に始まる五霞町、幸手

市域でも大規模な河川改修が行われた。赤堀川通水以前の利根川では、寛永十八年（1641）に逆川が開削される。これにより常陸川と寛永十二年（1635）から開削が進められていた江戸川が、関宿の北で繋がった。江戸川は、更に拡幅工事が進められ正保元年（1644）に完成し、前述の赤堀川三番堀の完成以前は、利根川、渡良瀬川両大河の水は、一部逆川を介して常陸川に注ぐものの、ほとんどはこの江戸川を流れていた。

このような利根川を中心とした河川改修の結果、前述の「内川廻し」の航路とともに、利根川上流域の上野、渡良瀬川上流域の下野との航路が確保され、北関東が江戸を中心とする経済圏の一部となった。また、利根川、荒川両大河の河川改修は、埼玉平野に広大な新田開発をもたらし、航路の開発とともに、その経済効果は絶大であった。

一連の工事の結果、栗橋地区を含む島中川辺領は、外縁部に囲堤が造られ河川の流路が固定されるとともに、領域全体が輪中となり、治水環境が整えられた。

日光道中と栗橋宿の成立

日光道中は、元の奥州街道（奥大道）のうちの江戸・宇都宮間を含み込み成立したものと捉えられる。寛永十三年（1636）に日光東照宮の造替が竣工し、徳川家光・家綱が盛んに社参を行うようになる頃には、日光道中としての整備も進んだと考えられる。一方、元栗橋は、利根川の河川改修による度重なる洪水が発生し、宿と渡しは荒廃した。そのため、栗橋宿の位置を現在地に移したようで、『栗橋町史』では、その時期を元和七年（1621）前後と想定している。なお、『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記稿』）では、慶長年中に池田鴨之介と並木五郎兵衛による開墾と伝え、明治十年（1877）頃の『武蔵國郡村誌』（以下『郡村誌』）や、明治四十五年（1912）の『栗橋町郷土誌』では、その時期を慶長十九年

(1614) としている。

すなわち『風土記稿』は、

栗橋宿は、江戸より十四里の行程なり、慶長年中下総國栗橋村の民池田鴨之助、並木五郎平と云もの願ひ、伊奈備前守忠次の指揮によりて開墾せしが、民家次第に増加しつひに宿並をなせり、故に下総國の方を元栗橋村と云ひ、當所を新栗橋と云、正保の國圖には上川邊新田と記し、傍に栗橋町ともにと細書し、別に又新栗橋町の名も載せたり、後一村となりしは當所次第に繁昌し、いつしか上川邊新田の名を失ひ、其地を概して今の名となりしにや、一下略一と記している。

また、『郡村誌』は「開墾家」池田鴨平の記事中で次のように述べている。

一前略一 慶長十九年鴨之助村民並木五郎平と謀り当所を開墾し竟に一村をなし栗橋に対して新栗橋と号す元和八年將軍家日光社参の時本陣役を勤む(是より世々本陣となる) 一下略一

池田鴨平は『風土記稿』に見える鴨之助の後裔で、『郡村誌』当時の池田家当主である。

地誌の記述からすれば、栗橋宿は慶長十九年(1614)、五霞町元栗橋の地に住居していた池田鴨之助、並木五郎平(五郎兵衛)を中心とする人々が移り住み、開拓して興した町ということになる。

両書に示された移転年代に対し、『久喜市栗橋町史 通史編上』(久喜市教育委員会2015)は、明確にはできないとしながらも、

「寛永元年(1624)には、関所が改めて設置されており、江戸と秋田を度々往返し、栗橋を通った秋田佐竹家家臣の『梅津政景日記』によれば、元和八年(1622)までの記述には「栗橋」とのみあるが、寛永三年(1626)には、「今栗橋」と「元栗橋」と区別されて記述されるようになる」

と記し、ことを以て、移転が行なわれたのは元

和後半から寛永初年の間と考定している。

これまでの発掘調査の成果では、栗橋宿本陣跡などから、17世紀前葉に遡り得る土壌が検出されている。多量のかかわりけを伴う様相から一般の集落の様相とは考え難い(『栗橋宿本陣跡Ⅱ』)。遅くとも寛永期頃までには宿場の機能を備えた町として成立していたものと考えられるが、遺構数が極端に少なく、続く時期の遺構がほとんど検出されない点をどう理解するのが問題である。

前述のように、寛永期に入ると「今栗橋」と「元栗橋」を区別した史料がみられる。宿内深廣寺の石造名号塔群の銘文には、承応三年(1654)7月までに立てられた8基が「新栗橋」とみえるが、同年8月以降に立てられた12基は「栗橋」とのみあり、「新栗橋」「今栗橋」が「栗橋」として定着していく過程が窺われる。その時期(17世紀中葉)までには、今の栗橋が宿場として確立していたはずであるが、発掘調査で検出された当該期の遺構は極めて少なく、初期の栗橋宿を考える上で大きな問題点である。

日光道中と栗橋宿の本陣・脇本陣

栗橋宿を通る日光道中は、江戸日本橋を起点とする五街道の一つで、日本橋から終点の下野国日光坊中まで20宿、36里11町(約142.6km)の道程であった。初め奥州街道とされた道は、徳川歴代將軍が家康を祀る東照宮への参詣道として重要視されるようになる。そして事実上、日光が目的地となったことから日光道中となり、宇都宮から先の東北方面が奥州道中になったものと考えられている(久喜市教育委員会2015)。

日光道中の道筋が確立する以前、奥州へ向かう街道は一般に鎌倉街道中道、または奥大道と呼ばれ、鎌倉幕府にとって軍事上重要な道であった。中道は幸手において元栗橋へ向かう東回りの道と、鷲宮から北川辺を経由して古河へ達する西回りの道とに分岐していた。後者は自然堤防上の高

まりを縫って北上する道で、江戸時代には旧栗橋町高柳で東へ折れ、古利根川に沿って栗橋宿へ至る新道として整備される。この道は日光御廻道と呼ばれ、将軍の日光社参に際し、本道の日光道中が洪水などで通行不能となった場合の迂回路とされた。

栗橋宿は江戸日本橋から、千住宿－草加宿－越ヶ谷宿－粕壁宿－杉戸宿－幸手宿を経た、日光道中第7番目の宿場である。路程は江戸から14里15町（約56.6km）、幸手宿から2里3町（約8.2km）、次の中田宿まで18町（約2km）、古河宿まで1里20町（約6.1km）であった（久喜市教育委員会文化財保護課2020）。

利根川対岸の中田宿とは渡船で繋がれ、両宿は合宿で1宿と数えられていた。合宿とは、二つの宿で伝馬（各宿に規定の人馬を常備させ、幕府公用の貨物人員を次の宿へ継送する制度）を月の半分交替で勤めることをいう。

江戸時代の初期に「日光道中」の名称は確立していなかったともいわれるが、いずれにせよ、その宿駅として栗橋宿は成立したのである。街道の整備が先か、町の開拓が先か明らかでないものの、『風土記稿』に関東代官「伊奈備前守忠次の指揮によりて開墾せし」とあるので、おそらく両事業は個別単独ではなく、密接な関連の下、計画的かつ複合的に実施されたに違いない。

『郡村誌』に「開墾家」とされた池田家は代々栗橋宿本陣を勤めた家柄で、今般の堤防強化対策事業に伴う転居まで、本陣の跡地にお住まいになられていた。

本陣の跡地は「栗橋宿本陣跡」として発掘調査した範囲の北部であり、敷地境や建物跡の一部が検出された。池田家家紋の「揚羽蝶文」をデザインした鬼瓦や中国産を含む陶磁器類は、文政五年（1822）の大火で被災した本陣備品を含むものである。並木家も江戸時代を通じ、同じく上町で旅籠屋（萬屋？）を営んだ栗橋宿の名家であり、

現在整理中の栗橋宿西本陣跡の一面にあたるものと考えられる。『栗橋宿絵図』（池田家所蔵・『栗橋町史 資料編一』所収）には、本陣池田家の位置に「御本陣」の記載があるが、その街道を挟んだ反対側に「往古仙臺様御本陣」「五郎平」などの記載がある。近年『伊達治家記録』から関所の検討を行った堀内謙一は、仙台藩との関りを示唆するこの注記に注目し「恐らく栗橋宿の開発者である二人、すなわち池田鴨之助の東側住居と並木五郎兵衛の西側住居にそれぞれ相当する敷地の可能性が高い。つまりこの絵図は、栗橋宿が開発された比較的初期の上（栗橋宿で最初に開発された地区）の状況を描いているものと考えられる」と指摘している。また『栗橋宿絵図』については、関所番の名前の組み合わせから概ね18世紀中頃と推測している。

栗橋関所

町の移転と同じ頃、栗橋宿から利根川対岸の中田宿への渡河点には、新たに関所が置かれた。これを「栗橋関所」と通称するが、正式には「房川渡（ぼうせんのわたし）中田御関所」あるいは「中田御関所」という。

『風土記稿』には、

關所 利根川堤上にあり、其置れし年代詳ならず、見張番所を構へて往來の旅人を改む、是を房川渡中田御關所と唱ふ、往來改の條目を記せし高札を建、往古のことを傳へず、關所番人四人あり、是は寛永元年今の加藤木工兵衛、足立十右衛門、富田定右衛門、嶋田源次郎の祖先御抱となり、世々在住してこれを勤む、此内後年外御關所より來りし者も有と云

とある。開設年代は詳ならずとしながら、寛永元年（1624）以降には4名の番士がその任に当たっていると記す。

当初の番士は富田茂左衛門、新井喜平次、佐々木長左衛門、森又左衛門であったといわれる。新井は後に落合、森は後に加藤と改称している。後

に幾度かの交替があり、寛政十二年（1800）以降は『風土記稿』が挙げる加藤、足立、富田、嶋田（島田）の4家に固定する。近年では落合家と仙台藩の関りについて個別の考察も行われており、各藩と交通の実態についても今後、検討が進むことが期待される（堀内2021）。

関所と番士は関東代官伊奈氏の支配下にあったが、寛保三年（1743）に伊奈忠尊が失脚した後は、栗橋宿周辺を支配する代官が所管するようになった（久喜市教育委員会2015）。

番士は代官所の手代に次ぐ下級武家の身分で、基本的には世襲であった。禄高は足立家のみが前任地（水戸街道の金町松戸関所）から引き継ぐ20俵4人扶持、他の3家は20俵2人扶持であった。因みにいえば、江戸町奉行所同心の禄は30俵2人扶持である。

関所、即ち番士の主たる任務は、女性や負傷者、不審者の通行を厳しく取り締まることにあった。関所の勤務は原則2名ずつの当番制で、明け六つ時から夕七つ時まで関所に詰めた。夜間は番士1名と宿民から雇用された下番1名が宿直した。参勤交代の大家など、多人数の通行がある場合には全員が勤務することもあった。

番士4家は牛頭天王社（八坂神社）の西方、古利根川の堤防脇に各々屋敷を構えていた。これを拝領屋敷、または居屋敷と称した。屋敷は東から加藤家、足立家、嶋田家、富田家の順で並立していた。調査対象地外の富田家を除く各屋敷の規模や構造などについては、当事業団が発掘調査を実施した、栗橋関所番士屋敷跡の調査報告書（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2018）を参照されたい。

先にも触れたように、堤防上に構えられていた関所は元禄三年、同八年、宝永元年、寛保二年の四度、利根川の氾濫により流失し、その度毎に再建されている。寛保二年の時は加藤家裏の堤防が決壊し、周囲より一段高い盛土上に建てられてい

たにも拘らず、屋敷は押し寄せた砂で軒先まで埋め尽くされている（埼玉県教育委員会2002）。

明治二年（1869）、新政府の行政が及ぶに至り、240年以上続いた房川渡中田御関所は廃止となる。番士4家も時を待たず任を解かれ、新たに置かれた葛飾県役所へ奉職することとなった。

（3）栗橋宿の様子

江戸を発した日光道中は幸手宿から北上し、栗橋宿の入り口で直角に左折、直ぐに右折すると長い北向きの直線路となる。宿の北端で再び右折、堤上の関所を経て中田宿へ向かう房川渡（渡船場）となる。この道筋は関所付近を除き、現在も主要地方道羽生外野・栗橋線に踏襲されている。

『風土記稿』は栗橋宿の規模を長さ10町（1090m）余、民家419軒とし、その多くは街道左右に透き間なく建ち並び、櫛の歯のごとくであると記す。

宿内には上町、中町、下町、三ツ俣、船戸、鍛冶町の小名（地区名）があることが、『風土記稿』に記載されている。上町は街道沿いの北部で、本陣や脇本陣、問屋場、旅籠屋など宿の中核的な施設が集中していた。北端で右折して関所へ向かう街道沿いは、上横町もしくは横町と呼ばれた。中町は同じく中央部、下町は南部で新町とも称される。本書報告の栗橋宿跡第8地点は中町（史料によっては「仲町」）に位置する。三ツ俣は牛頭天王社と関所番士屋敷の間、船戸は利根川堤防に沿った堤外（河川側）の町で、河岸場があり舟問屋などが立ち並んだ。鍛冶町は上町と堤防に挟まれた地区で、渡船や舟運に携わる水主たちの住まいが密集していた。町の中心は北部の上町側で、昭和初期の上町では、本通りに面した家はその全てが瓦葺きであった。それに対して中町、新町（下町）は農家が多く、藁屋根の家々が目立ったという（久喜市教育委員会2011）。

『久喜市栗橋町史 資料編二』（久喜市教育委員会2013）に載る文政十二年（1829）の「栗橋

宿外十二ヶ村農間渡世改帳（抄）」には、宿の大きさが記されていないものの、家数434軒、人口1,772人とある。434軒のうち309軒は「農間商并職人」で、建て前上は農業となっている。

一方、『大概帳』によれば、往還（街道）の距離は南隣の小右衛門村の境から房川渡船場まで15町13間（約1,658m）、道幅は6間半（約11.7m）、町並の長さは南北10町30間（約1,140m）である。人口は男869人、女872人の計1,741人、家数は本陣・脇本陣各1軒、旅籠屋25軒を含め、総数404軒とする。

『大概帳』に載る埼玉県内の他の5宿の人口、および家数は次のとおりである。

草加宿：3,619人、723軒（うち旅籠屋67軒）

越ヶ谷宿：4,303人、1,005軒（うち旅籠屋52軒）

粕壁宿：3,701人、733軒（うち旅籠屋45軒）

杉戸宿：1,663人、365軒（うち旅籠屋46軒）

幸手宿：3,937人、962軒（うち旅籠屋27軒）

杉戸宿を除くと、栗橋宿の人口や家数は他宿の半数以下で、合宿である中田宿の人口403人、家数69軒を加えてもその数は4宿に遠く及ばない。人口、家数ともに、関所や渡船場を有する街道の要衝にしては意外な数値である。なお、越ヶ谷宿は千住宿、宇都宮宿に次ぎ、日光道中では3番目の規模を有する繁華な宿場であった。

明治時代の『郡村誌』を見ると、栗橋宿の人口は男1,109人、女1,131人の計2,240人である。家数は戸数として本籍476戸、寄留4戸、社1戸、寺5戸が挙げられている。日光道中に該当する道については、これを「陸羽街道」と呼んで、小右衛門村から房川渡船場まで15町55間（約1,745m）、道幅は4間（約7.2m）としている。

『大概帳』と比較すると、道幅が2間半（約4.5m）も狭くなっている。試みに『郡村誌』に載る他宿の「陸羽街道」幅を確認したところ、杉

戸宿は5間、幸手宿は6間と記されている。両宿の幅からしても、栗橋宿のそれを4間とする『郡村誌』の記述には注意が必要である。現在の主要地方道羽生外野・栗橋線の幅は、路側帯を含めれば10mを超える。

これまでの発掘調査では、本陣跡の北辺部で道路跡が検出されている。硬化面の幅は6～7mで、関所へ続く往昔の街道そのものであることは間違いない（埼玉県埋蔵文化財調査事業団2020a）。第一面で検出された道路跡の両側に敷設された木樋や、第二面で検出された側溝状の溝と土壌の間隔は、7.3～7.5m（およそ4間）と読み取ることができる。発掘調査前、この部分に存在した道路の幅は6m程であった。

この点について、『大概帳』は宿の南北を貫く街道の幅（6間半）で、『郡村誌』の記述は誤記や誤植ではなく、そこから折れて関所へ向かう街道の幅（4間）をそれぞれ示しているのではなからうか。江戸時代の諸絵図が関所前の街道を心持ち細く描いているのも、故なきことではないのかもしれない。

宿内の生業について、『風土記稿』は宿駅関連と諸商とし、『大概帳』は農業の傍ら旅籠屋（25軒）や食物を提供する茶店の他、諸商を営む者が多いと記す。

天保十四年（1843）～弘化二年（1845）頃に作成されたと考えられる久喜市所蔵の『栗橋宿往還絵図』には、町並の図とともに居住者名と職業が書き込まれている。同図によれば、職種は旅籠屋22軒（うち飯売旅籠屋2軒）、荒物屋12軒、煮売茶屋10軒、青物屋9軒、饅頭屋8軒、小売酒屋6軒、茶屋5軒、春米屋5軒、餅菓子屋5軒、湯屋4軒、髪結4軒、豆腐屋3軒、糸屋3軒、畳職人3軒、塩物屋2軒、煙草屋2軒、足袋屋2軒、医師2軒、鍛冶屋2軒、乾物屋2軒、甘酒屋2軒、油屋2軒、出穀問屋2軒の他、駕籠屋、芋屋、舟問屋、質屋、古立道具屋、鍋釜屋、左官、

附木屋、定足屋、絵師、仕立職人、綿屋、建具屋、飴屋、小間物屋、薬師屋、按摩各1軒などとなっている（他に明家、明地あり）。

一方、前出の「栗橋宿外十二ヶ村農間渡世改帳（抄）」には居酒屋27軒、髪結7軒、湯屋6軒、煮売屋5軒、質屋29軒（休業中8軒）が経営者名とともに記されている。『栗橋宿往還絵図』に比して質屋の軒数が異常に多いが、これは他職を兼業する者も載せたためであろうし、煮売屋が少なく居酒屋が多いのも、酒肴を提供する煮売茶屋や一部の旅籠屋をも含むためと解される。

『郡村誌』では、専ら男は農・工・商、女は農・商に携わるとする。

栗橋宿と舟運

栗橋宿は利根川河畔に拓けた町のため、舟船による物資運輸も盛んであった。船戸町（栗橋河岸）と宿の南端近く（下河岸）には河岸場が備わり、周辺農村の年貢米をはじめ、民間の荷も多数取り扱われた。

利根川では舟運による輸送が発達しており、栗橋近辺でも権現堂河岸と関宿河岸が古くから知られている。栗橋河岸は、近世当初の元禄年間には年貢米を江戸へ送る「津出し湊（河岸）」ではなかったが、明和八年（1771）には中里村の、天明期（1781～89）には加須市域の水深村の津出しが行われ、近世中・後期にはその役割があった。栗橋町史に『武蔵国郡村誌』から作成した栗橋町域の明治初期の船の一覧が掲載されているが、その数610艘に上る。いかに栗橋区域が舟運と密接な生活を送っていたかが分かる。

この内、栗橋宿が有していた舟運に関わった所謂川船は、高瀬舟10艘、小高瀬舟2艘、似躰（にたりひらた）船8艘、屋形船17艘である。

江戸まで荷を運んだ舟は荷下ろしの後、奥川積問屋を通じて塩、砂糖、肥料、木綿、瀬戸物などを積載して遡行の途に就いた。奥川積問屋とは特定の河岸場との取引権を有する問屋のことで、

栗橋河岸を持ち場としたのは、江戸小網町二丁目の利根川屋多吉であった（久喜市教育委員会2015）。

栗橋河岸には、房川渡しから堤沿いに続く舟戸町の船着き場と、やや下った利根川と権現堂川の分岐付近の下河岸があった。

栗橋関所では、船改め役を務める船問屋が船荷を改める「船改め」が行われていた。『栗橋関所史料一』によれば、船改めは享保年間（1716～1736）に下河岸で行われていた。しかし浅間山噴火（1783）の泥流の影響で、利根川の川筋が変化して下河岸に接岸できなくなり、舟戸町近辺に場所を移したとされている。従って、津出し湊や、江戸との川船の往来に利用されたのは舟戸町の河岸場と推定される。

河岸には舟の手配と荷の積み下ろしを行う舟問屋があり、栗橋舟渡町の河岸場では伊勢屋と菊田屋が著名である。栗橋の関所では舟荷も改める必要があったが、実際の業務はこれら舟問屋に委託されていた。

近世の栗橋村

近世初頭では栗橋宿を含む井坂、松長、佐間、島川、広島、河原代、狐塚、中里、小右衛門の各村は幕府の蔵入地で、代官伊奈半十郎忠治によって支配されていた。伊奈氏の支配は関東諸国に及び、特に武蔵国東部の低地開発を強力に推し進めたことで知られている。その結果、開発された広大な新田は伊奈氏の支配地として引き継がれていった。利根川東遷事業による新田開発もその一環とも言えるだろう。

元禄十年（1697）の所謂元禄の地方直しでは、高柳村、高柳新田は酒井対馬守、島平村は酒井監物、広島村は久津見斧太郎、河原代村は久津見斧太郎・榊原大膳の旗本知行へ支配替えが行われた。

加えて、松長、間鎌、間鎌新田、佐間、佐間新田、井坂の各村は、18世紀中葉の延享年間

(1744～1748)、19世紀前半から中葉の文政年間から安政年間(1818～1860)に徳川御三卿領への支配替えとなった。

周辺の近世遺跡

栗橋周辺の近世遺跡は、日光道中と古河城を中心に展開する。

古河城(14)は、近世以降小笠原、戸田松平、奥平、永井、土井、堀田、藤井松平、大河内松平、本多など、多くの幕閣を含む歴代の城主によって、拡張、城下町の整備が行われた。特に、度々将軍の日光参詣の宿城となったため、その都度、特別な手当金が支給され整備が進んだ。

利根川の東側は、利根川の河川改修以降も、この古河城を中心として遺跡が展開している。

旧総和町香取東遺跡(17)では18～19世紀の土壌(墓壇)、井戸跡、溝跡が検出された。南側に隣接する釈迦才仏遺跡(36)(茨城県教育財団1998)には、南北11.4m、東西8.4m、高さ1.0mの不整隅丸方形を呈する近世後半の塚が造られた。

長井沼の奥になる本田山遺跡(21)は、中世に引き続き近世でも墓地として継続している。柳橋城の南側となる旧総和町向坪B遺跡(19)(茨城県教育財団1986)からは近世の土壌、溝跡が検出され、土壌墓が含まれていると考えられる。長井沼東側の旧鎌倉街道は栃木県多功に通ずる日光東街道として、元和年間には整備されていたとされている。街道には仁連宿、谷貝宿が設けられた。仁連宿の北、諸川には中世から続く本田遺跡(29)(技研測量設計株式会社2010)があり、17世紀後半を中心とする掘立柱建物跡、竪穴状遺構、地下式坑、土壌、墓壇、井戸跡、溝跡が検出された。

利根川の西側では、近年の堤防強化対策事業に関わる発掘調査成果がある(埼玉県埋蔵文化財調査事業団2021)。栗橋宿跡から10kmほど上流の本田遺跡では、利根川に隣接する水塚の調査が行

われ、水塚の盛土・石積みと、その上の建物跡・隣接する蔵跡などが検出された。水塚を広範囲に発掘調査した事例は少なく、建物構造等を把握する上で貴重な成果となった。一方で、水塚と建物の構築順序などを遺構の観察から明確にすることは予想外に困難であった。特殊な近世構築物に関わる調査方法の確立が必要となろう。建物の基礎からは幕末～明治期の生活道具・建築材が多く出土し、清朝磁器や赤瓦の出土が特筆される。地方農村の遺物様相を窺うことができる好例である。

(4) 近世から近代への栗橋

幕末の栗橋宿

幕末の19世紀中葉には、天保の飢饉に端を発する打ちこわし、慶應二年(1866)から始まる武州世直し一揆、元治元年(1864)の水戸浪士による天狗党の乱など、社会情勢が不安定になった。栗橋でも、慶應四年(1868)羽生陣屋焼き払いに始まる打ちこわしが波及した。『足立家文書御関所日誌』には、9000人余りが宿内へ侵入し、名主良右衛門宅に放火し、仲町百姓弥平次宅、本陣池田由右衛門宅を打ちこわし、また関所へも押し入り、番士が関所から退去したとある。

明治二年(1869)2月には、葛飾県役所から関所廃止の通知が出された。番士四家は関所道具を栗橋宿へ預け、関所改めの廃止を各所に通知し、関所を引き払った。一方栗橋宿は、明治二十二年(1889)に町村制が施行され、北葛飾郡栗橋町となった。交通の要衝としての役割は引き継がれていった。

近代の栗橋地区

本陣池田家の池田鴨平は、明治新体制下において、葛飾県の組合取締役・勸農取締役方を務め、行政区画が埼玉県に移行すると、第八区区長となった。明治九年(1876)の明治天皇行幸に際しては、案内人を務めている。

交通網における大きな変化は、大宮～宇都宮間の鉄道敷設で、明治十八年(1885)7月に栗橋

駅までが開通する。当所、渡船連絡であった利根川の渡河も、翌年7月には鉄橋が架設された。四号国道の利根川渡河は大正期に至ってもあいかわらず渡船であったが、大正十三年（1924）に利根川橋が開通した。

一方、明治十年（1877）には内国通運会社が東京深川から栗橋を経て、思川の生井村（栃木県小山市）まで蒸気船通運丸を就航させた。内国通運会社は、江戸飛脚問屋仲間を中心に、京都・大阪の飛脚問屋仲間などが参加し、明治五年（1872）に設立された運輸会社である。明治六年（1873）には、政府は太政官布告第230号により、国内の陸上・水上交通をほぼ独占する権限を内国通運に与え、各地の輸送を同社に統合していく政策をとった。通運会社の資料によると、栗橋が寄港地として掲載されるのは、明治十年（1877）8月21日の運航からで、扇橋—乙女（栃木県小山市）間を毎日運航する就航路であった。寄港地は扇橋・行徳・松戸・加村・野田・宝珠花・関宿・境・中田・栗橋・古河・生井・生良の順であった。また、同年十三年7月10日開設の扇橋—北河原（行田市）間の就航路にも、栗橋の地名が記される。明治十三年（1880）には長島良幸が長島丸を、同三十五年（1902）には栗橋の廻船問屋古川平兵衛が古川丸を就航させるが、内国通運会社との競争に敗れ撤退している。その後、鉄道の発達により、舟運は衰退し、大正八年（1919）、内国通運も撤退している（栗橋町教育委員会2010）。

このころの栗橋町の様子は、明治三十五年（1902）の『埼玉県営業便覧』にみることができる。旧日光道中の表通りには商家が連なり、回漕、運送業に関わる店が多いのも特徴である。明治三十一年（1898）に町の地主や商人による出資で開業した栗橋銀行や、明治三十三年（1900）開業の栗橋商業銀行、いずれも池田鴨平が設立に関わった栗橋学校（明治五年（1872）に私塾と

して開校）・淑徳女学館（明治二十二年（1889）開校）等、主要な施設が旧宿場内に設置されていたことが分かる。

利根川沿いの船戸町には回漕業や料理店等が立ち並び、文豪田山花袋が度々訪れたという鯉料理店の稲荷楼（稲荷屋）も船戸町にあった。稲荷楼は利根川の上に張り出すように店を構えており、川岸には棧敷を作るなど風情ある店であった。ちなみに『風土記稿』には、利根川の産物として、鯉、鮒、鰻、鯰、さい（ニゴイ）、いなは（種不明）の6種の川魚が挙げられ「味ひ最美なり」とある。稲荷楼は、国会開設に先立つ大同団結運動期に政治活動にも用いられた。明治二十一年（1888）には栗橋町の町制が敷かれるにあたって、埼玉県知事らが巡視後に投宿している。翌二十二年1月には「町村制講義会」が栗橋学校で講習会を開くが、その聴衆は300余人に上り、夜には稲荷楼で盛大な懇親会が行われたという。同年には、幸手・杉戸地域の有志によって結社「蘭交会」が発足、例会が行われている。また、明治二十四年（1891）9月には自由党派の政談演説会が開かれ、稲荷楼で小宴が開かれている（久喜市教育委員会2011）。

近世の宿場町を骨子としつつ、近代化を遂げた栗橋町であったが、前代に引き続き水害・災害と直面することも多かった。明治四十三年（1910）の水害では冠水を逃れたが、それ以前の明治二十三年（1890）の水害では栗橋町の戸数の25%強が冠水したとされる。

明治三十三年（1900）からは、利根川の抜本的な改修計画（利根川改修計画）が始まり船戸・鍛冶町は河川敷となる。利根川における近代治水事業は以後、継続的に実施されている。

栗橋宿跡の利根川渡河地点という立地は、交通の要衝としての発展と、水害によるリスクが表裏一体の関係にあったと言えよう。

Ⅲ 遺跡の概要

栗橋宿跡の調査は、首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って実施したものである。所在地は久喜市栗橋中央二丁目である。

栗橋宿は、慶長年間に池田鳴之助、並木五郎平らが元栗橋から移住して開宿した宿場と伝わる。南北に走る日光道中を挟んで町屋が並んでいた。『日光道中宿村大概帳』には、宿高 689 石余、宿往還の長さ 15 町 13 間余、宿町並 10 町 30 間、宿の家数 404 軒、本陣・脇本陣各 1 軒、旅籠屋 25 軒、人口 1741 人（男性 869 人、女性 872 人）と記されている。

栗橋宿関連の発掘調査は、既に報告された平成二十四年（2012）の栗橋関所番士屋敷跡・栗橋宿跡第 1 地点（埼玉埋蔵文化財調査事業団 2018a, b、以下埼玉埋文）に始まり、継続的に続けられ、範囲も広範囲に及ぶ。このため、調査区全体を網羅するように、大グリッドと小グリッドを組み合わせて方眼を組んでいる。詳細は凡例と第 4 図に示した。今回報告する栗橋宿跡第 8 地点は、大グリッドの F 7 グリッドにあたる。既に報告された栗橋宿跡第 7 地点（埼玉埋文 2019d）の北、及び第 9 地点（埼玉埋文 2022）の南に隣接する調査区であり、日光道中から東におよそ 28 m 離れた町屋の「ウラ」に当たる場所に位置している。

既報告の調査地点は、久喜市郷土資料館所蔵の天保十四年～弘化二年（1843～1845）の様子を描いたと推定される（埼玉埋文 2021a）『栗橋宿往還絵図』（以下『絵図』）及び明治三十五年（1902）に刊行された『埼玉県営業便覧』（以下『営業便覧』）と発掘調査で検出された区画施設を基に対比を行っている。本書でもそれらに倣い、第一面の区画施設を基に、『絵図』と『営業便覧』を用いて対比を行った。

区画名は『栗橋宿本陣跡Ⅰ』の町屋区画 A に始まり、区画 Z 以南は AA、AB…とした。また、区

画施設はみられないが、『絵図』から複数の敷地が対応される場合は、A1、A2 というように細分した。

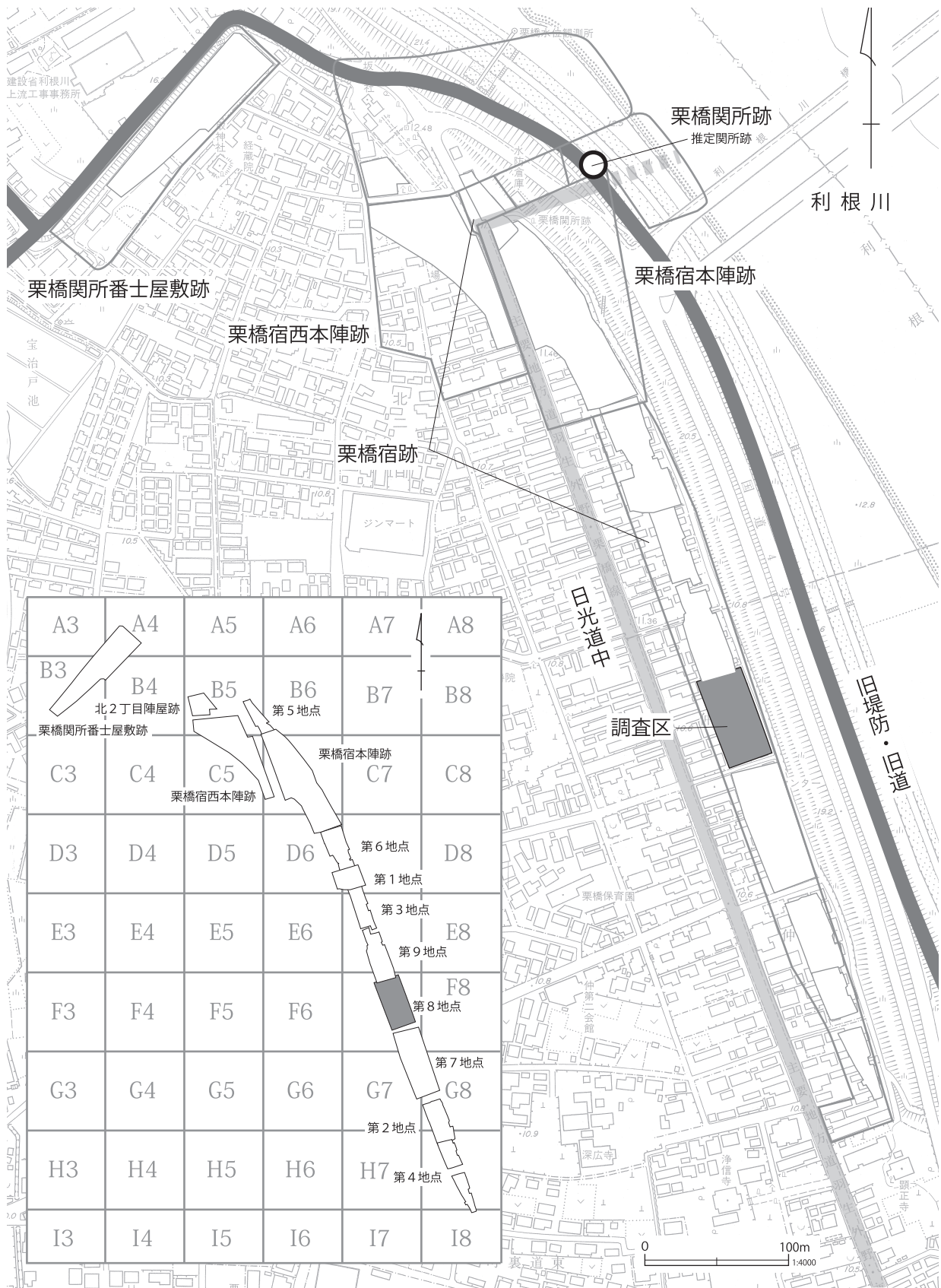
第 8 地点の区画は、第 9 地点と重複する調査区北端の区画 AA から南端の区画 AG にあたる（第 18 図）。なお、南に隣接する第 7 地点では区画 AJ から始まっているが、第 8 地点と第 7 地点の間には調査区外（南北幅第 8 地点 4.4 m、第 7 地点 2.4 m）及び幅 3.8 m 程度の現代の道路を合わせた南北幅計 10.6 m 程度の未調査区がある。未調査区は北から『絵図』にみえる「旅籠屋 / 長吉」（区画 AH）、『営業便覧』では「高津辰五郎」、『群村史』にみえる上の橋（長五間・巾三尺）、『絵図』の「饅頭屋 / 吉左衛門」（区画 AI）、『営業便覧』の「料理店 / 柿沼亀吉」にあると推定される。

本報告の調査区は北から区画 AA「荒物屋 / 忠助」、区画 AB「青物屋 / 要右衛門」、区画 AC「明地 / 清吉」、区画 AD「煮賣茶屋 / 兵藏」、区画 AE「旅籠屋 / 吉田屋 / 太左衛門」、区画 AF 1「餅菓子屋 / 惣右衛門店 / 内藏之丞」、区画 AF 2「旅籠屋 / 惣右衛門」、区画 AG「明地 / 平八持」、区画 AH「旅籠屋 / 長吉」に相当する。区画 AA については大半が第 9 地点にかかっているため、遺構の詳細は『栗橋宿跡Ⅶ』を参照されたい。

第二・三面では明確な区画施設を確認することができなかったため、第一面の区画に即した。第一面と第二・三面の間に区画の変動があった可能性については留意しておきたい。

区画 AD の第三面では、天明三年（1783）の浅間山噴火直後の 18 世紀後葉に比定される第 500 号土壇から「吉田屋」の刻書がみえる焙烙が出土しており、区画 AE の敷地が 18 世紀後葉～19c 前半にかけて変動している可能性がある。

区画 AE・AF は面積が他の区画より広い。未調査区及び第 7 地点の区画を考慮すると、区画 AF



第4図 遺跡位置図

において二つの区画が推定されるが、区画施設はみられないため、実態は一つの区画である。

また、『営業便覧』では区画 AA/AB「米穀肥料商 / 吉岡善六」、区画 AC/AD「田口龍太郎」、区画 AE「吉田作二郎」、区画 AF 1 / AF 2「薬種商 / 柿沼清九郎」、区画 AG「菅谷藤二郎」である。近代になると一部で対応する区画が広がる。

発掘調査では、上下二面の遺構確認面を設定し、実施した。標高は、上面の第一面で 10.0 ～ 10.4 m 前後、下面の第二面で 9.1 ～ 9.5 m 前後である。

第二面では、第 458 号土壌（第 460 図）を掘削した際、確認面よりさらに下層に掘り込み面をもつ遺構が確認された。そのため、調査区北半部を 0.2 ～ 0.3 m 程度掘削を行った。標高 9.1 ～ 9.3m の地点で下層遺構群が検出され、第二面下層として調査が行われた。なお、調査区南半部は第二面表土掘削時に標高 9.2m 前後まで掘削されている。第二面下層遺構群については、主体となる時期が第二面より古く、遺構の掘り込み面が異なることから第三面とした。

検出された遺構は、近世以降の建物跡 6 棟、基礎状遺構 6 基、埋設桶 20 基、埋設甕 1 基、井戸跡 8 基、杭列 4 条、溝跡 28 条、木樋 1 基、畠跡 3 箇所、小鍛冶跡 2 基、焼土遺構 9 基、土壌 484 基、性格不明遺構 2 基、ピット 77 基である。

第一面は、19 世紀前半以降の生活面と考えられるが、遺構の大半は 19 世紀後半以降である。堅固な造りの建物跡が杭列、溝跡によって区画された短冊形の区画に整然と並んで検出されている。杭列や溝跡は 19 世紀前半以降に機能していたものと考えられ、現在の敷地境と一致する。既報告の地点と同様に、日光道中に対して直交する敷地境が 19 世紀以降に整備され、現在まで引き継がれてきたことを示している。

第一面については、廃絶期の指標となる陶磁器が近世・近代ともに混在している事例があり、幕

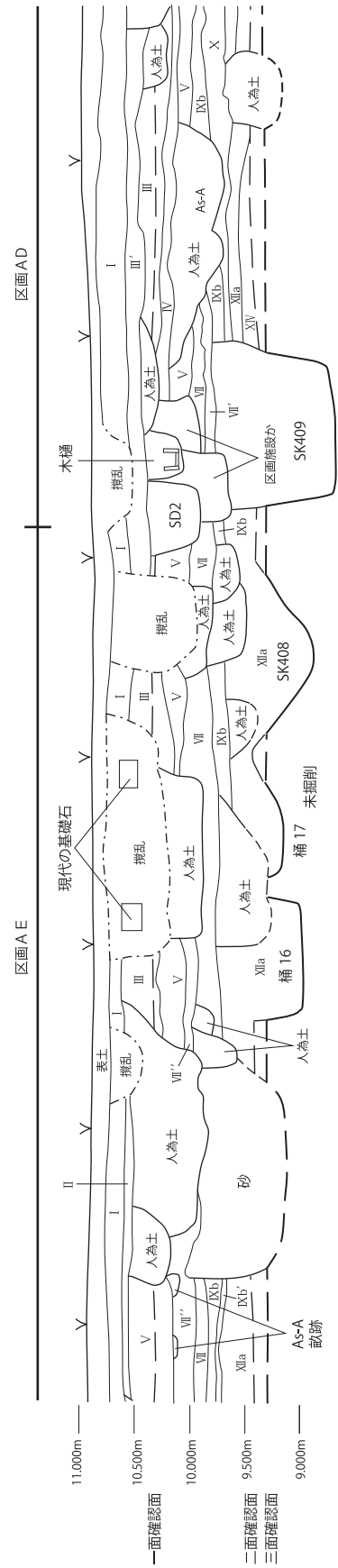
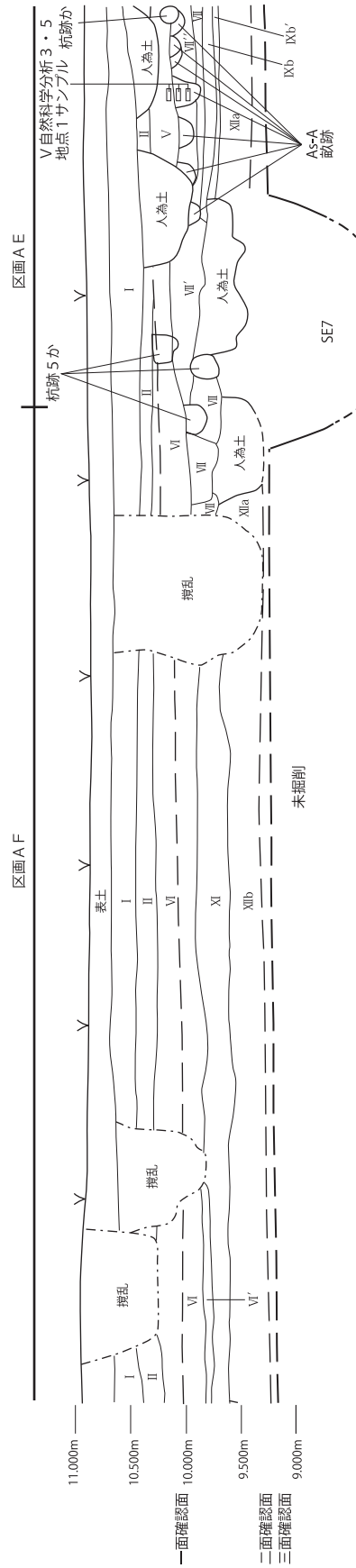
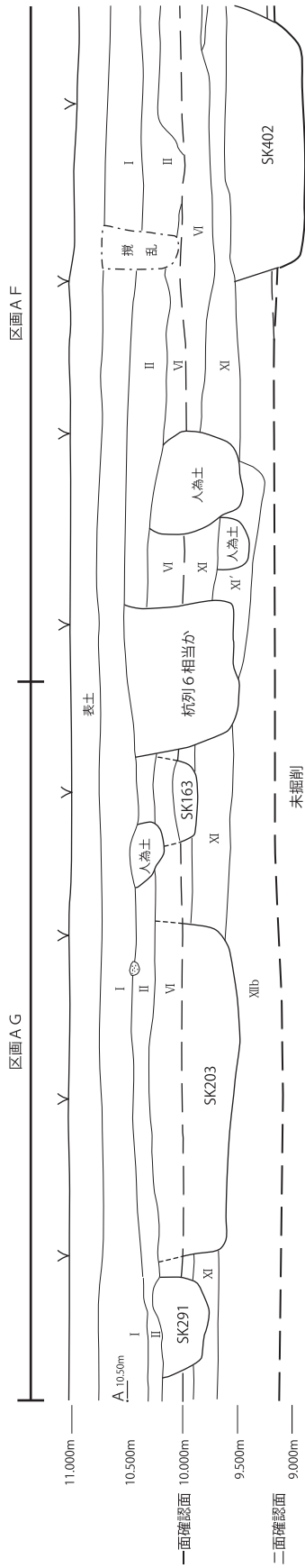
末・明治時代初頭の遺構、近代遺構、攪乱の判別が現地調査では困難であったことから、明らかな現代の攪乱を除いたすべての遺構の記録を行っている。そのため、他の調査地点より遺構の数、とりわけ土壌の数が多いことについて留意したい。

第一面で検出された土壌のうち、平面形がおよそ鍵穴状を呈し、焼土層や炭化物層がみられる浅い土壌は、焼土遺構として扱った。また、純砂層もしくは砂利・瓦片を多く含む堅致な覆土で、出土遺物が極端に少なく、単独の方形土壌及び溝跡は、基礎状遺構として扱った。また、同様の覆土で「ロ」字形にまわる遺構は建物跡とした。

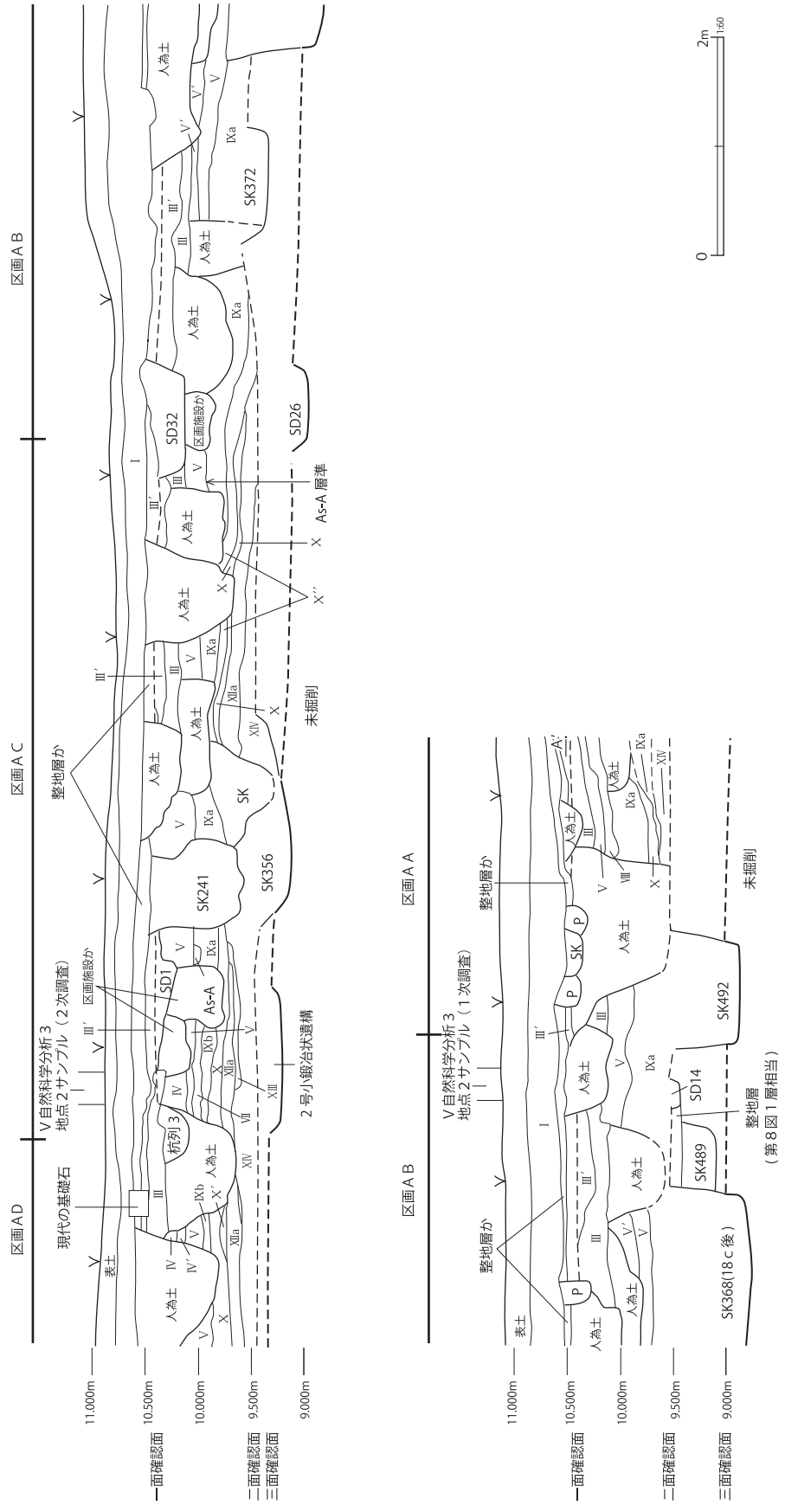
第一面は 19 世紀後半以降を中心に利用されたと考えられるが、19 世紀前葉の遺構も少数確認されている。特筆すべき遺構では、埋設桶が多数検出されている。これまでの調査から用途は多様であるようだが、第 23 号埋設桶は木樋に接続しており、所謂集水枘としての機能が窺える。また、埋設桶のうち、第 3・4・7 号埋設桶については長方形の共有された掘り方を持ち、屋根材が破損した桶内に堆積している特異な出土状況であった。桶内覆土の自然科学分析の結果から、第 8 号埋設桶と共に便槽としての機能が指摘されている（V-6）。

第一面では古い時期の遺構が極一部にみられ、標高が低い調査区南側では、18 世紀末に遡る第 275 号土壌（第 358 図）が検出されている。第 6 地点（『栗橋宿跡Ⅲ』埼埋文 2019c）では、第一面で 18 世紀末の遺構が 1 基確認されており、18 世紀末から 19 世紀にかけての生活面にそれほど比高差がないと考えられる。

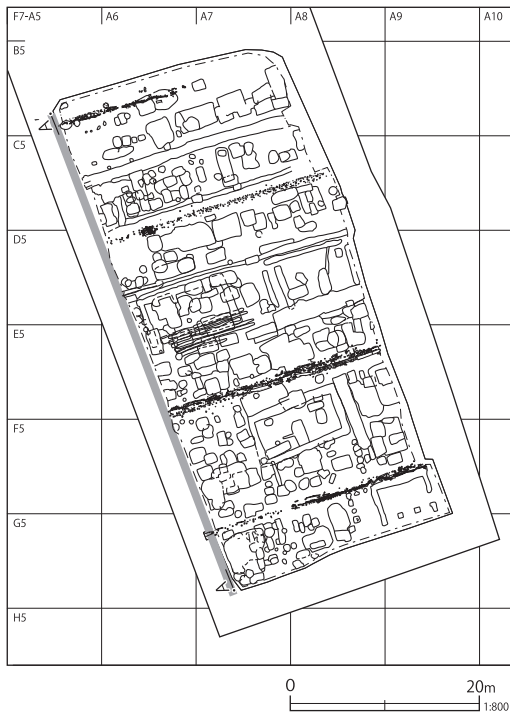
第二面は、18 世紀後半を中心に利用されたと考えられる面であるが、19 世紀前・中葉の遺構も比較的多い。建物跡、埋設桶、井戸跡、溝跡、畝跡、小鍛冶遺構、土壌等が検出されている。第二面の特徴の一つとして、井戸跡が多数検出されている。第一面では井戸跡の検出が皆無であり、



第5図 基本土層西壁(1)

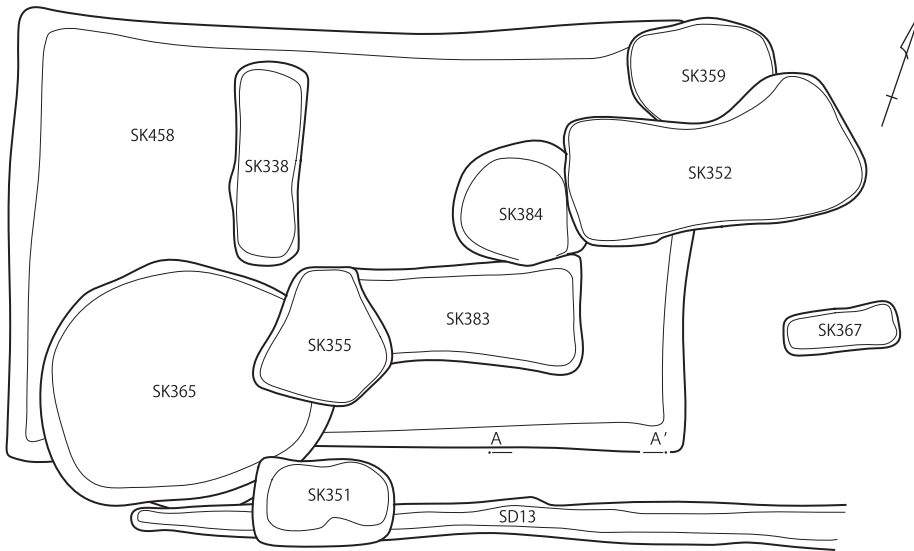


第6図 基本土層西壁(2)



- 基本土層（西壁）
- I 灰褐色シルト やや固い、人為的整地層 II よりも細かい
 - II 灰色シルト 炭化物 (φ2~3mm) 多量 人為的整地層か
 - III 灰黒色シルト Vよりやや砂質 やや均一 木片 (φ20~50mm)・炭化物 (φ2~20mm)・酸化鉄多量 人為的
 - III' III層ほぼ同じだが分層可
 - IV 灰色シルト 不均一 構築物か ブロック少量 盛土の可能性あり
 - IV' IV層ほぼ同じだが分層可
 - V 灰黒色シルト やや均一 木片 (φ20~50mm)・炭化物 (φ2~20mm)・酸化鉄多量 人為的
 - V' V層ほぼ同じだが分層可
 - VI 灰色砂 細砂 混入物なし 自然層
 - VI' VI層ほぼ同じだが分層可
 - VII VとIXbの混合土 人為的
 - VII' VII層ほぼ同じだが分層可
 - VII'' VII層ほぼ同じだが分層可
 - VIII 灰色砂 ややシルト質 ラミナなし As-A層準
 - IXa 灰色シルト やや不均一 部分的に砂を含む 乱流堆積物か ラミナなし 炭化物 (φ2~3mm) 若干 自然層
 - IXb 灰色シルト やや均一 ラミナあり 自然層
 - IXb' IXb層ほぼ同じだが分層可
 - X 灰色砂 均一 やや細粒 シルトとの互層あり 炭化物・焼土なし 自然層
 - X' Xの下部に存在 Xよりやや粗粒な砂とシルトの互層
 - X'' Xの上部に存在 Sn-1より少し細かいシルト質の砂層
 - XI 灰色砂
 - XI' XI層ほぼ同じだが分層可
 - XIIa 灰色シルト やや不均一 部分的に砂を含む 乱流堆積物か ラミナなし 炭化物 (φ2~3mm) 若干 自然層
 - XIIb 砂層
 - XIII 灰色シルト やや不均一 部分的に砂を含む 乱流堆積物か ラミナなし 炭化物 (φ2~3mm) 若干 自然層 やや黒色ぎみ
 - XIV 灰色シルト 均一 極めて均一 ラミナなし

第7図 基本土層西壁（3）



- 基本土層（第二面）
- | | |
|---|--|
| <p>A 10.00m</p> <p>基本土層</p> <p>0 2m 1:600</p> | <ul style="list-style-type: none"> 1 暗褐色土 しまり密 炭化物粒子・焼土粒子若干 整地層 2 灰白色土（乾） 暗褐色（湿）細粒砂 ラミナ状の流動痕が水平方向に観察される SK458より上部覆土と同一洪水による堆積か 3 黒褐色土 しまりやや強 炭化物粒子若干 粘性強 整地土 グライ化の影響をうけたシルト質 細粒砂少量混在 褐色細粒砂ブロック少量 4 暗褐色土 シルト質 細粒砂中量混在 5 にぶい黄褐色土 シルト質 細粒砂混在 6 褐色砂 細粒砂（亜角） 7 灰色砂 粗粒砂 軽石少量混在 <p>※4・5はグライ化の酸化⇄還元の程度の差か</p> |
|---|--|

第8図 基本土層下層

これは第6地点や第7地点の分布状況と同様である。一方で、本陣跡や栗橋上町の町屋区画では第一面で井戸跡が一定数みられる(埤埋文 2019a・2020b)。仲町以南は19世紀以降に水源に関わる土地利用法が栗橋上町とは異なる可能性がある。

第500号土壌は、遺構覆土の中層に天明三年(1783)に比定される浅間A降下軽石と考えられる層が検出されており、その直上から18世紀後葉に比定される遺物が多量に出土している。刻書「吉田屋」が刻まれた焙烙がみられ、『絵図』における「旅籠屋/吉田屋/太左衛門」に比定される旅籠屋の一括資料である。「吉田屋」が18世紀後葉まで遡り、史料では確認することができない貴重な事例である。

第三面は、18世紀前半を中心とし、栗橋宿跡では稀である18世紀前葉に比定される土壌が一定数検出されている。確実に18世紀前葉以前を遡る遺構は、本陣跡第1056号土壌(18世紀前葉)、第1025号土壌(17世紀中葉)、第1032号土壌(17世紀中葉)、第6地点第220号土壌(17世紀中葉)等、極少数しか確認されていない(埤埋文 2019c・2020b)。第8地点で検出された18世紀前半以前の遺構群は、江戸時代前・中期の栗橋宿における町屋形成を解明する手掛かりとなる。

特に、18世紀初頭に比定される第497号土壌の掘り込み面直上を覆う焼土層は、出土陶磁器から18世紀前葉に起きた火災に関わる焼土層の可能性が考えられる。なお、栗橋宿跡では享保十年(1725)に栗橋宿が全焼する火災に見舞われている。関係性が示唆されるが、焼土層は極一部しか確認されておらず、現状では判断し得ない。文化七年(1810)の栗橋宿大火(弥七火事)の痕跡が不明確であるという問題と共に、宿における災害については議論の余地が残されている。

また、第552号土壌(第711図)は、18世紀前葉起きた火災に伴う廃棄土壌であり、栗橋宿跡最古級の火災処理土壌である。

18世紀前葉以前の火災関係遺構が標高9.1～9.3mの地点で散漫的に検出され、調査区の中央から東側に分布する点は興味深い。

基本土層は、町屋の形成過程を把握するために、日光道中側である調査区西壁に設定し、およそ45mに渡って記録した。また、第二・三面遺構確認面以下は、水平堆積を確認できた第458号土壌の内壁面南側を対象に幅およそ1.5m、深さ1.0mの基本土層を記録した。

西壁の調査区中央部付近、標高10.0～10.1mに畝跡がみられ、畝跡覆土に浅間A降下軽石(As-A)がみられる(V-5)。畝跡は人為的な第V層に覆われおり、第V"層を掘り込んで形成されている。なお、畝跡は第一面と第二面確認面の中間に位置する遺構であり、掘り込みも浅いため、遺構検出は叶わなかった。第V層は調査区半ばから北にかけてみられ、同一レベルで南側にみられる第VI層の自然堆積層と共に、その最下部が浅間A降灰時の生活面と考えられる。

また、第二面調査区北端部位置する第368号土壌(第433図)は掘り込み面を第V層に覆われている。多量に出土している陶磁器類は18世紀後葉、具体的には1770～1780年代の組成を示している。浅間A降灰時の生活面を掘り込み面としていることから、浅間A降灰前後の遺物組成を示す貴重な事例である。

以上に述べてきたように第V層最下部が天明三年(1783)の浅間山噴火時の生活面であったことは確実である。また、第VI層最下部もまた同様の年代の生活面であろう。浅間山噴火時の生活面標高はおよそ9.9～10.3mで、南に向かって傾斜している。

これまでの栗橋宿跡の調査では『栗橋宿跡V』の日光道中において、浅間A降下軽石が検出されており(埤埋文 2020c)、基本土層4では10.9m、基本土層6では11.5m付近で検出されている。第8地点における火山灰の検出標高より0.8～

1.4 m程度高いが、これは自然堤防上の立地により宿全体が南へ僅かに傾斜しているためと考えられる。

浅間A降灰時の生活面の他に、出土陶磁器と遺構の掘り込み面の関係から二時期の生活面が明らかとなっている。

第二面調査区北に位置する第372号土壌は19世紀中葉と18世紀代の遺物が混在しており、調査区西壁の状況から第372号土壌は浅間A降灰時の生活面を掘り込んで作られている。南側には第Ⅲ層に覆われた土壌状の人為層がみられ、19世紀中葉の遺物はこの層からの混入と推定される。したがって、第Ⅲ層最下部は19世紀中葉の生活面に相当すると考えられる。

また、第489号土壌（第461図）を覆う整地層は第8図基本土層（3）の第1層に相当する。遺構の廃絶期は18世紀前半に比定され、第1層最下部が18世紀前半以前の生活面と推定される。

栗橋宿跡ではこれまでの調査の中で、洪水層を捉えることができていなかった。その理由は、栗橋宿本陣跡や第6地点等、栗橋上町にあたる場所では土地利用や整地が頻繁に行われていることから、洪水層などの自然堆積物が失われていることが考えられる（埤埋文2019c、2020b）。そのため、洪水層が僅かに残されていても、調査では捉えることが困難であったと考えられる。

しかし、第8地点は栗橋仲町にあたる場所であり、自然堆積層や整地層の遺存状態が良好であった。このことは、基本土層西壁から窺える。また、南に近接する第7地点の基本土層では自然層の水平堆積が顕著に観察され、土地利用があまり行われていないことが確認されている（埤埋文2019d）。これは第7地点の遺構密度が低いこと、18世紀末を最古段階の遺構としていることから指摘できる。また、栗橋宿跡第2・4地点（埤埋文2018b）においても同様に遺構密度が低く、19世紀以降の遺構のみが確認されていることから、第

7地点より土地利用の開始がさらに遅いことがわかっている。

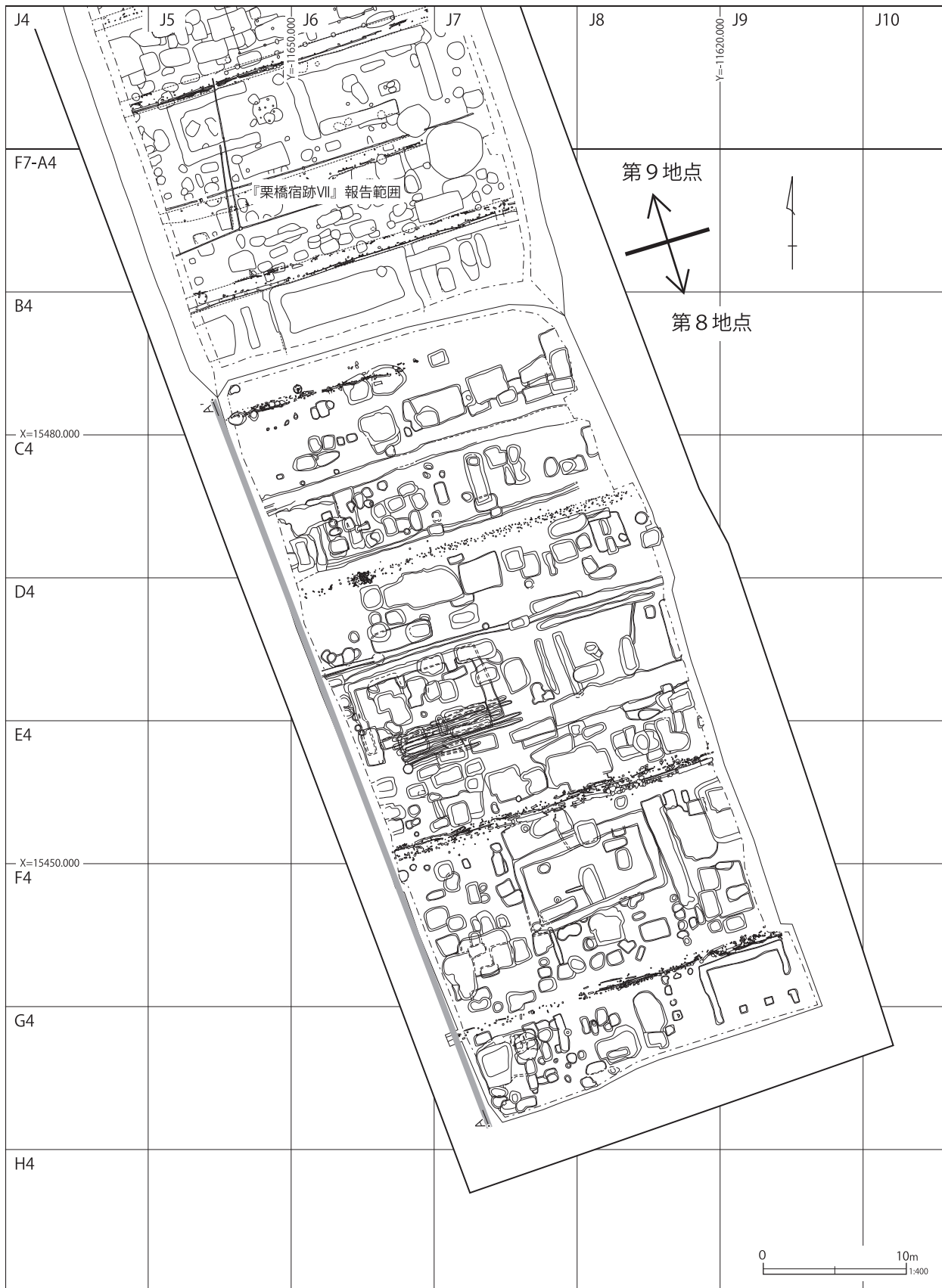
第8地点の調査区南半部は自然堆積層に覆われ、調査区北半部は人為堆積土を主体としていることが窺える。また、第二・三面は、南側の遺構密度が極端に低いことが指摘できる。本陣周辺の栗橋宿上町から続く宿内における土地利用の開始が、第8地点の調査区中間地点、具体的には区画AE/AFを境に次第に遅くなっていくのであろう。

土層の堆積物微細構造観察、砂粒組成・粒度分析を行った結果、下層に洪水由来の堆積物が幾重にも重なり、上層は整地が繰り返されていることが判明した（V-1～4）。自然科学分析に利用した土層のサンプリング箇所は第5・6・10図に示した。

分析を行った西壁の土層堆積状況をみると浅間A降下軽石層準を境に整地を行う頻度が増加している。天明三年（1783）の浅間山噴火を契機に、利根川河床が上昇し、洪水が頻発するようになったと伝えられている。洪水に見舞われるたびに土地の整地を繰り返したのであろう。

第二面調査中に調査区北半を0.2～0.3 m程掘削下した際には、一定量の遺構外出土遺物が出土している。遺物はグリッド下層・最下層遺物として、各グリッドで一括して取り上げている。陶磁器類は、17世紀の遺物が主体であり、古瀬戸の平碗等、中世段階の遺物も比較的多くみられた（第735図）。また、グリッド下層・最下層遺物や第三面遺構群では、他の地点よりも古代以前の遺物が多く含まれている。

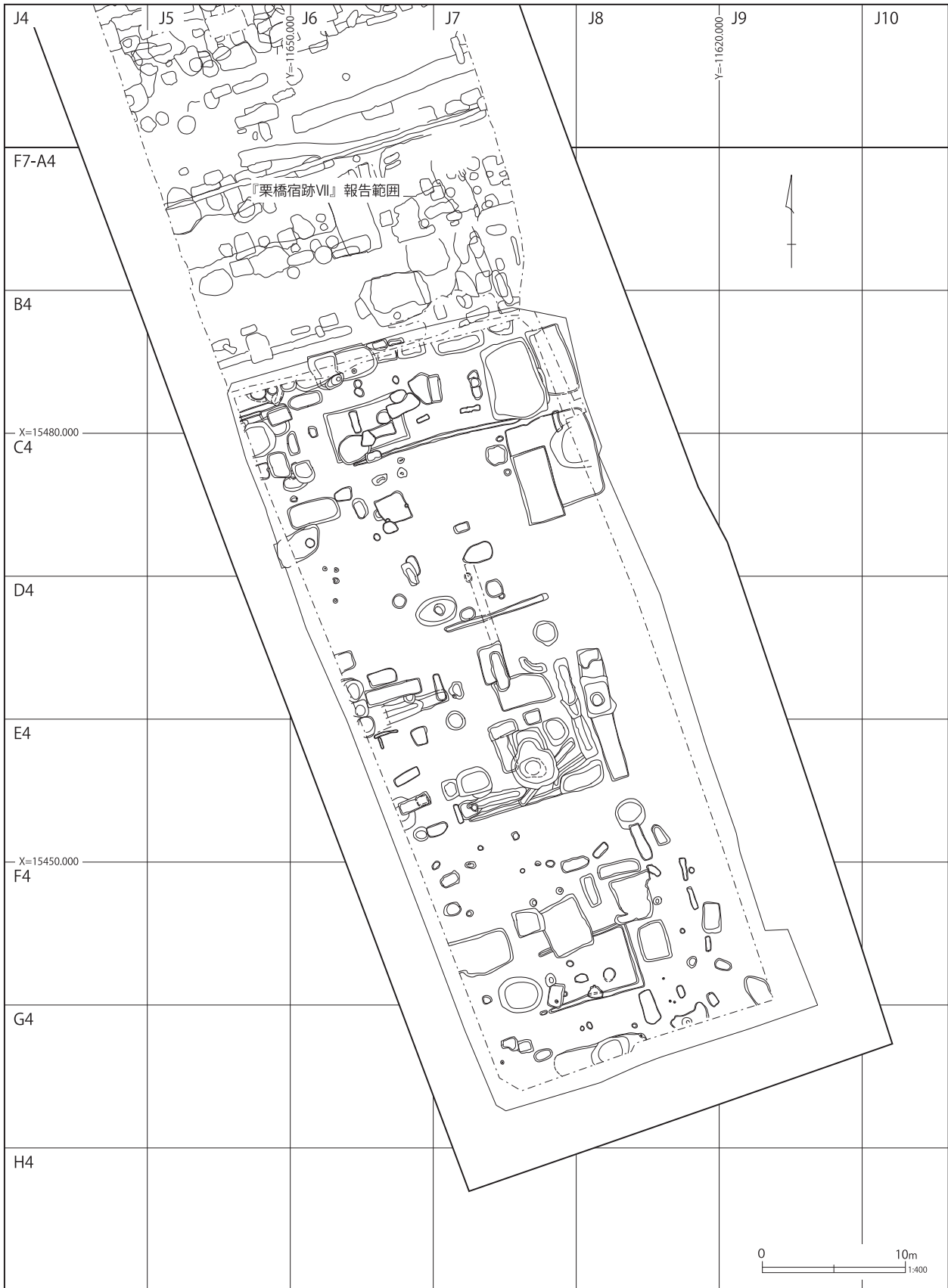
上記に加えて、掘削後に検出された第三面遺構群の年代より古いことから、第二面と第三面の間には整地層が介在し、17世紀以前の遺構を削平した土が盛られていることが推定される。また、須恵器や土師器が一定量みられ、縄文土器や円筒埴輪等も出土している。洪水で流れてきたとは考えにくく、栗橋宿付近で古代以前の活動痕跡があ



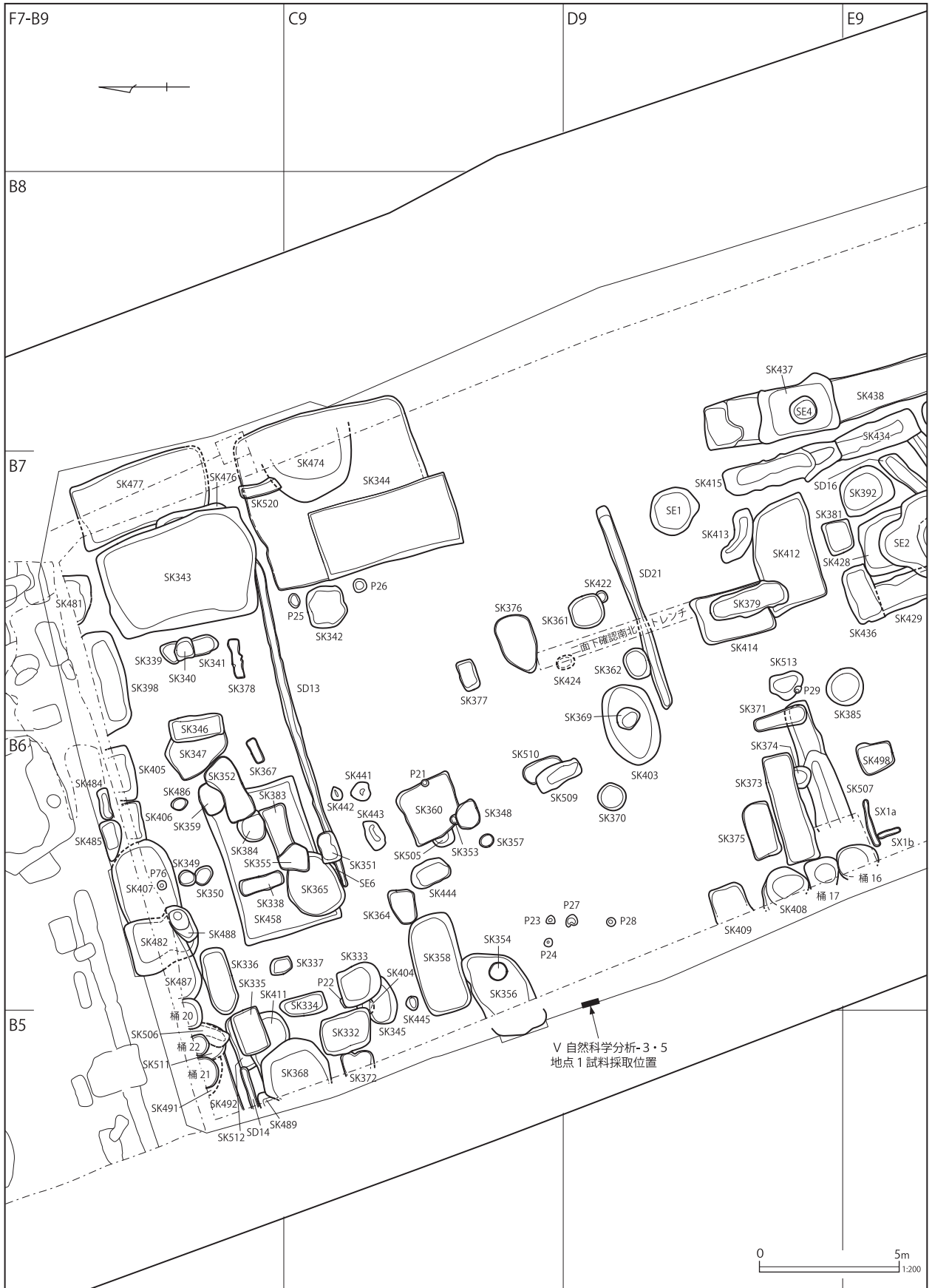
第9図 調査区第一面全体図



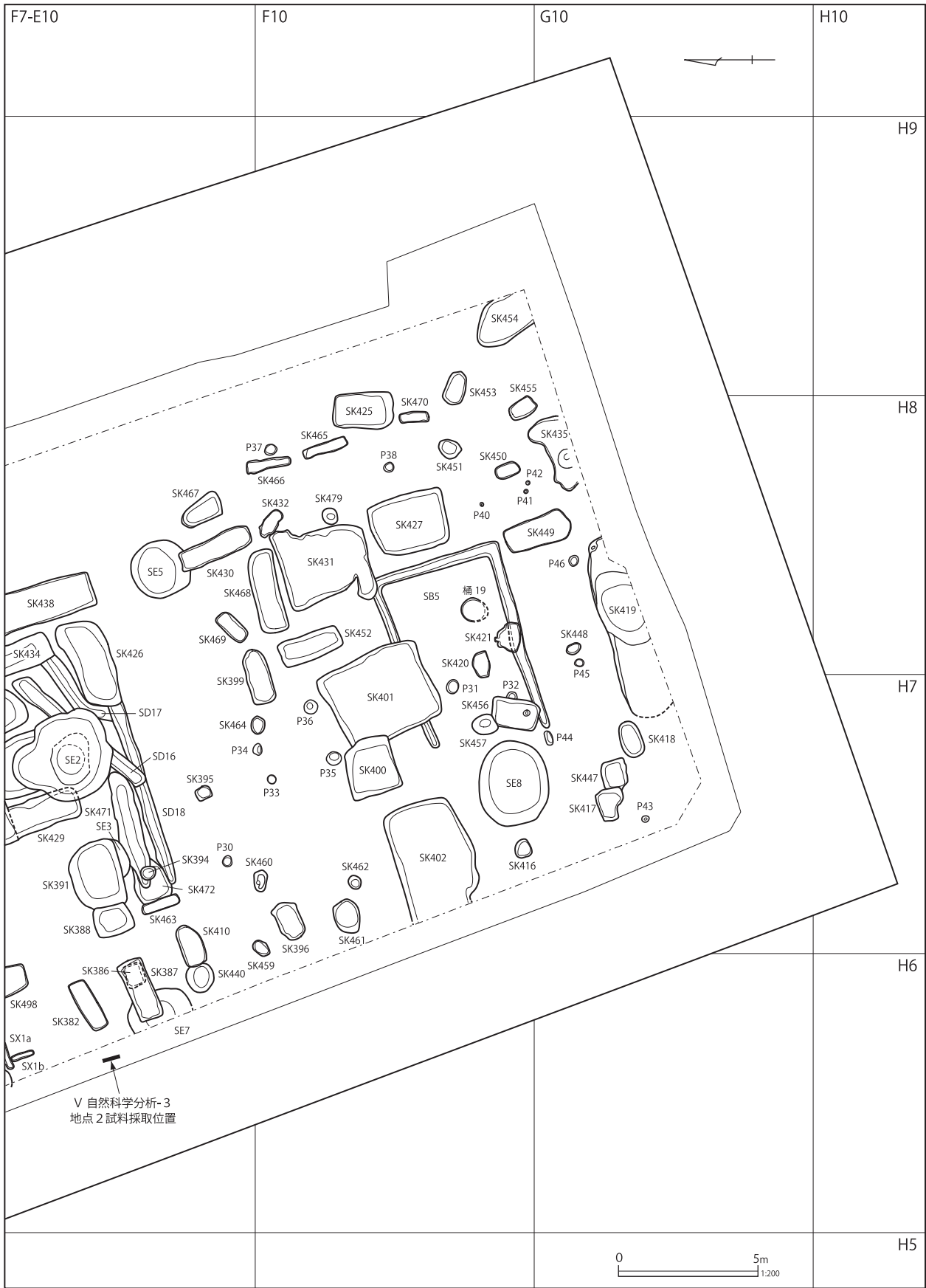
第 10 図 調査区第一面分割図 (1)



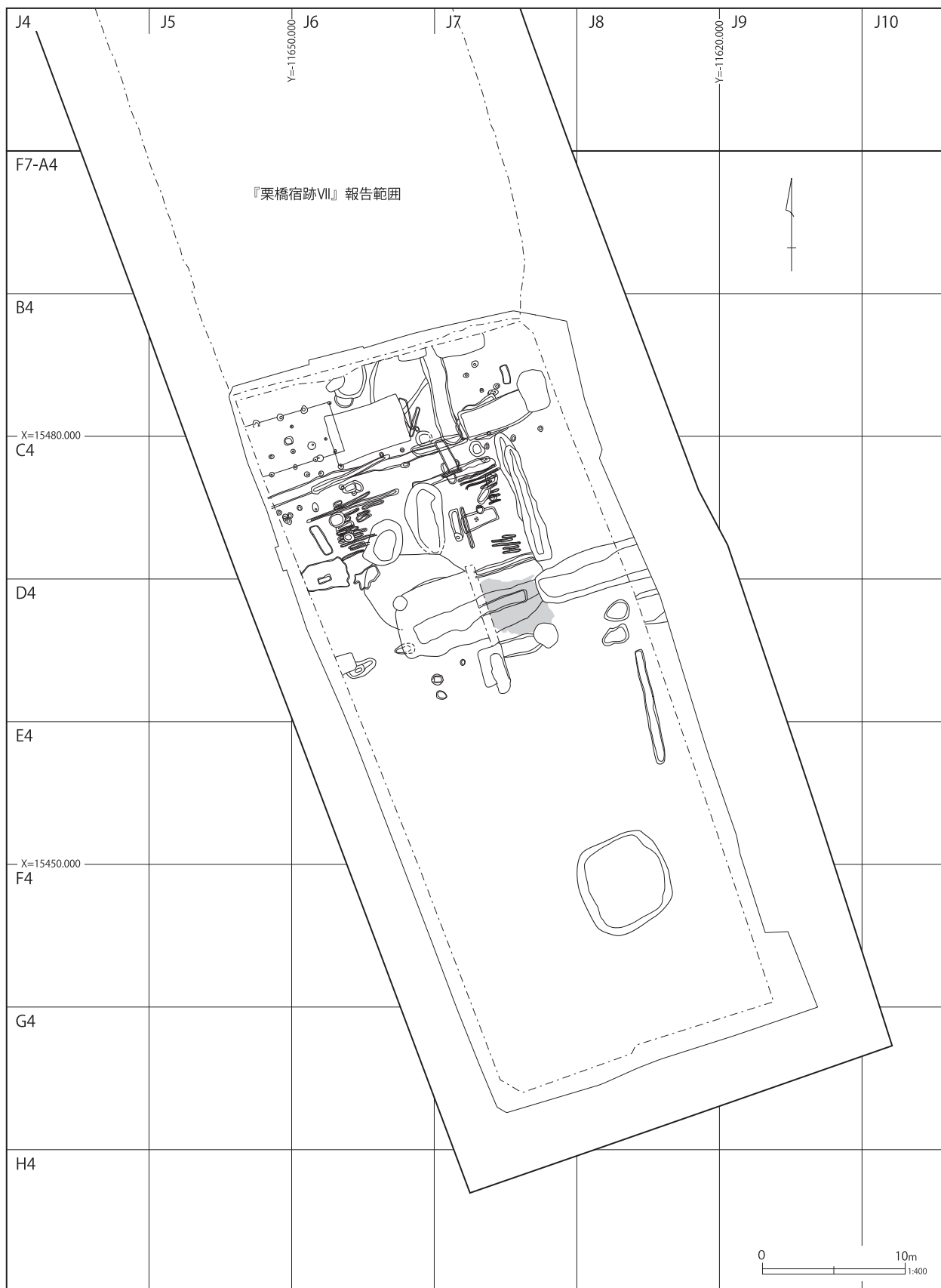
第 12 図 調査区第二面全体図



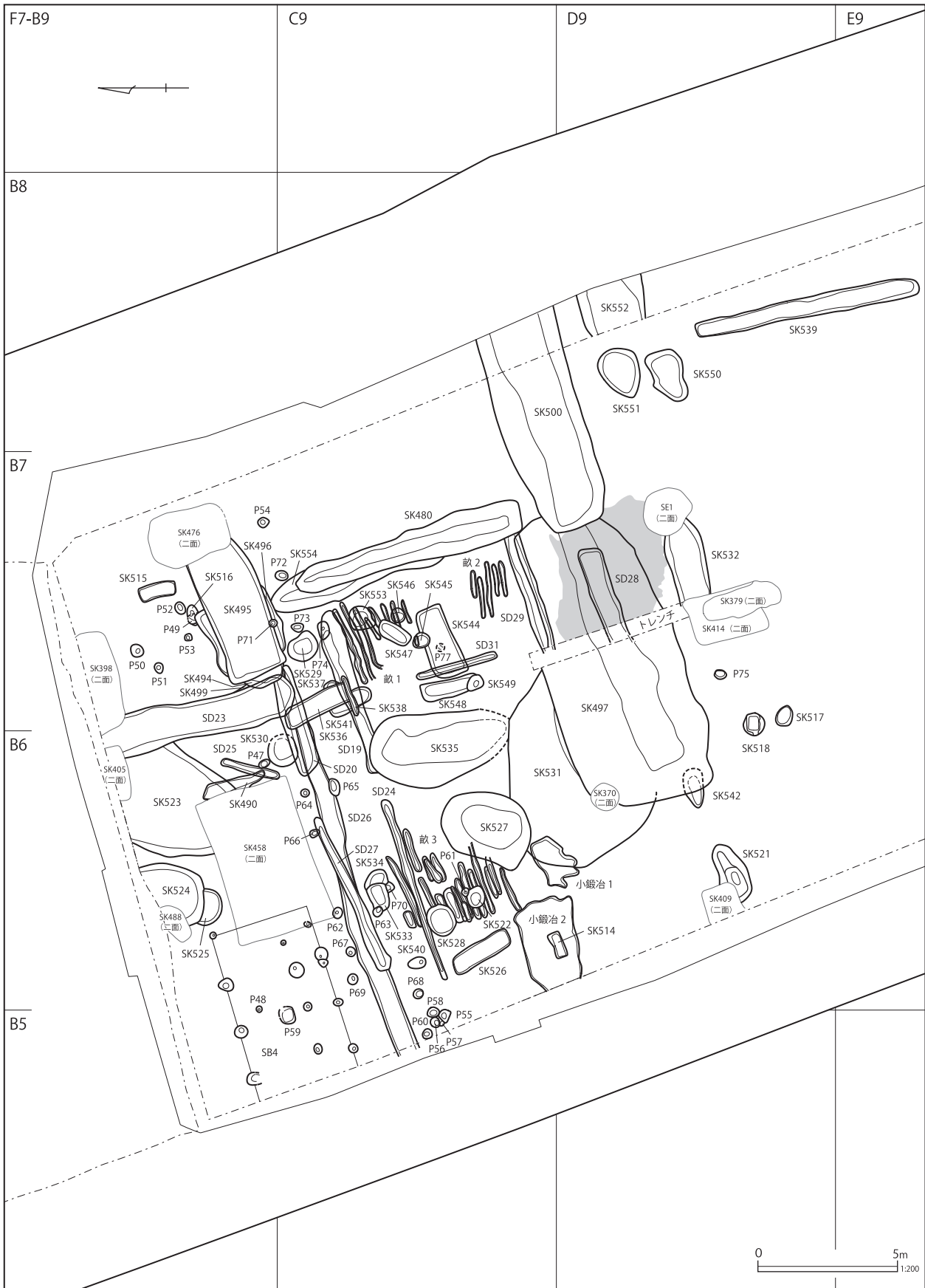
第 13 図 調査区第二面分割図 (1)



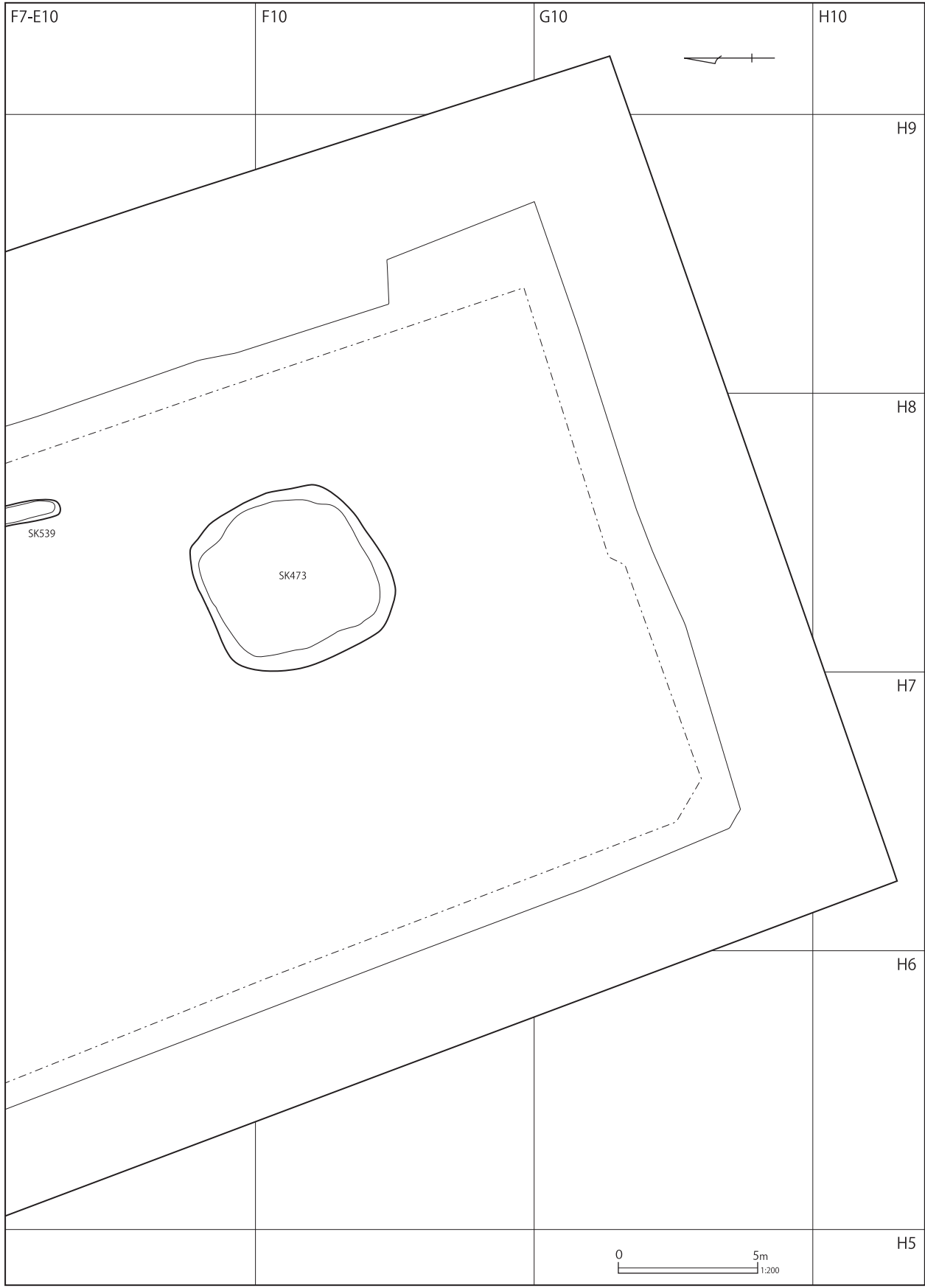
第 14 図 調査区第二面分割図 (2)



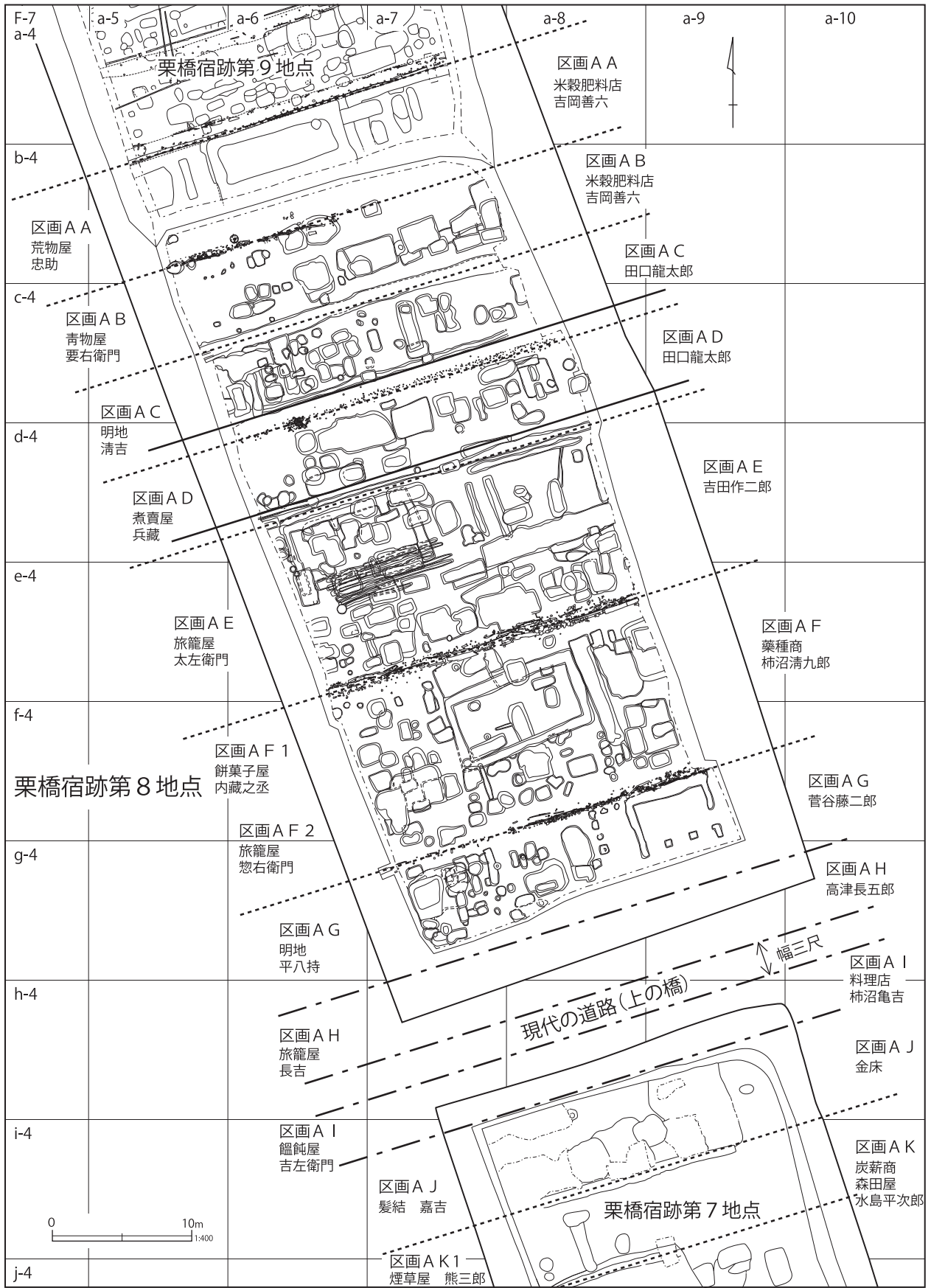
第 15 図 調査区第三面図全体図



第 16 図 調査区第三面分割図 (1)



第 17 图 調査区第三面分割图 (2)



第18図 第8地点区割図案

ったことが示唆される。

また、調査区西壁基本土層上では確認することができなかったが、第二面の調査区中央部で火災層の一部が検出されている。火災層は、標高 9.3 m で検出されている第 497 号土壌(第 608 図)を被覆するようにアメーバ状に広がっている。火災層内には被熱した遺物が多く含まれており、おおむね 18 世紀前葉の組成を示している(第 255 表)。

出土遺物は、土壌を中心に陶磁器類や瓦、木製品等が多量出土した。陶磁器類は、各遺構の最新期の陶磁器や特徴的な陶磁器を中心に挿図・観察表で示した。

磁器は、第一面は瀬戸美濃系、第二・三面は肥前系を主体とし、碗・坏・鉢類が多く認められるが、中・大皿類は比較的少ない印象である。また、「吉田屋」銘染付磁器が多数出土しており、『絵図』にみえる「旅籠屋 / 太左衛門」に関わる資料と考えられる。すべて肥前系磁器であり、小丸碗、広東碗、広東碗の蓋等があることから 18 世紀後葉～19 世紀初頭には既に、肥前において注文生産が行われていたことが示唆される。

また、舶載陶磁器も出土しており、清朝景德鎮窯系磁器や徳化窯系磁器のほか、オランダ・マーストリヒトのペトルス・レグー社製軟質磁器碗が出土している。

土製品は、江戸在地系、京都系を主体とするミニチュアや人形類、玩具類のほか、江戸在地系とは異なる胎質のものも一定量出土している。

瓦については、すべて収納することが難しいため、現地で水洗い、乾燥を行い、種別ごとに分類し、記録するように努めた。出土した瓦は第 240～242 表の出土瓦一覧にまとめた。

瓦は、江戸式に類似する変形した唐草文様が主体である。特に、第一面出土の軒瓦は中心弁が三重になる文様多いという特徴がある。大阪式、東海式瓦は極めて少ない。

第二面で出土している瓦は特定の瓦当文様に偏り、文様形態もこれまでに類例が少ない特殊なものである。19 世紀前葉の遺構にみられる傾向がある。

瓦の胎土は黒色粒子を多量に含むものが多く、雲母細粒が顕著にみられる。中には角閃石が認められる製品もある。多量の黒色粒子を含むものは、砂質な胎土を呈しているものが一定量みられる。

鬼瓦が比較的多く出土しているほか、屋号を示した瓦や棟を飾る菊丸瓦もみられ、町屋内における他の調査地点とは、異なる様相である。

刻印資料が少数みられ、栗橋宿で利用される瓦の生産地を特定する手掛かりとなる。また、一部の瓦の欠失部等には部分的に摩耗や使用痕、敲打痕が観察され、転用が示唆される。挿図では軒瓦・軒丸瓦・鬼瓦を中心に示した。

調査地点は地下水が高い環境であり、木製品も多量に残存していた。しかし、遺存状態が悪く、回収できないものも多く存在した。木製品はすべて収納することが難しいため、可能な限り遺構内の出土状況を作成し、回収した木製品は現地で個体別の記録写真の撮影と器種分類を行い、記録するように努めた。

木製品は主に土壌から出土した。漆器や下駄など日常的に使用していた製品が中心である。この他、小型の馬鋏、綿繰り機の部材、台鉋、木槌、櫛状木製品、漆が付着した刷毛など、生業に関わるような遺物も多くみられる。木札や樽には墨書が書かれている製品もあり、「馬喰 / 上野」「幸手」などの地名、「梅干」「ザラメ」などの品名、屋号や人名など、宿場と宿場外との流通を知る手掛かりとなる。

金属製品は、建物の構築等の際に使われたと思われる鉄釘のほか、銅製の煙管を中心に多様な器種が確認された。火箸や簪がみられ、江戸時代の町屋の様相を表している。なお、金属製品は様々な製品を構成する部材などが多いため器種の同定

が困難なものが散見される。これらの遺物の器種同定が課題となろう。

特筆すべき遺物としては、鉄製トイガンが挙げられる。大小2点が確認されており、栗橋宿では栗橋関所番士屋敷跡の加藤家屋敷跡の盛土からの出土例がある。

銭貨の多くは新寛永通寶であるが、他地点と比べると古寛永通寶と渡来銭の出土量が多く、18世紀前葉以前の遺構が多くみられる第8地点の特徴が反映されている。また、17世紀前半頃と推定される第529号土壙からは絵銭が出土している。

石製品は、建物の基礎に利用されたと思われる切石材等の石材のほか、砥石を中心に磨石や硯、火打石等の生活道具が出土している。

特に、多孔質の角閃石安山岩転石を利用した磨石は、利根川中流域の中・近世遺跡で一定量出土する特異な遺物である。利根川流域の自然堤防上の遺跡では、現在の春日部市周辺を中心に奈良・平安時代の遺構で確認されており、特殊な遺物でありながらも古代から近世にかけて普遍的に存在している。その出土年代幅と分布範囲、利用方法が問題となる。

挿図では、遺存状態の良いものを原則掲載とした。砥石については、工具痕の判別が可能なものは遺存状態が不良であっても図示した。磨石は使用痕がみられるものを掲載し、遺構内から多量に出土している自然石と思われる多孔質角閃石安山岩転石については、数量を第238表の備考欄に示した。また、転石サイズの計測を行い、第742図に散布図を示した。

火打石は稜の敲き潰れもしくは連続する微細剥離痕が観察されるものを掲載し、明確な打割痕跡が確認されたものは挿図内で示した。使用痕がみられない玉髓や石英、良質なチャートについては、火打石の未使用品と判断し、剥片剥離した際の打面と主要剥離面が残されているものについて

は原則図示した。良質チャート製火打石には青灰色のものがみられ、徳島県太田井産と推定される。江戸遺跡においても確認されているが、栗橋宿跡では初出である。

その他に、鍛冶関連遺物として鉄滓及び羽口、坩堝等が多量に出土している。第4地点（埼玉文2018b）や第9地点には、『絵図』との対比で鍛冶屋が確認されており、多量の鉄滓と鞆の羽口が出土している。

第8地点では鍛冶関連の職業が『絵図』からみえない一方で、小鍛冶遺構が検出されており、どのように使われ、如何なる経緯で廃棄されたのかが問題となる。また、羽口などの鍛冶関連遺物（巻頭図版2-1）は18世紀初頭及び後葉の遺構で多量に出土しており、第4地点や第9地点で出土した19世紀後半の製品と対比が可能である。

建物の構築材である土壁材や漆喰の出土もみられ、土壁材には端部が丸くなるものや湾曲して反り返るもの等多様性が認められる。

筭等の硝子製品、ブラシ等の骨製品、革製品、布製品が出土した。布製品等、実測に耐えることができない素材については写真のみを掲載した。

また、貝類や種子類、動物・魚骨等の自然遺物も一定量出土している。これらの遺物については、第243～251表の出土遺物一覧表に数量を示し、各遺構の出土遺物について触れる中で、その傾向について記述する。

栗橋宿跡第8地点では、遺構内や整地層に混入する形で古代以前の遺物の出土が一定量認められる。古代以前の遺物はこれまでも、いくつか出土しているが、他地点と比べると数が非常に多い。縄文土器、古墳時代の土師器・円筒埴輪、平安時代の須恵器・土師器、縄文時代のものと思われる敲石等のほか、黒曜石の剥片も出土しており、多様性が認められる。これらの遺物については可能な限り図示した。

IV 遺構と遺物

1. 第一面の遺構と遺物

第一面から検出された遺構は、建物跡4棟、基礎状遺構6基、埋設桶14基、埋設甕1基、杭列4条、木樋1基、溝跡12条、焼土遺構8基、土壙282基、ピット20基である。

第一面では現代の建物に沿うように区画施設が明確に検出されている。そのため、『絵図』との対比が可能である。各遺構が属する区画については、第18図（栗橋宿跡第8地点区画案）を参照されたい。

(1) 建物跡

建物跡は4棟が検出された。検出された建物跡4棟の位置、規模等の基礎的な情報は第2表に、遺構図は第19・20・27・28・30・33図に示した。遺構図は、原則として日光道中（往還道）が上となるように配置した。

なお、第6号建物跡については、第3号溝跡、第130・136・297号土壙として調査が行われたが、覆土の状況や区画施設と建物跡との位置関係から1棟の建物跡として扱った。調査時の遺構番号は欠番とした。

検出された建物跡の基礎構造は、比較的簡素なものが多く、樽地業や蠟燭地業のような堅固なものとは認められなかった。

建物跡が検出された区画は、AE「旅籠屋/太左

衛門」、AF「餅菓子屋/内藏之丞、旅籠屋/惣右衛門」、AG「明地/平八持」の調査区南側3区画であり、偏りがある。

また、確認された基礎工法は、布掘り内に捨て杭を打ち込んだもの（第1号建物跡）、布掘りと壺掘りを組み合わせ、内部に捨て杭を打ち込んだもの（第2号建物跡）、布掘り内の一部に瓦や砂を敷いたもの（第3号建物跡）、独立した4本の布掘りにシルトと砂を交互に敷いたもの（第6号建物跡）の4種である。第6地点（埤埋文2019）など、過去に検出された建物跡群と同様に、その基礎工法に統一性は認められなかった。

建物の基礎内からの出土遺物は少ない傾向にある。遺物の多くは重複遺構や包含層からの混在が考えられ、建物跡に直接伴う遺物は少ない。掲載遺物の抽出は、最新期の陶磁器に留意した。

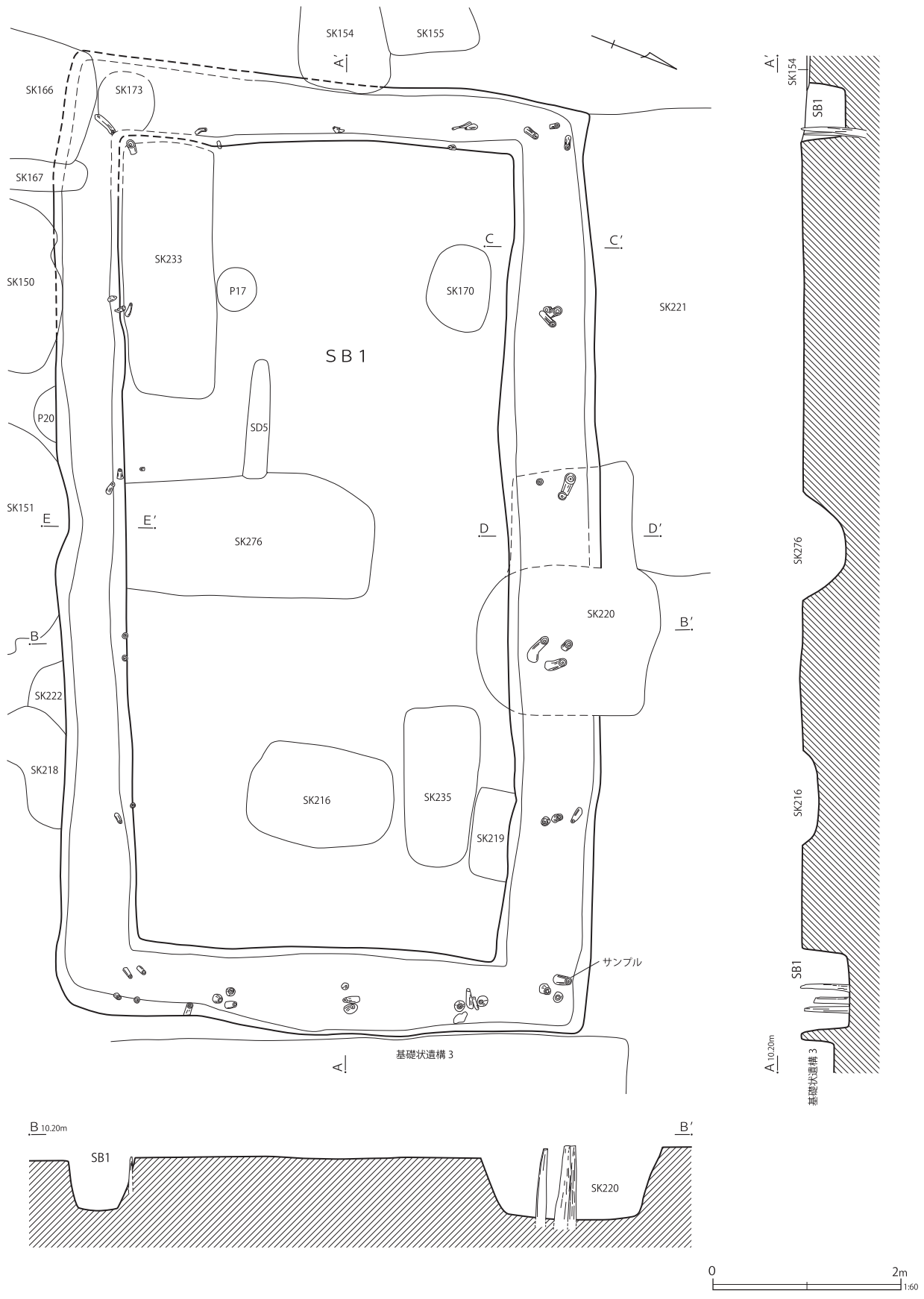
第1号建物跡（第19～26図）

F7-E7・8、同F7・8グリッドの区画AEに位置する。第151・220・221・276号土壙より新しく、第154・166・173・218・222号土壙より古い。さらに、第5号溝跡、第150・167・170・216・219・233・235号土壙、ピット17・20と重複し、極めて多くの遺構と重複関係にある。建物跡の南には、第3・4号基礎状遺構が極めて

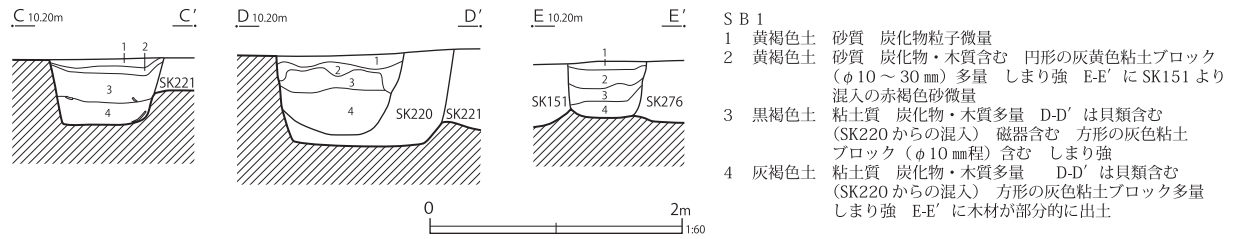
第2表 第一面建物跡一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	桁行（長軸）	梁行（短軸）	桁行推定	梁間推定	深さ	方位	備考
1	AE	F7-E7・8・F7・8	10.20	5.70	9.00	4.90	0.45～0.60	N-70°-E	SK154・166・173・218・222より古 SK151・220・221・276より新 SD5・SK150・167・170・216・219・233・235・P17・20と重複
2	AG	F7-F8・9・G8・9	6.20	4.90	5.50	3.60	0.10～0.25	N-70°-E	杭列6と重複
3	AF	F7-D6・7・E6・7	10.00	5.40	9.00	4.90	0.35	N-72°-E	SD6～8・桶2・P13より新 SK60・70・83・97より古 SK80・84～88・92～94・96・129 ピット11・12と重複
6	AE	F7-D7・8・E7	(9.70)	7.20	-	-	0.15～0.45	N-70°-E	SK296より新 SD4・基礎状遺構1・SK114・115・121・271・299と重複



第19図 第1号建物跡(1)



第20図 第1号建物跡(2)

近い位置で隣接する。

基礎部分の規模は長軸10.2m、短軸5.7m、深さ0.45～0.6mで、長軸の方位はおよそN-70°-Eを指す。基礎は「口」字状に全周する布堀りで、幅は0.6～0.95m、北辺と東辺がやや太い。

充填土は上層の1・2層が砂質土、下層の3・4層が炭化物と木質を多く含む粘質土である。中層の2・3層はしまりが強く、セクションD-D'下層の3・4層は第220号土壌由来の遺物を多量に包含している。セクションE-E' 4層に木材が部分的に確認できる。

布堀り内には、遺構確認面を上端とした3本1組の捨杭が打ち込まれており、その柱間は桁行5間、梁行4間である。ただし、西辺と南辺は内側に寄っているうえ、杭も細く大半は2本1組となっている。杭の径はおよそ12cm、細いものは径6cm程度である

想定される建物の規模は、桁行9m(約5間)、梁行4.9m(約2間4尺)で、面積(建坪)は44.1㎡(約13坪)となる。

建物跡の基礎地業は深く掘り込むため、下層遺構の遺物を巻き上げることがある。布堀りの充填土中からは、陶磁器類や石製品、木製品、貝類などが出土しているが、大半は基礎北辺の出土である。基礎北辺は、第220・221号土壌と重複しており、特に第221号土壌の遺物が多量に混在している。

最新期陶磁器について留意してみると、瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏(第22図23)が1点みられる。また、基礎の東西南北辺の非掲載遺物に明らか近代遺物は認められなかった。出土陶磁器か

らの年代推定は困難であるが、重複遺構との先後関係から建物跡の構築年代は19世紀後葉以降と推定される。

第21図～26図に出土遺物、第3表に遺物観察表を示した。先に述べたように、出土遺物は基礎北辺に重複する第220・221号土壌からの混入が極めて多い。掲載遺物の多くはこれらの土壌からの混入であることについて留意したい。

第21図1～14・第22図15・16は肥前系磁器で、1～7は小丸碗である。1は未掲載遺物に同文の製品が3個体みられ、組物と考えられる。2・6は同文である。

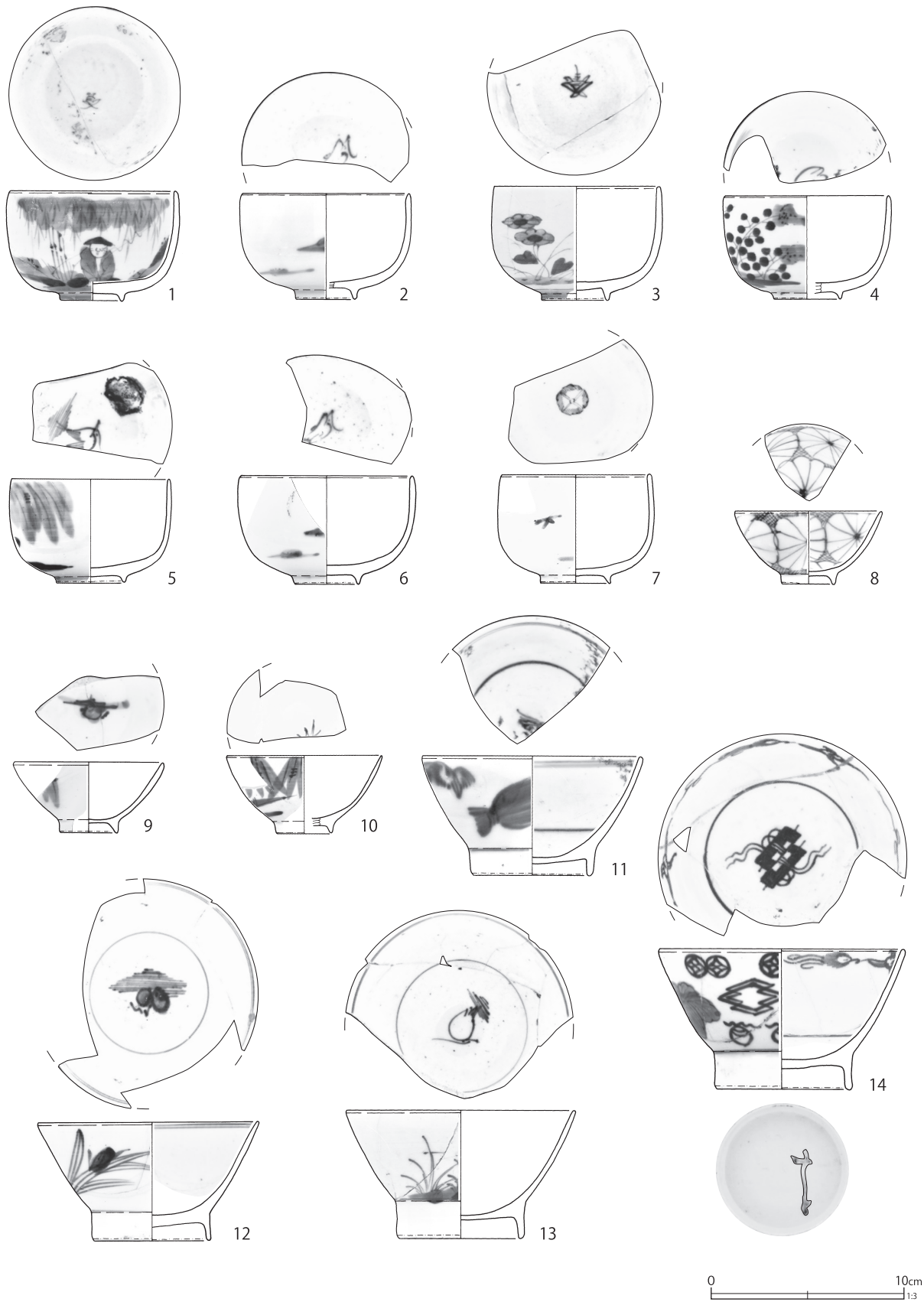
8～10は小広東碗、11～15は広東碗である。14・15には焼継痕がみられ、高台内に焼継印が確認できる。15の広東碗は基礎南辺で出土している。16は大振りの端反形碗である。

第22図(17・19～21)は瀬戸美濃系磁器の端反形碗で、21は坏状で小法量である。

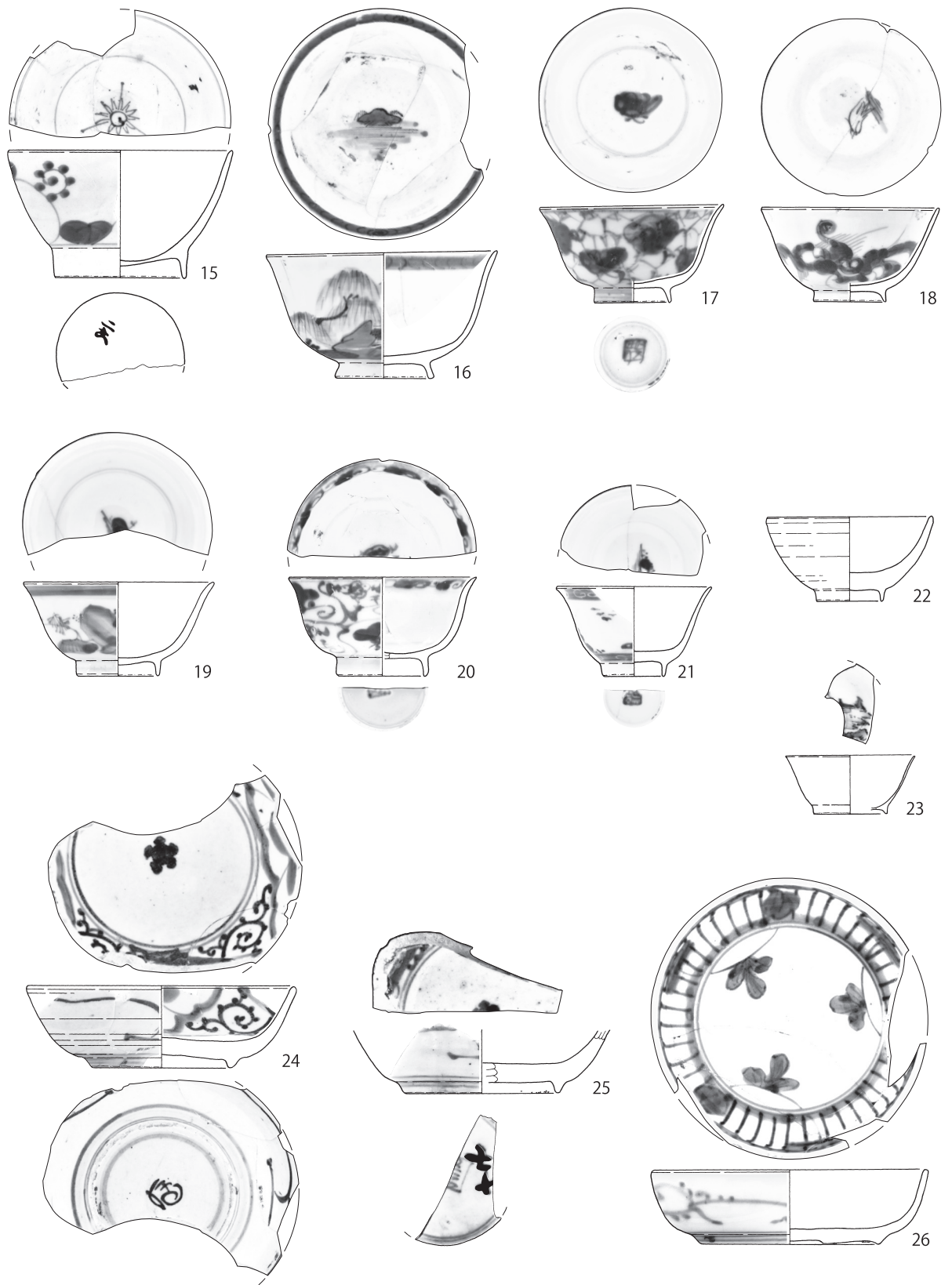
23は肥前系磁器の卵殻手坏である。器胎は極めて薄く内面に丁寧な染付がみられる。磁器の出土遺物の中では最新期にあたるが、第1号建物跡一括出土遺物であるため、出土位置は判然としない。

第22図24～26・第23図27～29は、肥前系磁器の皿である。24・25は波佐見系の粗製五寸皿で、中心の五弁花文は崩れている。26～28は高台の低い蛇ノ目凹形高台の皿である。27は折り返し口縁の玉縁状である。28には焼継痕がみられ、高台内に焼継印がみえるが、文字は判読できない。29は中皿で基礎南辺の出土である。

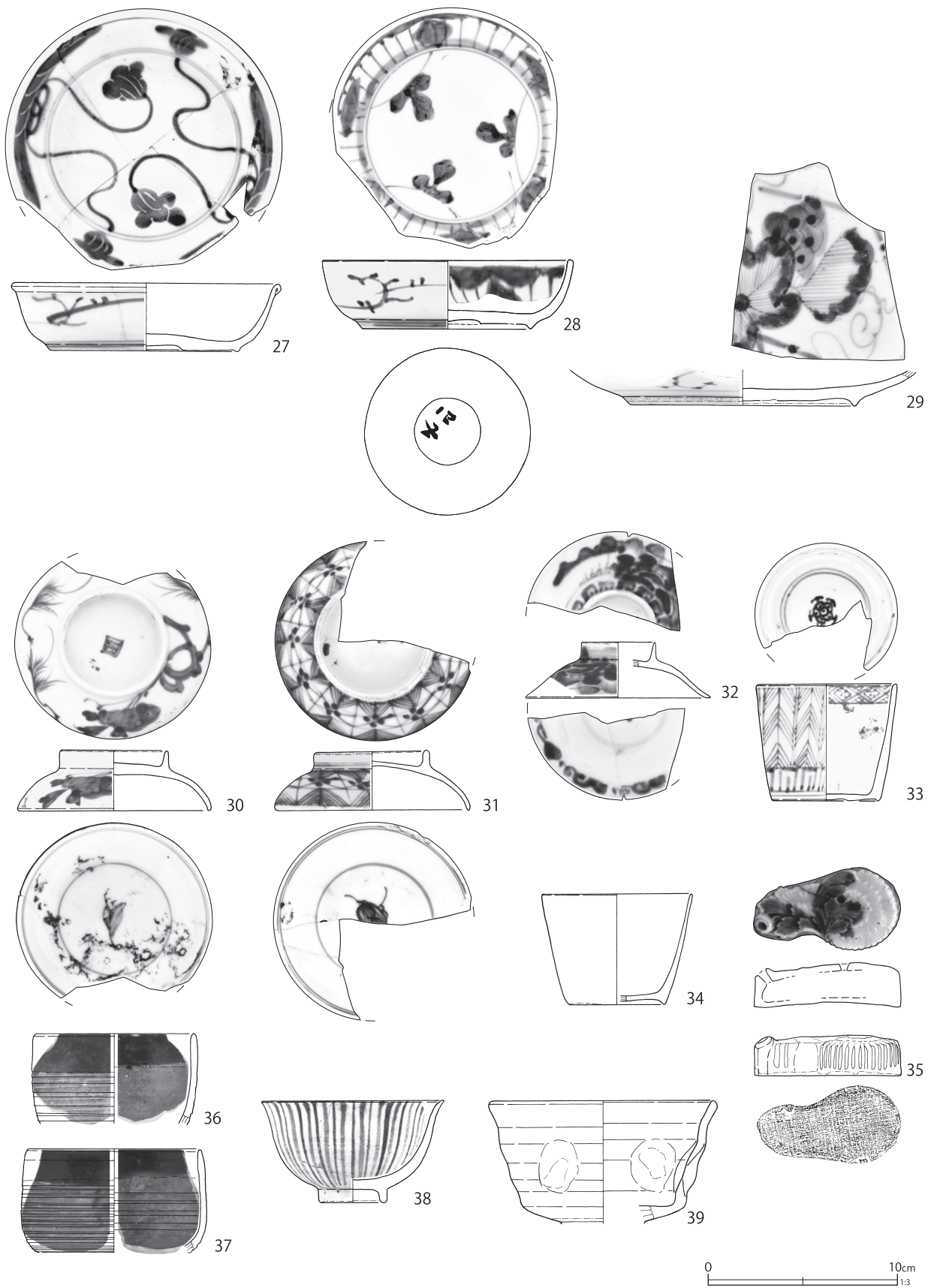
30・31は肥前系で、広東碗の蓋である。32は



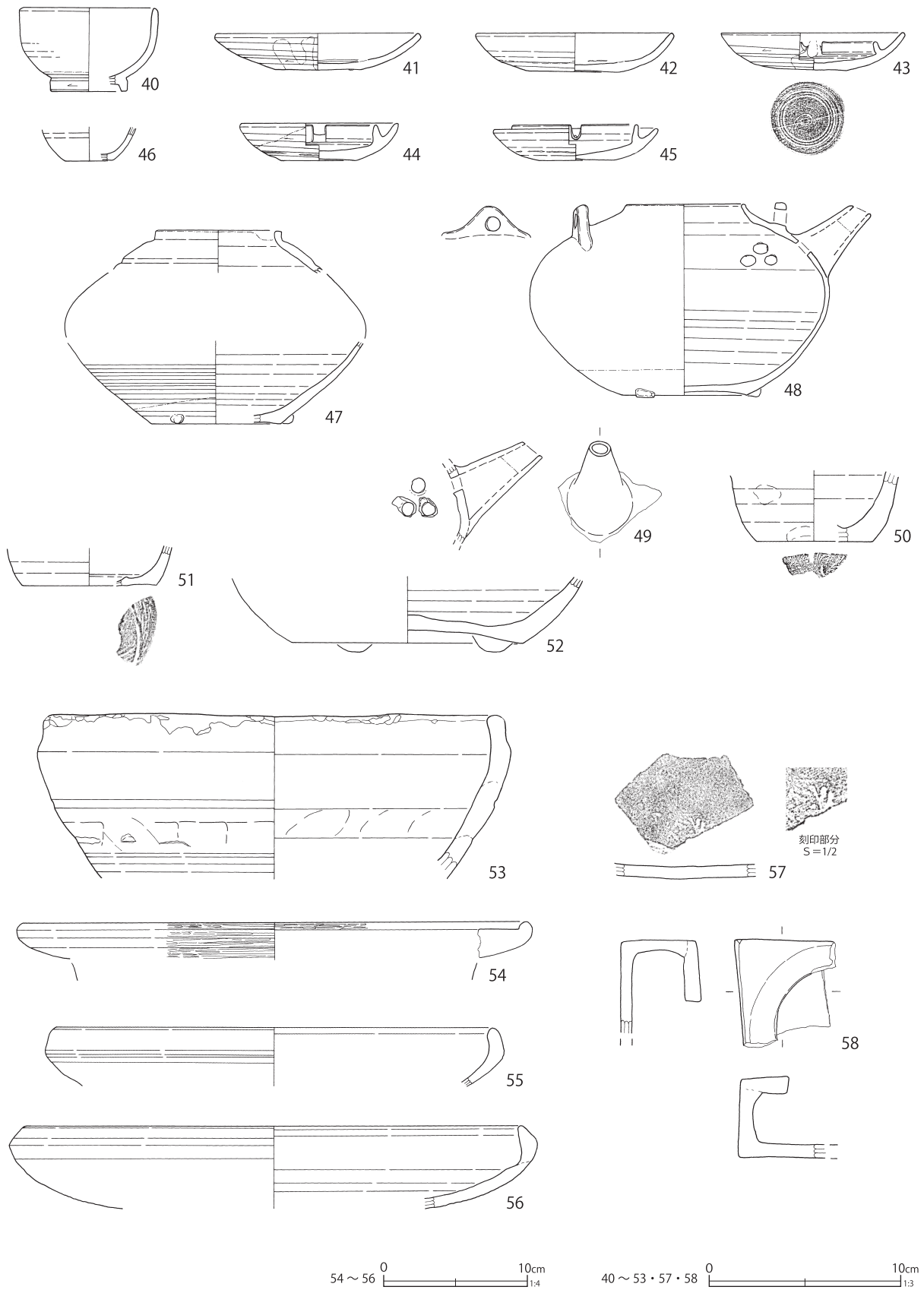
第 21 図 第 1 号建物跡出土遺物 (1)



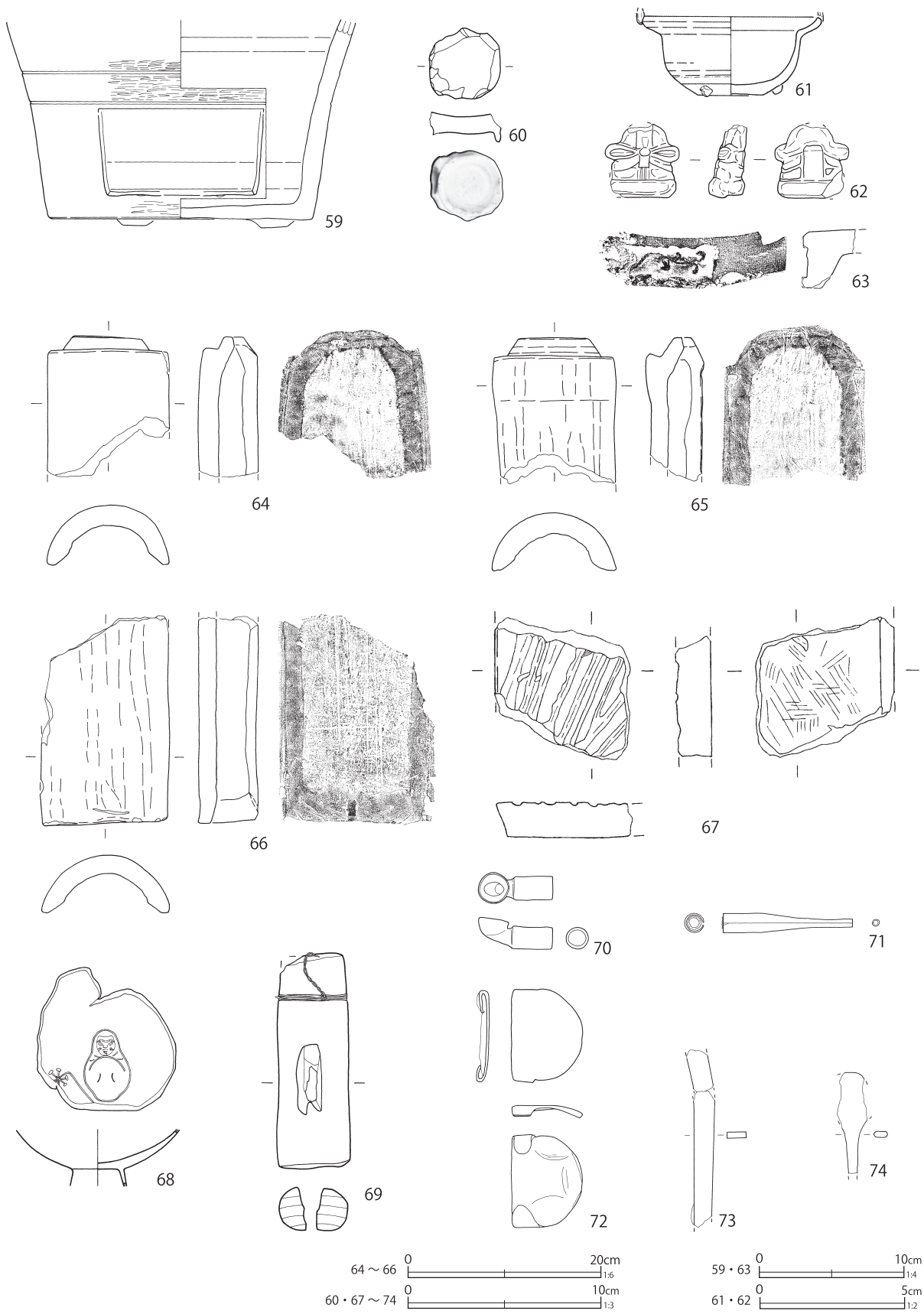
第22図 第1号建物跡出土遺物(2)



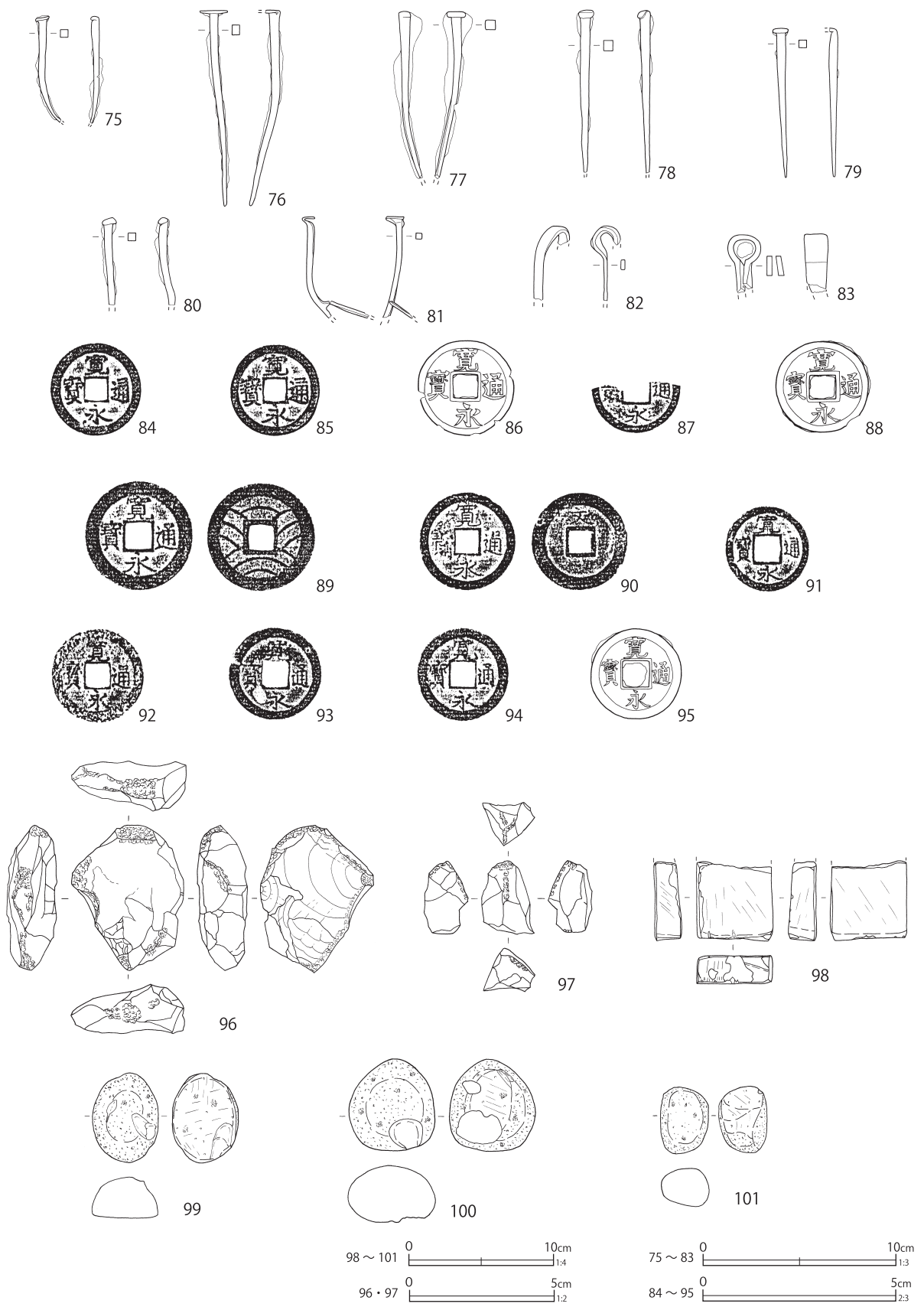
第23図 第1号建物跡出土遺物(3)



第 24 図 第 1 号建物跡出土遺物 (4)



第25图 第1号建物跡出土遺物(5)



第 26 图 第 1 号建物跡出土遺物 (6)

第3表 第1号建物跡出土遺物観察表(第21~26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	8.6	5.6	3.1	—	100	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土 同文個体3あり	
2	磁器	碗	(8.6)	5.4	(3.0)	—	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
3	磁器	碗	(9.5)	5.8	3.4	—	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
4	磁器	碗	(8.4)	5.3	(3.4)	—	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
5	磁器	碗	(8.1)	5.3	3.5	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
6	磁器	碗	(8.8)	5.6	(3.2)	—	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
7	磁器	碗	(7.6)	5.5	3.5	—	40	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付	
8	磁器	碗	(7.5)	3.7	(2.6)	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
9	磁器	碗	(7.6)	3.6	2.9	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
10	磁器	碗	(7.9)	4.0	(2.8)	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
11	磁器	碗	(10.6)	6.1	(5.9)	—	25	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
12	磁器	碗	11.3	6.1	5.9	—	65	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
13	磁器	碗	(11.7)	6.6	(6.2)	—	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
14	磁器	碗	12.6	7.2	6.9	—	70	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印あり 基礎北辺出土	64-1
15	磁器	碗	11.1	6.4	6.5	—	50	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 焼継印(赤) 基礎南辺出土	
16	磁器	碗	11.5	6.3	4.7	—	90	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
17	磁器	碗	9.2	4.9	3.8	—	100	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 同文別個体3あり 基礎北辺出土	
18	磁器	碗	8.8	4.7	3.6	—	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	64-2
19	磁器	碗	(9.4)	4.7	(4.0)	—	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
20	磁器	碗	(9.3)	4.9	(4.3)	—	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	64-3
21	磁器	碗	(7.7)	4.4	3.0	—	50	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
22	磁器	碗	(8.2)	4.2	(3.2)	—	40	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
23	磁器	坏	(6.4)	2.9	(3.6)	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉 内面染付	
24	磁器	皿	(13.4)	4.1	6.9	K	50	良好	灰白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
25	磁器	皿	—	[3.2]	(7.6)	—	20	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕・焼継印あり	
26	磁器	皿	13.7	3.7	8.9	—	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	64-4
27	磁器	皿	13.9	3.6	9.8	—	85	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
28	磁器	皿	13.0	3.6	8.8	—	60	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印(被熱・色とび)・輪状に砂付着	
29	磁器	皿	—	[1.8]	(11.8)	—	30	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎南辺出土	
30	磁器	蓋	5.5	3.1	10.0	—	95	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
31	磁器	蓋	5.8	3.1	10.1	—	85	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
32	磁器	蓋	(3.8)	2.9	(9.7)	—	40	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 基礎北辺出土	
33	磁器	猪口	7.1	6.1	5.5	—	70	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台 基礎東辺出土	
34	磁器	猪口	7.8	5.8	5.0	—	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 基礎南辺出土	
35	磁器	水滴	縦4.3 横7.7 高さ2.3			—	100	良好	白	肥前系 型成形 下面布目痕 上・側面施釉 上面染付 下面煤付着 基礎南辺出土	
36	陶器	碗	(8.2)	[4.7]	—	I	5	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面上位鉄釉(漆黒)・下位錆釉 基礎北辺出土	
37	陶器	碗	(9.0)	[5.3]	—	IK	10	普通	灰白	瀬戸美濃系 内外面上位鉄釉(漆黒)・下位錆釉 基礎北辺出土	
38	陶器	碗	(8.2)	4.2	(3.2)	IK	50	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面鉄・呉須絵 基礎南辺出土	64-5
39	陶器	碗	(11.7)	[6.4]	—	K	25	良好	灰白	京都信楽系 内外面灰釉 体部中位凹ます 基礎西辺出土	
40	陶器	坏	(6.8)	4.3	(3.8)	K	30	良好	灰白	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉 基礎北辺出土	
41	陶器	灯明皿	10.4	1.9	4.4	IK	95	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 内面輪状重焼痕(径4.5cm) 基礎北辺出土	
42	陶器	灯明皿	10.1	2.0	4.7	K	90	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部釉拭き取り 内面輪状重焼痕(径4.6cm) 基礎北辺出土	
43	陶器	灯明皿	9.4	2.0	3.8	IK	90	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面柿釉 体部下位・底部釉拭き取り 基礎北辺出土	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
44	陶器	灯明皿	8.1	1.9	3.9	IK	95	良好	褐灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 体部下位・底部釉拭き取り 体部下位輪状重焼痕 (径 5.9cm) 基礎北辺出土		
45	陶器	灯明皿	8.4	1.8	3.9	IK	80	良好	灰	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面弱く釉拭き取り 体部 中位輪状重焼痕 (径 6.3cm)		
46	陶器	瓶類	—	[1.7]	2.4	—	15	良好	褐灰	備前系 胎土炆器質 外面塗土		
47	陶器	土瓶	(6.1)	(10.0)	(6.2)	K	15	良好	黄灰	内外面鉄釉 底部煤付着 接点のない上下2点から推定復元 基礎北・西辺出土		
48	陶器	土瓶	6.0	(10.0)	6.4	K	70	良好	黄灰	外面灰釉 底部煤付着 接点のない上下2片から復元 SK220 と接合 基礎北辺出土		
49	陶器	土瓶	—	[5.2]	—	K	5	良好	灰白	外面青緑釉 内面施釉 基礎東辺出土		
50	土師質土器	植木鉢	—	[3.6]	(6.0)	AIK	20	普通	にぶい橙	底部糸切痕 (左) 胎土粉質		
51	土師質土器	植木鉢	—	[2.0]	(7.0)	AHIK	10	普通	橙	底部糸切痕 胎土粉質		
52	瓦質土器	火鉢	—	[3.8]	(12.0)	ACFHIK	20	不良	にぶい褐	外面剥落著しい 雲母細粒多量 脚部1遺存 基礎南 辺出土		
53	瓦質土器	火鉢	(23.0)	[8.4]	—	CFHIK	10	普通	にぶい橙	やや酸化焰焼成 口縁部敲打痕 基礎北辺出土		
54	瓦質土器	火鉢	(37.0)	[2.5]	—	CIK	5	普通	にぶい黄 橙	やや酸化焰焼成 内外面ミガキ 口縁欠失部に貼付痕 遺存		
55	土師質土器	焙烙	(30.3)	[11.0]	(31.0)	ACIK	10	普通	にぶい褐	江戸在地系カ 砂目底 胎土粉質 基礎北辺出土		
56	土師質土器	焙烙	(34.4)	[5.7]	(36.2)	CHIK	30	普通	灰白	砂目底 体部下位ミガキ状の光沢 底部煤付着 基礎 北・東辺出土		
57	瓦質土器	焙烙	—	0.6	—	CIK	5	普通	灰白	砂目底 強く燻す 内面刻印「大極上」カ		
58	土師質土器	風口	縦 [5.5] 横 [5.1] 高さ 4.0			AHIK	5	良好	橙	江戸在地系 胎土粉質 板作り整形 基礎北辺出土		
59	瓦質土器	焜炉	—	[14.3]	18.2	ACHIKM	25	普通	灰	砂目底 体部中・下位ミガキ (下位弱く) 燻す		
60	磁器	碗	—	[1.4]	—	—	—	普通	白	肥前系 内外面施釉 外面コンニャク印刷染付 円盤 状製品転用 (底部) 縦 3.7 cm 横 3.7 cm		
61	陶器	ミニチュア	(6.0)	[2.9]	2.2	K	75	良好	灰白	鍋 内外面柿釉 底部煤付着 重量 19.5g	117-1	
62	土製品	人形	長さ [2.3] 幅 2.6 厚さ 1.7 重量 5.5 g			AHIK	—	良好	橙	江戸在地系 天神様 前後合二枚型成形 中実 正面黒 色塗付粉付着	117-2	
63	瓦	軒棧瓦	長さ [4.7] 幅 [12.7] 厚 さ 2.3 高さ [6.0]			ACIK	—	普通	灰白	胎土マーブル状 雲母付着 粒径大の黒色粒子多量 瓦当面摩耗	123-1	
64	瓦	丸瓦	長さ [14.6] 幅 [12.7] 厚 さ 2.1 高さ [6.2]			AK	—	良好	灰白	弱く銀化 燻す		
65	瓦	丸瓦	長さ [15.2] 幅 13.0 厚 さ 2.15 高さ [5.9]			AIK	—	良好	灰白	銀化 燻す		
66	瓦	丸瓦	長さ 22.0 幅 13.5 厚 さ 1.8 高さ 6.0			AIK	—	良好	灰白	強く銀化 燻す 雲母付着		
67	瓦	平瓦カ	長さ [7.4] 幅 [7.0] 厚 さ 1.8			ACIK	—	普通	灰白	転用瓦 胎土砂質 表刃物痕 裏線条痕 一部煤付着	123-2	
68	木製品	漆杯	高さ [2.9]								表裏面赤漆 内面金で文様 横木取り	
69	木製品	不明品	長さ 11.1 幅 3.8 厚さ 2.2								方形穴 三重に銅線を巻いている 板目	
70	銅製品	煙管	長さ 3.8 火皿径 1.6 小口径 1.1 重さ 7.2								雁首	
71	銅製品	煙管	長さ 6.7 小口径 1.0 口付径 0.4 重さ 7.1								吸口 内部に残存	
72	鉄製品	帯金具	縦 4.8 横 3.7 厚さ 0.6 重さ 21.4									
73	鉄製品	不明	長さ [9.2] 幅 1.0 厚さ 0.3 重さ 9.0								基礎 延べ板状品	
74	鉄製品	不明	縦 [5.2] 横 [1.6] 厚さ 0.3 重さ 5.1									
75	鉄製品	釘	長さ [5.5] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.4									
76	鉄製品	釘	長さ 10.1 幅 0.4 厚さ 0.5 重さ 12.9									
77	鉄製品	釘	長さ [8.6] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 13.4									
78	鉄製品	釘	長さ [8.8] 幅 0.5 厚さ 0.5 重さ 8.1									
79	鉄製品	釘	長さ 7.7 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 4.3									
80	鉄製品	釘	長さ [4.5] 幅 0.4 厚さ 0.4 重さ 3.2									
81	鉄製品	釘	長さ [5.2] 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 5.0									
82	鉄製品	環釘	長さ [3.8] 幅 0.5 厚さ 0.2 重さ 3.6									
83	鉄製品	環釘	長さ [2.9] 幅 0.3 厚さ 1.0 重さ 12.2									
84	銅製品	銭貨	径 24.2 厚さ 1.2 mm 重さ 3.3								北 寛永通寶 (古)	
85	銅製品	銭貨	径 24.0 厚さ 1.4 mm 重さ 3.9								北 寛永通寶 (古)	
86	銅製品	銭貨	径 24.3 厚さ 1.3 mm 重さ 2.9								北 寛永通寶 (古)	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
87	銅製品	銭貨	径 23.5	厚さ 1.2	重さ [1.5]					北 寛永通寶 (古) 半欠	
88	鉄製品	銭貨	径 23.8	厚さ 1.8	重さ 2.9					北 寛永通寶 (古)	
89	銅製品	銭貨	径 28.3	厚さ 1.1	重さ 4.2					寛永通寶 (新) 11 波	
90	銅製品	銭貨	径 25.3	厚さ 1.3	重さ 3.5					南 寛永通寶 (新) 背文	
91	銅製品	銭貨	径 22.0	厚さ 1.0	重さ 1.7					基礎 寛永通寶 (新)	
92	銅製品	銭貨	径 24.4	厚さ 1.5 mm	重さ 2.6					基礎 寛永通寶 (新)	
93	銅製品	銭貨	径 24.2	厚さ 1.1	重さ 7.4					西 寛永通寶 (新)	
94	銅製品	銭貨	径 24.2	厚さ 1.1	重さ 2.7					北 寛永通寶 (新)	
95	鉄製品	銭貨	径 23.1	厚さ 1.7	重さ 2.7					北 寛永通寶 (新)	
96	石製品	火打石	長さ 5.0	幅 3.9	厚さ 1.7	重さ 35.5				玉髓 使用痕あり 基礎西辺出土	
97	石製品	火打石	長さ 2.5	幅 1.8	厚さ 1.5	重さ 6.1				玉髓 稜の潰れ著しい 基礎西辺出土	
98	石製品	砥石	長さ [5.4]	幅 5.3	厚さ 1.9	重さ 91.2				流紋岩 側面幅広工具痕・削痕 砥面 4 遺存 基礎北 辺出土	
99	石製品	磨石	長さ 6.2	幅 4.6	厚さ 2.8	重さ 47.4				角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面 2 溝状使 用痕 基礎西辺出土	140-3
100	石製品	磨石	長さ 6.4	幅 6.0	厚さ 3.9	重さ 71.2				角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面 2 溝状使 用痕 基礎北辺出土	140-3
101	石製品	磨石	長さ 4.6	幅 3.3	厚さ 2.6	重さ 17.7				角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面 1 基礎西 辺出土	

瀬戸美濃系磁器の端反形碗の蓋である。同文の身と蓋が第220号土壌で出土している。

33・34は肥前系磁器の蕎麦猪口である。33は蛇ノ目凹形高台で内面上位に四方襷文、内底面には丁寧な五弁花がみられる。出土位置は基礎東辺である。34は輪高台で無文である。出土位置は基礎南辺である。

35は肥前系磁器の水滴である。型成形で、下面には露胎で布目圧痕がみられる。文様は陽刻状で、染付がみられる。出土位置は基礎南辺である。

36～39は陶器の碗である。36・37は瀬戸美濃系の鎧手碗である。外面下位には工具による条線が施文され、37は内面の下位にも同様の施文がみられる。共に、内外面下位には錆釉、上位に漆黒鉄釉を施釉する。

38は瀬戸美濃系の奈良茶碗である。外面に鉄・呉須絵による縦縞の絵付けが施される。出土位置は基礎南辺である。

39は京都信楽系で、体部を窪ます胴締め碗である。出土位置は基礎西辺である。

第24図40は京都信楽系陶器の坏である。底部はケズリ調整が認められ、胎土は緻密且つ硬質で

光沢のある磁器質である。

41～45は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿である。41・42は油皿で、いずれも釉の拭き取り痕と輪状の重ね焼き痕がみられる。重ね焼き痕はほぼ同径である。43～45は油受皿で、いずれも釉の拭き取り痕がみられる。44・45には輪状の重ね焼き痕が残る。44の出土位置は基礎南辺である。

46は備前系陶器の瓶類で、小型の徳利の可能性が考えられる。炆器質な胎土で外面には塗土状の光沢が認められる。

47～49は陶器の土瓶で、いずれも産地不詳である。47は鉄釉土瓶で体部の上位に段が付く。器高は接点のない2片から推定復元した。体部下位はケズリ調整で、底部に使用痕と思われる煤が付着する。基礎北辺及び西辺から出土しているため、建物跡の覆土に伴うものと考えられる。48は灰釉土瓶で、接点のない2片を合成し、図上復元した。底部には使用痕と思われる煤が付着する。49は青緑釉がかかる所謂青土瓶の注口部である。出土位置は基礎東辺である。

50・51は土師質土器の植木鉢である。いずれも粉質な胎土で、底部に糸切痕が遺存する。50

の糸切痕は左回転である。また、胎土中には細粒な雲母片が認められる。

52～54は瓦質土器の火鉢である。52は丸火鉢の底部で、外面は著しく剥落している。胎土には多量の雲母細粒が含まれるが、角閃石や軽石状の粒子、赤色粒子等、在地的な要素も認められる。出土位置は基礎南辺である。53は台付火鉢の体部である。表面はやや酸化焰焼成で橙色気味の色調である。口縁部に敲打痕がみられ、体部下半部は丸みを帯びずに直線的に伸びる。54は大型の台付火鉢の口縁部である。やや酸化焰焼成で表面は橙色気味の色調である。鏝状で、端部は受け口となっている。外面及び口縁端部にミガキ調整、破断面には粘土接合の刻み目がみられる。

55・56は土師質土器の丸底焙烙である。55は粉質胎土で雲母細粒を含んでおり、江戸在地系の可能性がある。56は体部にミガキ状の光沢がみられる。胎土に角閃石がみとめられ、在地産と推定される。

57は瓦質土器の平底焙烙の底部である。表面は強い燻しが認められる。内底面に刻印が押されており、「[大極上]」と読める。

58は土師質土器の風口で、江戸在地系と考えられる。胎土に細粒な雲母を含む粉質胎土で、板状粘土を接ぎ合わせた板づくり成形である。第25図59は瓦質土器の焜炉である。体部にミガキ調整がみられ、表面は燻しにより黒化している。

61は産地不詳陶器の両手鍋である。柿釉が施釉され、胎土は硬質である。煤等の使用痕跡が認められなかったため、ミニチュアとして扱った。62は江戸在地系の土人形である。モチーフは天神様で、二枚型を用いて前後を合わせて成形している。中身は中実である。

63～67は瓦で、いずれも黒色の素焼きである。63は軒棧瓦である。マーブル状で、粒径の大きい黒色粒子を含む特徴的な胎土を呈している。64～66は丸瓦で、65・66には外面にヘラナ

デがみられる。66は特に強く銀化している。67は転用瓦で、平・軒瓦を転用したものと考えられる。表面には深いV字状の刃物痕が多数みられ、裏面には擦痕が確認できる。砥具に転用したことが考えられる。

68・69は木製品である。68は漆杯で、内面に金彩で達磨が描かれている。69は方形の貫通孔がみられる棒状製品で、何らかの部材と思われる。上部には銅線が三重に巻かれる。

70・71は銅製品の煙管である。70は雁首で、頸部・体部が非常に短い。71は吸い口で内部に有機質の羅字が残存している。

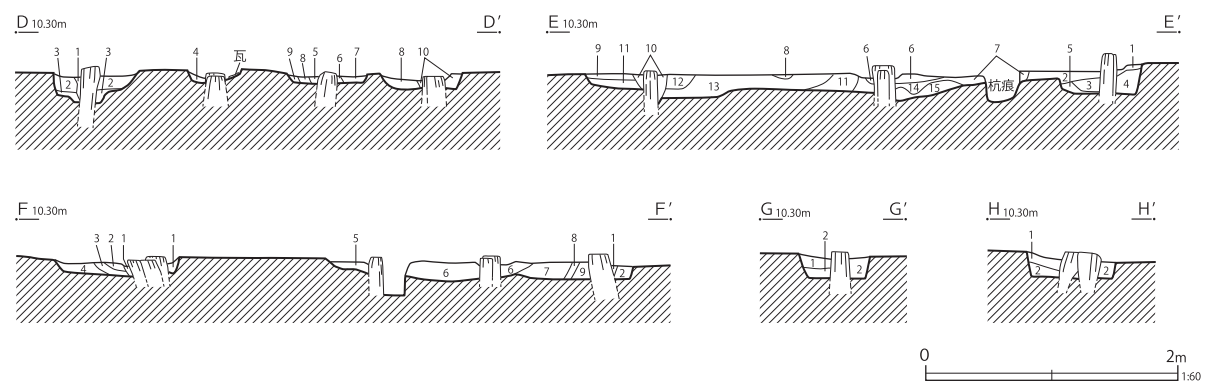
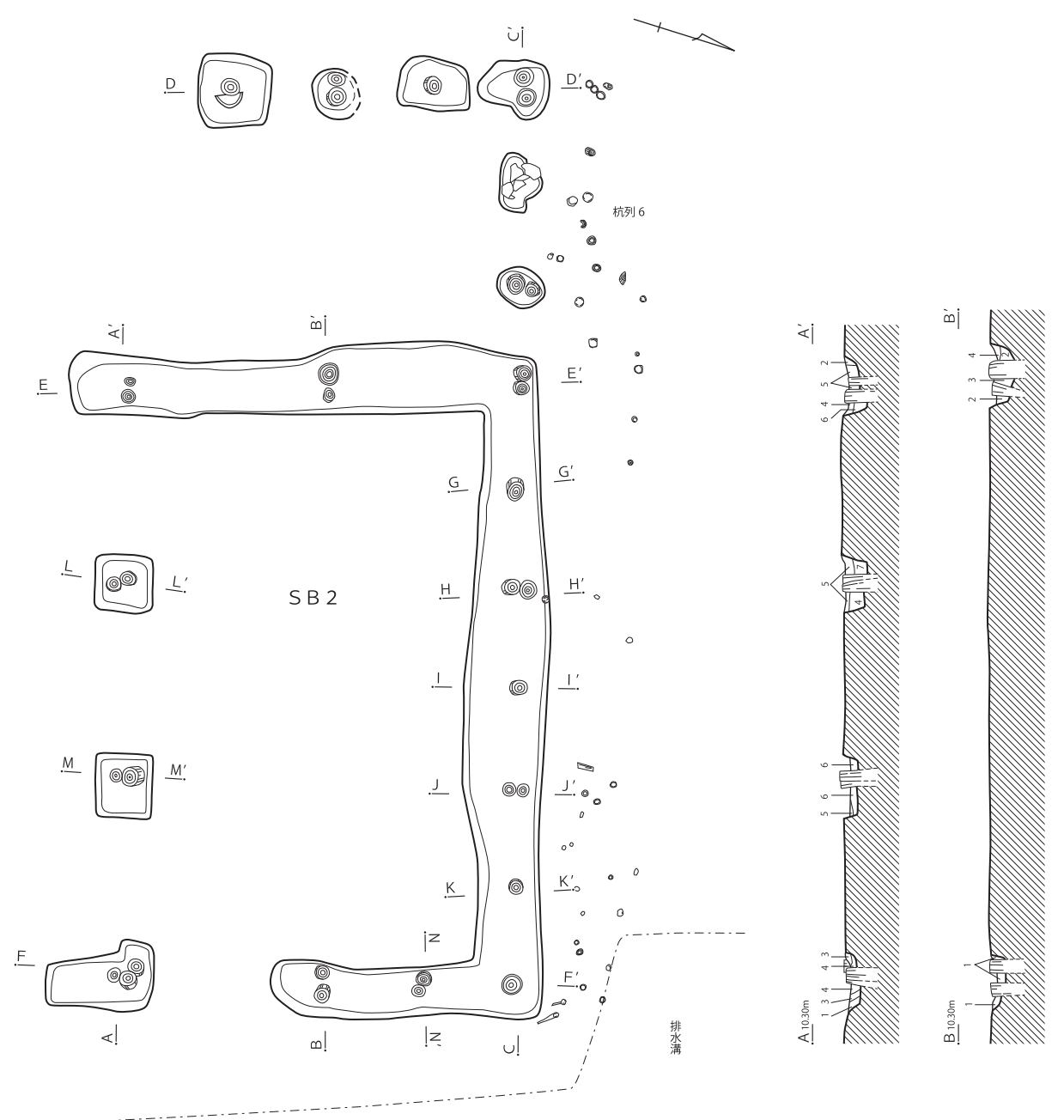
第25図72～74・第26図75～83は鉄製品で、72は帯金具である。73・74は用途不明の製品で、73は扁平の延べ板状を呈している。75～81は頭巻釘、82・83は環釘である。いずれも建築部材等に使用されたと推定される。

84～95は銭貨である。84～88は古寛永通寶で、すべて基礎北辺から出土している。下層にある遺構や整地層からの混入と考えられる。90は背文の新寛永通寶で、基礎南辺の出土である。93は新寛永通寶で、基礎西辺の出土である。

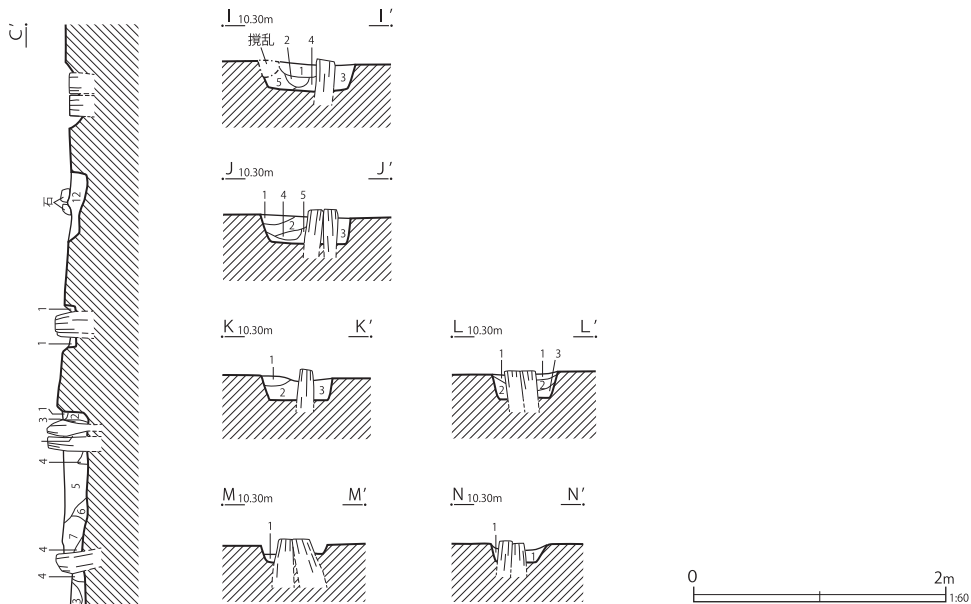
96～101は石製品である。96・97は玉髓製の火打石で、96には使用による潰れが著しく稜の丸みが強い箇所がみられる。また裏面には主要剥離面が遺存しており、打ち割りによって得られた剥片を素材としている。97は小さく、打ち割り痕が確認されないことから碎片を素材としていることが窺える。使用痕はみられるが、敲き潰れが弱く、それほど多くは使用されなかったと考えられる。いずれも基礎西辺の出土である。

98は白色の流紋岩製砥石で、側面に工具による削り痕がみられる。

99～101は磨石で、黄白色～白色を呈する多孔質の角閃石安山岩転石を素材としている。99は断面形が半円状で、平坦面が僅かに凸面になっている。自然面側には溝状の使用痕がみられる。



第 27 图 第 2 号建物迹 (1)



S B 2

A-A'

- | | | |
|---|-------|---------|
| 1 | 灰黄褐色土 | シルト質 |
| 2 | 褐色土 | 橙色土多量 |
| 3 | 灰褐色土 | 橙色土微量 |
| 4 | 暗褐色土 | 炭化物粒子微量 |
| 5 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 6 | 灰色土 | シルト質 |
| 7 | 暗灰色土 | シルト質 |

B-B'

- | | |
|---|-------|
| 1 | 灰黄褐色土 |
| 2 | 灰褐色土 |
| 3 | 黄褐色土 |
| 4 | 暗灰色土 |

C-C'

- | | | |
|----|-------|----------|
| 1 | 灰黄褐色土 | シルト質 |
| 2 | 褐色土 | |
| 3 | 褐色土 | 橙色土多量 |
| 4 | 暗灰色土 | シルト質 |
| 5 | 灰色土 | 橙色土極多量 |
| 6 | 黄褐色土 | |
| 7 | 暗褐色土 | |
| 8 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 9 | 灰褐色土 | |
| 10 | 灰色土 | シルト質 |
| 11 | 灰褐色土 | 橙色土微量 |
| 12 | 褐色土 | 黄褐色土粒子微量 |
| 13 | 暗褐色土 | 炭化物粒子微量 |
| 14 | 褐色土 | 炭化物微量 |

D-D'

- | | | |
|----|-------|-----------|
| 1 | 灰黄褐色土 | |
| 2 | 灰黄褐色土 | 粘土質 |
| 3 | 灰黄褐色土 | 褐色土粒子微量 |
| 4 | 灰褐色土 | |
| 5 | 灰色土 | 橙色土含む |
| 6 | 灰色土 | |
| 7 | 灰色土 | 黄白色土含む 砂質 |
| 8 | 黄褐色土 | |
| 9 | 褐色土 | |
| 10 | 暗灰色土 | |

E-E'

- | | | |
|----|-------|------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | シルト質 |
| 2 | 褐色土 | 橙色土粒子多量 |
| 3 | 褐色土 | |
| 4 | 褐色土 | 橙色土多量 |
| 5 | 暗灰色土 | シルト質 |
| 6 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 7 | 黄褐色土 | |
| 8 | 褐色土 | 黄褐色土粒子微量 |
| 9 | 橙色砂質土 | |
| 10 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 11 | 暗褐色土 | 炭化物粒子微量 |
| 12 | 灰褐色土 | 炭化物含む しまり強 |
| 13 | 灰褐色土 | |
| 14 | 灰黄褐色土 | 砂質 橙色土多量 |
| 15 | 灰色土 | シルト質 |

F-F'

- | | | |
|---|-------|----------|
| 1 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 2 | 灰色土 | シルト質 |
| 3 | 灰色土 | 橙色土極多量 |
| 4 | 暗灰色土 | シルト質 |
| 5 | 褐色土 | 橙色土多量 |
| 6 | 暗褐色土 | しまり強 |
| 7 | 褐色土 | 黄褐色土粒子微量 |
| 8 | 黄褐色土 | |
| 9 | 灰褐色土 | 橙色土微量 |

G-G'

- | | | |
|---|------|------|
| 1 | 褐色土 | 砂質 |
| 2 | 暗灰色土 | シルト質 |

H-H'

- | | | |
|---|------|----------|
| 1 | 褐色土 | 黄褐色土粒子微量 |
| 2 | 暗灰色土 | シルト質 |

I-I'

- | | | |
|---|-------|-------|
| 1 | 褐色土 | 砂質 |
| 2 | 褐色土 | 橙色土多量 |
| 3 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 4 | 灰色土 | シルト質 |
| 5 | 黄褐色土 | |

J-J'

- | | | |
|---|-------|-------------------|
| 1 | 暗褐色土 | 粗粒 |
| 2 | 灰黄褐色土 | |
| 3 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 4 | 灰黄褐色土 | 炭化物粒子・灰白色粒子含むシルト質 |
| 5 | 暗灰色土 | |

K-K'

- | | | |
|---|------|----------|
| 1 | 褐色土 | 黄褐色土粒子微量 |
| 2 | 暗褐色土 | 炭化物粒子微量 |
| 3 | 灰色土 | シルト質 |

L-L'

- | | | |
|---|-------|-------|
| 1 | 灰黄褐色土 | 砂質 |
| 2 | 褐色土 | 橙色土多量 |
| 3 | 暗灰色土 | シルト質 |

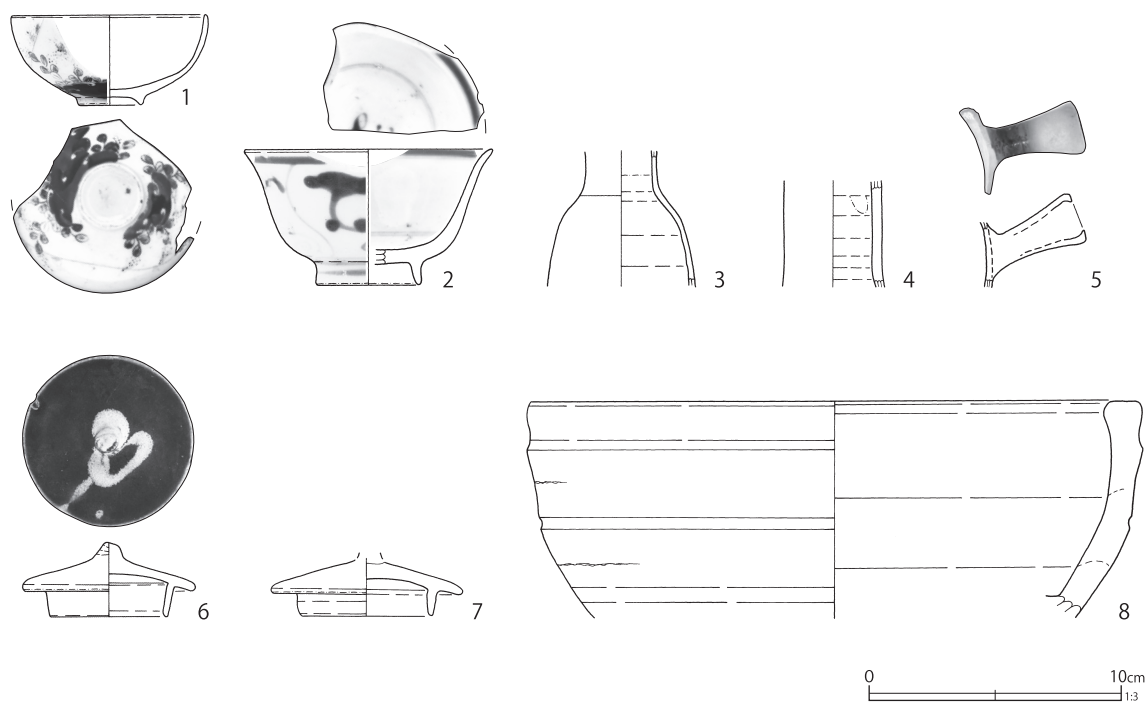
M-M'

- | | | |
|---|------|------|
| 1 | 暗灰色土 | シルト質 |
|---|------|------|

N-N'

- | | | |
|---|-------|-------|
| 1 | 灰黄褐色土 | 褐色土含む |
|---|-------|-------|

第 28 図 第 2 号建物跡 (2)



第29図 第2号建物跡出土遺物

第2表 第4表 第2号建物跡出土遺物観察表 (第29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(7.6)	3.5	2.4	—	70	良好	白	肥前系 内外面施釉 外面色絵 (赤・緑)	64-6
2	磁器	碗	(9.7)	5.3	(4.0)	—	25	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
3	磁器	爛德利	—	[5.4]	—	—	5	良好	白	瀬戸美濃系 外面施釉 肩部凸帯1条	
4	陶器	德利	—	[4.2]	—	IK	5	普通	灰白	外面青緑釉 内面柿釉 頸部	64-7
5	陶器	急須	—	[3.7]	—	K	5	良好	にぶい黄橙	胎土炆器質 部分的に施釉 把手	
6	陶器	蓋	—	2.9	4.6	K	100	良好	にぶい黄橙	上面鉄釉・うのふ釉流し掛け	
7	陶器	蓋	—	[2.2]	5.1	IK	90	良好	にぶい褐	松岡系 上面鉄釉	
8	瓦質土器	火鉢	(24.0)	[8.6]	—	CHIK	10	普通	浅黄橙	やや酸化焰焼成 体部下位ケズリをナデ消し 胎土中 心部褐灰	

100は断面形が楕円形で、自然面を直接使用したことによる平坦面が形成されている。自然面側には99と同様に溝状の使用痕がみられる。101は断面形が楕円形で、使用面は自然面を直接使用したことによる不規則な面が複数形成されている。99と101は基礎西辺の出土である。

第2号建物跡 (第27～29図)

F7-F8・9、同G8・9グリッドの区画AGに位置する。北辺を同一方向に延びる第6号杭列と重複していることが、セクションから確認できる。

基礎は、東・西・北の各辺が布掘り状の溝で

「コ」字状に接続し、南辺のみが独立した3基の壺掘りによって構成されている。壺掘りの平面形状は方形、円形、不整形と多様である。

規模は長軸6.2m、短軸4.9mで、長軸方位はおおよそN-70°-Eを指す。布掘りの幅は東辺が約0.4m、西辺が0.45～0.7m、北辺は推定で0.65～1mである。南辺の壺掘りは、東南隅が0.5×1mの長方形、他の2基が方0.5m程の方形である。深さは布掘り、壺掘りともに0.1～0.25mと浅い。上部構造は削平されていると考えられるが、石材や木材などの出土が表土掘削時に確認されなかった。充填土は砂質土とシルト質

土が主体だが、版築のように規則的な堆積ではない。

布掘り及び壺掘りの底面には、2～3本一組の捨杭が打ち込まれており、その柱間は桁行3間、梁行2間である。さらに北辺の桁柱間には3箇所にも1本ずつ、西辺北側の梁柱間にも1箇所に1本が加えられている。

想定される建物の規模は、桁行5.5m（約3間）、梁行3.6m（約2間）で、面積（建坪）は19.8㎡（約6坪）である。

なお、建物跡の西側には、北辺の延長上に3基、その西端から南へ3基の計6基の壺掘りと捨杭が半間間隔で検出されている。平面形も規模も不揃いだ、1基を除き、底面に1～2本の杭が打ち込まれている。南辺を構成する基礎は見当たらないため、建物本体とは考え難いが、建物跡と方向や柱間の距離が一致するので、付属施設の可能性が考えられる。

未掲載遺物には瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗がみられ、酸化コバルト染付などの明確な近代製品は一切認められなかった。抽出した最新期の遺物は、爛徳利（第29図3）と急須（第29図5）である。建物跡の構築年代は19世紀中葉頃と考えられる。

第29図に陶磁器類を図示した。1～3は磁器である。1は肥前系の色絵半球碗で、外面に赤と緑の上絵付が施される。2は瀬戸美濃系の端反形碗である。3は瀬戸美濃系の爛徳利で、頸部と体部の境に隆線が1条廻る。栗橋宿跡では19世紀後半の遺構にみられることから、本製品が最新期の陶磁器と考えられる。

4～7は陶器で、4は北関東地方を中心に分布する頸部別造りの大型長頸瓶の頸部である。外面に青緑釉、内面に柿釉が薄く施釉される。5は産地不詳急須の把手である。胎土炆器質の焼き締め陶器で、部分的に火襷がみられる。6は鉄釉土瓶の笠形蓋で、鉄釉の上に海鼠釉気味の施釉がみら

れる。7は松岡系鉄釉土瓶の蓋である。ザラメ状の粗い胎土を呈している。

8は瓦質土器の台付火鉢である。やや酸化焰焼成で表面が薄い橙色気味である。胎土中心部は還元焰焼成である。

第3号建物跡（第30～32図）

F7-D6・7、同E6・7グリッドの区画AFに位置する。第6～8号溝跡、第2号埋設桶、ピット13より新しく、第60・70・83・97号土壌より古い。さらに、第80・84～88・92～94・96・129、ピット11・12と重複する。

他の遺構との重複が激しく、基礎全体の形状は明確とし得ないが、北・東・西辺の溝が「コ」字状に連続し、これに基礎南辺の東端をブリッジ状に残した布掘りが想定される。また、基礎北辺の内側3箇所には、長方形、乃至は楕円形の張り出しが見られる。

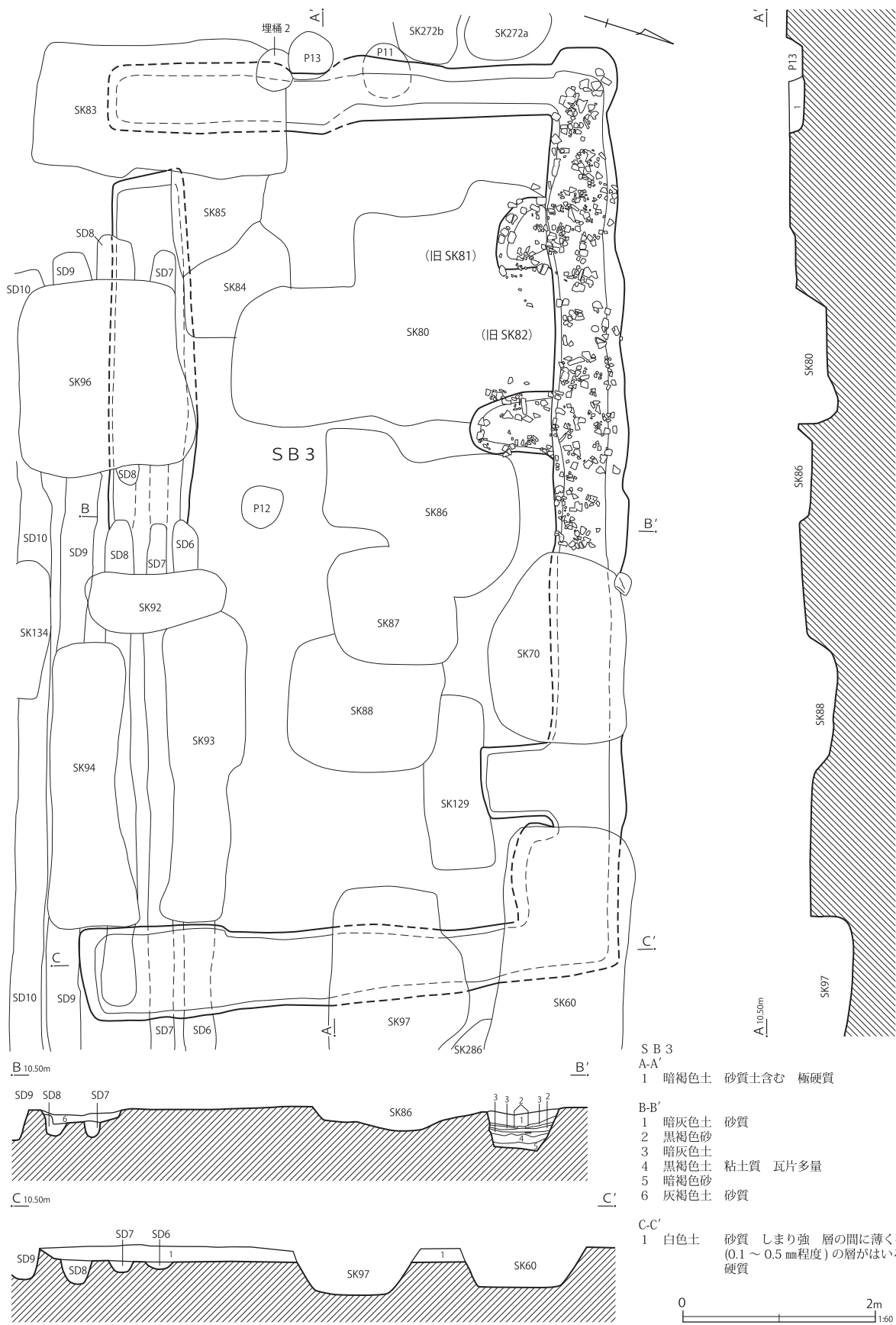
規模は長軸10.0m、短軸5.4mで、長軸方位はN-72°-Eを指す。溝の幅は一定していないもの、おおよそ0.55～0.95mである。また、布掘りの深さは一定ではなく、瓦片が敷かれている部分は深く掘り込まれている。

充填土は砂質土を主体とし、版築状に堅く締まっている。特に基礎北辺と南辺の砂質土は極めて硬質である。また、基礎北西部の充填土は砂や砂質土が互層となっており、その下層で瓦が敷かれている。瓦は総数2283点、106,300g出土している。

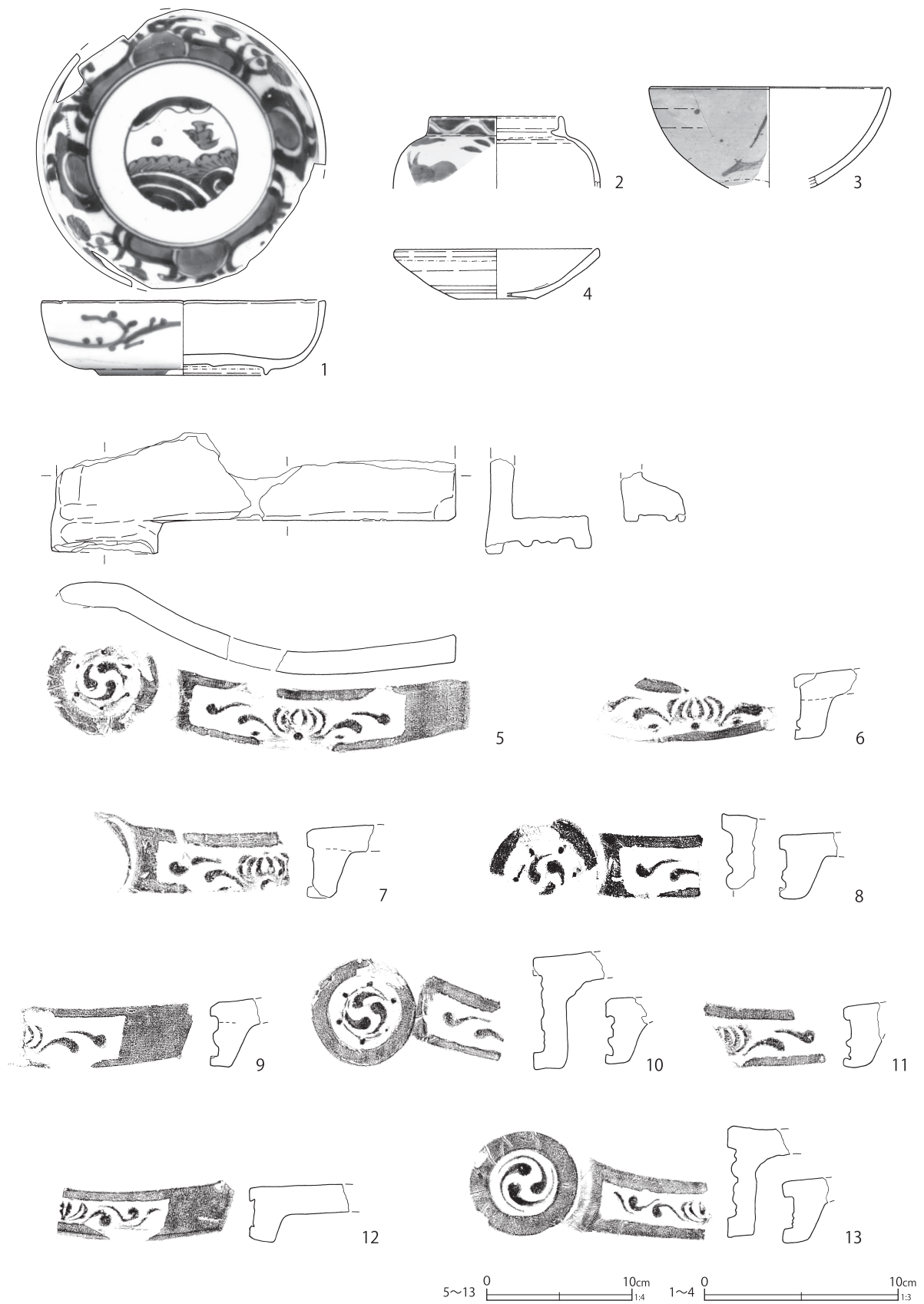
底面に捨杭などの検出はなく、柱間は不明である。北辺溝の張り出しを桁柱に関わる施設と見れば、桁行は5間となろう。

想定される建物の規模は、桁行9m（約5間）、梁行4.9m（約2間4尺）で、面積（建坪）は44.1㎡（約13坪）となる。

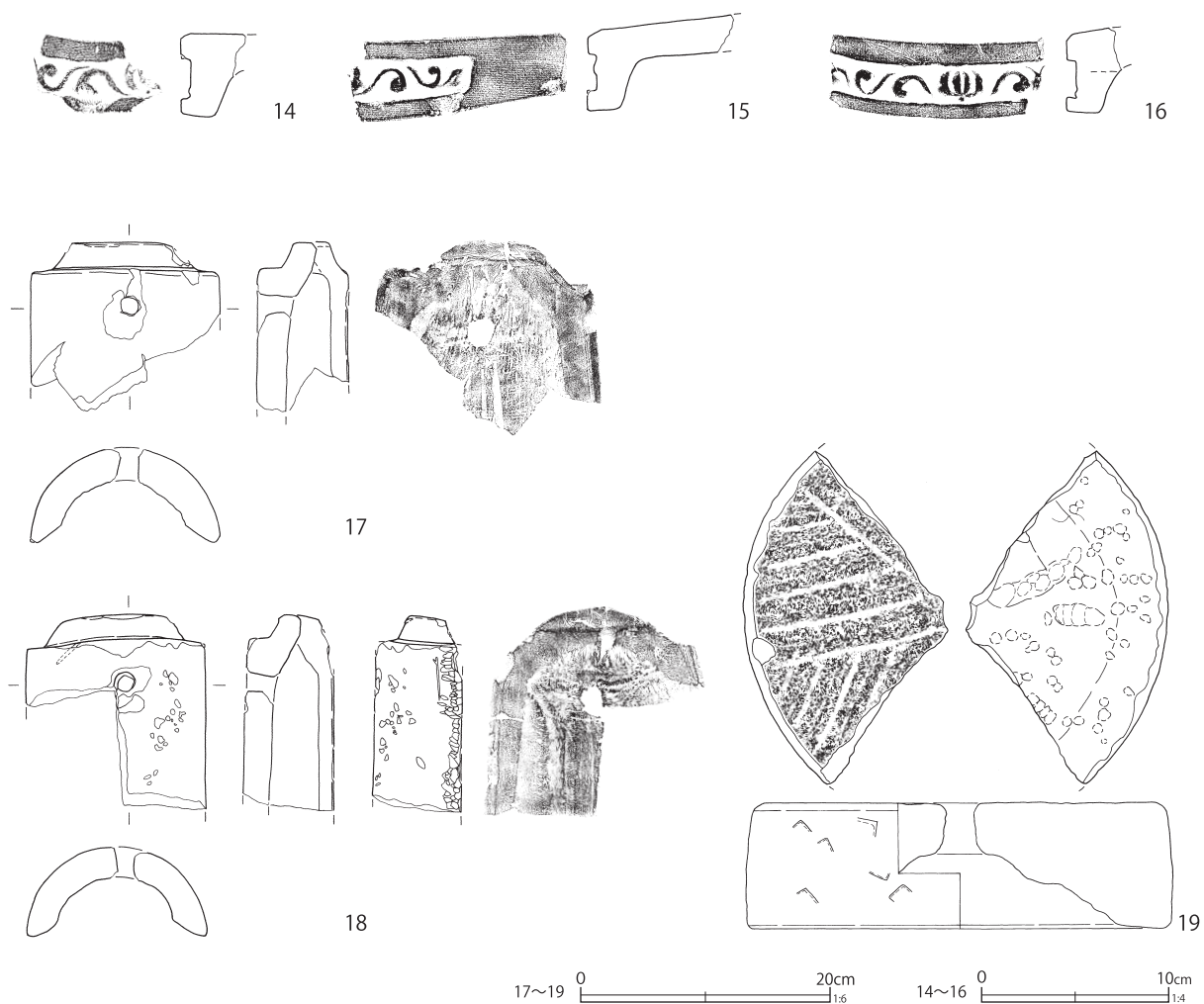
基礎北辺の西半部と張り出し部からは、多量の瓦片が出土している。遺構の重複関係が激しく全体像が把握し難いが、部分的に瓦を敷設していた



第 30 図 第 3 号建物跡



第31図 第3号建物跡出土遺物（1）



第32図 第3号建物跡出土遺物（2）

と考えられる。瓦片を敷く建物跡は、第6地点の第20号建物跡（埤埋文2019c）や栗橋宿本陣跡の第305号建物跡（埤埋文2019a）等、複数確認されている。

陶磁器の出土は非常に少なく、近代に比定される遺物は非掲載遺物にみられる銅版転写染付磁器の坏1点が最新期の陶磁器である。しかし、遺構の重複が激しいため混入の判断が困難である。

第31・32図に出土遺物を図示した。第31図1は肥前系磁器の皿である。高台が低い蛇ノ目凹形高台で口縁部がやや輪花気味となっている。2は瀬戸美濃系磁器の急須である。3は瀬戸美濃系陶器の柳茶碗である。4は京都信楽系の灯明皿である。被熱しており、底部にタール状の黒色物質

が付着している。

第31図5～13・第32図14～18は黒色素焼きの瓦である。いずれも江戸式に類似する中心弁と唐草を持つ。5～7、8～10はそれぞれ同文の瓦当文様であり、中心弁が六枚で唐草文様の巻が弱い点で共通する。12・15・16は瓦当面の縦幅が他より狭い特徴がある。17・18は丸瓦で、共に二次穿孔が1箇所遺存している。18は右側縁部に敲打痕がみられ、転用が行われている。

19は石製品の石臼である。安山岩製の下臼で、側面にノミ状の工具痕がみられる。また下面は凹面状にノミ状工具で削られている。

第6号建物跡（第33～36図）

F7-D7・8、同E7グリッドの区画AEに

第5表 第3号建物跡出土遺物観察表 (第31・32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	皿	14.3	3.8	8.5	—	85	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台 高台内輪状に砂粒付着 基礎南辺出土	
2	磁器	急須	(6.6)	[3.7]	—	—	15	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 基礎北辺出土	
3	陶器	碗	(12.2)	[5.1]	—	IK	20	良好	灰白	瀬戸美濃系 内外面灰釉 外面鉄絵 基礎北辺出土	
4	陶器	灯明皿	(10.3)	2.5	(4.0)	HK	10	良好	灰白	京都信楽系 内外面施釉 内面ピン痕1遺存 底部タール状物質付着 被熱 基礎北辺出土	
5	瓦	軒棧瓦	長さ[8.3] 幅27.8 厚さ1.8 高さ[7.7] 径1.7			AIK	—	良好	灰白	左巻六連珠三巴文 燻す 雲母付着	123-3
6	瓦	軒棧瓦	長さ[4.4] 幅[12.6] 厚さ2.2 高さ[5.1]			AIK	—	普通	灰白	燻す	
7	瓦	軒棧瓦	長さ[5.5] 幅[14.4] 厚さ2.4 高さ[5.1]			AIK	—	不良	灰白	表面剥落	
8	瓦	軒棧瓦	長さ[6.4] 幅[24.1] 厚さ2.6 高さ[13.3] 径(7.0)			AK	—	普通	灰白	左巻六連珠三巴文 燻す 雲母付着	
9	瓦	軒棧瓦	長さ[3.6] 幅[13.2] 厚さ2.3 高さ8.2			AIK	—	普通	灰白	銀化 雲母付着 燻す	
10	瓦	軒棧瓦	長さ[5.3] 幅[13.7] 厚さ2.2 高さ[7.7] 径7.4			AIK	—	良好	灰白	弱く銀化 左巻六連珠三巴文 燻す	123-4
11	瓦	軒棧瓦	長さ[3.3] 幅[9.5] 厚さ2.2 高さ[4.7]			AIK	—	普通	灰	燻す 胎土中心部灰色	123-5
12	瓦	軒棧瓦	長さ[6.8] 幅[12.3] 厚さ1.9 高さ[6.8]			AIK	—	良好	灰白	弱く銀化 瓦当面幅狭・シャープ	123-6
13	瓦	軒棧瓦	長さ5.2 幅[16.7] 厚さ2.2 高さ[7.6] 径7.4			AIK	—	普通	灰	右巻三巴文 燻す	
14	瓦	軒棧瓦	長さ[3.3] 幅[7.1] 厚さ2.2 高さ[4.9]			AIK	—	普通	灰白	燻す 雲母付着	
15	瓦	軒棧瓦	長さ[8.0] 幅[13.5] 厚さ2.2 高さ7.3			AK	—	普通	灰白	弱く銀化 瓦当面幅狭 雲母付着	123-7
16	瓦	軒棧瓦	長さ[3.9] 幅[13.8] 厚さ2.2 高さ[5.3]			AIK	—	普通	灰白	弱く銀化 瓦当面幅狭 燻す	123-8
17	瓦	丸瓦	長さ[13.6] 幅[15.3] 厚さ2.6 高さ7.5			AIK	—	良好	灰白	燻す 穿孔1遺存	
18	瓦	丸瓦	長さ[15.7] 幅14.6 厚さ2.3 高さ7.4			AIK	—	良好	灰	銀化 穿孔1遺存 外面右半分敲打状痕	
19	石製品	石臼	径(34.4) 厚さ10.2 重さ5246.2							安山岩 下臼 穿孔1 上面挿目 下面凹状に整形 側面ノミ状工具痕	138-1

位置し、同区画内の第3号建物跡と隣接する。現地調査では北辺を第3号溝跡、西辺を第130号土壌、南辺を第136号土壌、東辺を第297号土壌として精査した。

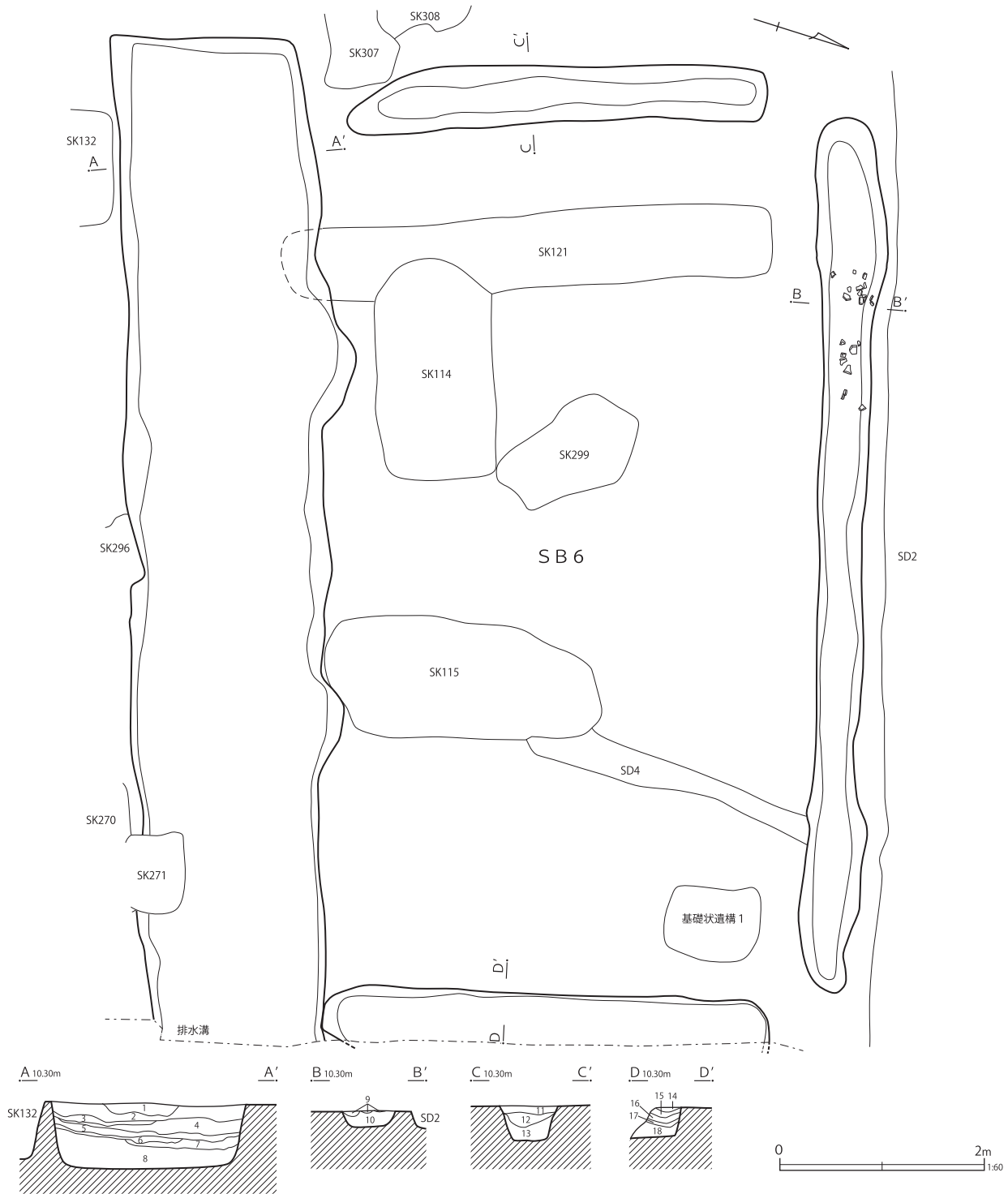
しかしその後、覆土の状況、第3号建物跡及び区画施設である第2号溝跡との位置関係から、これらが四辺をなす1棟の建物跡と確認できた。第296号土壌より新しく、第1号基礎状遺構、第4号溝跡、第114・115・121・271・296・299号土壌と重複する。

東辺の半分が調査区外となるが、基礎全体は独立した4本の溝で構成されている。北・東・西辺の溝は幅0.7m前後、深さ0.15～0.45mとほぼ同規模だが、南辺は幅1.9m前後、深さ約0.6

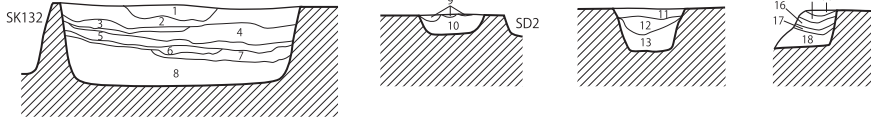
mと卓越している。この4条の溝を布掘りの基礎とすれば、全体は長軸9.7m以上、短軸7.2mの布掘り状となる。長軸の方位はおよそN-70°-Eを指す。

基礎南辺の充填土は、砂質土とシルト質土で構成され、互層になっている。基礎西辺は砂質土で、下層は橙色砂との混合土である。基礎西辺はシルト質土で、最上層が極めて固くしまっている。基礎北辺は砂質土主体で、間にシルト質土と粘質土が入る。西部には瓦片が散布する。底面に捨杭が打設されたような様子は窺えず、簡素な造りである。

想定される建物の規模は、各溝の中央を柱通りとした場合、桁行9.1m(約5間)、梁行6.1m(約



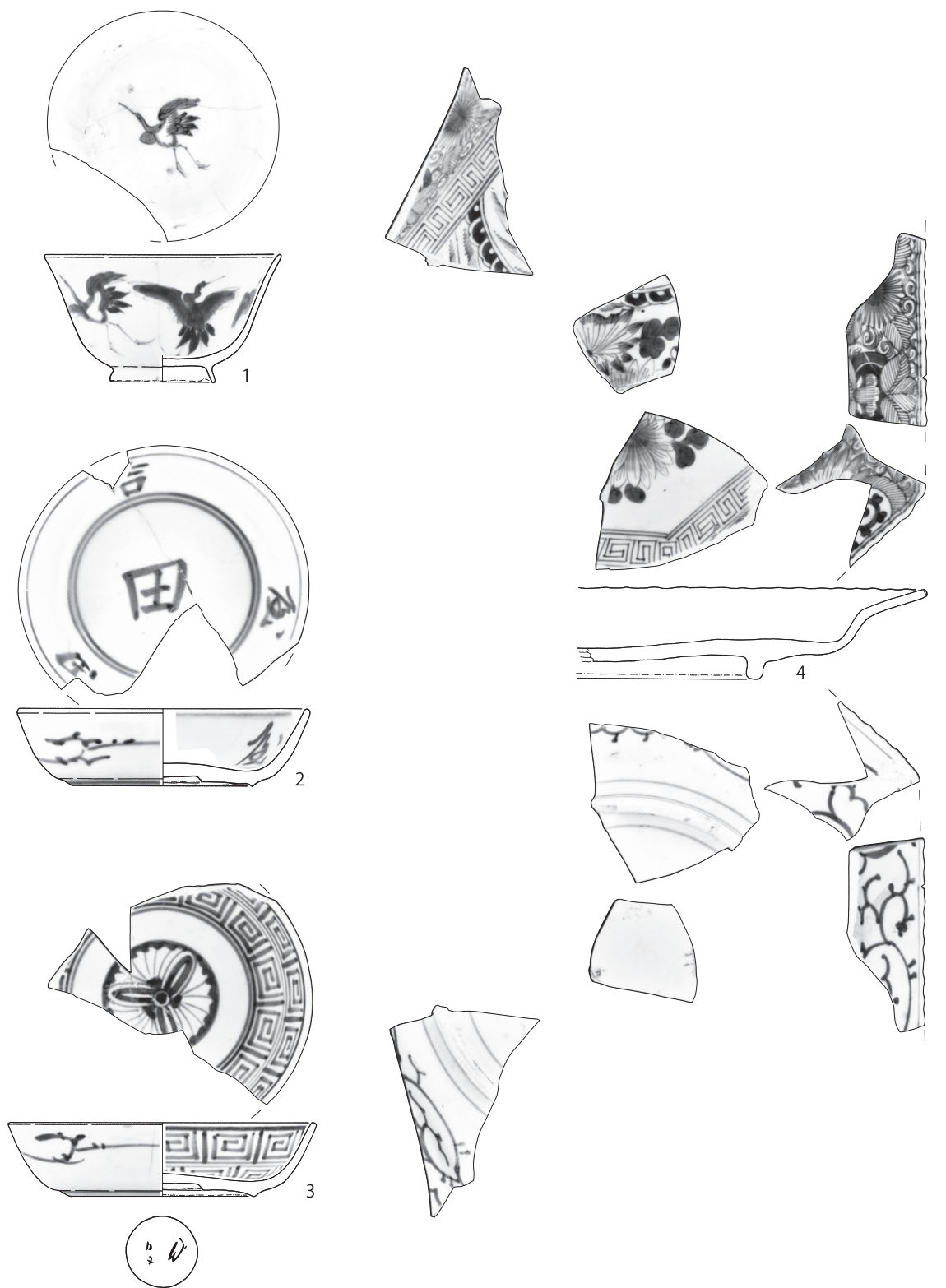
A 10.30m A' B 10.30m B' C 10.30m C' D 10.30m D'



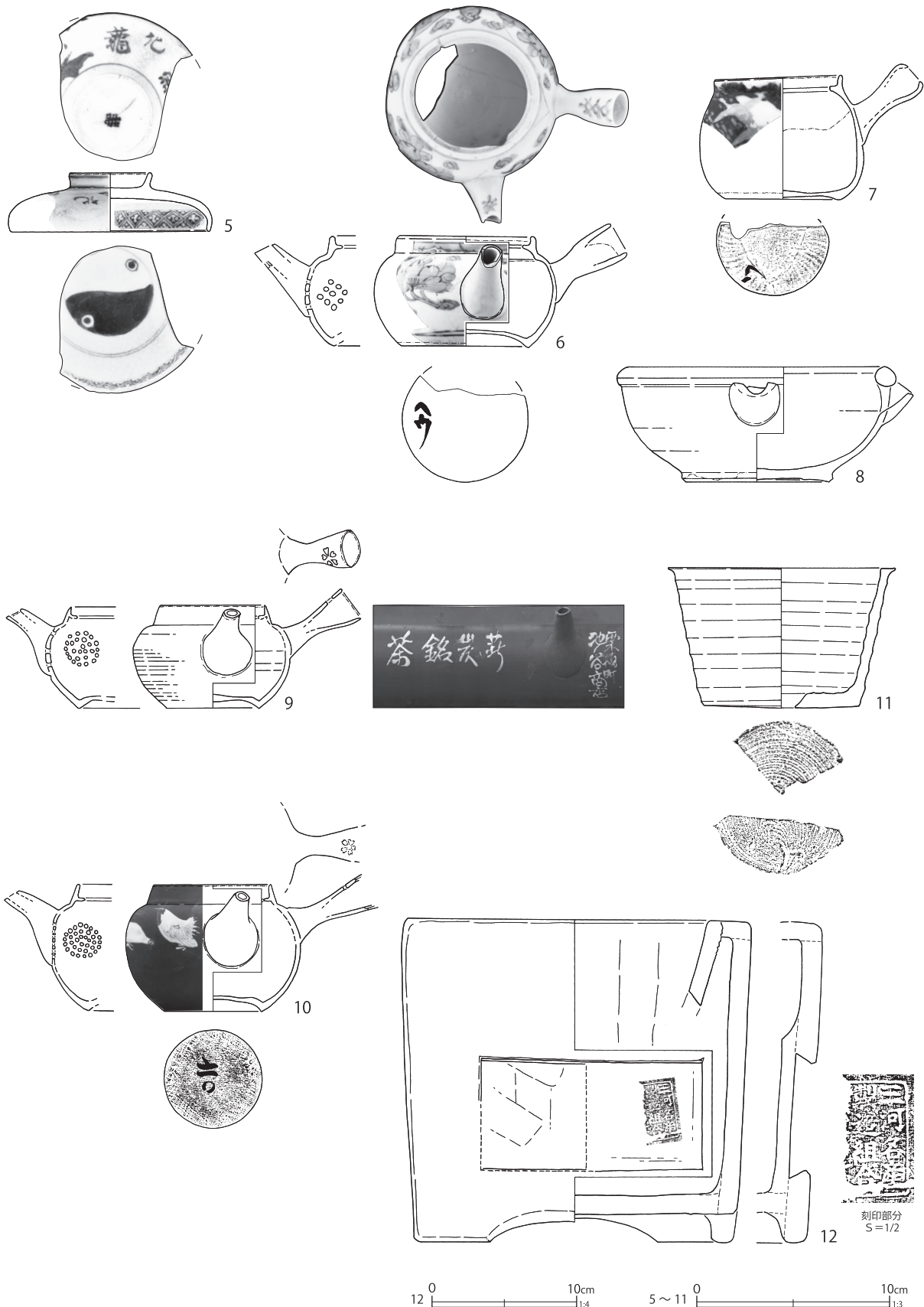
S B 6

- | | |
|--|---|
| 1 灰白色土 砂質 やや均一 細粒砂主体 灰白色シルトブロック (φ5 ~ 30 mm) 多量 暗灰色シルトブロック (φ5 ~ 30 mm) 少量 | 8 灰白色土 砂質 均一 細粒砂主体 灰白色シルトブロック (φ5 ~ 30 mm) 多量 |
| 2 灰白色土 砂質 均一 細粒砂主体 灰白色シルトブロック (φ5 ~ 30 mm) 多量 酸化鉄含む | 9 灰褐色土 砂質 橙色砂混合土 |
| 3 灰白色土 シルト質 均一 灰白色シルトブロック主体 細粒砂少量 | 10 暗灰色土 シルト質 均一 しまり極強 炭化物 (φ1 ~ 2 mm) 少量 |
| 4 灰白色土 砂質 均一 細粒砂主体 灰白色シルトブロック (φ5 ~ 30 mm) 多量 酸化鉄含む | 11 灰色土 シルト質 均一 炭化物 (φ1 ~ 2 mm) 少量 |
| 5 灰白色土 シルト質 均一 細粒砂微量含む 3層より砂多量 | 12 灰色土 シルト質 均一 炭化物 (φ1 ~ 2 mm) 少量 |
| 6 灰白色土 砂質 均一 細粒砂主体 灰白色シルト層 (φ5 ~ 30 mm) 多量 酸化鉄含む 2層よりシルトブロック少量 | 13 黄灰色土 シルト質 均一 炭化物 (φ1 ~ 2 mm) 少量 |
| 7 灰白色土 シルト質 均一 灰白色シルトブロック主体 細粒砂微量 3層より砂多量 | 14 灰黄色土 砂質 炭化物少量 |
| | 15 橙色土 砂質 細粒砂 |
| | 16 灰褐色土 シルト質 炭化物含む |
| | 17 橙色土 砂質 細粒砂 |
| | 18 灰褐色土 粘土質 炭化物含む |

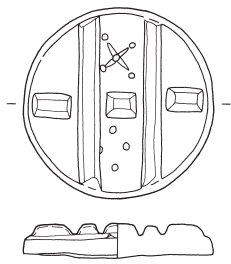
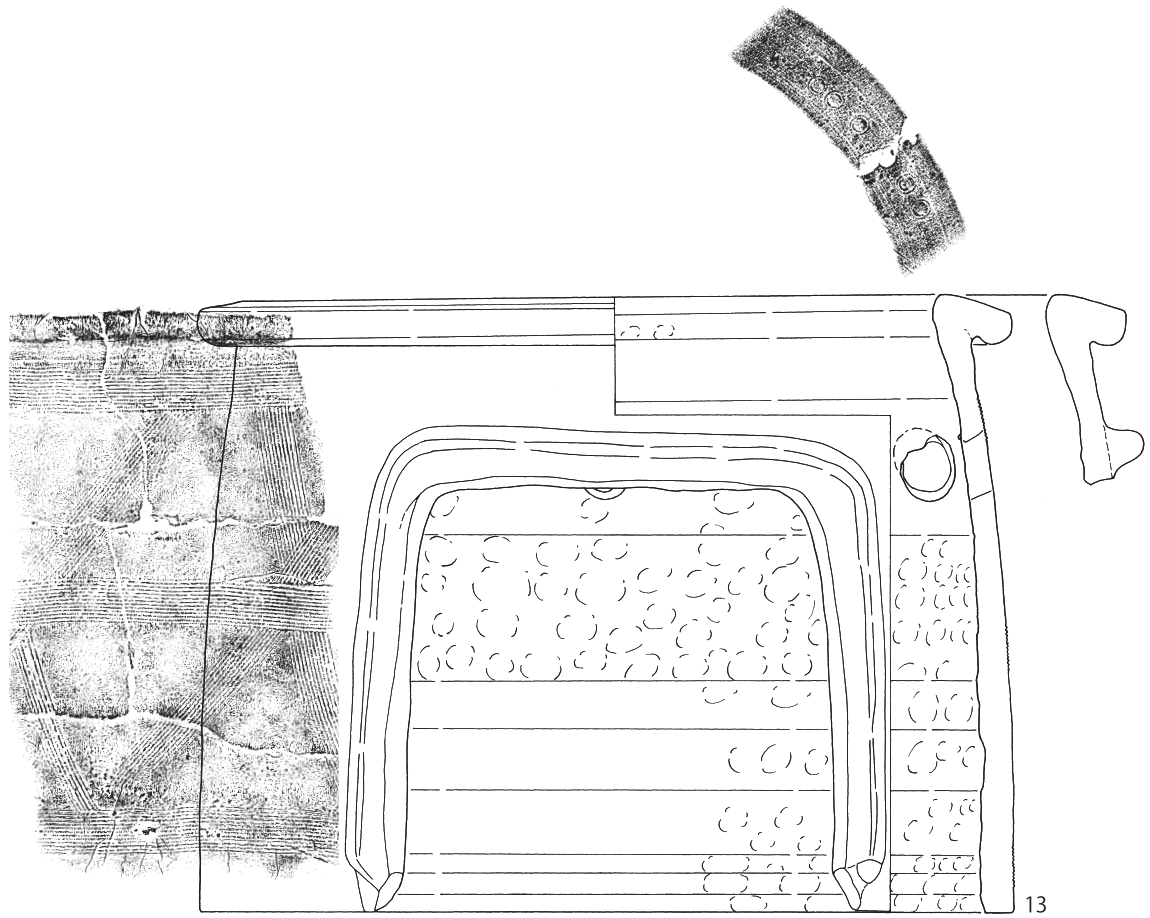
第 33 図 第 6 号建物跡



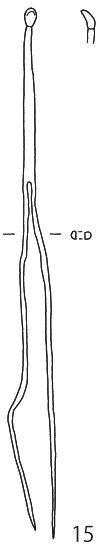
第 34 図 第 6 号建物跡出土遺物 (1)



第 35 图 第 6 号建物跡出土遺物 (2)



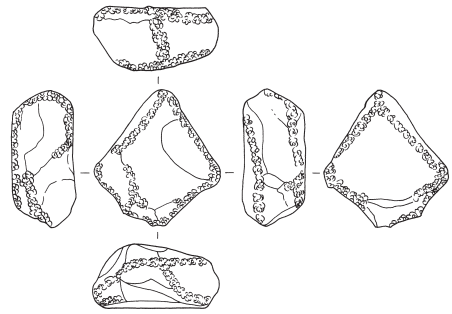
14



15



16



17

0 10cm
13 14

0 10cm
16 13

0 5cm
14 · 15 · 17 12

第36图 第6号建物跡出土遺物(3)

第6表 第6号建物跡出土遺物観察表（第34～36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版	
1	磁器	碗	11.2	6.1	4.9	—	80	良好	白	肥前系 内外面施釉・染付		
2	磁器	皿	13.7	3.7	8.6	—	75	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 内面染付文字「田 / 吉田屋」	64-9	
3	磁器	皿	(14.5)	3.6	8.2	—	40	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印（赤）		
4	磁器	皿	—	4.4	—	—	20	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付 高台内ハリ支跡1遺存・釘書「キ」接点のない2片から断面復元		
5	磁器	蓋	(10.2)	3.0	4.1	—	45	普通	白	肥前系 内外面施釉・染付	64-10	
6	磁器	急須	6.8	5.7	6.5	—	70	良好	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 底部墨書「へウ」	64-8	
7	磁器	急須	6.4	6.4	5.8	—	45	普通	白	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面銅版転写染付（青・桃） 底部墨書		
8	磁器	片口鉢	(13.2)	5.9	7.4	IK	65	良好	灰白	内外面灰釉 露胎部煤付着		
9	陶器	急須	5.4	5.3	4.8	—	100	良好	暗赤灰	萬古系 胎土炆器質 把手透彫り 口唇・注口・把手端部施釉（一部金彩遺存）外面イチン文字「薪 / 炭 / 銘茶 / 栗橋町 / 池谷商店」		
10	陶器	急須	5.9	[7.0]	5.0	—	95	良好	暗赤灰	萬古系 底部・注口部布目痕 胎土炆器質 把手透彫 口縁・注口・把手端部施釉 外面絵付（白・赤・緑） 底部墨書		
11	瓦質土器	植木鉢	(11.6)	[7.2]	8.0	AIK	60	普通	灰白	江戸在地系 底部糸切痕（左） 胎土粉質 燻す		
12	土師質土器	焜炉	21.5	22.3	21.2	ADE	50	普通	にぶい橙	三河産 板作り成形 窓部刻印 漆喰僅かに付着 内面上位煤付着 窓は推定復元		
13	瓦質土器	竈	36.0	32.7	42.7	CHIK	70	普通	灰	外面櫛歯状施文 内面下位指頭痕 焼成前穿孔2あり 燻す 口唇部刻印「○○○○○○」		
14	土製品	ミニチュア	幅 5.0 厚さ 0.9 重さ 19.9				AHIK	—	普通	にぶい橙	蓋 型成形	117-3
15	銅製品	簪	長さ 14.0 幅 0.5 厚さ 0.2 重さ 4.1									
16	鉄製品	火箸	長さ 25.5 厚さ 0.4 重さ 17.9								箸頭環状	
17	石製品	火打石	長さ 3.6 幅 3.3 厚さ 1.7 重さ 23.9								石英 稜の潰れ著しい	

3間2尺)で、面積(建坪)は55.51㎡(約17坪)となる。また、内法を優先して想定すると、梁行は5.4m(約3間)で、面積(建坪)は49.15㎡(約15坪)となる。

基礎東・西・北辺の出土遺物は極めて少ない。一方で、基礎南辺では多く出土しており、建物跡解体に伴う遺物の可能性がある。非掲載遺物の銅版転写染付磁器が最新期の陶磁器であり、第296号土壇との先後関係から、建物跡の構築年代は19世紀後半以降と推定される。

第34～36図に出土遺物を図示した。第34図の1は肥前系磁器の端反形碗である。内外面に鶴の染付が施されている。2は肥前系磁器の五寸皿である。高台の低い蛇ノ目凹形高台で、内底面に染付文字「田」、内側面に染付文字「吉田屋」の銘がみえる。

「吉田屋」は『諸国道中商人鑑』にみえる旅籠

屋の「吉田屋 / 太左衛門」である。『絵図』との対比から区画AEは「吉田屋 / 太左衛門」の区画であり、区画案と出土遺物の整合性がとれているといえる。

また、このような染付銘は生産地に対して注文生産が行われていたことを意味する。第8地点では「吉田屋」と推定される染付銘の磁器が多数出土しており、他の地点とは様相が異なっている。

染付銘の磁器は、第6地点で出土している『絵図』にみえる「煮売屋 / 運平」に比定される「とらや」や「脇本陣」と推定される「とらや / ㊦」等が確認されており、江戸時代における注文生産の初現が課題となろう。

3は肥前系磁器の皿で、高台の低い蛇ノ目凹形高台である。高台内に焼継印がみえる。4は肥前系磁器の輪高台型皿である。接点のない2片から器高を復元した。平面形は八角形と推定される。

第 35 図 5 は肥前系磁器の丸碗の蓋である。内面に太極図と四方襷文がみられ、つまみ内に宝結び文、外面には染付文字がみえる。6 は瀬戸美濃系磁器の急須である。底部には墨書「へウ」がみえる。7 は瀬戸美濃系磁器の急須で、外面に多色刷りの銅版転写染付が施される。底部には放射状のカナケズリ痕と墨書がみえる。

9 は萬古系陶器の急須である。外面にイッチン描き文字で「栗橋町 / 池谷商店 / 薪 / 炭 / 銘茶」と書かれている。10 は萬古系陶器の急須で、外面に絵付、底部には墨書がみえる。

11 は瓦質土器の植木鉢である。粉質胎土で細粒な雲母を含む江戸在地系である。底部には左回転の回転糸切痕が残り、内外面は強いロクロナデで成形されている。12 は三河産の箱形焔炉である。板作り成形で、板状粘土を接ぎ合わせた痕跡が明瞭に残る。外面は単位が不明瞭なミガキが施される。窓に刻印「三河名産 / 製造組合」がみえる。窓は推定で復元した。

第 36 図 13 は瓦質土器の竈である。外面に楡歯状の施文が施され、内面に指頭痕が無数に残る。背面には焼成前穿孔が 2 箇所みられる。口唇部には刻印「〇〇〇〇〇〇」がみえる。「〇」の数は大きさを示すものと推定され、セットになるであろう竈鏝にも同様の刻印が押される。本製品の「〇」の数は現段階で最大数である。

14 は土製品のミニチュアである。型成形で釜の蓋を模っている。

15 は銅製品の簪、16 は鉄製品の火箸である。

17 は石英製火打石で、稜の潰れが著しく、ほ

とんどの角が丸みを帯びている。

(2) 基礎状遺構 (第 37 図)

建物跡のように「ロ」の字形に廻らず、方形で砂利や純砂を覆土とする遺物をほとんど含まない遺構や版築状堆積土、砕かれた瓦の充填等が確認される建物跡の基礎構造に類似する遺構を基礎状遺構として扱った。

基礎状遺構は 6 基が確認された。いずれも現地調査では土壇として調査された。第 2～6 号基礎状遺構は同一区画内で近接して検出されており、第 1 号建物跡と併せて相互的な関連性が窺われる。第 37 図に第 2～6 号基礎状遺構の配置図を付した。

位置・規模等の基本的な情報は第 7 表に示した。

第 1 号基礎状遺構 (第 37・38 図)

F 7-D 8 グリッドの区画 AE 第 6 号建物跡内側の北東隅に位置する。第 6 号建物跡と関連する遺構の可能性がある。全体は隅丸長方形で、長軸 0.95 m、短軸 0.75 m、深さ 0.15 m を測る。長軸方位はおよそ N-7° -W を指す。

掘り込みは極めて浅く、上部は削平されていると考えられる。覆土は砂質土の単層で、下位に瓦片が多量に含まれている。

出土陶磁器は極めて少なく、未掲載遺物の肥前系磁器湯呑形碗片が最新である。遺構の時期は 19 世紀中葉頃と推定される。

第 38 図 1 に軒棧瓦を図示した。江戸式に類似する瓦当文様で、中心弁は六枚である。

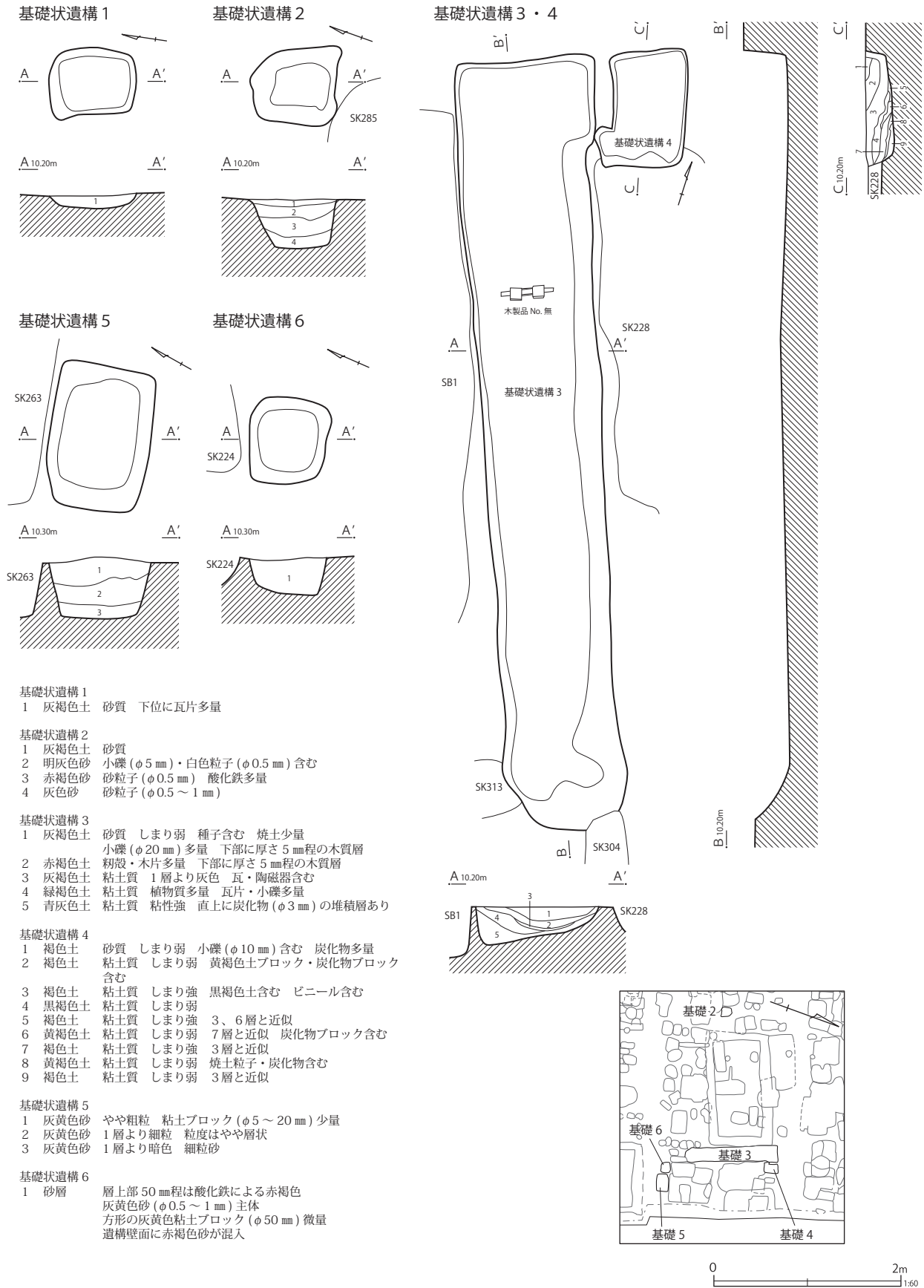
第 2 号基礎状遺構 (第 37 図)

F 7-F 7 グリッドの区画 AF に位置し、第

第 7 表 第一面基礎状遺構一覧表

単位：m

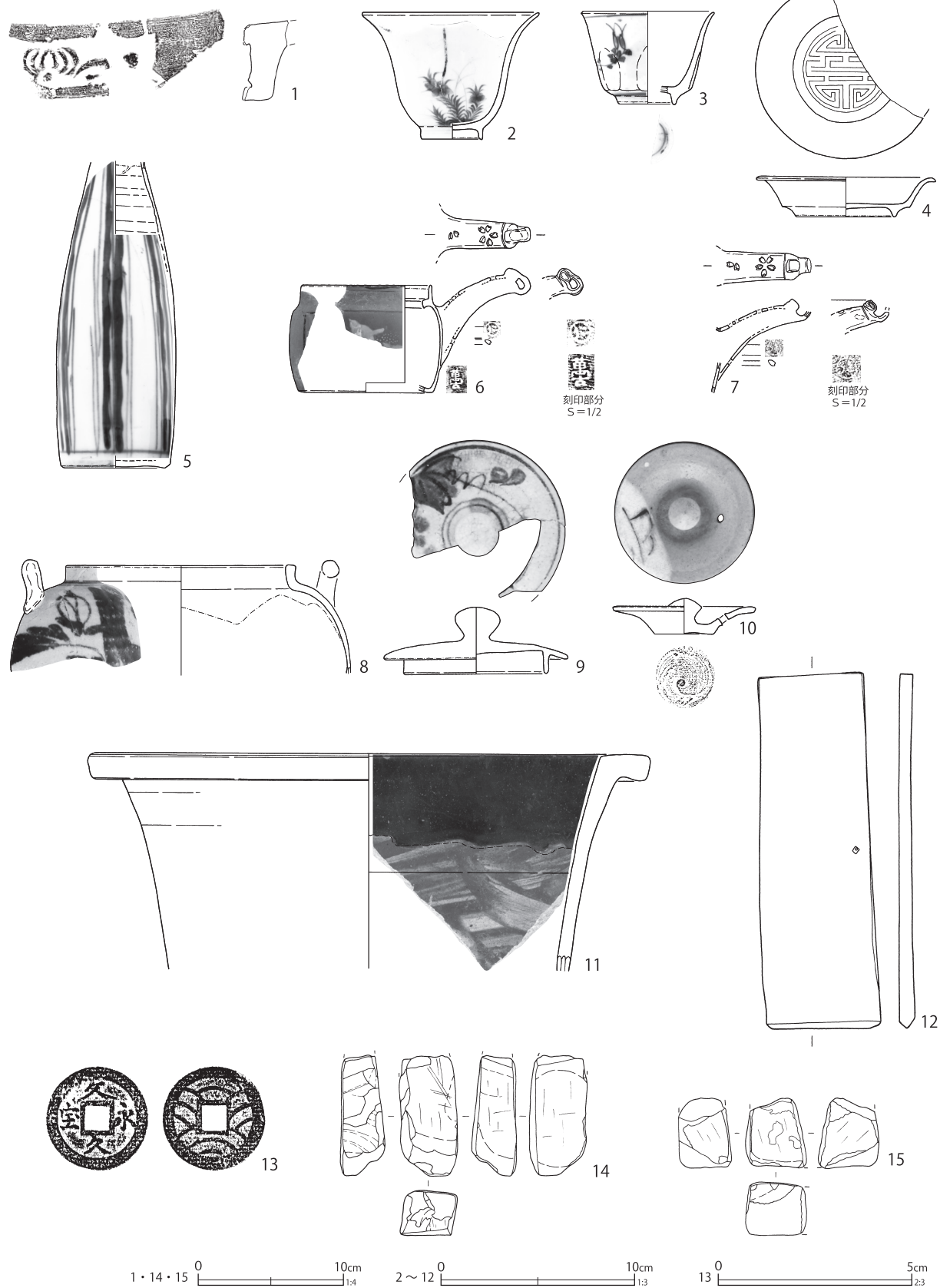
番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
1	AE	F7-D8	隅丸長方形	0.95	0.75	0.15	N-7° -W	SB6 と重複
2	AF	F7-F7	不整形	0.95	0.80	0.50	N-20° -W	SK285 と隣接
3	AF	F7-E・F8	隅丸長方形	8.20	1.50	0.40	N-21° -W	SK304 より新 SK313 と重複 基礎状遺構 4 と隣接
4	AF	F7-E8	不整形	1.30	(1.00)	0.30	N-14° -W	SK228 より新 基礎状遺構 3 と隣接
5	AF	F7-F9	隅丸長方形	1.55	1.10	0.70	N-69° -E	
6	AF	F7-F8・9	隅丸方形	0.95	0.85	0.40	N-70° -E	



第 37 図 基礎状遺構

基礎状遺構 1

基礎状遺構 3

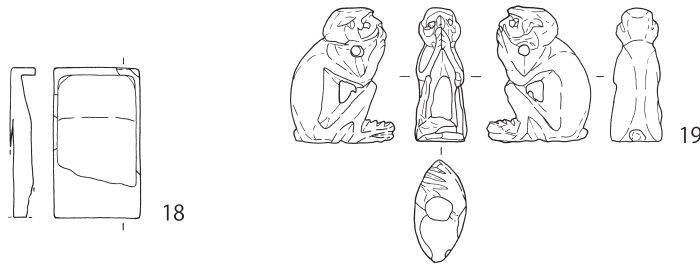
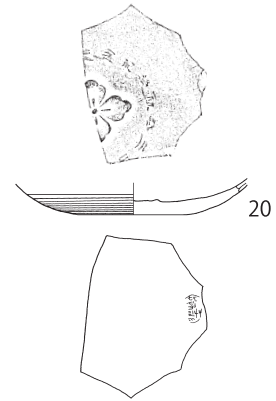


第 38 図 基礎状遺構出土遺物 (1)

基礎状遺構 4



基礎状遺構 5



第 39 図 基礎状遺構出土遺物 (2)

第 8 表 基礎状遺構出土遺物観察表 (第 38・39 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	瓦	軒棧瓦	長さ [4.1] 幅 [15.6] 厚さ 2.2 高さ [6.7]			AIK	—	普通	灰白	基礎 1	江戸式 燻す 摩耗顕著	
2	磁器	碗	(9.0)	6.5	3.0	—	60	良好	白	基礎 3	肥前系 内外面施釉 外面染付 焼継痕あり	
3	磁器	坏	(6.6)	4.7	(2.8)	—	30	普通	白	基礎 3	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
4	磁器	皿	8.7	2.1	5.0	—	70	良好	白	基礎 3	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
5	磁器	爛德利	—	[15.7]	5.2	—	80	普通	白	基礎 3	瀬戸美濃系 外面施釉・酸化コバルト染付	
6	陶器	急須	(6.6)	6.4	(6.3)	I	55	良好	褐灰	基礎 3	萬古系 型成形 胎土炆器質 把手透彫り 口唇・ 把手端部施釉・金彩 外面絵付 体部下位刻印「㊦」 「萬古」	71-3
7	陶器	急須	—	[4.8]	—	—	5	普通	褐灰	基礎 3	萬古系 型成形 胎土炆器質 把手透彫り・一部 施釉 把手下面刻印「㊦」	71-4
8	陶器	土瓶	(11.7)	[5.5]	—	K	10	普通	黄灰	基礎 3	外面施釉・呉須絵 (酸化コバルト染付)	
9	陶器	蓋	9.4	3.4	7.2	K	50	良好	灰白	基礎 3	上面白土染付 (青・緑)・鉄絵・施釉	
10	陶器	蓋	7.3	1.8	3.1	K	100	良好	にぶい 黄橙	基礎 3	底部離し糸切痕 上面施釉・白土・鉄絵 露胎部 煤付着	
11	陶器	植木鉢	(27.7)	[11.1]	—	EIK	10	良好	灰白	基礎 3	瀬戸美濃系 内面上位・外面鉄釉 内面下位柿釉 刷毛塗状	
12	木製品	木札	長さ 18.3 幅 5.9 厚さ 0.8							基礎 3	樽の側板転用 表面墨書 板目	
13	銅製品	銭貨	径 26.6 厚さ 1.1 重さ 3.6							基礎 3	文久永宝	
14	石製品	砥石	長さ [8.3] 幅 4.0 厚さ 3.1 重さ 141.4							基礎 3	流紋岩 側面削痕 砥面 4 被熱 (赤化・剥落)	
15	石製品	砥石	長さ [4.3] 幅 [4.2] 厚さ 3.6 重さ 101.0							基礎 3	流紋岩 砥面 3 被熱 (剥落)	
16	磁器	碗	—	[4.2]	—	—	5	普通	白	基礎 4	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面上絵付 (赤・白・金)	
17	鉄製品	釘	長さ [5.1] 幅 0.3 厚さ 0.3 重さ 3.0							基礎 4		
18	石製品	硯	長さ 7.9 幅 4.6 厚さ— 重 80.3							基礎 4	粘板岩 器高 1.3cm	
19	石製品	人形	長さ 3.5 幅 1.4 厚さ 2.8 重さ 13.2							基礎 4	滑石カ 下面穿孔	
20	陶器	皿	—	[1.4]	(3.8)	K	20	良好	灰白	基礎 5	京都系 白色土器質 内面型押陽刻文 体部刻印	71-5

285 号土壌と隣接する。平面は不整形で、長軸 0.95 m、短軸 0.8 m、深さ 0.5 m を測る。長軸方位はおよそ N-20°-W を指す。

覆土は純砂層主体で、第 1 層は砂質土、第 2 層に径 5 mm 程度の小礫が含まれる。

出土陶磁器はなく、遺構の時期は不詳である。

幕末・明治前半頃の水塚跡を調査した加須市本田遺跡では、攪乱として報告している砂を充填した施設について、風呂・手洗い関係の施設と推定している (埴埋文 2021b)。栗橋宿跡で時折みつかると砂を充填した方形且つ小規模な遺構は、そのような構造物の可能性も考えられる。

第3号基礎状遺構（第37・38図）

F7-E8、同F8グリッドの区画AFに位置する。第304号土壌より新しく、第313号土壌と重複する。第4号基礎状遺構とは隣接し、位置関係から関連性が窺える。また、第1号建物跡と極めて近い位置で隣接する。

平面形は隅丸長方形で、長軸8.2m、短軸1.5m、深さ0.4mを測る。南側は丸くなっており、底面は不整形である。長軸方位はおよそN-21°-Wを指す。

覆土は第1層の砂質土に径20mm程度の小礫が多量に含まれ、下部に厚さ5mmの木質層がみられる。また、第4層には瓦片と小礫が多量に含まれる。木質層などの有機物が多くみられる。

断面形は南北方向は底面がほぼ水平であるが、東西方向は西へ傾斜している。

出土陶磁器は多く、非掲載遺物に銅版転写染付磁器の坏、酸化クロム青磁釉の長筒形坏が最新期の陶磁器である。遺構の時期は19世紀末以降と考えられる。

第38図2～15に出土遺物を図示した。第38図2は肥前系磁器の碗である。坏形を呈し、口縁部が強く反る。3は瀬戸美濃系磁器の坏である。体部下半に鎬、外面に酸化コバルト染付が施され、体部が直線的に伸び、腰が強く張る。4は瀬戸美濃系磁器の木型打ち込み成形そり皿である。内面に型押しで隸字「寿」文の陰刻がみられる。5は瀬戸美濃系磁器の爛徳利である。外面に酸化コバルト染付が施される。

6は萬古系陶器の急須である。把手端部は手捻り成形で装飾が貼り付けられている。外面に盛絵等の絵付が施され、把手の下面に刻印「㊦」と「萬古」がみえる。7は6と同タイプの萬古系陶器急須の把手である。把手の下面に刻印「㊦」がみられる。8は陶器の土瓶で、生産地は不詳である。外面に酸化コバルトの呉須絵が施されている。9

は土瓶の蓋である。10は陶器の蓋で、急須もしくは土瓶の落し蓋と推定される。底部に右回転の離し糸切痕がみられる。11は瀬戸美濃系陶器の植木鉢である。外面に鉄釉、内面下位に柿釉が刷毛塗状に施釉される。

12は木製品の木札である。樽の側板を転用しており、表面に墨書「無類/㊦/㊧/台玉/□□」がみられる。一部は判読できなかった。

13は文久永宝の略宝四文銭である。初鑄年は文久三年（1863）である。

14・15は石製品の流紋岩製砥石で、14は側面に工具による削り痕がみられる。両者共に被熱により著しく剥落している。

第4号基礎状遺構（第37・39図）

F7-E8グリッドの区画AFに位置する。第3号基礎状遺構と隣接し、関連性が示唆される。第228号土壌より新しい。

平面形は不整形で、検出長軸1.3m、短軸1.0m、深さ0.3mを測る。長軸方位はおよそN-14°-Wを指す。

覆土は最上層が小礫を含む砂質土で、その下は粘質土である。粘質土はしまりの強弱が互層状となっている。

出土遺物は極めて少なく、第39図16に図示した色絵金彩の湯呑形碗が最新期と考えられる。遺構の時期は19世紀後葉以降である。

第39図16～19に出土遺物を図示した。16は瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗である。外面は色絵に金彩で絵付けてある。断面は体部から口縁部にかけて膨らむ、所謂長筒丸腰湯呑とされる器形である。

18は粘板岩製の硯である。19は人形で、利用石材は滑石と思われる。下面に穿孔がみられる。

第5号基礎状遺構（第37・39図）

F7-F9グリッドの区画AFに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸1.55m、短軸1.10m、

深さ 0.7 m を測る。長軸方位はおよそ N - 69° - E を指す。

覆土は第 2 号基礎状遺構と同様の純砂層である。上層は粗粒砂、下層は細粒砂である。

出土遺物は極めて少なく、非掲載遺物の内面に型押菊花状施文を施す瀬戸美濃系磁器の蛇ノ目凹形高台の皿が最新期の陶磁器である。遺構の時期は 19 世紀後葉と推定される。

第 39 図 20 に出土遺物を図示した。20 は京都系陶器の皿である。白色土器質で、内面は型押しで陽刻文を施文し、体部には刻印がみられる。

第 6 号基礎状遺構 (第 37 図)

F 7 - F 8 ・ 9 グリッドの区画 AF に位置する。平面形は隅丸方形で、長軸 0.95 m、短軸 0.85 m、深さ 0.4 m を測る。長軸方位はおよそ N - 70° - E を指す。

覆土は単層で、第 2 ・ 5 号基礎状遺構と同様に純砂層である。

出土遺物は極めて少なく、小破片のため図示し得るものがなかった。未掲載遺物にある瀬戸美濃系磁器の銅版転写染付爛徳利が最新期の陶磁器である。遺構の時期は、19 世紀後葉以降と推定される。

(3) 埋設桶 (第 40 ~ 46 図)

埋設桶は 14 基が検出された。位置・規模等の基本的な情報は第 9 表に示した。

埋設桶の分布は、区画施設付近に集中し水道施設との関連性が示唆される。また、区画 AD、AF に集中する一方で、区画 AA、AB、AG では検出されなかった。

埋設桶の構造は、底板がみられるもの(第 3 ・ 4 ・ 7 ・ 8 ・ 9 ・ 11 ・ 23 号埋設桶) と当初より抜き取られた状態で埋設すると想定されるもの(第 1 ・ 2 ・ 5 ・ 6 ・ 10 ・ 12) の大きく二種類が認められる。

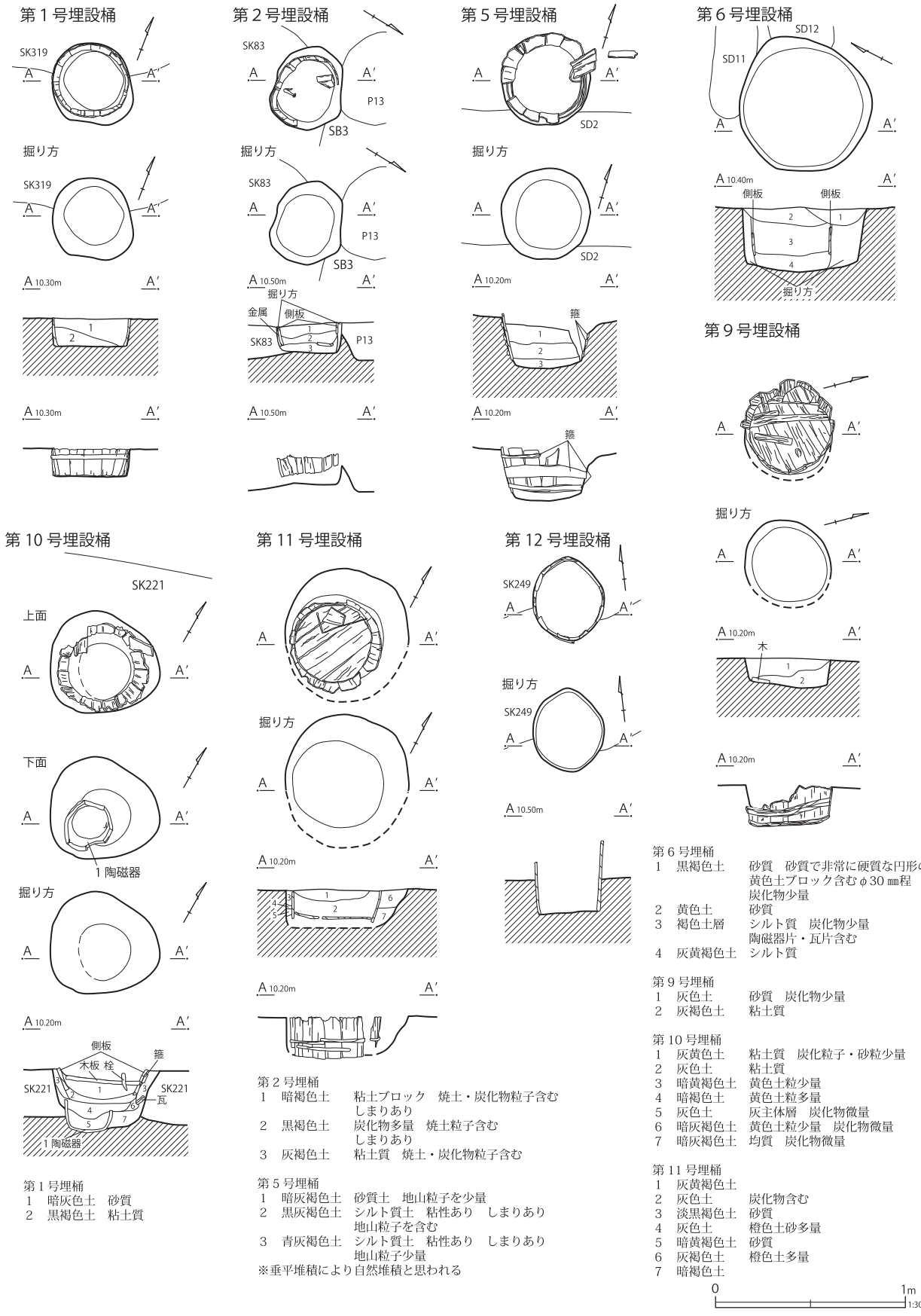
第 3 ・ 4 ・ 7 号埋設桶は自然科学分析の結果から便槽としての機能が示唆されており、埋設桶の用途を同定出来たことについては意義が深い。一方、第 8 号埋設桶の土壌から寄生虫卵がほとんど検出されなかったことを考慮すると、埋設桶の機能は多岐に渡ると考えられる。

第 23 号埋設桶は第 1 号木樋 (第 53 図) と接続しており、一連の遺構とされる。現地調査での遺構名は第 1 号枡だが、同様の検出状況を示す『栗橋宿本陣跡Ⅱ』第 88 号埋設桶(埤埋文 2020b)、『栗橋宿跡Ⅲ』第 201 ・ 205 ・ 207 ・ 212 ・ 214 ・ 217 号埋設桶(埤埋文 2019c) 等に則して、埋設桶として扱った。

第 9 表 第一面埋設桶一覧表

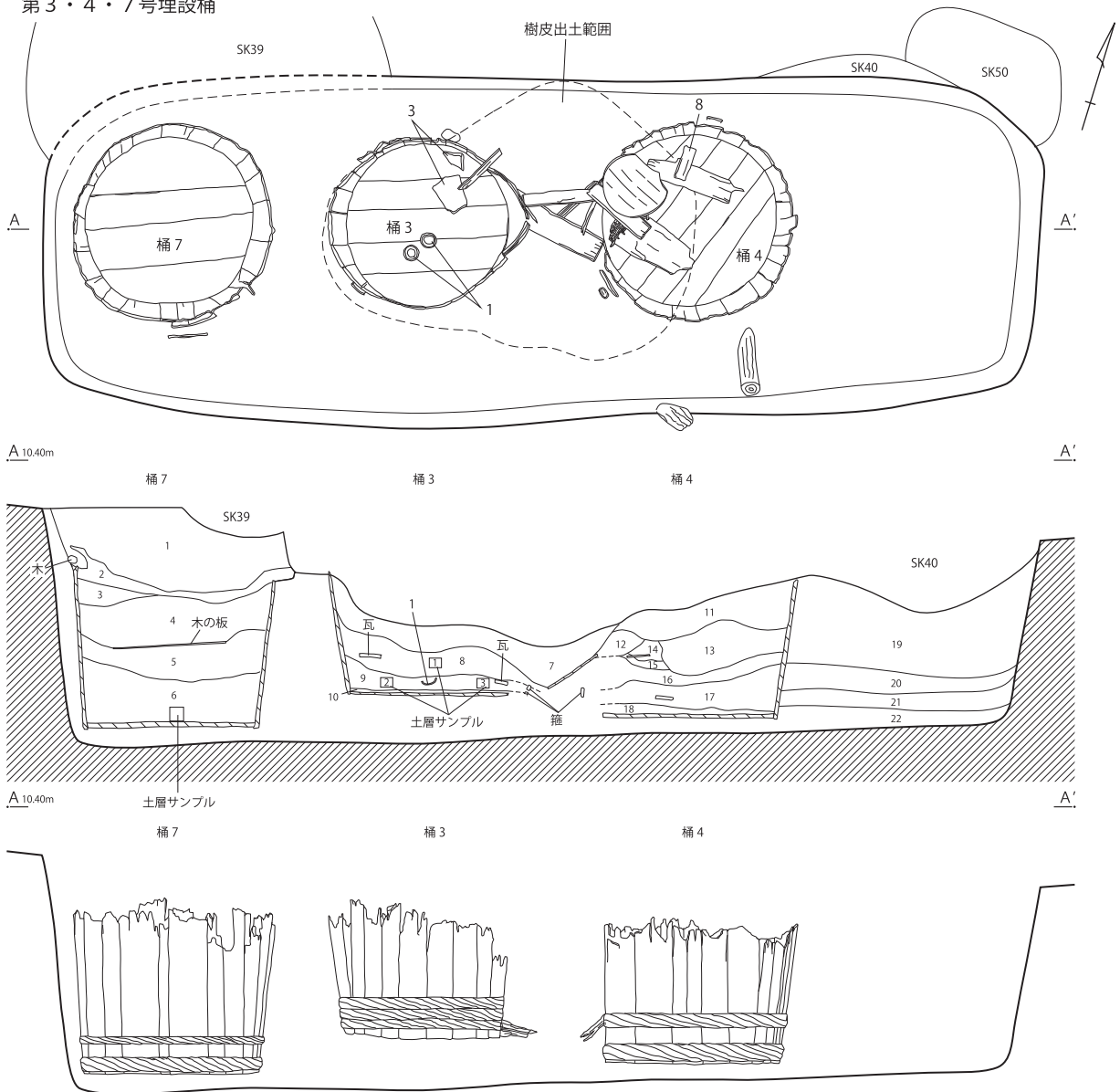
単位：m

番号	区画	グリッド	外径	高さ	内法		掘り方径	深さ	備考
					内径	深さ			
1	AC	F7-C6	0.40	0.14	0.39	—	0.46	0.14	SK319 より新
2	AE	F7-E6	0.35	0.16	0.30	—	0.44	0.16	SB3 ・ SK83 ・ P13 より新
3	AD	F7-D6	0.70	0.52	0.67	0.50	4.30 × 1.50	1.00	SK39 より古 SK50 と重複
4	AD	F7-D6	0.80	0.60	0.72	0.58	4.30 × 1.50	1.00	SK40 より古 SK50 と重複
5	AB	F7-D7	0.49	0.25	0.38	—	0.50	0.26	SD2 より新
6	AE	F7-E6	0.42	0.19	0.38	—	0.70	0.30	SD11 ・ 12 と重複
7	AD	F7-D6	0.88	0.70	0.70	0.68	4.30 × 1.50	1.00	SK39 より古 SK50 と重複
8	AF	F7-F6	0.88	0.51	0.73	—	0.78	0.47	
9	AF	F7-F6	0.50	0.21	0.45	—	0.46	0.15	
10	AF	F7-E7	0.52	0.13	0.34	—	0.60	0.33	SK221 より新
11	AD	F7-D7	0.50	0.21	0.42	0.15	0.64	(0.20)	
12	AF	F7-E7	0.42	0.38	0.40	—	0.42	(0.18)	SK249 より新
15	AD	F7-C8	0.44	0.44	0.42	—	0.86	0.56	
23	AD	F7-D6	0.62	0.80	0.43	0.54	0.86	0.80	SD2 より新 木樋 1 から連結



第40図 埋設桶(1)

第3・4・7号埋設桶

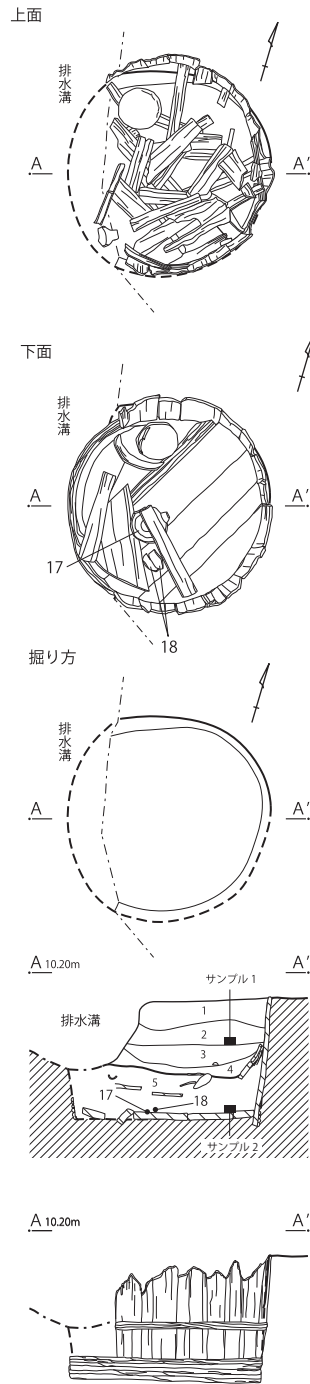


第3・4・7号埋桶

- 1 暗黄褐色砂
- 2 黒褐色土 木質含む
- 3 灰色土 粘土質 黄褐色土多量
- 4 灰色土 粘土質
- 5 灰色土 粘土質 木質木材極多量
- 6 暗灰色土 粘土質
- 7 黒褐色土 樹皮主体 (サンプル採集)
- 8 暗褐色土 炭化物粒子・陶磁器・瓦片含む
- 9 暗黒褐色土 粘土質 炭化粒子・陶磁器含む
- 10 黒色土 砂主体 しまり・粘性弱
- 11 暗褐色土 しまり弱 粘性弱 瓦片・木質含む
- 12 暗褐色土 粘土質 ブロック状に堆積
- 13 暗褐色土 粘土質 しまりあり
- 14 褐色土 しまり弱 粘性弱
- 15 暗褐色土 粗粒 砂粒含む しまり・粘性弱
- 16 暗褐色土 しまり・粘性弱 木片出土
- 17 暗褐色土 粘土質 しまりあり
- 18 黒褐色土 砂粒混入 しまり・粘性弱
- 19 灰黄褐色土 粘土質
- 20 灰色土 粘土質 19層と類似しているが 21層の砂混入
- 21 灰黒色砂 河砂のように粒子が細かい
- 22 桶3・4・7掘り方

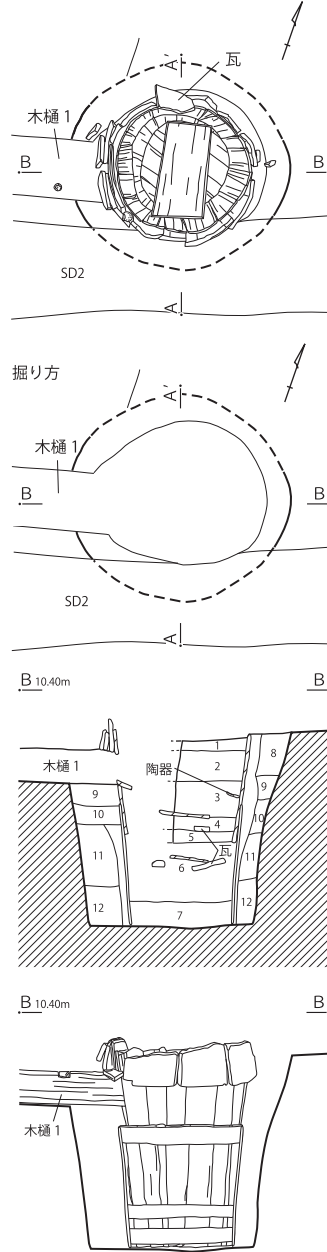
第41図 埋設桶(2)

第 8 号埋設桶



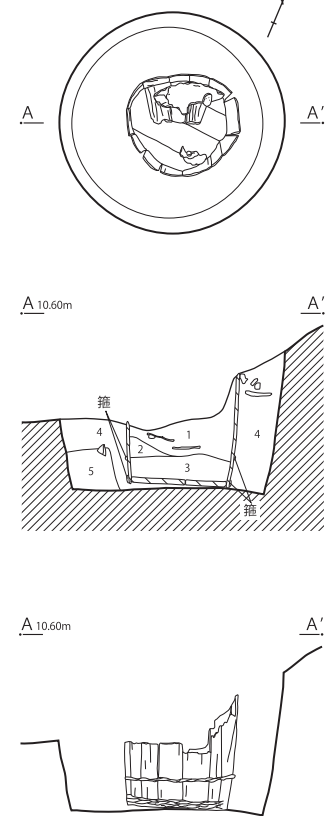
- 第 8 号埋設桶
- 1 灰黄色土 砂質 炭化粒子少量
 - 2 浅黄褐色土 シルト質 粘性強 しまり弱 炭化粒子微量
 - 3 褐色土 粘土質 粘性強 しまり弱 木質多量 木板出土
 - 4 褐色土 3層と同質 木皮多量 (下部より木板出土)
 - 5 褐色土 シルト質 粘性弱 しまり弱 木質・木材主体層
- ※根椋、排水溝の掘削による攪乱で掘り方は一部を除き不明

第 23 号埋設桶



- 第 23 号埋設桶
- 1 灰褐色土 砂質
 - 2 灰黄褐色土 砂質 炭化物少量
 - 3 灰色土 シルト質 粘性あり 磁器片微量出土
 - 4 黒灰色土 粘土質
 - 5 黒色土 粘土質 有機物含む
 - 6 黒灰褐色土 粘土質 木材出土 植物質・木片少量
 - 7 灰褐色土 粘土質 掘り方か
 - 8 褐色土 砂質 炭化物少量
 - 9 灰褐色土 粘土質 炭化物微量
 - 10 灰色土 粘土質 木質微量
 - 11 灰色土 粘土質
 - 12 白灰色土 粘土質

第 15 号埋設桶



- 第 15 号埋設桶
- 1 灰褐色土 粘土質 炭化物含む 最下部に木片含む
 - 2 灰褐色土 シルト質 粘性強
 - 3 灰黄色土 粘土質 炭化物少量
 - 4 暗褐色土 粘土質 炭化物含む
 - 5 灰黄色土 粘土質 黄色砂粒 (細粒) 含む



第 42 図 埋設桶 (3)

第 23 号埋設桶については、桶材の側板の実測図も第 46 図に示した。

第 1 号埋設桶 (第 40 図)

F 7-C 6 グリッドの区画 AC に位置する。第 319 号土壌より新しい。埋設桶の側板下部と箍が遺存しており、上部は削平されている。底板は見られず、当初から抜き取られていたと考えられる。ほぼ同径の掘り方である。

覆土は上層が砂質土で下層が粘質土である。

出土遺物はなく、遺構の時期は第 319 号土壌との重複関係から 19 世紀後葉以降と推定される。

第 2 号埋設桶 (第 40 図)

F 7-E 6 グリッドの区画 AE に位置する。第 3 号建物跡、第 83 号土壌、ピット 13 より新しい。側板下部のみが遺存しており、上部は削平されていると思われる。底板はみられなかった。第 1 号埋設桶と同様に当初から底板が抜き取られていたと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、図示し得るものはなかった。非掲載遺物に陶器の地方窯系製品が 1 点みられる。遺構の時期は重複関係から 19 世紀後葉以降と考えられる。

第 3・4・7 号埋設桶 (第 41・43 図)

F 7-D 6 グリッドの区画 AD に位置する。第 39・40 号土壌より古く、第 50 号土壌と重複する。

現地調査では第 79 号土壌を精査中に 3 基の桶が東西に一定間隔で並んで検出され、これらを第 3・4・7 号埋設桶とした。埋設桶にみられる円形の掘り方は確認できなかったが、第二面精査時に埋設桶 3・4・7 の底板を取り囲むように、長方形の掘り方が検出された。これにより、第 79 号土壌は、第 3・4・7 号埋設桶の掘り方と認識された。

埋設桶は便槽と推定される事例が多い。第 3・7 号埋設桶については、埋設桶の機能を明らかにするために、桶内の土層サンプリングを行い、寄生虫卵分析を実施した (第 V 章自然科学分析

6)。サンプリング箇所は挿図内で示した。

分析の結果、第 3 号埋設桶の桶内下層からは多くの寄生虫卵が確認された。また、第 7 号埋設桶内の下層からも多くの寄生虫卵が検出されており、その数は他の埋設桶を越える量である。

以上のことから、第 3・4・7 号埋設桶は一連の遺構であり、いずれも便槽であることが示唆された。

分析結果からは当時の食物事情も窺え、検出された寄生虫卵の種別から、主に淡水魚を摂取していた可能性が指摘される。また、第 7 号埋設桶からはメロン類種子と同定される大型植物遺体が確認されており、上述の便槽との関連性が窺える。

第 3 号埋設桶は、他の埋設桶より底板の径が小さく、底面が 0.15 c m 程度高い位置で検出されている。一方で、第 4・7 号埋設桶の底板の径はほぼ同じであり、最下面の標高も同様であることから、少なくとも二基の埋設桶が同時期に設置されたことが想定される。

第 3 号埋設桶は東側の側板が倒れ、側板の一部が第 4 号埋設桶に流れ込んでいる。また、網籠状製品や曲げ物と思われる底板も流れ込むような状態で検出されている。

埋設桶上部には、屋根材と考えられる樹皮が堆積していた。樹皮は第 3・4 号埋設桶にまたがって堆積している。廁の屋根として葺かれていたものが廃絶時にまとめて廃棄されたものと考えられる。

掘り方の覆土は粘質土で構成されるが、下層の河砂に類似する粒子の細かい砂層がみられる。

埋設桶内の覆土は、最上層に砂が厚く堆積しており、その下は粘質土が主体である。木質が多く含まれる。第 3 号埋設桶最下層には砂が薄く堆積する。

出土遺物は少量である。掘り方最下層の出土遺物は 18 世紀前半の陶磁器類で占められ、検出面の年代と大きく齟齬が生じている。

第二面精査時に下層で遺構が確認されたことから調査区北半部を20～30cm程度掘り下げ、第三面の検出を行った。その際、整地土中等から18世紀前半に遡る陶磁器類が多く出土している(第Ⅲ章遺跡の概要、第237表参照)。埋設桶掘り方の出土遺物は、これら整地土等からの混入と考えられる。以上のことから、陶磁器類の出土があるものの、第3・4・7号埋設桶の設置年代は不詳である。

桶内の出土遺物は18世紀後半～19世紀前半の遺物が主体であるが、第4号埋設桶内から酸化コバルト染付が施される瀬戸美濃系磁器の爛徳利が1点出土しており、最新期の遺物と考えられる。埋設桶の推定廃絶年代は19世紀後葉と考えられる。

第43図1～16に出土遺物を図示した。1は京都系陶器の水筒である。柚子を模しており、二枚型成形で上下に合わせて作られている。焼成前穿孔が2箇所あり、外面は黄色釉、へたの部分は緑釉を施す。

2は土製品の人形である。京都系で馬を模している。左右合わせの二枚型成形で中実である。外面には黄色釉が施される。

3は黒色素焼きの瓦で、棧瓦の可能性はある。4は鉄製品の頭巻釘である。5・6は掘り方出土の新寛永通寶である。

7は瀬戸美濃系陶器の火鉢である。灰釉で獅子頭と隆帯状の施文がみられる。内面には煤が付着し、口縁部には敲打により欠失している。

8は木製品で、箱の側板である。表面は黒漆と石目塗、裏面は赤漆が塗布される。9は鉄製品の小柄で、柄は欠失している。

10は瀬尾美濃系磁器の端反形碗である。埋設桶に隣接し、区画ABとACを隔てる第2号溝跡と出土のものと接合関係にある。

11は江戸在在系かわらけの小皿である。底部には左回転の回転糸切痕が残り、口縁部には煤

が付着する。灯明皿としての用途が示唆される。

12は軒棧瓦である。右巻きの三巴文で、銀化による光沢がみられる。

13は鉄製品の頭巻釘である。14・15は新寛永通寶で、14は銅製、15は鉄製である。

16は硝子製品で、青色透明の簪の玉である。

第5号埋設桶(第40図)

F7-D7グリッドの区画ABに位置する。第2号溝跡より新しい。

箍と側板下半部が遺存しており、底板はみられない。掘り方は確認できていない。

陶磁器の出土はなく、図示し得る遺物はなかった。瓦片200gと木製品2点の出土に留まる。

遺構の時期は第2号溝跡との重複関係から19世紀後葉以降の設置・廃絶である。

第6号埋設桶(第40図)

F7-E6グリッドの区画AEに位置する。現地調査では第111号土壌として調査されたが、側板が遺存するため、埋設桶として扱った。第11・12号溝跡と重複する。

覆土は上層が砂質土で、下層がシルト質土である。第3層に陶磁器などの遺物が含まれる。また、桶の外に広がる円形の掘り方が確認されている。

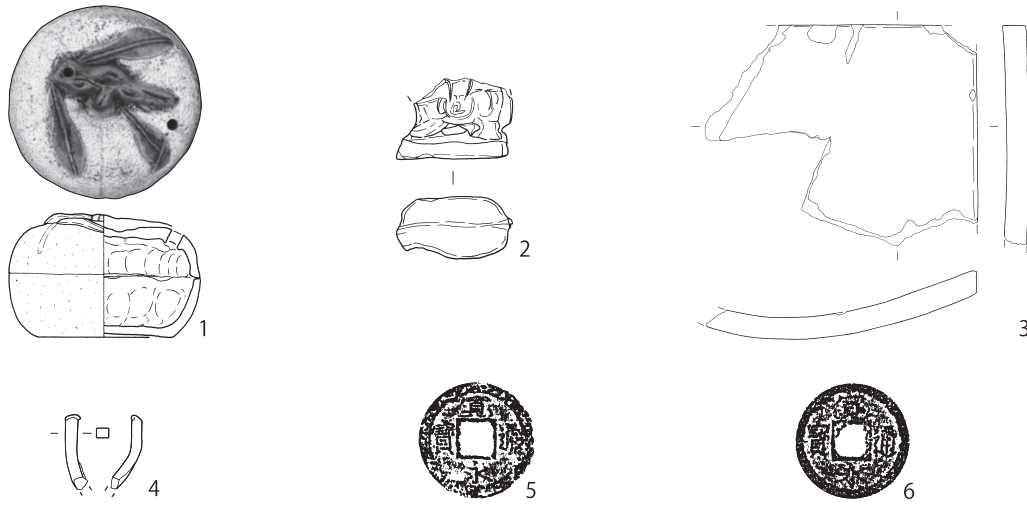
出土遺物は極めて少なく、小破片であるため図示し得るものがなかった。非掲載遺物に、波佐見系磁器の二重網目文くわんか手碗、瀬戸美濃系陶器の天目碗がみられ、埋設桶の時期を判断する資料はなかった。遺構の時期は18世紀後半以降である。

第8号埋設桶(第42・44図)

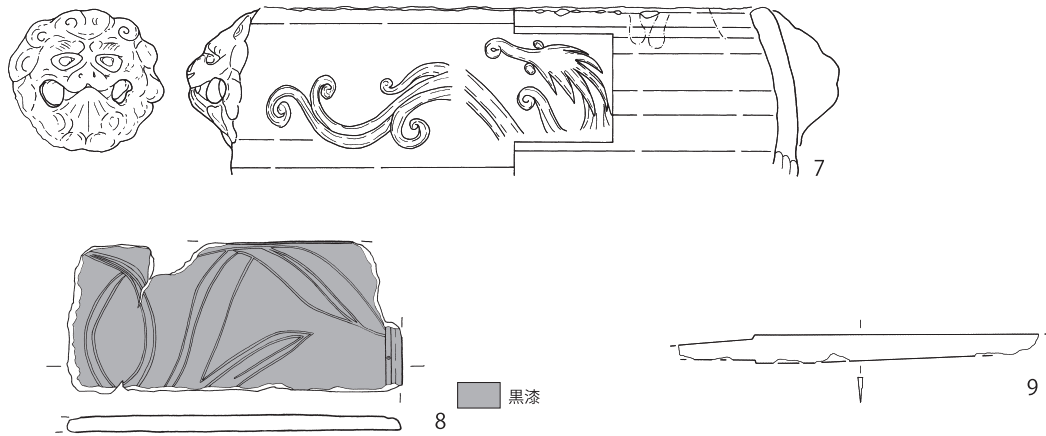
F7-F6グリッドの区画AFに位置する。

遺構の西端部は、調査時に掘削した排水溝にかかっており、削平されている。掘り方埋土は確認できていない。桶内北隅に杭が打ち込まれているが、区画施設とはやや離れており、杭の性格は不明である。

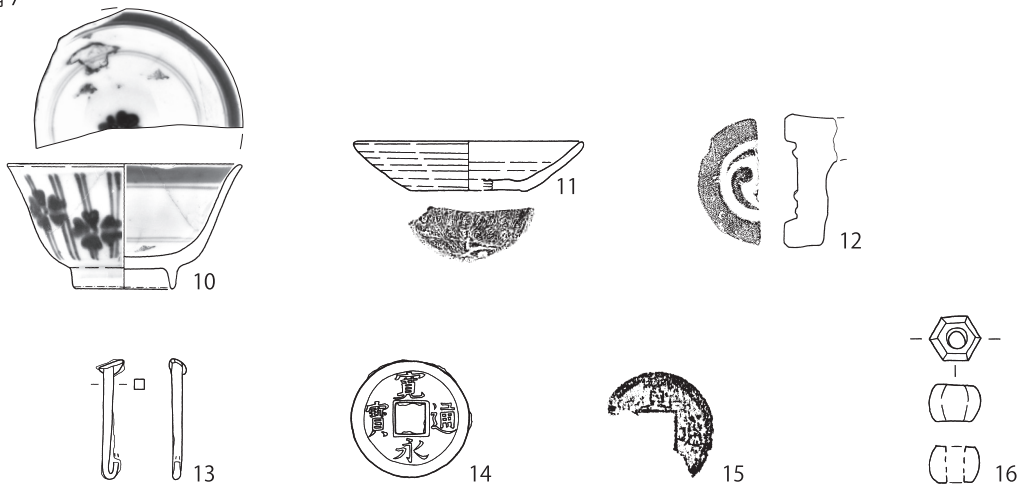
桶 3



桶 4



桶 7



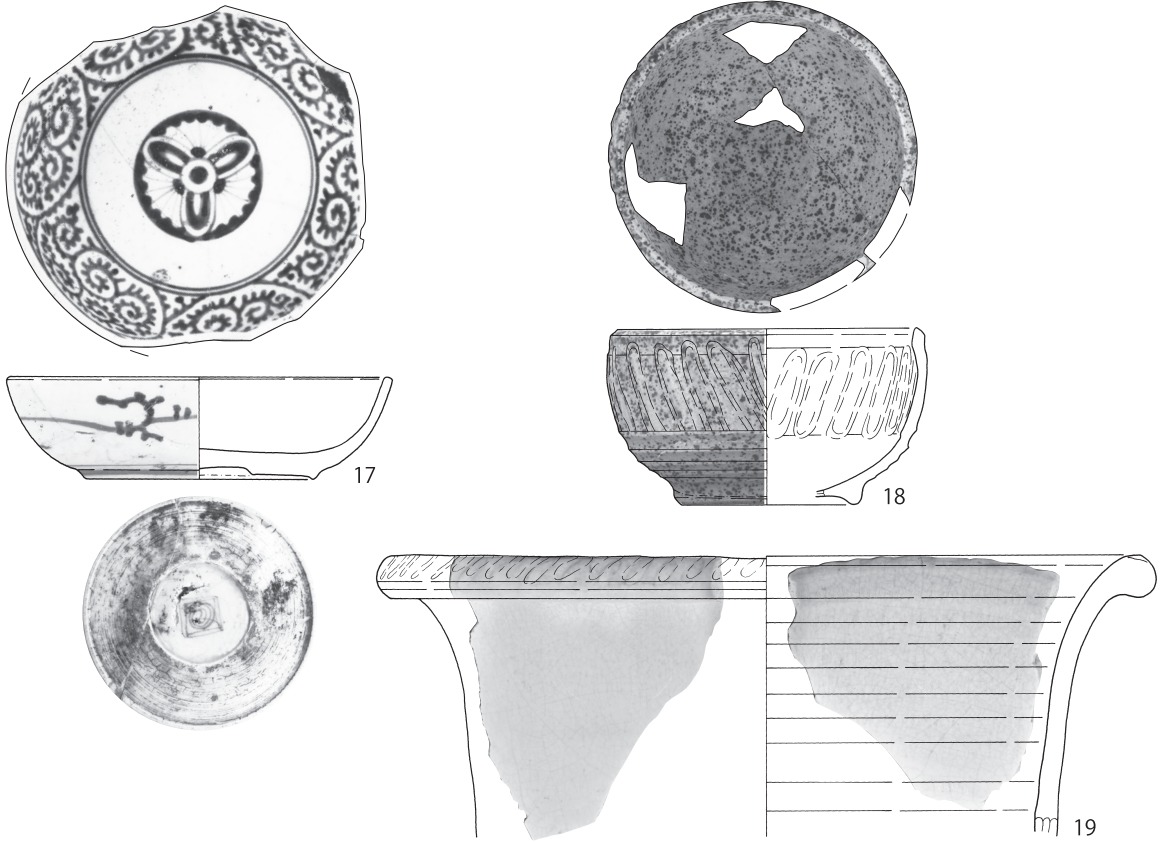
0 20cm
3 1.6

0 10cm
12 1.4
0 5cm
2 · 16 1.2

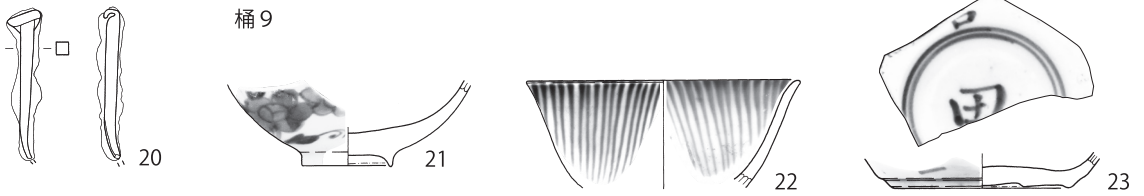
0 10cm
1 · 4 · 7 ~ 11 · 13 1.3
0 5cm
5 · 6 · 14 · 15 2.3

第 43 図 埋設桶出土遺物 (1)

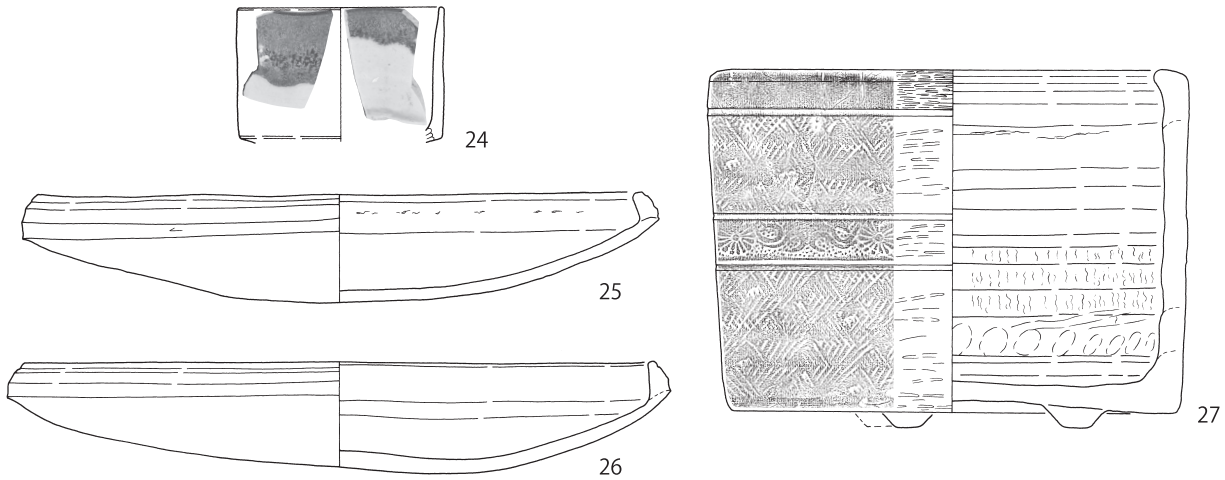
桶8



桶9



桶10

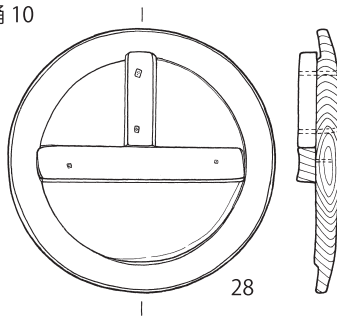


25 ~ 27 0 10cm 1:4

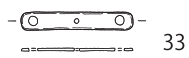
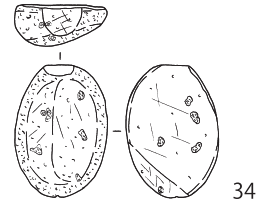
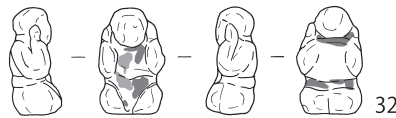
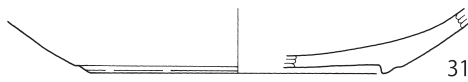
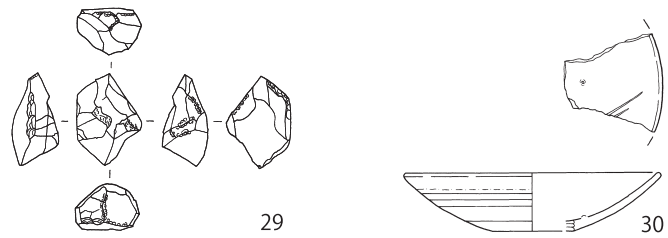
17 ~ 24 0 10cm 1:3

第44図 埋設桶出土遺物(2)

桶 10



桶 15

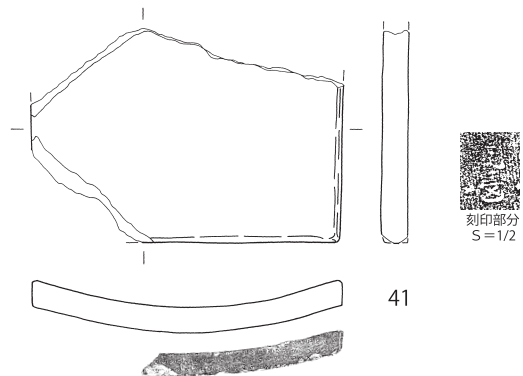
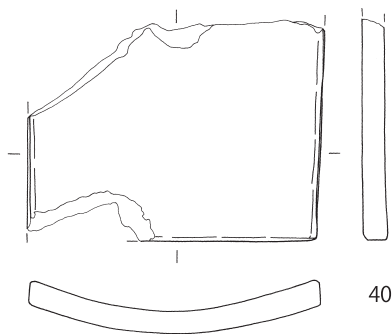
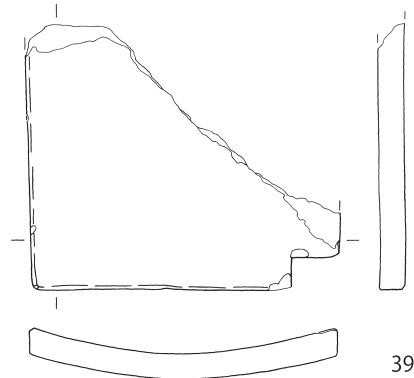
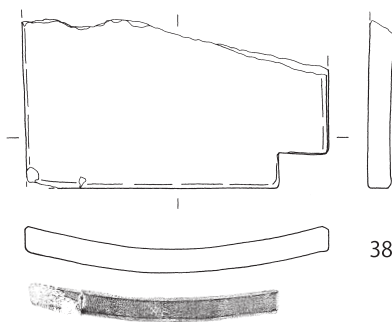


■ 緑 ■ 金

桶 23



刻印部分
S=1/2

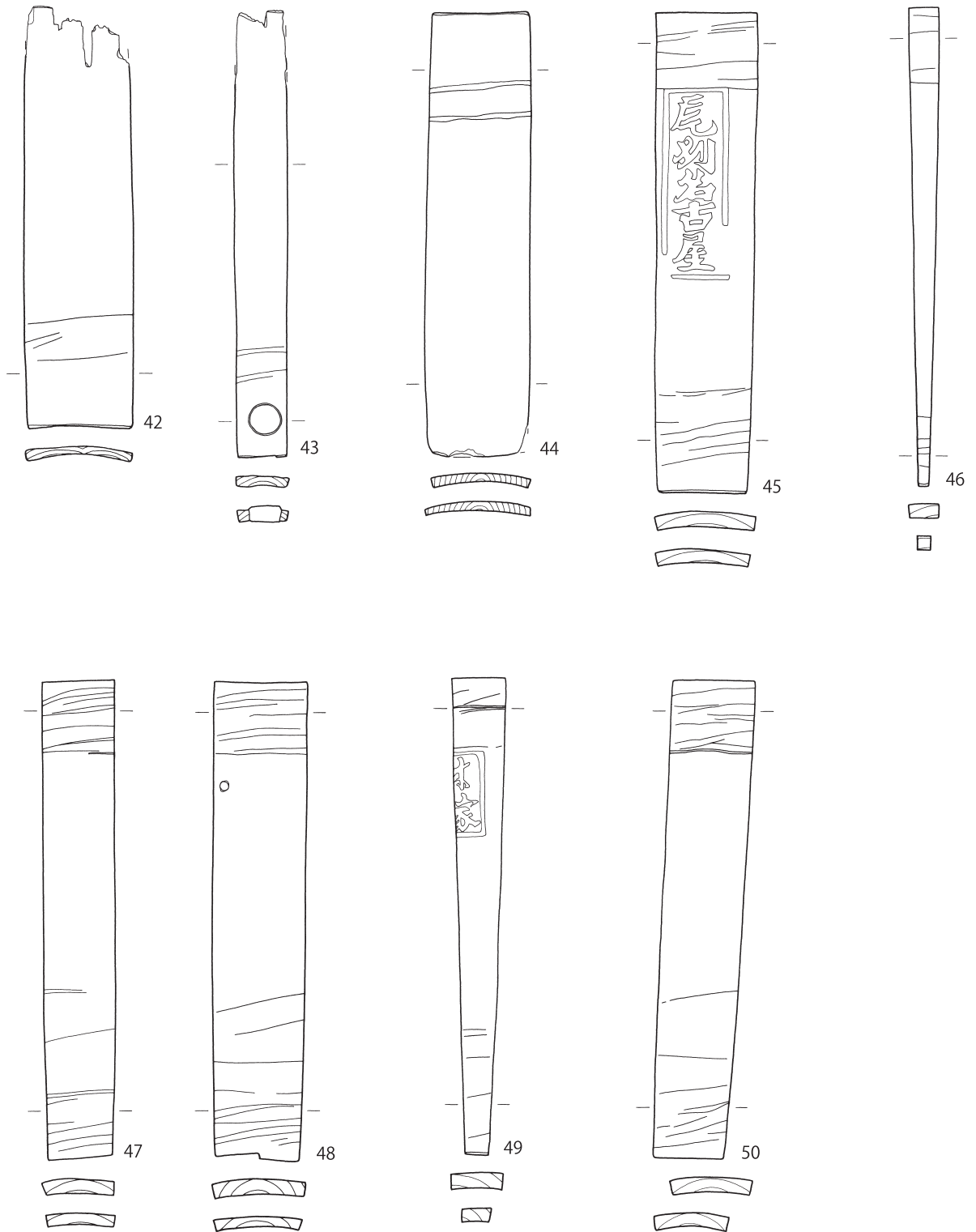


38~41 0 20cm 1:6
30・31・33・35 0 10cm 1:3

28・34・36・37 0 10cm 1:4
29・32 0 5cm 1:2

第 45 図 埋設桶出土遺物 (3)

桶 23



第 46 図 埋設桶出土遺物 (4)

第10表 埋設桶出土遺物観察表 (第43～46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	陶器	水滴	—	4.8	3.2	AIK	95	良好	灰白	桶3	京都系 柚子 上下合二枚型整形 外面施釉(黄・緑) No.1・2	64-11
2	土製品	人形	長さ[2.1] 幅3.1 厚さ1.6 重量5.9			AIK	—	良好	灰白	桶3	京都系 馬 左右合二枚型成形 中実 外面黄色釉	117-4
3	瓦	棧瓦カ	長さ[17.3] 幅[21.5] 厚さ1.9 高さ[5.4]			AIK	—	良好	灰白	桶3	銀化 燻す	
4	鉄製品	釘	長さ[2.9] 幅0.5 厚さ0.4 重さ1.5							桶3		
5	銅製品	銭貨	径23.8 厚さ1.5 重さ2.3							桶3	堀方 寛永通寶(新)	
6	銅製品	銭貨	径22.8 厚さ1.0 重さ2.4							桶3	堀方 寛永通寶(新)	
7	陶器	火鉢	—	[6.7]	—	IK	10	良好	灰白	桶4	瀬戸美濃系 外面灰釉 貼付施文 内面上位煤付着 口縁部敲打痕	
8	木製品	箱	長さ[6.1] 幅[13.2] 厚さ0.7							桶4	側板 表面黒漆・石目塗 裏面赤漆 柀目 No.5	
9	鉄製品	小柄	長さ[14.2] 刃長[11.2] 刃幅1.0 背幅0.2 重さ8.7							桶4	柄欠失	
10	磁器	碗	(9.1)	4.8	3.9	—	40	良好	白	桶7	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 SD2と接合	
11	かわらけ	小皿	(8.9)	1.9	(4.5)	ACHK	30	良好	にぶい黄橙	桶7	底部糸切痕(左) 口縁部一部煤付着	
12	瓦	軒棧瓦	長さ[2.3] 幅[3.7] 厚さ2.1 径7.0			AIK	—	良好	灰白	桶7	右巻三巴文 銀化(青みがかる)	
13	鉄製品	釘	長さ4.8 幅0.4 厚さ0.4 重さ3.9							桶7		
14	銅製品	銭貨	径23.5 厚さ1.4 重さ2.7							桶7	寛永通寶(新)	
15	鉄製品	銭貨	径23.7 厚さ1.6 重さ[1.7]							桶7	寛永通寶(新) 半欠	
16	硝子製品	簪の玉	長さ1.2 幅1.4 厚さ1.0 重さ2.7							桶7	六角形 青色透明 孔径0.5 cm	142-3
17	磁器	皿	(14.9)	4.0	8.9	—	65	良好	白	桶8	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台 被熱(弱) 煤付着 No.1・2	
18	陶器	鉢	11.4	6.9	6.9	K	75	良好	灰白	桶8	大堀相馬系 胎土砂鉄含む 体部鏽 内外面施釉 No.2	64-12
19	陶器	鉢カ	(29.4)	[11.1]	—	HIK	15	普通	灰白	桶8	瀬戸美濃系 内外面白釉・青緑釉流し掛け 口縁部鏽状文	
20	鉄製品	釘	長さ[5.9] 幅0.5 厚さ0.5 重さ5.6							桶8		
21	磁器	碗	—	[3.3]	3.4	K	60	良好	白	桶9	肥前系 内外面施釉 外面染付	
22	磁器	碗	(10.6)	[4.2]	—	—	20	良好	白	桶9	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
23	磁器	皿	—	[1.4]	(6.8)	—	40	良好	白	桶9	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台 内面染付文字「田」	65-1
24	陶器	碗	(8.0)	[5.3]	—	IK	10	良好	灰白	桶10	瀬戸美濃系 内外面上位鉄釉・下位施釉	
25	瓦質土器	焙烙	31.9	5.8	33.7	CFHIK	80	普通	淡黄	桶10	底部シワ状痕(部分的にケズリ状痕) 体部下位ケズリ やや酸化焙焼成 内面全面煤付着 SK221と接合	65-2
26	瓦質土器	焙烙	33.2	5.4	35.0	CFHIK	75	普通	灰白	桶10	底部シワ状痕 体部下位ケズリ やや酸化焙焼成 内面全面煤付着 SK221と接合	65-2
27	瓦質土器	火鉢	(22.3)	18.8	23.2	AHIK	60	良好	褐灰	桶10	砂目底・スノコ状圧痕 胎土粉質 外面ミガキ・スタンプ施文 燻す 内面上位煤付着・中位火箸傷 No.1	
28	木製品	容器カ	厚さ2.2 口径/径14.0							桶10	側板接着痕 全面黒漆 鉄釘残存 板目	
29	石製品	火打石	長さ2.4 幅1.7 厚さ1.2 重さ4.4							桶10	玉髓 使用痕あり	
30	陶器	灯明皿	(10.0)	2.3	(3.2)	—	15	良好	灰白	桶15	京都信楽系 内外面施釉 内面櫛目・ピン痕1 遺存	
31	陶器	鍋	—	[2.6]	(11.6)	HIK	5	普通	浅黄橙	桶15	内面施釉 被熱(黒化)	
32	磁器	人形	長さ2.8 幅1.7 厚さ1.4 重量8.0			—	—	良好	白	桶15	瀬戸美濃系 前後合二枚型成形 中実 外面施釉・上絵付(緑・黄・金)	
33	銅製品	煙草入れ金具	縦0.7 横4.4 厚さ0.1 重さ1.9							桶15	袋の提げ受け金具	
34	石製品	磨石	長さ7.0 幅4.9 厚さ2.2 重さ39.6							桶15	角閃石安山岩 多孔質 自然面遺存 使用面3	140-3
35	磁器	碗	(7.2)	[3.9]	—	—	30	良好	白	桶23	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
36	瓦	軒棧瓦	長さ[2.8] 幅[13.0] 厚さ2.7 高さ[5.0]			HIK	—	普通	灰白	桶23	弱く銀化 燻す	
37	瓦	軒棧瓦	長さ[4.0] 幅[7.0] 厚さ2.6 高さ[4.9]			AIK	—	良好	灰白	桶23	江戸式 弱く銀化 燻す	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
38	瓦	棧瓦	長さ [13.5] 幅 [24.5] 厚さ 1.9 高さ [3.7]			AHIK	—	良好	灰白	桶 23	燻す 刻印あり	123-9 124-13
39	瓦	棧瓦	長さ [21.2] 幅 25.1 厚さ 2.1 高さ 4.0			ACHIK	—	良好	灰	桶 23	燻す	123-10
40	瓦	平瓦	長さ [17.6] 幅 23.8 厚さ 2.0 高さ 4.2			AHIK	—	良好	灰白	桶 23	銀化 燻す	123-11
41	瓦	平瓦	長さ [17.0] 幅 [21.0] 厚さ 2.1 高さ 4.1			ACHIK	—	良好	灰	桶 23	燻す 刻印あり	123-12
42	木製品	桶	[41.8]	10.7	1.0	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 43・44 と同一個体 上段①No. 1	152-11
43	木製品	桶	[44.3]	5.2	1.5	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 栓径 3.2 cm 42・44 と同一個体 上段②No. 2	152-11
44	木製品	桶	43.0	10.4	1.0	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 42・43 と同一個体 上段③No. 3	152-11
45	木製品	桶	47.4	10.0	1.9	—	—	—	板目	桶 23	側板 焼印 46～50 と同一個体 下段 1 No. 1	
46	木製品	桶	47.3	3.0	1.4	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 45・47～50 と同一個体 下段 2 No. 2	
47	木製品	桶	47.6	9.1	1.4	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 45・46・48～50 と同一個体 下段 No. 4	
48	木製品	桶	47.4	7.1	1.4	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 45～47・49・50 と同一個体 下段 No. 3	
49	木製品	桶	47.3	5.3	1.5	—	—	—	板目	桶 23	側板 焼印「本家」墨書 45～48・50 と同一個体 下段 No. 6	
50	木製品	桶	47.3	8.0	1.5	—	—	—	板目	桶 23	側板 墨書 45～49 と同一個体 下段 No. 5	

覆土中層の第3層には木質と木板、第4層最下部には木皮と木板が多量に出土し、最下層の第5層では木質と木材を主体とする堆積土となっている。他の埋設桶とは異なる出土状況を示している。

第3・4・7号埋設桶と同様に、便槽である可能性を考慮して、寄生虫卵分析を行った（第V章自然科学分析6）。

分析の結果、サンプル内の寄生虫卵数は極めて少なく、便槽の可能性を示唆する結果とはならなかった。ただし、第3号埋設桶の分析結果のように同一層序内で異なる産状を示す場合があるということについて留意しておきたい。

出土遺物は一定量出土しており、第44図18の大堀相馬系陶器の鉢や非掲載遺物にみられる瀬戸美濃系磁器の卵殻手酒杯の小片が最新期の遺物にあたる。推定廃絶年代は19世紀中葉である。

第44図17～20に出土遺物を図示した。17は肥前系磁器の五寸皿である。高台の低い蛇ノ目凹形高台で、弱く被熱し、煤が付着する。

18は大堀相馬系陶器の鉢である。緻密で硬質な胎土であり、胎土内に黒色粒子が多量に含ま

れる。黒色粒子は焼成により、表面に無数の斑状模様のように浮かびあがる。体部に鎬状の施文が施される。

19は瀬戸美濃系陶器の鉢と思われるもので、内外面に白釉を施釉し、その上から青緑釉を流し掛けている。口縁部には連続する鎬状の施文が施される。

20は鉄製品の頭巻釘である。

第9号埋設桶（第40・44図）

F7-F6グリッドの区画AFに位置する。底板と側板の下半部、箍が遺存している。

覆土は上層少量の炭化物を含む砂質土、下層が粘質土である。掘り方の埋土は確認できていない。

出土遺物は少なく、磁器と瓦が出土している。第44図22の瀬戸美濃系磁器の端反形碗が最新期の陶磁器である。推定廃絶年代は19世紀前葉である。

第44図21～23に出土遺物を図示した。

21は肥前系磁器の丸碗、22は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。

23は肥前系磁器の手塩皿で、高台の低い蛇ノ目凹形高台である。内面に染付で「田」の文

字があり第34図2と同様に「田/吉田屋」と書かれている可能性が高い。『絵図』にみえる「旅籠屋/太左衛門」の区画はAFであり、第9号埋設桶が位置する区画とは隣接する。

第10号埋設桶 (第40・44・45図)

F7-E7グリッドの区画AFに位置する。第221号土壌より新しい。

側板と箍のみ遺存しており、底板はみられない。上層に栓付きの木板が残る。掘り方埋土は確認されており、おおむね円形を呈する。最下層から出土している陶磁器内には灰が含まれる。下層には側板が残っていないため、出土遺物はSK221からの混入物も含まれる可能性があることについて留意しておきたい。

出土遺物は近世段階に比定されるもので占められるが、詳細な年代は判断し難い。第221号土壌との重複関係から、推定廃絶期は19世紀中葉以降と考えられる。

第44図24～27、第45図28・29に出土遺物を図示した。24は瀬戸美濃系陶器の筒形碗である。内外面上位に鉄釉、下位に灰釉を掛け分けている。25・26は瓦質土器の丸底焙烙である。江戸遺跡や利根川周辺の遺跡も然る事ながら、栗橋宿跡でも稀な製品である。いずれも第221号土壌出土遺物と接合し、内面全面に煤が付着する。器形に歪みが生じており、土師質土器の丸底焙烙とは作りが大きく異なる。

第11号埋設桶 (第40図)

F7-D7グリッドの区画ADに位置する。側板の下半部と箍、底板が遺存する。埋設桶より一回り大きい円形の掘り方が確認されている。桶内の覆土には炭化物が含まれる。

出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかった。瓦片が160g出土している。遺構の時期は不詳である。

第12号埋設桶 (第40図)

F7-E7グリッドの区画AFに位置する。第

249号土壌より新しい。側板のみが遺存している状態であった。覆土の状況は確認し得なかった。また、掘り方埋土も確認できず、掘り方は埋設桶と同径である。遺物の出土はなかったが、第249号土壌との重複関係から推定設置・廃絶期は19世紀末以降である。

第15号埋設桶 (第42・45図)

F7-C8グリッドの区画ADに位置する。側板の下半部と箍、底板が遺存する。掘り方は桶より一回り以上大きく、粘土質の埋土がみられる。第4層は炭化物を含み、第5層は黄色砂を含むブロック状の堆積である。桶内の覆土は炭化物を含む粘質土を主体とする。

出土遺物は少なく、第45図31に図示した地方窯系と考えられる鍋が最新期と考えられる陶磁器である。非掲載遺物の磁器には酸化コバルト染付等の近代の染付技法は認められず、湯呑形碗や卵殻手坏が磁器の最新である。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第45図30～34に出土遺物を図示した。30は京都信楽系陶器の灯明皿である。内面に窯道具痕と櫛目がみられる。31は地方窯系の鍋である。内面に飴釉を施釉し、被熱により黒化している。

32は瀬戸美濃系磁器の人形である。前後合わせの中実二枚型成形である。透明釉を施釉し、上絵付で彩色する。

33は銅製品の煙草入れ金具である。34は多孔質の角閃石安山岩転石製磨石である。平坦な使用面が3面残り、自然面を直接使用した痕跡が認められる。

第23号埋設桶 (第42・45・46図)

F7-D6グリッドの区画ADに位置する。第2号溝跡より新しい。第1号木樋と接続する一連の遺構である。木樋については第53図を参照されたい。

第1号木樋は調査区外へと延び、埋設桶の東側では検出されず、木樋が接続していた痕跡も

認められなかった。このことから、木樋を伝った排水を溜める機能が推定される。

桶は入れ子状の二重構造となっており、底板は遺存している。上段桶の周囲には平・棧瓦が桶の側板を支えるように縦に差し込まれており、木樋と接続部上にも設置されている。

桶内部の中央に長方形の板状木材が落ち込んでいる。上部を覆う蓋の一部である可能性がある。

下段桶は遺存状態が極めて良好である。第46図に桶上段・下段の特徴的な部材を図示した。

既報告である栗橋宿跡第6地点『栗橋宿跡Ⅲ』では、建物跡の中から外に向かって埋設桶間を短い距離で接続する第212・214号埋設桶と竹樋が検出されている。2個体の桶が入れ子状となっており、長方形の板状木材を組み合わせて蓋としている等、第23号埋設桶と共通点がみられる。報告書では重複する建物跡に伴う排水施設であると指摘している（埼玉文 2019c）。

以上のことから、第23号埋設桶と木樋は表空間（日光道中沿い）に建っていたと推定される建物跡

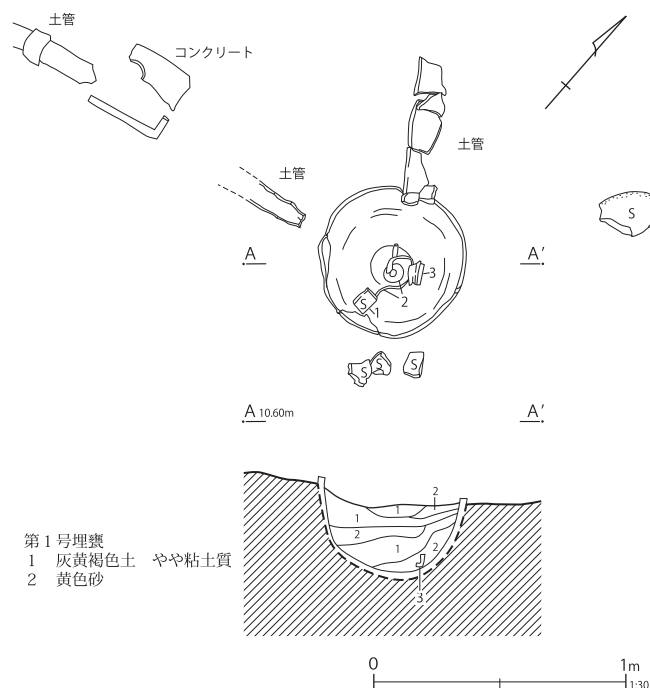
に伴う排水施設と考えられる。

桶内部第3層からは、最新期の陶磁器と考えられる瀬戸美濃系磁器の湯呑形碗（第45図35）が出土している。第2号溝跡との重複関係及び、木樋と第5号焼土遺構との重複関係から埋設桶及び木樋の推定設置・廃絶期は、19世紀後葉である。

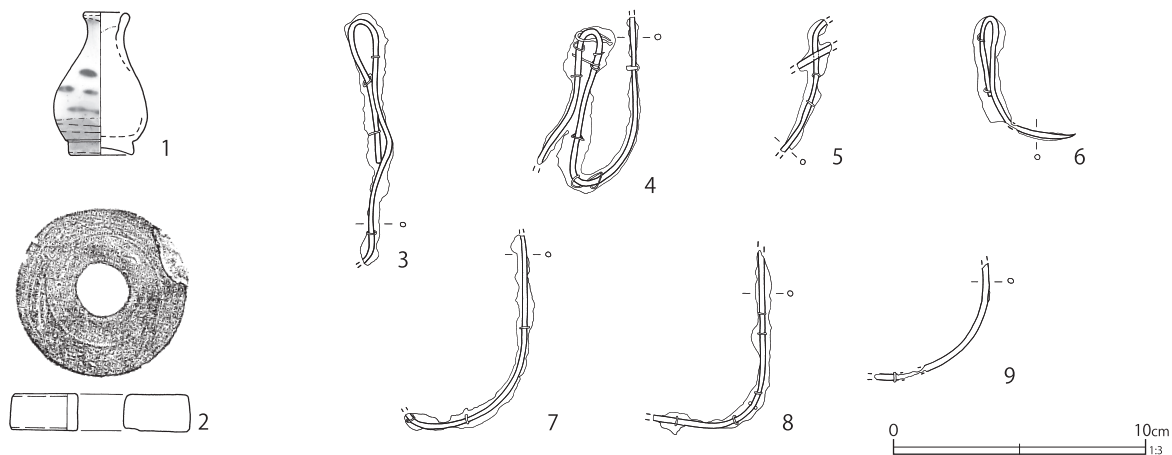
第45図35～41、第46図に出土遺物を図示した。第45図35は瀬戸美濃系磁器の湯呑形小碗で、最新期の陶磁器である。

36・37は黒色素焼きの軒棧瓦で、36は中心弁七枚に渦巻唐草文、37は江戸式の唐草文様である。いずれも弱く銀化し、光沢が認められる。38・39は棧瓦で、隅切りが遺存する。38は端面に41と同様の刻印がみられるが、判読できない。40・41は平瓦で、41には38と同様の刻印がみられる。刻印資料は瓦の生産地と消費地の関係性を示すものとして重要である。生産地の同定が課題となろう。

第46図42～44は埋設桶上段の側板、45～50は下段の側板である。42～44、45～50はそ



第47図 第1号埋設甕



第48図 第1号埋設甕出土遺物

第11表 埋設甕出土遺物観察表 (第48図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	徳利	1.6	5.5	2.4	—	95	普通	白	瀬戸美濃系 外面施釉・染付 肥前系 側面摩耗 同一製品か 丸棒状の金具に、細い針金が間隔をあけて巻付く No. 2	65-3
2	磁器	戸車	6.9	1.4	—	—	95	良好	灰白		
3	鉄製品	不明	長さ [9.6] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 8.6								
4	鉄製品	不明	長さ [6.7] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 10.5								
5	鉄製品	不明	長さ [5.2] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 3.3								
6	鉄製品	不明	長さ [4.9] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 4.7								
7	鉄製品	不明	長さ [7.6] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 5.0								
8	鉄製品	不明	長さ [7.0] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 4.5								
9	鉄製品	不明	長さ [4.9] 幅 0.2 厚さ 0.2 重さ 1.6								

れぞれ同一個体で一枚の側板である。「全」と推定される墨書がみられる。45～50にも同様の墨書が認められるが、山形の右上に「上」・「尾州名古屋」焼印がみられる。また、「本家」の焼印がみえる。

墨書はヤマサ醤油の商標に類似するが、関連性は窺えなかった。焼印から名古屋の醸造者が生産したものと推定される。

(4) 埋設甕 (第47・48図)

F7-B6グリッドに位置し、区画AAに位置する。第1号杭列と重複する。瓦質土器大甕の下半部が単独で検出されたもので、残存する甕の胴部最大径は0.6m、高さは0.42m、内径0.52m、深さ0.3mである。

埋設甕は表面が酸化焰焼成状の赤色を呈する胎土中心部灰色の瓦質土器で、近世の常滑系大甕に類似する口縁部を持つ。胎土の特徴から栗橋宿にほど近い北関東地方で生産された可能性がある。

故意の充填か判断し難いが、内部には粘質土と黄色の砂が互層となって堆積していた。掘り方は確認できなかった。

遺構周辺には、埋設甕に続く土管とコンクリートがみられ、近代まで機能を果たしていたと考えられる。土管の走行方位はやや南西方向から埋設甕を中継して、北西方向へクランクしている。なお、掘り方を確認することができていないため、埋設時期は不詳であるが、近世まで遡る可能性も考え得る。

出土遺物は極めて少なく、内部にあった埋設甕の破片3点(929.8g)を取り上げ、埋設甕本体は取り上げていない。第48図には出土遺物を図示した。

1は瀬戸美濃系磁器の小型御神酒徳利である。2は肥前系磁器の戸車である。3～9は同一個体の可能性がある湾曲した棒状の鉄製品で、丸棒状の金具に細い針金が巻き付けてある。埋設甕に係

わる製品の可能性がある。

1の御神酒徳利が最新期の陶磁器と考えられ、推定廃絶年代は19世紀後葉以降である。

(5) 杭列 (第49～52図)

掘り込みがみられず、無数の杭が連続して打設され、直線上に並ぶ区画施設と考えられる遺構を杭列とした。本来は第32号溝跡(第56図)のように溝状の掘り込みを持ち、壁面に側板を設置し、杭で支えた構造であると想定される。

既報告である栗橋宿跡第6地点(『栗橋宿跡Ⅲ』)ではこのような区画施設が比較的良好な状態で遺存している(埤埋文2019c)。

後述の溝跡と共に、日光道中に直交するように短冊状地割を構成している。多くは無数の杭が乱立していることから、複数回にわたる改修が行われていると考えられる。

なお、現地調査では杭や木材等の構造物が遺存している範囲を面的に掘削しているため、出土遺物については他遺構や整地層からの混在が激しい。遺構に伴うものか判断することが困難であることから、遺構外出土遺物として扱った。

また、遺構名については現地調査で多様な名称が用いられている。本報告では混乱を避けるために区画施設については「杭列」の名称で統一し、その中で溝状の掘り込みを持つものは「溝跡」として扱った。

第2号杭列は、溝状の掘り込みを伴うため、第32号溝跡に振り替えた。また、第4号杭列は第2号溝跡と一連の遺構と考えられるため、第2号溝跡として扱った。

各遺構図には検出された区画施設と建物跡の位置関係、第12表に位置・規模等の基礎的な情報

を示した。

第1号杭列 (第49図)

F7-B5・6グリッドに位置し、区画AA・ABを隔てる。第1号埋設甕、第7・8・23・24号土壙と重複する。西は調査区外へ延びるが、東は調査区半ば程で杭や木材などの検出が途切れている。検出長14.6m、走行はおよそN-72°-Eを指す。

溝状の掘り込みは削平されているため確認されなかった。杭列の左側に、長さおよそ2mの木材が接続して並べられ、それらを支えるように径0.12m程の木杭が0.5～0.6m程の間隔で打ち込まれている。

これを中心とした帯状の範囲からは、長さ0.36mを測る大型礫等が出土している。同様の構造を持つ区画施設が第7地点第8・9号溝跡にみられる(埤埋文2019d)。

「第8地点区割図案」(第18図)では、『営業便覧』が成立した明治三十五年(1903)には既に区画AA、AB間の区画施設はなく、両敷地を合わせて「米穀肥料店/吉岡善六」の敷地と推定した。また、第1号杭列と重複している土壙は、すべて酸化コバルト染付磁器を最新とする19世紀後葉頃の廃絶である。したがって、それ以前に杭列は廃絶していると推定される。

第3号杭列 (第50図)

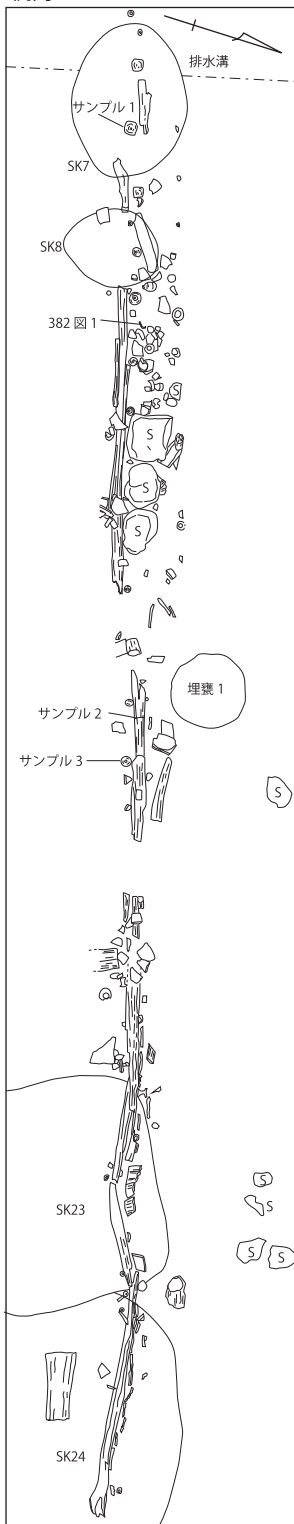
F7-C6～8、同D6グリッドに位置し、区画AC・ADを隔てる。両端は調査区外へ延びている。検出長24.5m、走行はおよそN-72°-Eを指す。第288号土壙と重複する。北側に平行する第1号溝跡とは敷地の拡大・縮小に伴った新旧関係が推定される。

第12表 第一面杭列一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	方位	備考
1	AA/AB	F7-B5・6	(14.60)	N-72°-E	埋設1 SK7・SK8・SK23・SK24と重複
3	AC/AD	F7-C6～8・D6	(24.50)	N-72°-E	SK288と重複
5	AE/AF	F7-E6～8	(23.50)	N-72°-E	SK221・SK329より新
6	AF/AG	F7-F7～9・G7	(24.30)	N-72°-E	SB2より新

杭列 1



第 49 図 第 1 号杭列

杭列3



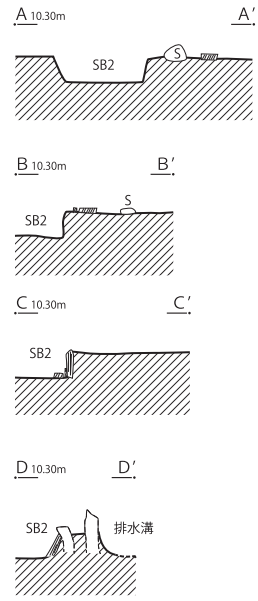
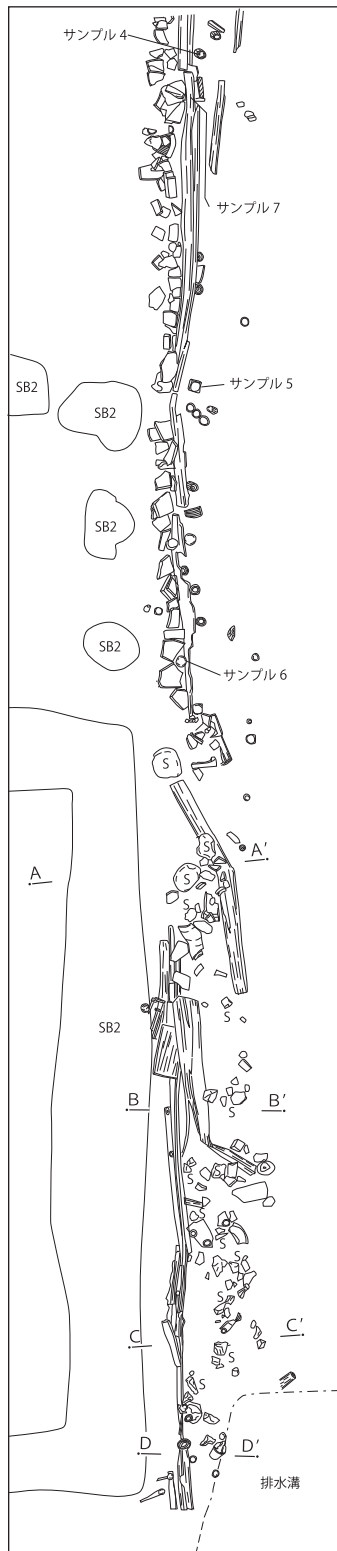
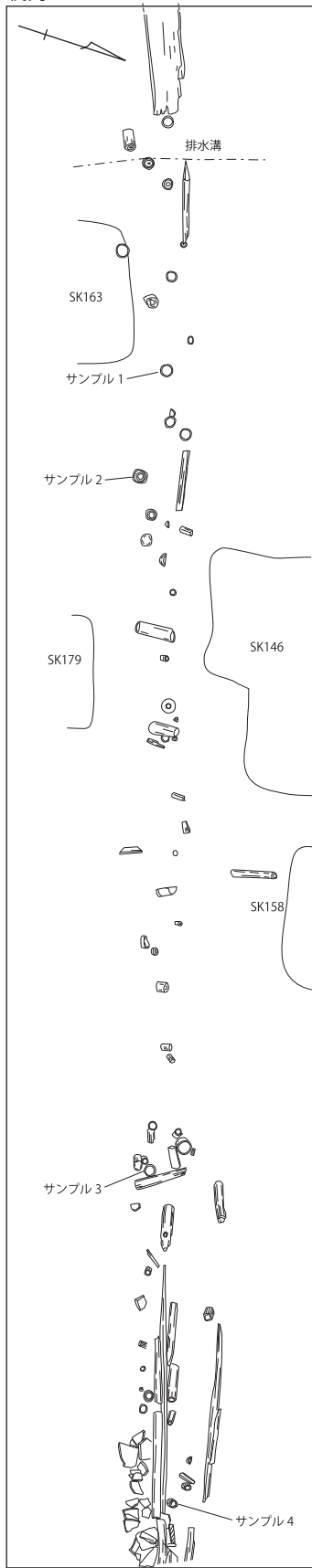
第50図 第3号杭列

杭列 5



第 51 図 第 5 号杭列

杭列6



第52図 第6号杭列

土層断面で溝状掘り込みの一つを捉えることができていますが、平面における遺構検出が困難であった。そのため、杭等が検出されている範囲を面的に掘削している。土層断面の範囲外から杭が多量に検出されていることから、少なくとも1度以上の改修が行われている。

杭列のおおよそ中心軸に径0.12 m程の杭が0.5～0.75 mの間隔で直線的に打設されている。杭の径が大きく、間隔が一定であることから側版を支える杭ではなく、木樋等の構築物を据えるために打ち込まれた杭と推定される。また、径0.06～0.09 mの杭は、側版を支えるためのものと推定されるが、側版は遺存していなかった。

杭列の西部には瓦溜まりが検出されている。第6号杭列のように、構築材の一つとして瓦を利用する事例がある。この瓦溜まりは、そのような構築材として利用され、廃絶時にまとめて廃棄されたのであろう。

重複する第288号土層は19世紀中葉の廃絶で、平行に隣接する第1号溝跡は19世紀後葉の廃絶である。また、出土遺物は遺構外出土遺物として扱っているが、土層断面で掘り込みが確認されていることから、ある程度遺構に伴う遺物が存在していると考えられる。出土した最新期の陶磁器は銅版転写染付磁器端反形坏である。

したがって、第3号杭列は第1号溝跡より新しく、19世紀後葉以降、19世紀末～20世紀初頭以前に設置・廃絶していると推定される。

第5号杭列（第51図）

F7-E6～8グリッドに位置し、区画AE・AFを隔てる。両端は調査区外へ延びている。検出長23.5 m、走行はおおよそN-72°-Eを指す。第221・329号土層より新しい。

溝状の掘り込みは確認されなかったが、区画施設を構成する構築材の一部と考えられる木材や大型礫が検出されている。

径0.12～0.15 mの杭が直線的に2列打設さ

れ、南側は0.5 m程の間隔の連続的な打設が確認できる。杭列の幅は0.5～0.7 mで、両列の外側は板材、一部は大型の礫で区切られ、全体は木樋状となっている。杭列中央から西側にかけて、やや南にずれた位置に杭列がみられるが、張り出し状の施設か、独立した遺構か判然としない。

杭列中軸から北側には、幅約0.3 m程度で、杭で支えた木材が多数検出されている。

また、杭列中軸から南側には、中央から東側にかけて、杭の上に0.33 m前後の板状木材が設置される。その上には、最大で長軸0.45 mの大型礫と長軸0.09～0.24 mの中・小型礫が敷かれている。第7地点第9号溝跡（埧埋文2019d）と同様の構造を呈している。

大型礫を用いた構築物は、杭列の南寄り、杭で支えられた2列の側板が、杭列の北寄りで検出されている。このことから、これらの構築物は区画施設の改修による時期差を示すか、もしくは異なる性格を持った遺構であると推定される。

遺構の時期は出土遺物が遺構外出土遺物扱いのため年代の絞り込みができない。第221号土層より新しいことから、19世紀中葉以降に構築・廃絶されたと考えられる。

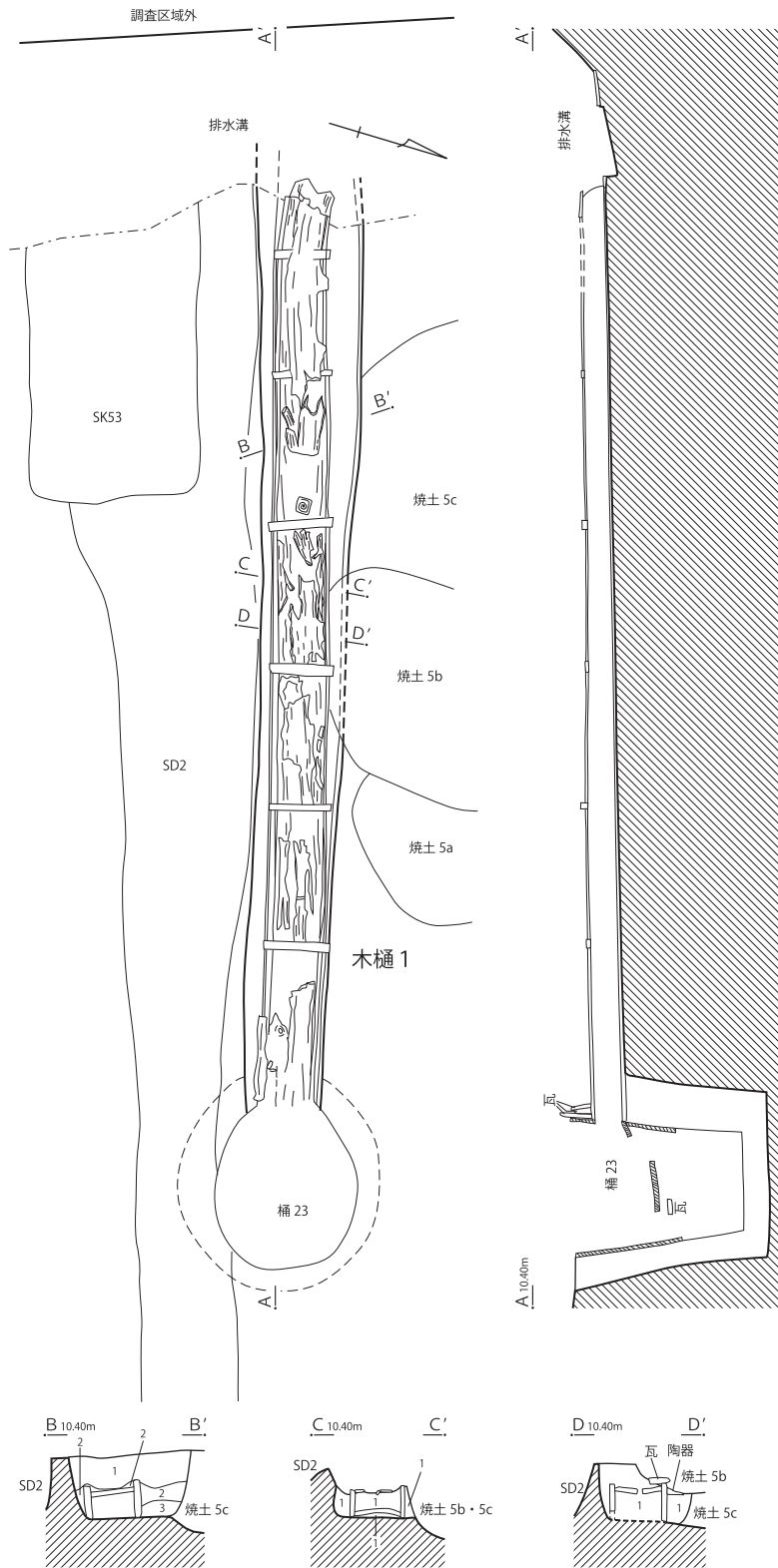
第6号杭列（第52図）

F7-F7～9、同G7グリッドに位置し、区画AF・AGを隔てる。両端は調査区外へ延びている。南側に並行する第2号建物跡の布掘り基礎北辺より新しい。

第2号建物跡の土層断面（第27・28図）では、杭列に伴うと考えられる溝状の掘り込みの一部をとらえられていたが、平面では確認されていない。

検出長24.3 m、走行はおおよそN-72°-Eを指す。径0.1 m程の杭が1 m前後の間隔で直線的に打設される。杭列の南側には板材が渡され、中央部では南側を瓦片で補強している。東側に少量散っている中・小型礫も補強素材の一種であろう。

杭列西端部では、第5号杭列でみられるような



- 木槨 1
- 1 暗灰褐色土 灰白色粘土多量 しまり強 掘り方
 - 2 暗灰褐色土 第1層よりやや暗い 掘り方
 - 3 暗灰褐色土 第2層より暗い 掘り方

第 53 図 第 1 号木槨

幅 0.33 m 程度の板状木材が検出されており、杭の上に設置されていた可能性がある。

杭はある程度のまとまりと間隔をもって打設されているため、改修はさほど行われなかったと考えられる。

構築時期は少なくとも 19 世紀中葉頃に建てられた第 2 号建物跡が取り壊された段階以降である。出土遺物は遺構外出土遺物扱いとなっているが、重複遺構が第 2 号建物跡のみであることを加味すると、遺物の混在は少ないと考えられる。酸化コバルト染付磁器主体に型紙摺絵染付磁器が少量みられることから、19 世紀後葉頃に廃絶した可能性が高い。

(6) 木樋 (第 53 図)

第 1 号木樋 (第 53 図)

F 7-D 6 グリッドの区画 AD に位置する。第 5 号焼土遺構 b より古く、同 c より新しい。木樋は東西方向に設置され、西端は調査区外へ延び、東端は第 23 号埋設桶に接続し、第 2 号溝跡より新しい。

木樋は幅約 0.4 m、深さ約 0.25 m の溝の底面に敷設されており、検出長は 3.7 m である。木樋本体の外法量は、幅 0.24 m 深さ 0.1 m である。木樋、溝ともに西から東に向け僅かに傾斜しており、第 23 号埋設桶へ流れるような構造となっている。溝内には木樋の設置後に粘土が充填されている。

木樋の本体は上下左右の四面を板で囲い、横断面を長方形とする所謂寄木式である。上面は補強材と推定される長さ 28 cm、幅 4 cm 程度の角材が 0.5 m 前後の間隔で留められている。東端の第 23 号埋設桶は立位に置かれ、木樋と接続する側面の上部は穿孔されている。

第 23 号埋設桶 (第 42 図) で述べたように、建物跡に伴う排水施設と考えられる。木樋は区画施設の役割を果たすことがあるが、本遺構は区画施設とは異なる性格である。

出土遺物は確認されなかったが、第 5 号焼土遺構 b・c との重複関係及び、接続する第 23 号埋設桶の年代から 19 世紀後葉に設置・廃絶したと考えられる。

(7) 溝跡 (第 54 ~ 63 図)

溝跡は 12 条検出された。第 1・2・32 号溝跡は日光道中に直交するように調査区を横断して検出されており、所謂区画施設と考えられる。

第 2・32 号溝跡には溝状の掘り込みに無数の杭と木材等が伴っており、先述した杭列 (第 49 ~ 52 図) の本来の姿である。

第 1 号溝跡は素掘りの溝跡で、杭や板材などの構築材が認められず、他の区画施設とは異なる様相を呈している。また、第 32 号溝跡は第 5 号杭列に類似しており、大型礫が直線的に並べられている。

第 6 ~ 12 号溝跡は同一方向に密集して検出されている。深く掘り込まれた底面に段差持ち、純砂を覆土とする栗橋宿ではこれまでに確認されていない特異な遺構である。

第 3 号溝跡は第 6 号建物跡の基礎北辺 (第 33 図) に振り替えられたため欠番となっている。また、第 4 号杭列は第 2 号溝跡と統合し、第 32 号溝跡は第 2 号杭列から遺構名の振替を行った。

第 1 号溝跡 (第 54・58 図)

F 7-C 6・7、同 D 6 グリッドに位置し、区画 AC・AD を隔てる。東西方向に開削された溝で、西端は調査区外へ延び、東端は確認面が浅いためか確認できなくなる。重複する第 32・49 号土壙より古い。第 90 号土壙とは重複する。

検出長 20.3 m、幅 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.25 m で、走行はおよそ N-73°-E を指す。溝の幅は一定ではない。

素掘りの溝跡で杭や木材などはほぼみられない。極僅かに杭が残るが、遺構に伴うものか、廃絶時に杭の抜き取りを行った残りか判然とし得ない。

隣接する第3号杭列とは同一区画を隔てているため、区画変動に伴う新旧関係が考えられる。第3号杭列で述べたように、重複する遺構との関係から区画AC・ADは19世紀後半頃に区画変動があったと考えられる。

出土遺物は近代の陶磁器が少量みられるが、第32・49号土壇との重複関係から混入と考えられる。瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏やトビガンナ施文の行平鍋が最新期の陶磁器である。第1号溝跡の推定廃絶期は19世紀後葉である。

第58図1～13に出土遺物を図示した。1は瀬戸美濃系磁器の端反形碗である。高台内には朱書きで焼継印がみられる。2は瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付平碗で、最新期の陶磁器である。3は瀬戸美濃系磁器の色絵碗で、外面に赤・青・緑色で上絵付が施される。内面に被熱痕跡がみられる。4は瀬戸美濃系磁器の卵殻手坏である。外面に染付、内面に色落ちした上絵付の痕跡がみられる。

5は肥前系磁器の八角鉢である。蛇ノ目凹形高台で、高台内に朱書きで焼継印が2箇所みられる。6は肥前系磁器の鉢である。内面に陰刻状文が施文され、染付が施される。蛇ノ目凹形高台で高台内に朱書きで焼継印、破断面には焼継痕がみられる。

7は瀬戸美濃系陶器の坏である。体部はやや張り、丸みを帯びる。器高が低く、灰釉が施釉される。底部には煤が付着する。8は京都信楽系陶

器の灯明皿である。胎土は磁器質で質が良く、内面に窯道具痕がみられる。口縁部付近から内面に掛けて施釉され、外面の上位にはタール状物質が付着する。9は産地不詳陶器の豆甕である。胎土は硬質で、内外面に柿釉が施釉される。

10は瓦質土器の平底焙烙である。底部は無調整でシワが残り、表面は燻しにより灰色である。内耳は欠失している。器高は低い。11は土師質土器の丸底焙烙である。底部は無調整でシワが残る。体部に補修時の二次穿孔がみられる。底部に煤が付着する。12は瓦質土器の置竈である。下部は欠失しているが、底があり、受皿状の舌部は付かないものと推定される。内面に煤が付着する。10～12はいずれも同一胎土で、角閃石を含むため利根川流域の同一産地と考えられる。

13は木製品の将棋駒である。表は銀将、裏は金である。

第2号溝跡（第55・58～60図）

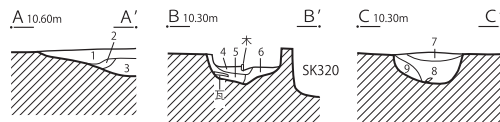
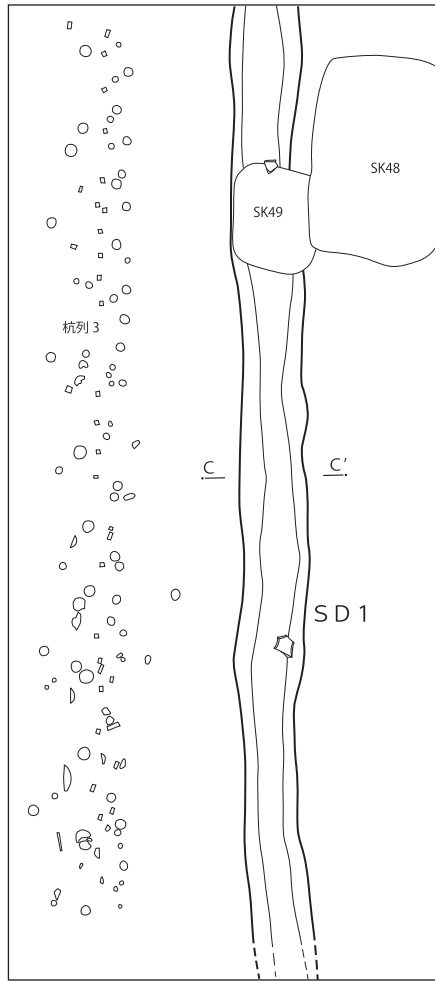
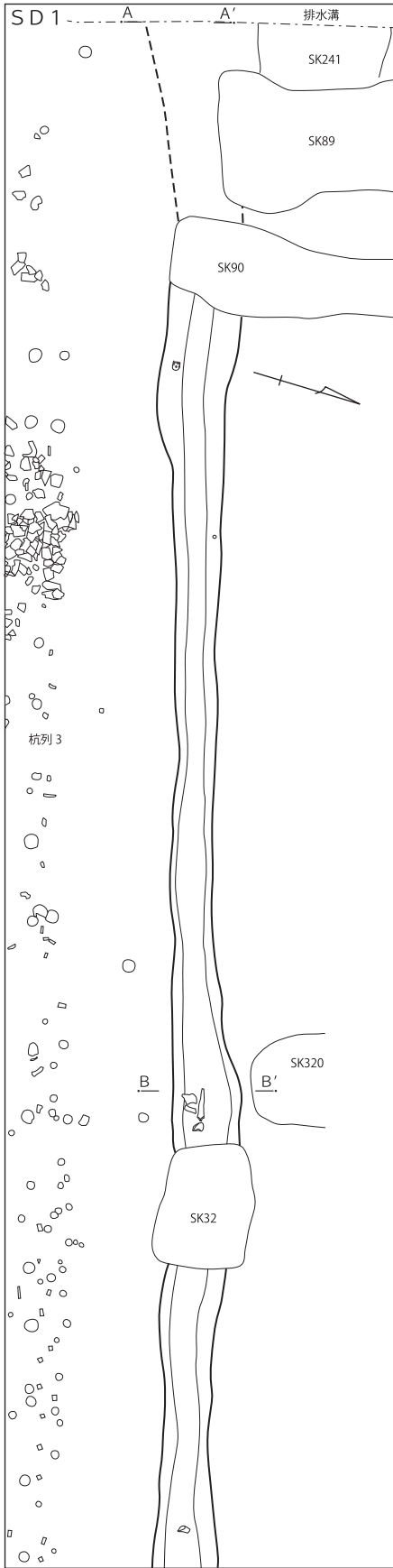
F7-D6～8グリッドに位置し、区画AD・AEを隔てる。両端ともに調査区外へ延びている。第5・23号埋設桶、第53・66・247号土壇より古い。

検出長24.55m、幅0.35～0.8m、深さ約0.25mを測り、走行はおおよそN-72°-Eを指す。溝の幅は一定ではなく、東側で溝幅が広がる。溝の西側と東側では遺構検出面において、おおよそ0.24mの比高差がみられ、底面は利根川方面に向かった傾斜が認められる。

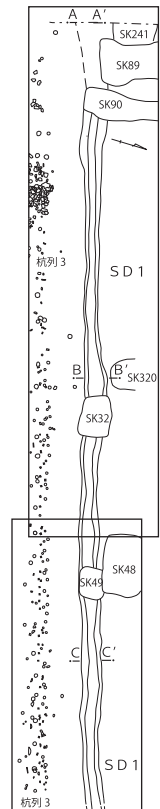
第13表 第一面溝跡一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	長さ	幅	深さ	方位	備考
1	AC/AD	F7-C6・7, D6	(20.30)	0.30～0.60	0.25	N-73°-E	SK32・49より古 SK90と重複
2	AD/AE	F7-D6～8	(24.55)	0.35～0.80	0.25	N-72°-E	桶5・23・SK53・66・247より古
4	AE	F7-D8	(2.95)	0.18～0.38	0.05	N-5°-E	SB6・SK115と重複
5	AF	F7-F7・8	(1.25)	0.25	0.35	N-70°-E	SB1・SK276と重複
6	AE	F7-D7・E6・7	5.60	0.30	0.20	N-72°-E	SB3・SK92・93より古
7	AE	F7-D7・E6・7	8.70	0.25	0.25	N-72°-E	SB3・SK92・93・96より古
8	AE	F7-D7・E6・7	8.00	0.30	0.20	N-72°-E	SB3・SK92・94・96より古
9	AE	F7-D7・E6・7	9.10	0.35	0.45	N-72°-E	SK92・94・96より古
10	AE	F7-D7・E6・7	8.90	0.30～0.40	0.30	N-72°-E	SK96・134より古
11	AE	F7-E6・7	(4.40)	0.25	0.30	N-72°-E	SK113・134より古 桶6と重複
12	AE	F7-E6・7	(5.00)	0.30～0.35	0.35	N-72°-E	SK112・113より古 桶6と重複
32	AB/AC	F7-B7・C5～7	(22.20)	0.90～1.30	0.35	N-72°-E	SK19・78より新 SK65・P6と重複

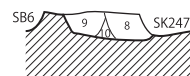
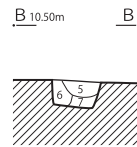
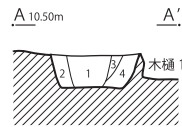
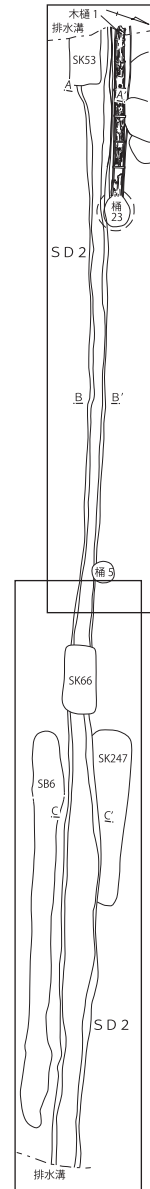
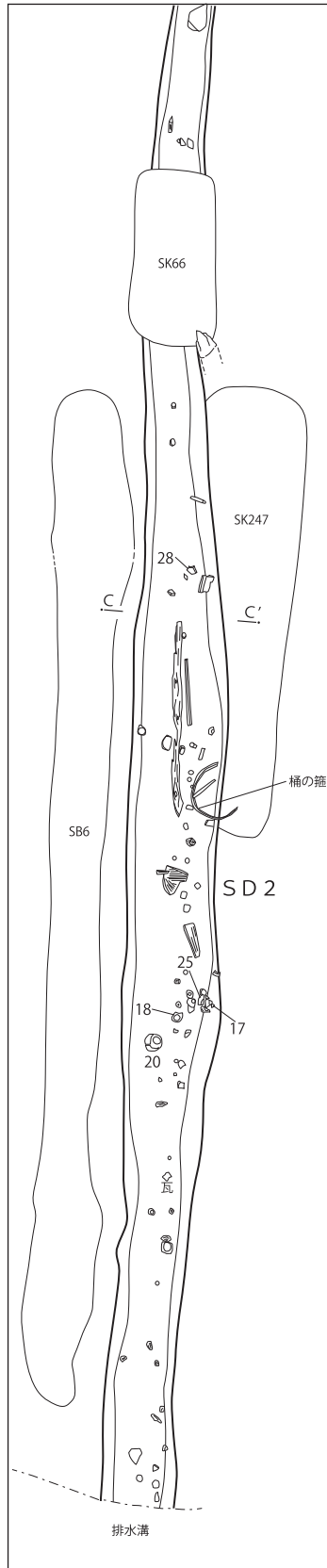
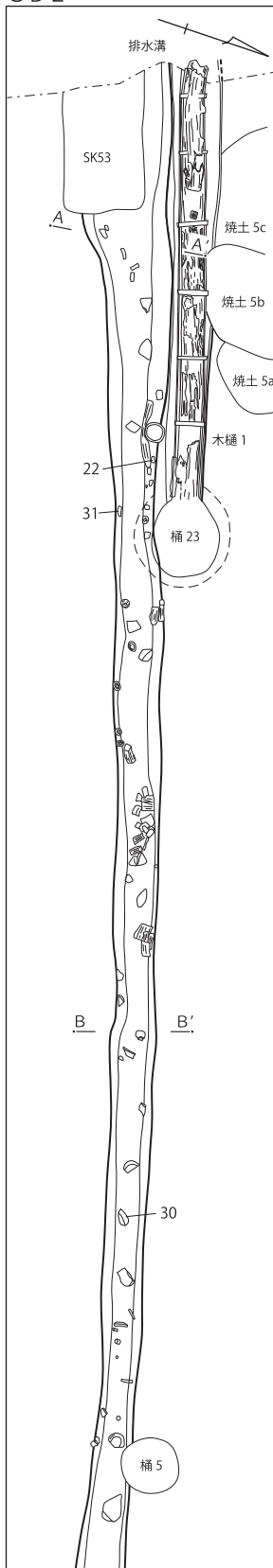


- SD 1
- | | | |
|---|-------|------------|
| 1 | 濃褐色土 | 砂質 |
| 2 | 灰色土 | 黄白色砂質土含む |
| 3 | 暗灰色土 | 黄褐色土含む 砂質 |
| 4 | 暗灰色土 | 黄褐色土微量 粘土質 |
| 5 | 暗灰色土 | 粘土質 |
| 6 | 暗褐色土 | |
| 7 | 灰黄褐色土 | 粘土質 |
| 8 | 暗灰褐色土 | 橙色土微量 しまり強 |
| 9 | 暗灰褐色土 | 橙色土多量 やや砂質 |



第 54 図 第 1 号溝跡

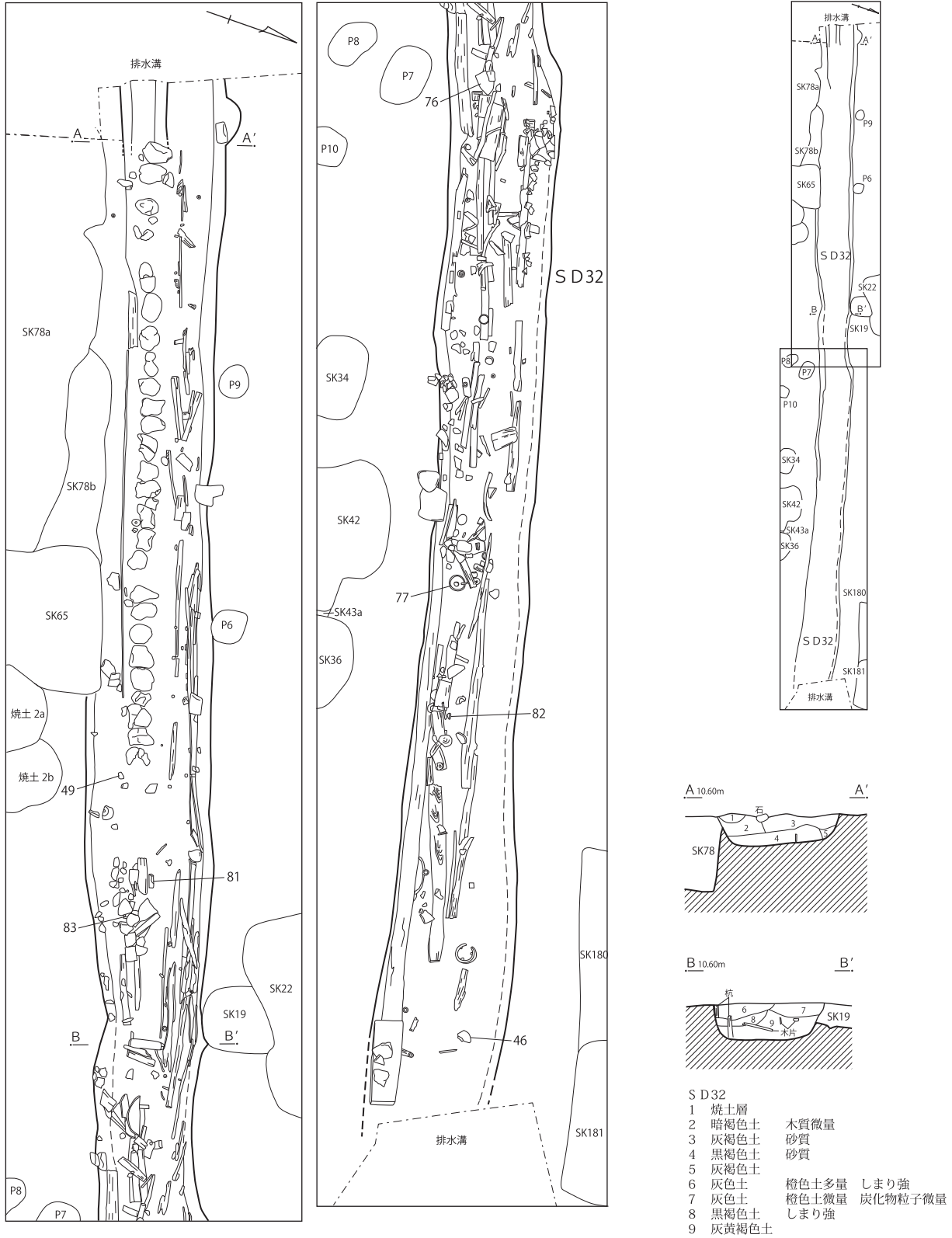
SD 2



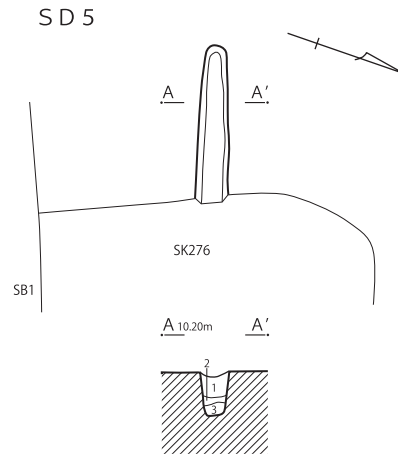
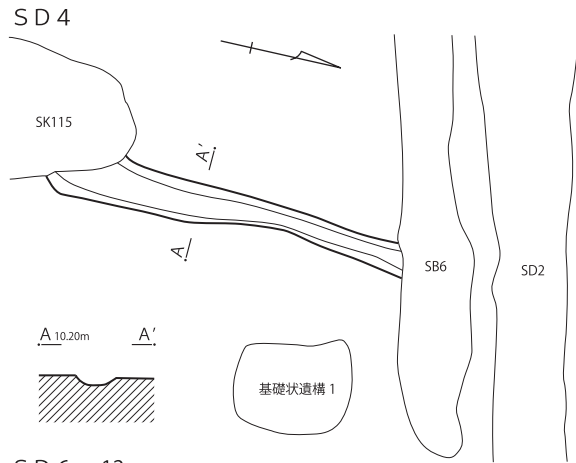
- SD 2
- 1 灰褐色土 炭化物粒子 橙色土含む
 - 2 灰褐色土 橙色土含む
 - 3 暗灰褐色土 橙色土微量 砂質
 - 4 暗灰褐色土 炭化物・橙色土微量 砂質
 - 5 灰褐色土 黄褐色土多量
 - 6 黒褐色土 橙色粒子含む 板材小片多量
 - 7 灰黄褐色土 砂質
 - 8 暗灰色土 橙色砂微量
 - 9 暗褐色土 粘土質
 - 10 暗灰色土 橙色土砂多量

第 55 図 第 2 号溝跡

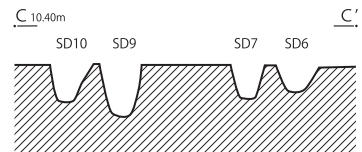
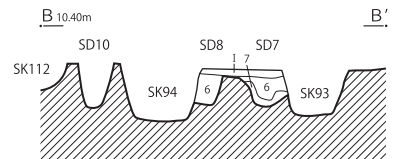
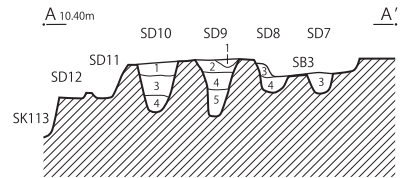
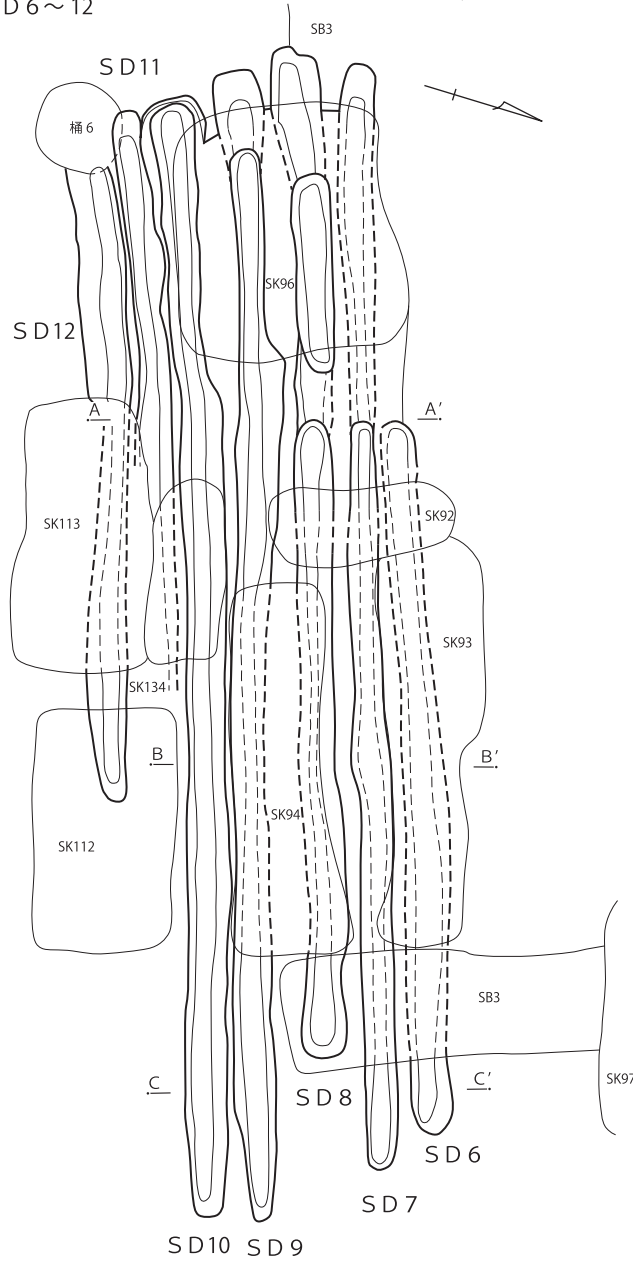
S D 32



第 56 図 第 32 号溝跡



SD 6 ~ 12

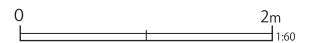


SD 5

- 1 灰褐色土 砂質 炭化物多量
- 2 灰色土 シルト質 炭化物微量
- 3 灰褐色砂 $\phi 0.1 \sim 0.5$ mmの砂粒多量

SD 7 ~ SD 10

- 1 灰褐色土 砂質 しまり極強 細粒砂微量 SB3覆土
- 1 暗褐色土 硬質
- 2 暗褐色土 砂層
- 3 白色砂
- 4 黒色砂
- 5 灰白色砂
- 6 白色砂 $\phi 0.5 \sim 1$ mm程度の砂粒
- 7 黄褐色土 シルト質 粘性あり しまり極強



第 57 図 第 4 ~ 12 号溝跡

溝跡の幅が広がり始める場所である土層断面C-C'をみると、第9・10層は北側の立ち上がりは壊されているものの西側の狭い溝と幅がほぼ一致する。したがって、第9・10層は第2号溝跡に伴う覆土と考えられ、第8層は堆積状況から改修に伴う溝である可能性が高い。第8層を第2号溝跡の改修に伴う新しい溝跡とすると、その西側の延長線上に存在する第5号埋設桶(第40図)、第23号埋設桶(第42図)と木樋(第53図)との関連性が示唆されよう。

逆台形の断面形状及び土層断面A-A'の堆積状況等から、溝跡には木樋状の構築物が設置されていた可能性が高い。第1層は木樋状構築物の抜き取り痕と推定される。また、土層断面B-B'第6層にみられる多量の板材小片はその一部である可能性がある。

出土遺物は混在が多く、年代の絞り込みが困難であるが、18世紀末～19世紀初頭、19世紀後葉の大きく2時期のまとまりがみられる。重複する第247号土層は酸化コバルト染付磁器を最新期とした遺構であるため、最終廃絶期は19世紀後葉以前と考えられる。

第58図14～18、第59図、第60図35～41に出土遺物を図示した。

14は肥前系磁器の筒形碗である。蛇ノ目高台で体部に糸目状施文がみられる。体部中位には鉄釉が帯状に施釉される。18世紀末～19世紀初頭の陶磁器群で最新である。

15は瀬戸美濃系磁器の筒形坏で、型紙摺絵染付が施される。16は瀬戸美濃系磁器の酸化クロム青磁釉端反形坏である。蛇ノ目凹形高台で、体部に鑄状施文がみられる。

17は肥前系磁器の皿である。口径が小さく、所謂手塩皿である。型打技法により菊花状に成形されている。17世紀後葉から18世紀前葉の所産であろう。第300号土層出土と接合関係にある。18は肥前系磁器の皿である。蛇ノ目凹形高台で

器高は低く、腰の丸みは強い。

第59図19は瀬戸美濃系磁器の皿である。蛇ノ目凹形高台で、内面は型打ちによる陰刻文、酸化コバルト染付が施される。

20は肥前系磁器の蓋物である。

21は瀬戸美濃系陶器の坏である。灰釉が施釉される。被熱している。

22は京都信楽系陶器の坏である。胎土は磁質で、上絵付文字「浅紅」がみられる。「浅」は崩し字である。上絵付は赤と黒だが、黒は赤が被熱変色したものと考えられる。「浅紅」は浅草の紅屋の商標で、所謂紅坏としての用途が考えられる。江戸遺跡での出土は極めて少ない一方で、栗橋宿では多量に出土しており、都市と地方における紅の流通を考える上で重要な遺物である。栗橋宿では18世紀後葉の遺構に集中して出土しており、本製品も18世紀末～19世紀初頭の陶磁器群に伴うと考えられる。

23は瀬戸美濃系陶器の鉄絵皿である。口縁部の破片のみであるが、高台がなく、底部が削り込みにより上げ底状になる扁平皿(第67図10)と考えられる。19世紀後葉の所産と推定される。

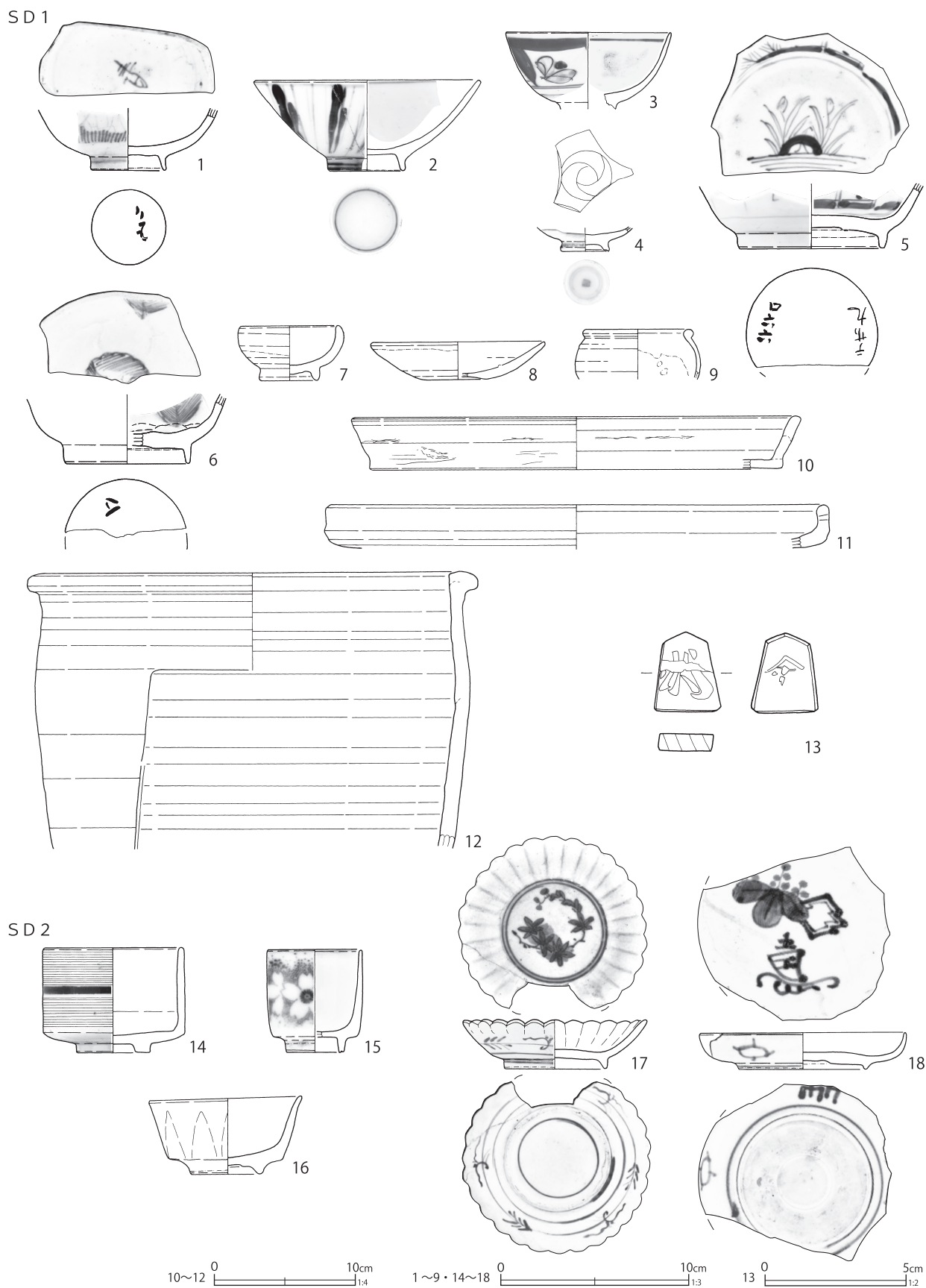
24は瀬戸美濃系陶器の石皿である。口縁部は折鏢状で内面に鉄絵・呉須絵が絵付けられている。

25は瀬戸美濃系陶器の柿釉灯明皿(油受皿)である。体部下位から底部は釉の拭き取りを行っており、体部中位には径7.0cmの輪状重ね焼き痕がみられる。受け口の切込みは「U」字状である。

26は産地不詳陶器の脚付き灯火具である。受け口は欠失している。

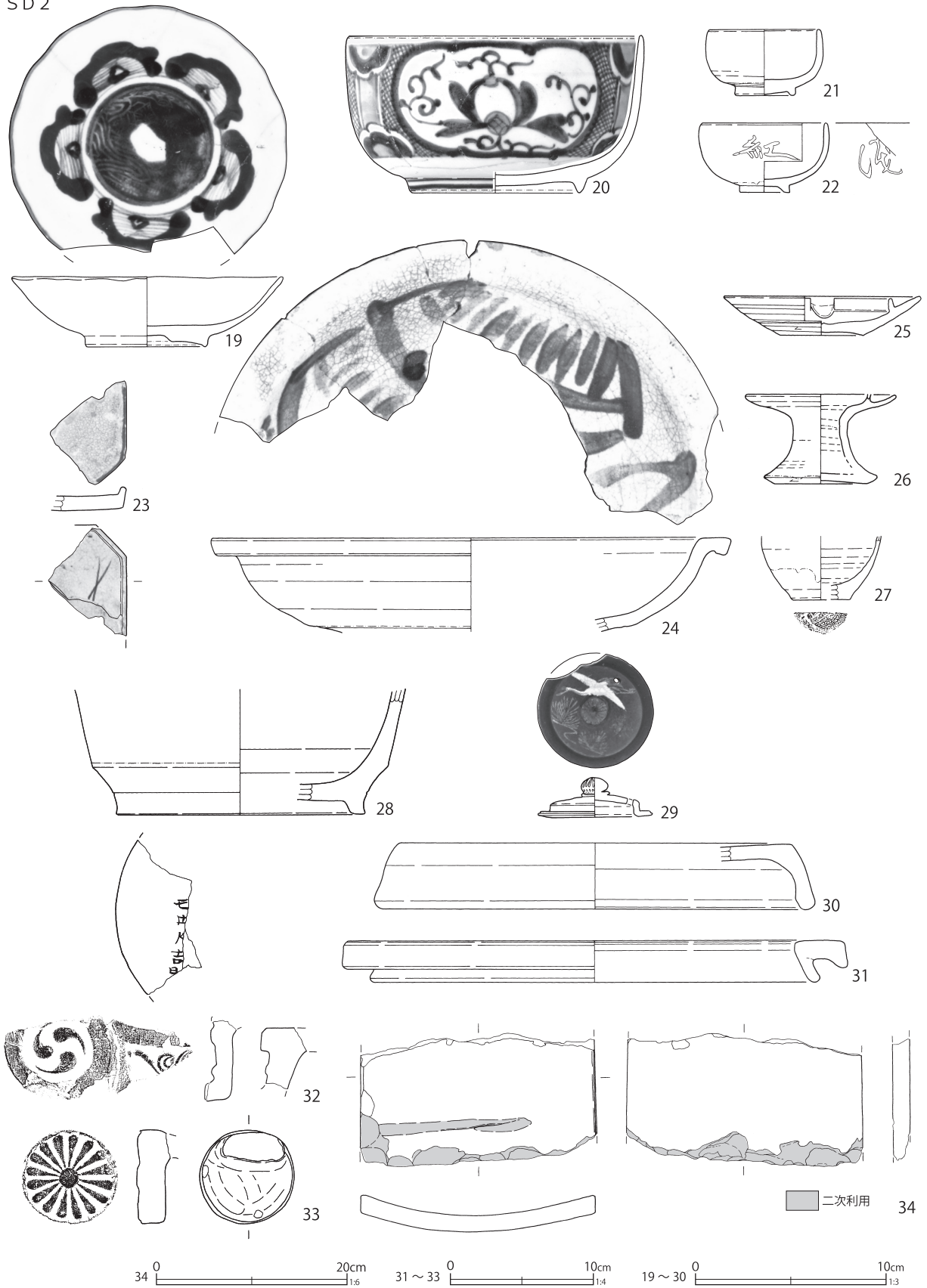
27は産地不詳陶器の豆甕である。内外面に柿釉が施釉され、底部に回転糸切痕が遺存する。第1号溝跡出土の豆甕(第58図9)と同一個体の可能性がある。

28は瀬戸美濃系陶器の半銅甕である。底部に墨書「巳[年]□吉日」がみえる。



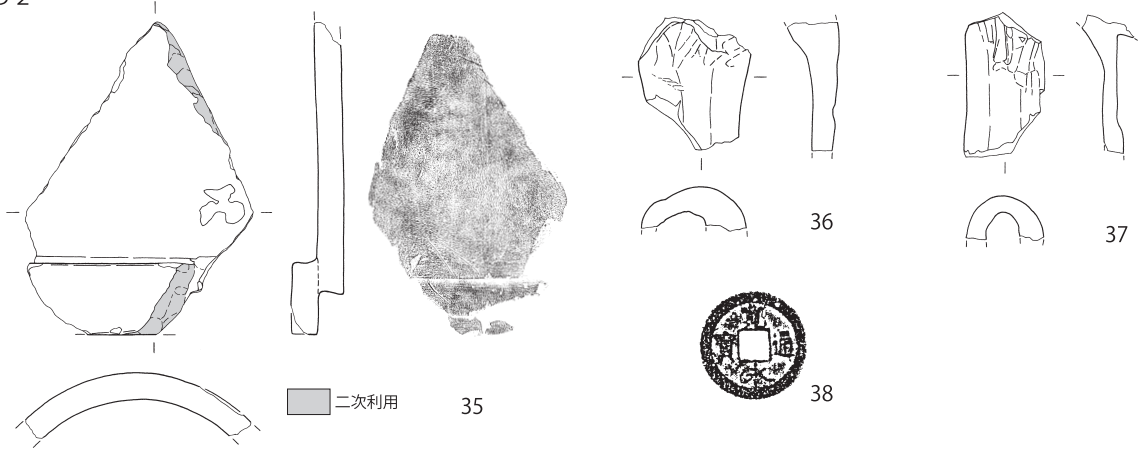
第58図 溝跡出土遺物(1)

SD 2

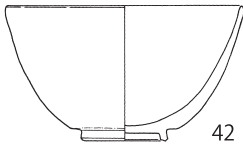


第 59 図 溝跡出土遺物 (2)

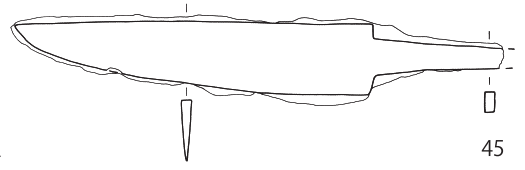
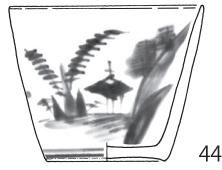
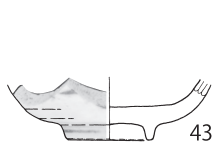
SD 2



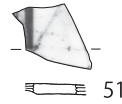
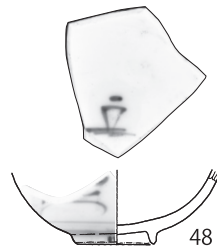
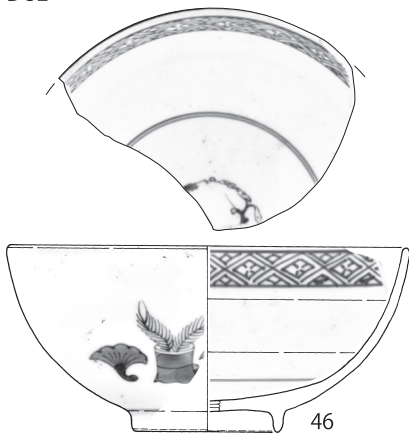
SD 4



SD 10



SD 32



35 ~ 37 0 20cm
1:6

40 0 10cm
1:4

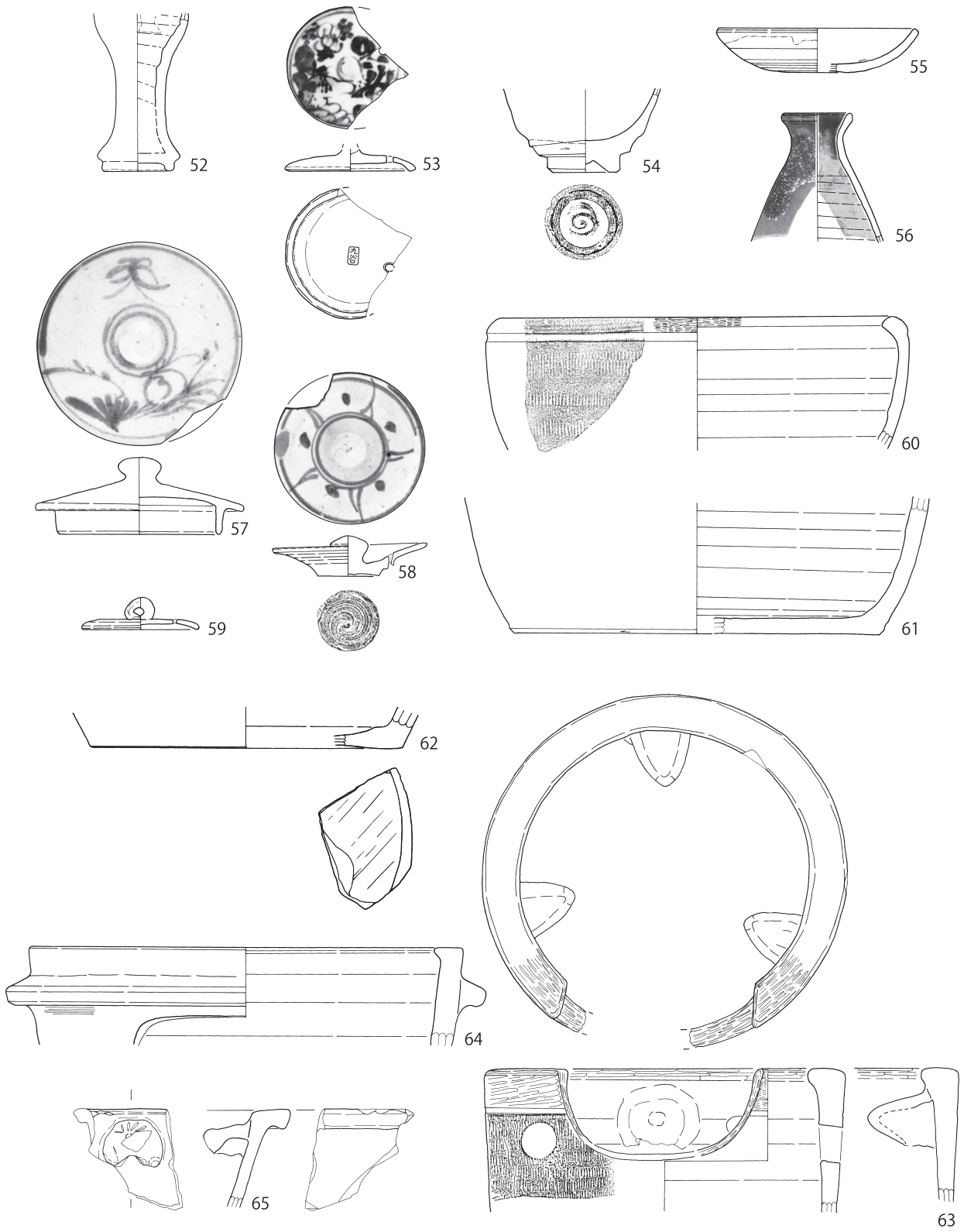
41 ~ 51 0 10cm
1:3

39 0 5cm
1:2

38 0 5cm
2:3

第 60 图 溝跡出土遺物 (3)

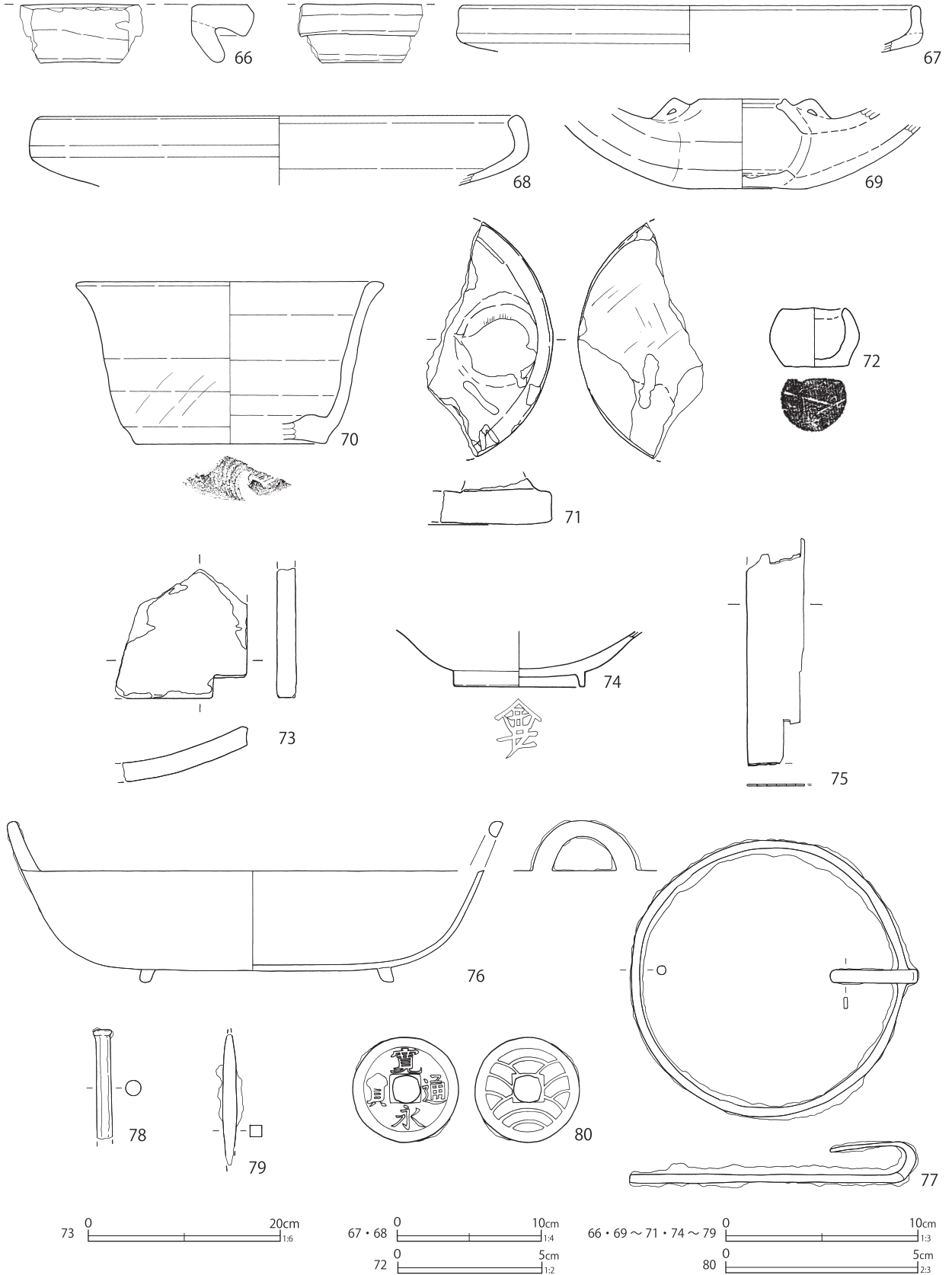
SD32



52 ~ 59 · 62 · 63 · 65 0 10cm 1/3 60 · 61 · 64 0 10cm 1/4

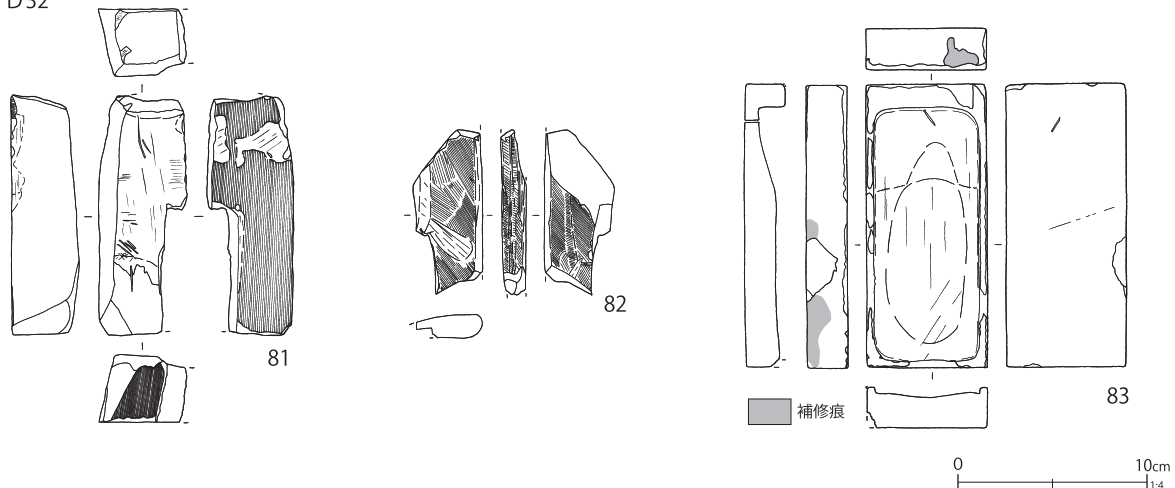
第 61 图 沟迹出土遗物 (4)

SD32



第 62 図 溝跡出土遺物 (5)

SD32



第63図 溝跡出土遺物(6)

29は萬古系陶器の蓋である。胎土が炆器質の急須の蓋で、上面に金・緑・白・赤で絵付けが施される。つまみは型成形である。

30は瓦質土器の火消壺の蓋である。上面は無調整で砂目が残る。燻しにより表面は灰色である。

31は瓦質土器の竈鏝である。燻しにより灰～黒色を呈し、上面に煤が付着する。

32～37は黒色素焼きの瓦である。32は軒椽瓦で、江戸式に類似し、左巻きの三巴文、二重唐草文がみられる。

33は菊丸瓦である。棟を飾る瓦で、背面の突起は欠失している。栗橋宿跡での出土は稀である。栗橋宿北端の八坂神社境内に位置する北二丁目陣屋跡(埧埋文2021a)の遺物包含層からは軒丸瓦に匹敵する大きさの菊丸瓦が出土している。

34は胎土が砂質気味の平瓦である。端部は打ち欠き、削痕がみられ、何らかの二次利用が示唆される。

第60図35は道具瓦である。欠失部の一部に打ち欠き・摩耗がみられ、何らかの二次利用が示唆される。

36・37は鬼瓦である。遺存率が極めて低いため、部位の同定は困難である。両者は同一個体の可能性もある。38は銅製の新寛永通寶である。

39～41は石製品である。39は玉髓製の火打

石である。使い込みが激しく、稜線は敲打により著しく丸みを帯びる。40はホルンフェルス製の砥石である。砥面は2面遺存しており、裏面にノコギリ状工具痕、下端面に刃幅の広い工具と推定される削痕がみられる。41は凝灰岩製の鉢もしくは碗と推定される。径4.2cmの高台高が低い輪高台がみられる。

第32号溝跡(第56・60～63図)

F7-B7、同C5～7グリッドに位置し、区画AB・ACを隔てる。両端ともに調査区外へ延びている。第19・78号土壌より新しく、第65号土壌、ピット6と重複する。

検出長22.2m、幅0.9～1.3m、深さ約0.35mを測り、走行はおよそN-72°-Eを指す。

溝跡の幅や出土構築材の分布等から複数回の改修が推定されるが、土層断面で捉えることはできなかった。遺構検出標高は、第2号溝跡より0.2mほど高い。遺構底面は東側が低くなっており、他の区画施設と同様に利根川方面に排水できるような構造となっている。

杭列と同様に、溝の両壁に板材等を差し込み側版とし、細い杭を打ち込んで支える構造を基本とする。土層断面B-B'の杭はその痕跡であろう。

溝跡西端部では、0.1m以上高い位置で、幅0.48m程度の溝が極一部検出されている。溝跡

第14表 溝跡出土遺物観察表(第58～63区)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版	
1	磁器	碗	—	[3.2]	(3.8)	K	30	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 焼継印(赤)	71-6	
2	磁器	碗	(11.8)	4.8	3.9	—	45	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付		
3	磁器	碗	(8.6)	[4.1]	—	—	20	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 内外面施釉・色絵(赤・青・緑) 内面被熱		
4	磁器	坏	—	[1.2]	2.3	—	60	良好	白	SD1	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付痕		
5	磁器	鉢	—	[3.4]	(7.6)	—	60	良好	灰白	SD1	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台 焼継印(赤) 2あり		71-7
6	磁器	鉢	—	[3.6]	(6.4)	K	40	良好	白	SD1	肥前系 内外面施釉 内面陰刻状文・染付 焼継痕・焼継印(赤)		
7	陶器	坏	5.1	2.9	2.9	IK	95	普通	灰白	SD1	瀬戸美濃系 内外面灰釉 底部煤付着		
8	陶器	灯明皿	(9.1)	2.0	(3.0)	K	20	良好	灰白	SD1	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉 内面ピン痕 1遺存 体部上位タール状物質付着		
9	陶器	豆甕	(5.3)	[2.6]	—	IK	20	良好	淡黄	SD1	内外面柿釉		
10	瓦質土器	焙烙	(31.1)	3.7	(29.0)	CHIK	5	普通	灰白	SD1	底部シワ状痕 燻す		
11	土師質土器	焙烙	(35.4)	[3.0]	—	CHIK	10	普通	灰白	SD1	底部シワ状痕 体部補修痕 1遺存 底部煤付着		
12	瓦質土器	竈	(29.6)	[19.5]	—	CHIK	25	普通	褐灰	SD1	燻す 内面煤付着		
13	木製品	将棋駒	長さ2.7 幅2.4 厚さ0.6								SD1	表「銀将」裏「金」板目	
14	磁器	碗	(7.2)	5.5	3.8	K	75	良好	白	SD2	肥前系 内外面施釉 体部中位・口唇部鉄釉 蛇ノ目高台		
15	磁器	坏	(4.9)	5.4	(3.0)	—	50	良好	白	SD2	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面型紙摺絵染付		
16	磁器	坏	8.0	4.0	3.7	—	80	良好	白	SD2	瀬戸美濃系 内外面酸化クロム青磁釉 体部鏽 蛇ノ目凹形高台		
17	磁器	皿	9.6	2.6	5.3	K	90	良好	白	SD2	肥前系 内外面施釉・染付 SK300と接合 SA4 No. 29		
18	磁器	皿	(10.8)	1.9	6.7	—	70	良好	白	SD2	肥前系 内外面施釉・染付 SA4 No. 31		
19	磁器	皿	14.0	3.6	6.2	—	90	良好	白	SD2	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面陰刻文・酸化コバルト染付 口紅 蛇ノ目凹形高台 SA4 No. 14		
20	磁器	蓋物	15.3	8.2	8.7	K	85	良好	白	SD2	肥前系 内外面施釉 外面染付 SA4 No. 37		
21	陶器	坏	(5.7)	3.5	3.0	IK	75	普通	淡黄	SD2	瀬戸美濃系 内外面灰釉 被熱		
22	陶器	坏	(6.4)	3.6	2.6	K	55	良好	灰白	SD2	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉 外面「浅紅」銘上絵付(赤・黒) SA4 No. 20		
23	陶器	皿か	縦4.5 横3.8 高さ1.2			I	5	良好	灰白	SD2	瀬戸美濃系 内外面施釉・鉄絵		
24	陶器	皿	(24.2)	[4.9]	—	EHIK	30	普通	灰白	SD2	瀬戸美濃系 内外面灰釉 内面鉄・呉須絵		
25	陶器	灯明皿	(10.2)	2.0	4.4	IK	60	良好	褐灰	SD2	瀬戸美濃系 内外面柿釉 体部軸拭きとり 体部中位輪状重焼痕(径7.0cm) SA4 No. 23		
26	陶器	灯火具	(7.6)	[4.6]	5.8	IK	80	良好	浅黄橙	SD2	内外面灰釉 被熱		
27	陶器	豆甕	—	[3.3]	(3.0)	K	20	普通	にぶい橙	SD2	底部糸切痕 内外面柿釉 SD1-9と同一個体カ		
28	陶器	半胴甕	—	[6.5]	(13.0)	IK	15	良好	灰白	SD2	瀬戸美濃系 内外面柿釉 底部墨書「巳[年]□吉日」 SA4 No. 15		
29	陶器	蓋	—	2.0	4.5	—	95	良好	赤灰	SD2	萬古系 胎土焙器質 上面上絵付(金・緑・白・赤)		
30	瓦質土器	蓋	—	[3.4]	(22.2)	CIK	20	普通	にぶい橙	SD2	上面砂目 燻す SA4 No. 11		
31	瓦質土器	竈鏝	(29.4)	2.9	(30.7)	CIK	5	普通	灰黄褐	SD2	燻す 上面煤付着 SA4 No. 2		
32	瓦	軒棧瓦	長さ[4.6] 幅[13.1] 厚さ2.3 高さ[6.8] 径7.2			CHIK	—	普通	灰白	SD2	江戸式か 左巻き三巴文 燻す		
33	瓦	菊丸瓦	厚さ1.9 径6.5			AIK	—	普通	灰白	SD2	燻す 菊紋		
34	瓦	平瓦	長さ14.2 幅25.0 厚さ1.9 高さ4.0			ACIK	—	普通	灰	SD2	胎土やや砂質 燻す 二次利用あり		
35	瓦	道具瓦	長さ[24.9] 幅[18.2] 厚さ4.1 高さ[5.3]			AHIK	—	普通	灰白	SD2	燻す 二次利用二箇所(打欠・摩耗)		
36	瓦	鬼瓦	長さ[10.3] 幅[8.8] 厚さ4.0			CIK	—	普通	灰白	SD2	燻す 部分的に摩耗		
37	瓦	鬼瓦	長さ11.2 幅6.2 厚さ3.6			AIK	—	普通	灰白	SD2	燻す 弱く銀化		
38	銅製品	銭貨	径21.7 厚さ1.0 重さ1.6								SD2	寛永通寶(新)	
39	石製品	火打石	長さ3.4 幅2.6 厚さ1.5 重さ16.1								SD2	玉髓 稜の潰れ著しい	
40	石製品	砥石	長さ[13.4] 幅7.0 厚さ3.4 重さ398.3								SD2	ホルンフェルス 裏面ノコギリ痕 側面幅広工具痕カ 砥面2 刃物痕あり	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版	
41	石製品	鉢カ	器高 [1.9] 底径 (4.2) 重さ 21.1								SD2	凝灰岩 (細粒)	
42	陶器	碗	(9.2)	5.3	(3.2)	HK	30	良好	灰白	SD4	京都信楽系 胎土磁質 内外面施釉		
43	磁器	碗	—	[2.4]	(3.0)	—	45	良好	白	SD10	肥前系 内外面施釉 外面染付		
44	磁器	猪口	7.5	6.1	4.7	—	60	良好	白	SD10	肥前系 内外面施釉 外面染付		
45	鉄製品	刀子	長さ [19.5] 刃長 14.0 刃幅 2.4 背幅 0.4 重さ 94.2								SD10	両関 茎尻欠失	
46	磁器	碗	(15.8)	7.3	(5.6)	—	25	良好	白	SD32	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 SA2 No.26		
47	磁器	碗	(11.2)	4.5	3.5	—	55	良好	白	SD32	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付		
48	磁器	碗	—	[3.0]	3.0	—	20	良好	白	SD32	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 高台内焼継印 (赤)		
49	磁器	坏	5.3	5.7	3.5	—	50	良好	白	SD32	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 SA2 No.6		
50	磁器	坏	7.4	4.1	3.5	—	90	良好	白	SD32	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面銅版転写染付		
51	磁器	皿	—	0.4	—	—	5	良好	白	SD32	肥前系 内面・高台内施釉 内面染付 蛇ノ目凹形高台 焼継痕・焼継印 (赤)		
52	陶器	徳利	—	[8.0]	3.3	K	80	良好	灰白	SD32	肥前系 外面瑠璃釉		
53	磁器	蓋	—	[1.0]	5.5	—	75	良好	白	SD32	瀬戸美濃系 上下面施釉 上面酸化コバルト染付 下面刻印「久谷」	71-8	
54	陶器	碗	—	[4.2]	3.3	IK	80	良好	黄灰	SD32	萩系 内外面藁灰釉 渦巻高台		
55	陶器	灯明皿	(10.0)	2.2	(3.1)	IK	20	良好	灰白	SD32	内外面灰釉 内面ピン痕 1 遺存		
56	陶器	爛徳利	(3.4)	[6.5]	—	IK	40	良好	にぶい橙	SD32	外面灰釉 口縁部青緑釉流し掛け		
57	陶器	蓋	—	3.9	8.1	K	95	良好	黄灰	SD32	上面白土染付		
58	陶器	蓋	—	2.0	3.1	K	95	良好	灰白	SD32	底部糸切痕 (中心) 上面白土染付		
59	陶器	蓋	—	1.6	5.8	—	55	良好	灰	SD32	胎土炆器質 摘み手捻り貼付 外面にぶい赤褐色		
60	瓦質土器	火鉢	(26.7)	[9.0]	—	ACHIK	5	普通	浅黄	SD32	口縁部ミガキ 外面トビガンナ状施文 燻す		
61	瓦質土器	火消壺	—	[9.4]	(25.0)	FHIK	40	普通	黒褐	SD32	砂目底 体部下端部ケズリ 燻す		
62	瓦質土器	火鉢	—	[2.1]	(16.0)	CI	10	普通	灰	SD32	燻す 底部砥具転用		
63	瓦質土器	焜炉	16.2	[7.3]	—	AK	90	普通	灰白	SD32	胎土粉質 口縁部・体部上位ミガキ 体部トビガンナ状施文 燻す		
64	瓦質土器	竈	(26.2)	[6.7]	—	CHIK	10	普通	灰	SD32	燻す		
65	瓦質土器	焜炉	—	[5.1]	—	CHIK	5	普通	褐灰	SD32	五徳部型成形・雲母細粒付着 口縁部白色物質付着		
66	瓦質土器	竈鏝	—	3.0	—	CIK	5	普通	黒褐	SD32	燻す		
67	土師質土器	焙烙	(31.5)	[3.2]	—	CIK	10	普通	灰白	SD32	砂目底		
68	土師質土器	焙烙	(32.8)	[4.8]	—	CHIK	10	普通	にぶい橙	SD32	砂目底 体部煤付着		
69	施釉土器	カンテラ	4.5	[4.6]	(4.8)	AIK	60	良好	橙	SD32	江戸在地系 底部糸切痕 胎土粉質 内外面施釉 (釉剥落著しい)		
70	瓦質土器	植木鉢	(15.0)	8.4	(10.0)	CFHIK	35	普通	灰	SD32	底部糸切痕 ほぼ酸化焰焼成 胎土砂質		
71	瓦質土器	蓋カ	(13.4)	[2.4]	(13.7)	CHIK	35	普通	灰黄褐	SD32	燻す 上面光沢あり 砥具転用 把手欠失		
72	土師質土器	小壺	(2.0)	2.0	(2.3)	AHIK	—	普通	にぶい黄橙	SD32	底部糸切痕 (左)・摩耗 胎土粉質 重さ 7.1 g	121-14	
73	瓦	棧瓦	長さ [13.6] 幅 [13.9] 厚さ 2.1 高さ [5.7]			AIK	—	普通	灰白	SD32	燻す 弱く銀化		
74	木製品	漆椀	高さ [3.0]								SD32	全面赤漆 高台内黒で「罎」横木取り	
75	木製品	経木	長さ [11.7] 幅 [2.9] 厚さ 0.1								SD32	表裏面墨書 柁目	
76	鉄製品	鍋	口径 (24.0) 高さ 8.4 厚さ 0.3 重さ 464.9								SD32	両手鍋 脚 3 点 No.10	
77	鉄製品	五徳	径 14.3 高さ 2.1 厚さ 0.5 重さ 83.5								SD32	No.20	
78	鉄製品	不明	長さ [5.6] 幅 0.8 厚さ 0.8 重さ 18.1								SD32	F7c6-1	
79	鉄製品	釘	長さ 8.0 幅 0.4 厚さ 0.1 重さ 4.3								SD32	合釘 F7c7-1	
80	銅製品	銭貨	径 27.4 mm 厚さ 1.0 mm 重さ 3.2								SD32	寛永通寶 (新) 11 波 F7c6-2	
81	石製品	砥石	長さ 12.7 幅 [4.7] 厚さ 3.6 重さ 305.6								SD32	ホルンフェルス 側・裏面ノコギリ痕 砥面 1 刃物痕あり No.27	
82	石製品	砥石	長さ [8.7] 幅 [3.7] 厚さ [1.3] 重さ 50.5								SD32	粘板岩 (黄灰色) 表・側・裏面ランダムな線条痕多数 砥面 3 No.23	
83	石製品	硯	長さ 15.0 幅 6.4 厚さ — 重さ 275.1								SD32	凝灰岩 器高 2.2cm 刃物による二次穿孔あり No.8	141-2

の延長線上には長軸0.24～0.3m程度の中・大型礫が直線的に並んで設置されている。東側の溝跡内に分布している丸太材や板材等はおおむね大型礫が並ぶ延長線上に寄っており、関連する構築材である可能性が高い。これらの構造は、第1・5号杭列（第49・51図）や第7地点第8・9号溝跡（埒埋文2019d）に類似しており、構築年代もおおむね同時期であろう。

以上のことから、溝跡西端部で検出された掘り込みと関連する構築部材は、改修が推定される第32号溝跡内で最も新しい区画施設であると考えられる。

出土遺物は酸化コバルト染付磁器を主体とし、銅版転写染付端反形環が最新期の陶磁器である。溝跡の最終廃絶年代は19世紀末～20世紀初頭頃である。

第60図46～51、第61～63図に出土遺物を図示した。46は肥前系磁器の大碗である。薄手で外面と見込みに染付が施される。内面上位には四方襷文がみられる。焼継痕が残る。47は瀬戸美濃系磁器の酸化コバルト染付平碗、48は染付碗である。48には高台内に朱書きで焼継印がみられる。49は瀬戸美濃系磁器の筒形環である。酸化コバルト染付が施され、内面は上半部全面に絵付けられている。50は瀬戸美濃系磁器の端反形環で、最新期の陶磁器である。口径が大きく器高は低い。高台内は深く削り込まれ、外面に銅版転写染付がみられる。51は肥前系磁器の皿である。底部破片で、蛇ノ目凹形高台が僅かに遺存する。焼継痕と朱書きの焼継印がみられる。

第61図52は肥前系磁器の瓶子形御神酒徳利で、外面瑠璃釉である。53は瀬戸美濃系磁器の蓋である。急須の蓋で、上面に酸化コバルト染付、下面に刻印「久谷」がみられる。

54は萩系陶器の碗である。内外面に藁灰釉が施釉され、底部は渦巻高台である。55は産地不詳陶器の灰釉灯明皿である。所謂地方窯系陶器で

内面に窯道具痕が1箇所遺存している。56は産地不詳陶器の爛徳利である。外面は灰釉で、口縁部から青緑釉を流し掛けている。57は陶器の蓋である。白土染付土瓶の蓋で、上面は白土の上に呉須絵、施釉している。58は陶器の落とし蓋である。急須の蓋で、底部に回転離し糸切痕が残る、上面は白土染付である。59は無釉焼き締め陶器の蓋である。炆器質な胎土で、つまみは手捻り成形で環状に貼り付けている。表面はにぶい赤褐色を呈する。

60は瓦質土器の丸火鉢である。表面は燻により灰～黒色を呈し、口縁部に丁寧なミガキ調整がみられる所謂硬質瓦質土器である。体部にトビガンナ状の施文がみられる。61は瓦質土器の火消壺である。底部は無調整で砂目が残る。体部下端にはケズリ状の工具ナデが一周廻る。62は瓦質土器の火鉢である。底部は二次利用により摩耗している。63は瓦質土器の焜炉である。五徳状の突起が3箇所につき、正面に「U」字状の窓が付く。体部上位から口唇部にかけてミガキ調整、体部下位にトビガンナ状の施文がみられる。粉質な胎土で、胎土中に細粒な雲母が含まれる。64は瓦質土器の竈である。正面上位に鏝状の凸帯が付き、窓が僅かに遺存する。65は瓦質土器の焜炉である。五徳部の突起は型成形であり、表面に離剤の役割を果たす雲母が付着する。口縁部には白色付着物がみられる。

第62図66は瓦質土器の竈鏝である。燻しにより灰～黒色を呈し、下端部は丸みを帯びる。67・68は土師質土器の丸底焙烙である。いずれも底部は無調整の砂目底で、67は体部に強いヨコナデがみられる。68は67より底部の丸みが強い。69は江戸在地系施釉土器のカンテラである。底部に糸切痕が僅かに遺存し、胎土は粉質である。内外面に透明釉が施釉されるが釉の剥落が著しい。70は瓦質土器の植木鉢である。胎土は砂質で、酸化焰焼成により橙色を呈するが、胎土

中心部は還元焰焼成の灰色である。71は瓦質土器の蓋とした。しかし、上面の銀化状光沢と欠失している突起状の痕跡から菊丸瓦の可能性もあることについて留意したい。いずれにせよ二次利用によって、下面は摩滅している。72は土師質土器の小壺である。京都系の所謂「つぼつぼ」に類似する製品だが、本製品は橙色を呈する粉質胎土で、底部に左回転の糸切痕が残る。底部は摩耗している。栗橋宿では19世紀後半の遺構で一定量出土する。

73は棧瓦で隅切りが遺存する。74・75は木製品で、74は漆椀である。内面に赤漆が塗布され、高台内に黒漆で「夔」の文字がみえる。75は経木で、判読しがたいが両面に墨書がみられる。表面は「[い]たや[三]」、裏面は判読し得なかった。

76～79は鉄製品である。76は両手鍋で突起状の脚が3箇所に見られる。77は五徳である。78は断面円形の棒状製品で器種は不明である。79は合釘である。80は銅製の新寛永通寶四文銭である。

第63図81～83は石製品である。81はホルンフェルス製の砥石で砥面は1面である。裏面と下端面に密度の高いノギリ状工具痕がみられる。裏面は一部使用痕が認められる。82は黄灰色を呈する粘板岩製の砥石である。表・側面・裏面にランダムな線条痕が多量にみられ、側面は丸みを帯びる。83は凝灰岩製の硯で鋭利な刃物による二次穿孔がみられる。内面の使用により凹んでいる。

第4号溝跡（第57・60図）

F7-D8グリッドの区画AEに位置する。南北に伸び、北端は第6号建物跡の基礎北辺、南端は第115号土壇と重複する。検出長は2.95mである。遺構の延長上では検出できなかったため、この長さを大きく超えるものではない。幅0.18～0.38m、深さ0.05mで極めて浅い。走行は

およそN-5°-Eを指す。

出土遺物は極めて少なく、第60図42に京都信楽系陶器の小杉碗を示した。推定廃絶期は18世紀末以降である。

第5号溝跡（第57図）

F7-F7・8グリッドの区画AFに位置する。短く東西方向に延びる溝で、東部は第276号溝と重複する。検出長1.25m、幅0.25m、深さ約0.35mである。延長線上では検出されていないため、この長さを大きく越えるものではないと考えられる。溝の幅に対して深く掘られている溝である。走行はおよそN-70°-Eを指す。覆土は最下層が砂で、上層は炭化物が多量に含まれる。出土遺物はなく、図示し得るものがなかった。

第6～12号溝跡（第57・60図）

F7-D7、同E6・7グリッドの区画AEに位置する。長さはやや異なるが、7条の溝は東西に並行している。走行はおよそN-72°-Eで一致している。重複する第3号建物跡、第92・93・94・96・113・134号土壇により古く、溝跡同士の重複は観察できなかった。このことから、7条は同時に開削されたものと考えられる。

土層断面B-B'第I層の砂質土を主体とする堅く締まった覆土は、位置関係から第3号建物跡の覆土と考えられる。第10・11号溝跡の第1層は、硬質な土であり、砂を埋めるための充填土であろうか。第2～6層はすべて砂層であり、黒色・灰色・灰白色の3種の砂が確認される。

溝の深さは一定ではなく、横断面は狭い「U」字形を呈する。また、底面に段差を持つ構造もみられる。

遺構の性格については明らかにし難いが、現状最も近似する遺構として、羽生市東畑遺跡で検出されている災害復旧痕が挙げられる（埤埋文2018）。東畑遺跡では、天明三年（1783）における浅間山噴火による利根川河床上昇に伴う洪水から耕作地を復旧するために「天地返し」を行って

おり、その痕跡が災害復旧痕として検出されている。出土した遺物が極めて少なく、18世紀の遺物のみが確認されている。

第8地点では浅間A降下軽石が調査区西壁セクション（第5～7図）で確認されており、その層準標高は区画AEで10.2m前後である。第6～12号溝跡は10.1～10.2mで検出されており、浅間A降下軽石検出標高とほぼ同じである。

第6～12号溝跡の遺物は、極めて少量の肥前系磁器が出土しており、すべて18世紀代に属する遺物である。なお、遺物はすべて第10号溝跡から出土している。

遺構の性格については検討の余地があるが、第8地点では現地調査で検出されていない浅間A降下軽石を含む畝跡が、本遺構と同一区画内で第一面遺構確認面より0.1～0.2m程度下層で確認されており（第5～7図）、耕作地との関係性が示唆される。

第60図43～45に出土遺物を図示した。43は波佐見系磁器のくらわんか手碗である。44は肥前系磁器の蕎麦猪口である。底部は輪高台で、外面に山水楼閣文の染付が施される。45は鉄製品の刀子である。

（8）焼土遺構（第64～67図）

平面形がおおよそ鍵穴状を呈し、床・壁面が焼けている、あるいは底面に焼土層・炭化物層、切石材による構築物がみられる小規模の土壌を焼土遺構として扱った。

既報告である栗橋宿跡第1地点（埤埋文2018b）や第6地点（埤埋文2019c）で一定数検出されているほか、近隣では上尾市稻荷台遺跡（埤埋文2020a）で相当数確認されている遺構である。簡易的な竈としての機能が推定される。

遺構は区画の偏りがなく分布しているが、第2・5号焼土遺構はそれぞれ複数基が重複しており、同じ場所に複数回作る特徴がある。上尾市稻荷台遺跡においても複数基の重複が確認されてお

り、焼土遺構は構築場所が固定され、且つ短期間で利用している可能性がある。

第1号焼土遺構（第64・66図）

F7-G7グリッドの区画AGに位置する。現地調査では、第209・210号土壌として調査された。第179・189・208号土壌より古い。重複のため全体の形状や規模、長軸の方位は明らかでない。検出された範囲では不整形の土壌状で、長軸1.4m、短軸0.75m、深さ0.1mを測る。

栗橋宿跡第1地点で検出された第1号焼土遺構と酷似しており、燃焼部の平面は円形、焚口は方形と考えられる（埤埋文2018b）。燃焼部は焚口部より一段低く掘り込まれる。

燃焼部の中央には大谷石と推定される長方形の切石材が設置され、焼土が広がっている。大谷石直上の第1層最下部には炭化物が薄く堆積している。焚口部は水平堆積のシルト質土で、第3層は焼土粒子主体、第4・5層は炭化物主体となっている。遺物は焚口の燃焼部付近でまとまって出土している。遺物の出土量は少なく、年代の根拠となるような資料は見出せなかった。推定廃絶期は遺構の重複関係から19世紀後半である。

第66図1～3に出土遺物を図示した。1は瀬戸美濃系陶器の水甕である。外面に呉須と鉄絵による奈良茶碗風の縦縞文様が絵付けられ、体部下位と高台内に鉄釉が刷毛塗状に施釉される。内底面に9箇所、底部に4箇所の目跡がみられる。2は瓦質土器の丸火鉢である。ほぼ酸化焰焼成であり、橙色を呈する。底部はヘラナデ、体部下位にケズリ調整が施される。胎土に角閃石が含まれており在地産と考えられる。3は白色流紋岩製の砥石である。砥面は4面遺存し、裏面に刃幅の広い工具による削痕がみられる。

第2号焼土遺構 a・b（第64・66図）

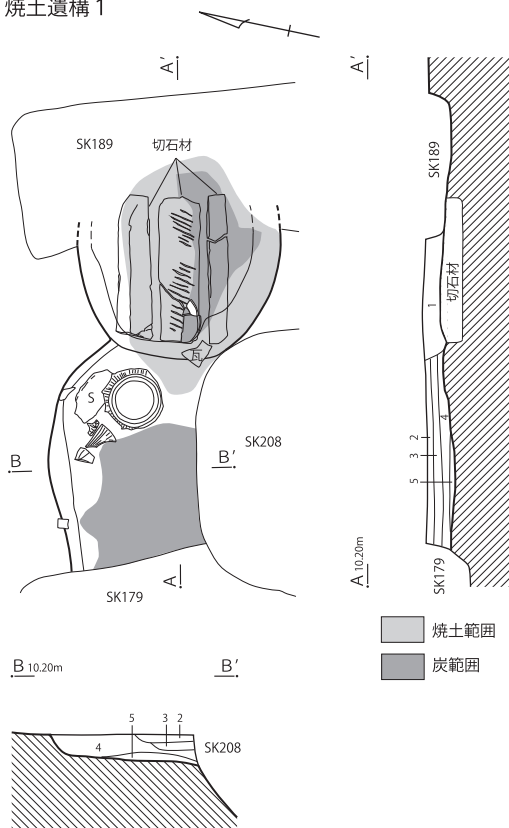
F7-C6グリッドの区画ACに位置する。現地調査では土壌として調査された。2基の独立した遺構か判断が困難であったため、旧第17号土

第 15 表 第一面焼土遺構一覧表

単位：m

番号	区画	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考
1	AG	F7-G7	不整形	(1.40)	0.75	0.10	N-76° -W	SK179・189・208 より古
2a	AC	F7-C6	不整形	1.18	0.85	0.35	N- 8° -W	焼土遺構 2b・3 より新 SK65 と重複
2b	AC	F7-C6	不整形	0.80	0.60	0.12	N-31° -W	焼土遺構 2a より古
3	AC	F7-C6	楕円形	(0.70)	0.55	0.20 ~ 0.30	N-77° -W	焼土遺構 2a より古
4	AC	F7-C6	不整形	0.80	0.50	0.07	N-33° -W	SK65 より新
5a	AD	F7-D6	楕円形	(0.70)	0.65	0.20	N-58° -E	
5b	AD	F7-D6	不整形	(1.25)	(0.90)	0.15	N-0°	木桶 1・焼土遺構 5c より新
5c		F7-D6	不明	(1.05)	0.85	0.33	N-15° -W	SK41・木桶 1・焼土遺構 5 b より古 SK76 と重複
6	AA	F7-B5	楕円形	0.90	0.55	0.15	N-62° -E	

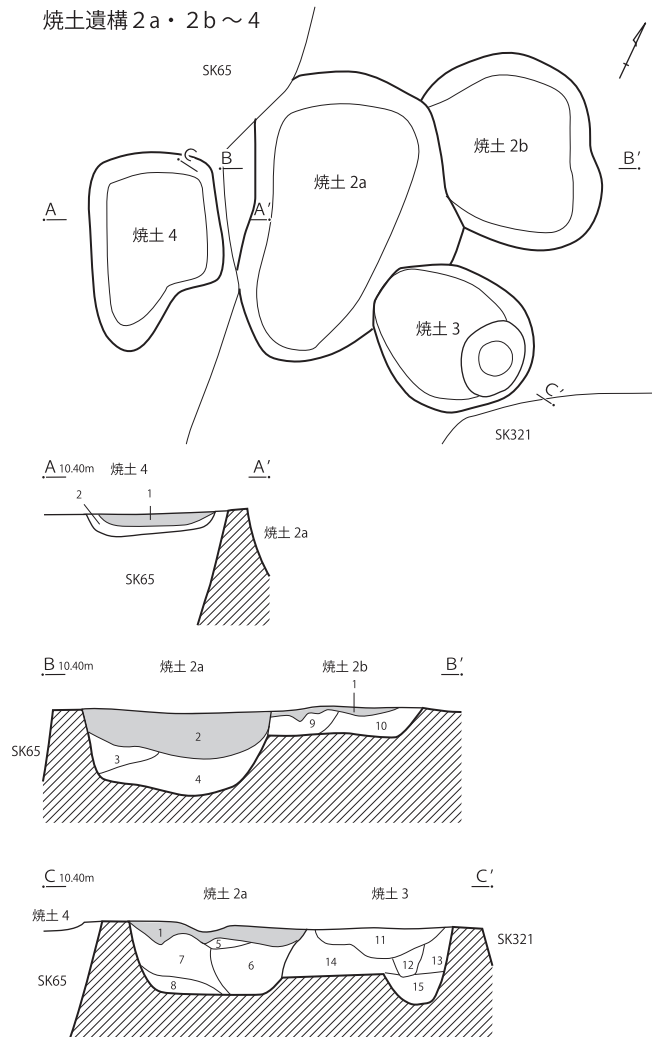
焼土遺構 1



焼土 1

- | | | | |
|---|-------|------|-----------------|
| 1 | 暗灰褐色土 | シルト質 | 最下部に炭化物層状 |
| 2 | 黄褐色土 | シルト質 | 焼土粒子少量 |
| 3 | 赤褐色土 | シルト質 | しまり強 |
| 4 | 黄褐色土 | シルト質 | 焼土粒子主体 |
| 5 | 黒褐色土 | シルト質 | 炭化物 (φ10 mm) 多量 |
| | | シルト質 | 炭化物主体 |

焼土遺構 2a・2b~4



焼土 2a・3

- | | | |
|---|-------|----------------|
| 1 | 焼土層 | |
| 2 | 黒褐色土 | 焼土・炭化物混合土 |
| 3 | 黒褐色土 | 黄褐色土少量 |
| 4 | 黒褐色土 | 粘土質 焼土・炭化物少量 |
| 5 | 灰褐色 | 炭化物多量 |
| 6 | 灰色土 | 焼土・炭化物若干 やや粘質 |
| 7 | 灰色土 | 黄褐色土微量 砂質 |
| 8 | 灰黄褐色土 | |
| 9 | 暗灰色土 | 焼土・炭化物少量 やや粘土質 |

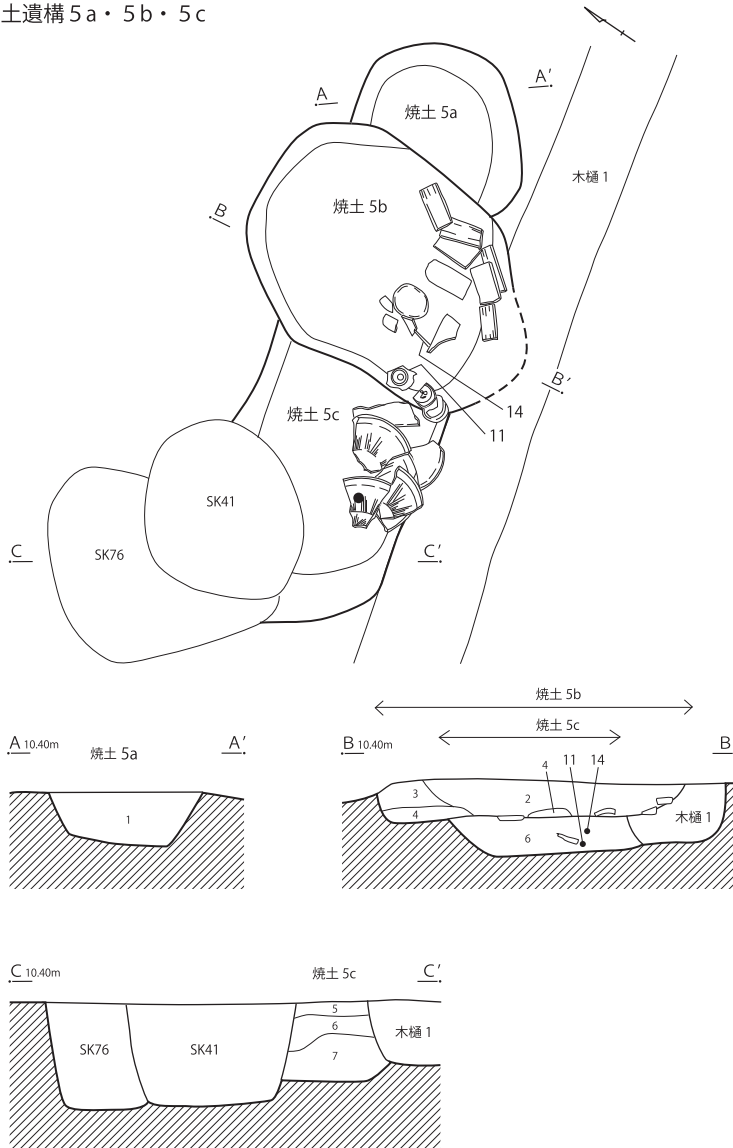
焼土 4

- | | | |
|----|-------|----------|
| 10 | 暗灰色土 | 焼土多量 |
| 11 | 灰黄褐色土 | 焼土・炭化物多量 |
| 12 | 灰褐色土 | 粘土質 |
| 13 | 黒褐色土 | 粗粒 焼土含む |
| 14 | 灰色土 | 砂質 |
| 15 | 黒褐色土 | 粘土質 粗粒 |

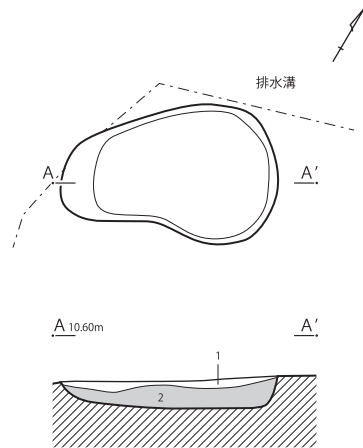


第 64 図 焼土遺構 (1)

焼土遺構 5a・5b・5c



焼土遺構 6



焼土 5a.b.c

- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 暗灰褐色土 | しまり弱 炭化物少量 |
| 2 灰褐色土 | 灰白色粘土多量 しまり強 遺物微量
炭化物少量 |
| 3 灰白色土 | 灰白色粘土を主体 粘性強 |
| 4 黒色土 | しまり極弱 炭化物・焼礫・砂主体 |
| 5 灰褐色土 | しまり極強 均質 混入物少量 |
| 6 暗褐色土 | しまり弱 炭化物・焼土粒子多量
遺物多量 |
| 7 灰白色土 | 粘土主体 しまり強 粘性強 遺物少量 |

焼土 6

- | | |
|-------|---------------|
| 1 黄色土 | 粘土質 炭化物微量 |
| 2 黒色土 | 粘土質 炭化物・焼土主体層 |



第 65 図 焼土遺構 (2)

壙を第 2 a 焼土遺構、旧第 16 号土壙を第 2 b 焼土遺構とした。1 基の焼土遺構の可能性もあることについて留意したい。

第 3 号焼土遺構より新しく、第 65 号土壙と重複する。平面形は不整形で、長軸 1.35 m、短軸 1.15 m、深さ 0.1 ~ 0.3 m を測る。2 a は 2 b より深く掘り込まれる。長軸方位はおよそ N-55° - E を指す。覆土は焼土と炭化物が主体であり、最上層の第 1 層は焼土層である。

2 b は陶磁器が極めて少なく、図示し得るものがなかった。いずれも最新期の陶磁器は型紙摺絵染付磁器である。遺構の推定廃絶期は 19 世紀後

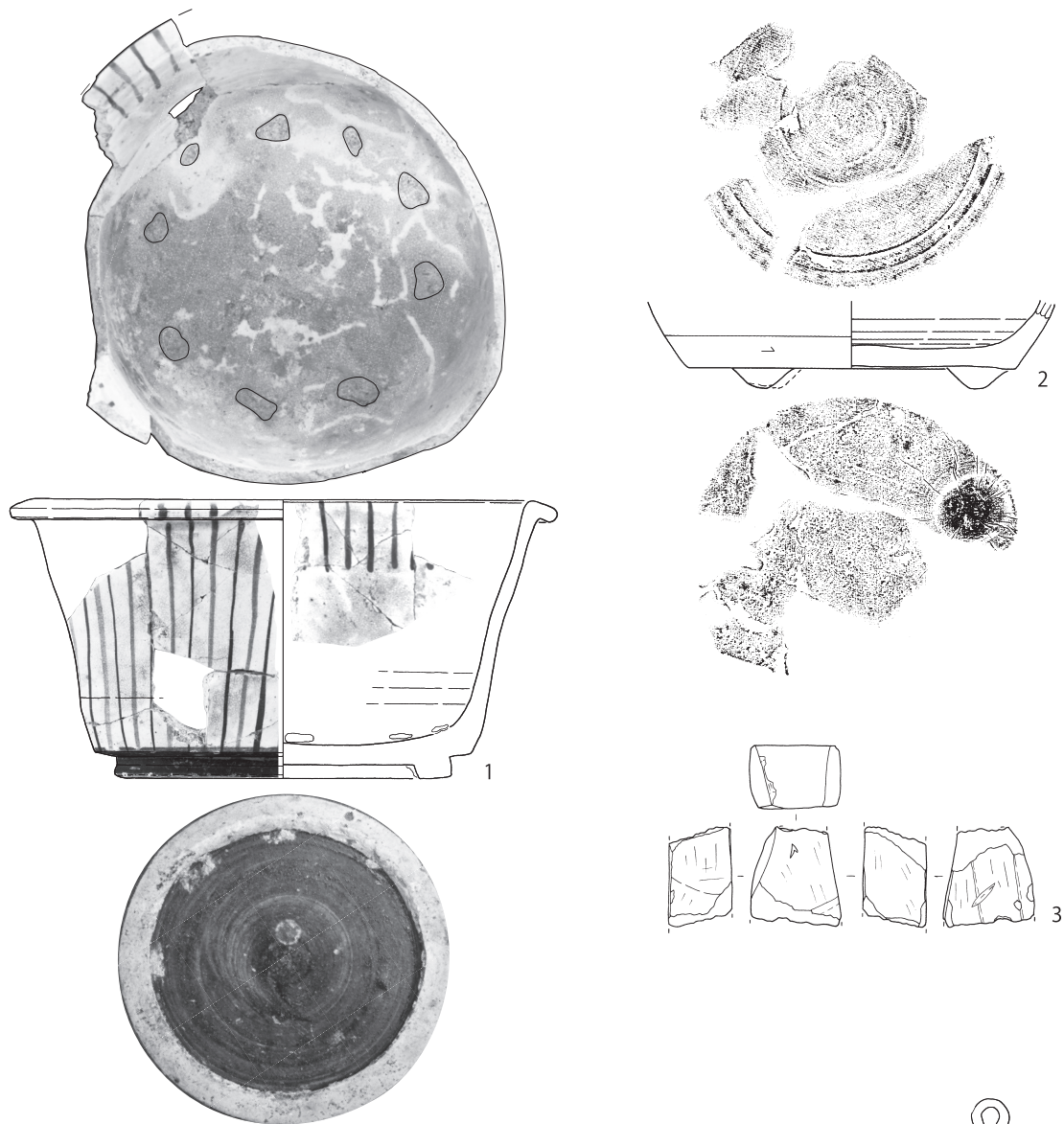
葉である。

第 66 図 4 ~ 8 に 2 a の出土遺物を図示した。4 は瀬戸美濃系磁器の紅皿である。型成形で外面に陰刻蛸唐草文が施文される。全面施釉である。5 は松岡系陶器に類似する鉄釉鍋である。胎土は極めて粗粒で、内面に目跡が遺存する。6 ~ 8 は銅製品で、6 は蝶番、8 は火箸である。

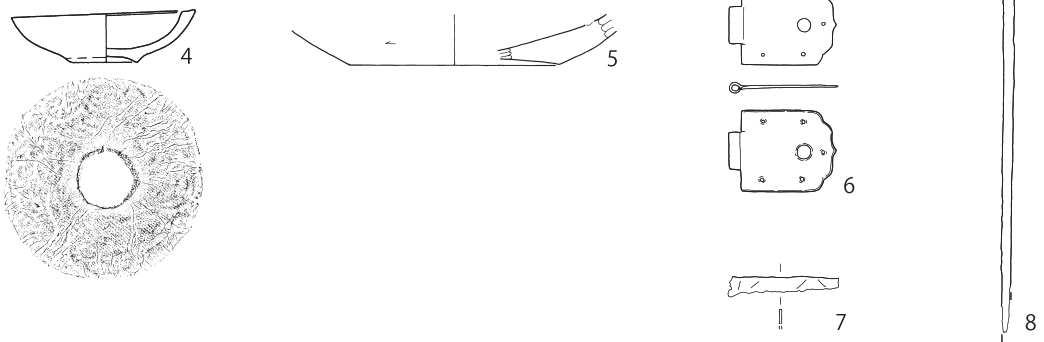
第 3 号焼土遺構 (第 64 図)

F 7 - C 6 グリッドの区画 AC に位置する。現地調査では第 27 号土壙として調査された。第 2 号焼土遺構 a より古い。平面は楕円形で、検出長軸 0.7 m、短軸 0.55 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m を測

焼土遺構 1



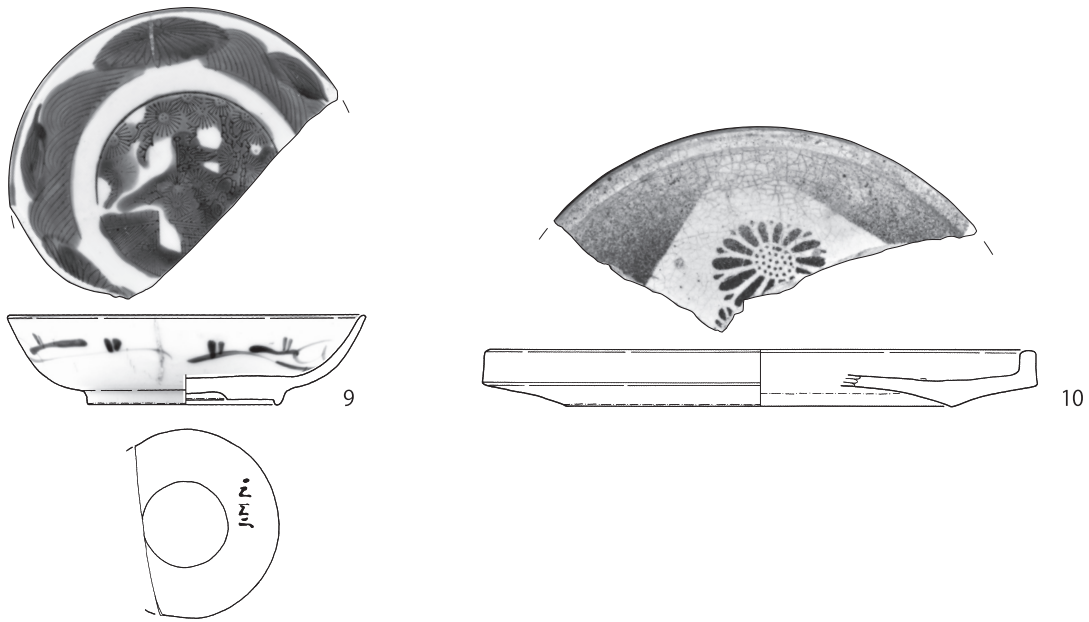
焼土遺構 2a



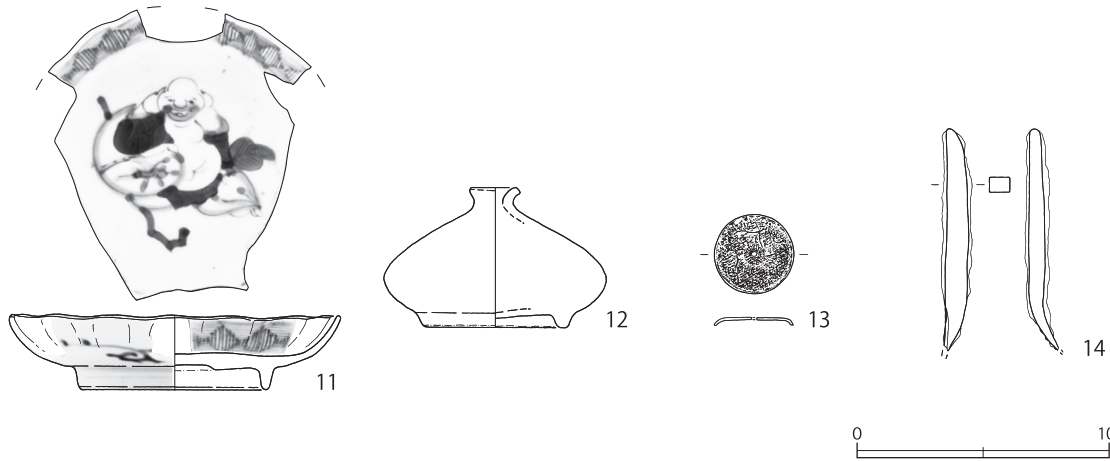
1・3 0 10cm 1/4
2・4~8 0 10cm 1/3

第 66 図 焼土遺構出土遺物 (1)

焼土遺構 5 b



焼土遺構 5 c



第 67 図 焼土遺構出土遺物 (2)

る。東部に円形の落ち込みがみられる。長軸方位はおよそN-77°-Wを指す。

覆土は第 11 層に焼土と炭化物が多量に含まれる。出土遺物は極めて少なく、小破片のため図示し得るものがなかった。遺構の重複関係から、推定廃絶期は 19 世紀後葉以前である。

第 4 号焼土遺構 (第 64 図)

F 7-C 6 グリッドの区画 AC に位置する。現地調査では第 33 号土壌として調査された。第 65 号土壌より新しい。平面形は不整形で、長軸 0.8 m、短軸 0.5 m、深さ 0.07 m を測る。長軸方位

はおよそN-33°-Wを指す。

覆土は上層が焼土層で、下層は砂質土である。出土遺物は極めて少なく、小破片のため図示し得るものがなかった。遺構の重複関係から推定廃絶期は、19 世紀後葉以降である。

第 5 号焼土遺構 a・b (第 65・67 図)

F 7-D 6 グリッドの区画 AD に位置する。現地調査では第 77・68 号土壌として調査された。a と b の共伴性が不確かであることから枝番を付した。第 5 号焼土遺構 c、第 1 号木樋より新しい。

5 a の平面形は楕円形で、検出長軸 0.7 m、短

第 16 表 焼土遺構出土遺物観察表 (第 66・67 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版	
1	陶器	甕	(27.4)	15.3	16.0	DIK	30	普通	灰白	焼土 1	瀬戸美濃系 内外面施釉・釉下彩(青・茶) 体部下位・高台内鉄釉刷毛塗状 内面目跡 9 あり 底部目跡 4 あり	65-9	
2	瓦質土器	火鉢	—	[3.6]	(13.4)	CHIK	15	普通	にぶい橙	焼土 1	底部ヘラナゲ 体部下位ケズリ 内底面渦巻状のナゲ ほぼ酸化焰焼成	65-8	
3	石製品	砥石	長さ [5.5] 幅 5.0 厚さ 3.5 重さ 132.0g								焼土 1	流紋岩 裏面幅広工具痕 砥面 4 遺存	
4	磁器	紅皿	7.2	1.9	2.5	—	100	良好	白	焼土 2a	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉	65-10	
5	陶器	鍋	—	[2.0]	(8.4)	EIK	5	普通	にぶい黄橙	焼土 2a	松岡系カ 外面ケズリ 内面鉄釉・目跡 1 遺存		
6	銅製品	蝶番	長さ 3.0 幅 4.2 厚さ 0.1 重さ 5.2								焼土 2a		
7	銅製品	不明	縦 [6.4] 横 [4.3] 厚さ 0.1 重さ 1.1								焼土 2a		
8	銅製品	火箸	長さ [18.0] 厚さ 0.5 重さ 17.4								焼土 2a	箸頭環形	
9	磁器	皿	14.0	3.5	7.4	—	50	普通	白	焼土 5b	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文・染付 口紅 焼継痕あり 高台内焼継印(赤)		
10	陶器	皿	(21.2)	2.2	(15.2)	—	15	良好	灰白	焼土 5b	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面吹き絵(鉄絵)・目跡 2 遺存		
11	磁器	皿	(12.9)	2.9	7.2	—	60	良好	白	焼土 5c	肥前系 内外面施釉・染付 No. 8		
12	磁器	油壺	1.7	5.5	5.4	—	95	普通	白	焼土 5c	肥前系 外面瑠璃釉	65-11	
13	銅製品	飾金具	径 3.1 高さ 0.3 厚さ 0.1 重さ 6.9								焼土 5c	花鳥文	
14	鉄製品	不明	長さ [8.7] 幅 0.8 厚さ 0.6 重さ 19.7								焼土 5c	No. 13	

軸 0.65 m、深さ 0.2 mを測る。長軸方位はおおよそ N-58°-E を指す。

5b の平面形は不整形で、検出長軸 1.25 m、短軸 0.9 m、深さ 0.15 mを測る。長軸方位は N-0° を指す。

覆土は 5b に灰白色粘土が多量にみられ、その下層に炭化物・焼礫・砂を主体とする層がみられる。出土遺物は 5a にはみられず、5b には型紙摺絵染付平碗を最新とする遺物が出土しているが、その範囲は 5c にまたがる。出土遺物は第 2 層最下部に集中する。推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 67 図 9・10 に出土遺物を図示した。9 は瀬戸美濃系磁器の皿である。蛇ノ目凹形高台で、内面は型押陰刻文染付である。焼継痕がみられ、高台内に朱書きで焼継印がみられる。10 は瀬戸美濃系陶器の皿である。扁平で、底部は削り込みによる上げ底状である。内面に吹き絵がみられる。近代の所産であろう。

第 5 号焼土遺構 c (第 65・67 図)

遺構の重複関係により、独立した遺構と推定されるため、第 5 号焼土遺構 c とした。現地調査では第 67 号土壌として調査された。第 5 号焼土遺

構 b、第 1 号木樋、第 41 号土壌より古く、第 76 号土壌と重複する。重複のため全体の形状や規模は不明ながら、検出長軸 1.05 m、短軸 0.85 m、深さ 0.33 mを測る。長軸方位はおおよそ N-15°-W を指す。

出土遺物は瀬戸美濃系磁器型紙摺絵染付丸碗を最新とするが、第 5 号焼土遺構由来の混入の可能性がある。遺構の重複関係から推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 67 図 11～14 に出土遺物を図示した。11 は肥前系磁器の皿である。12 は肥前系磁器の油壺で、外面に瑠璃釉が施釉される。13 は銅製品の飾金具で、花鳥文がみえる。14 は断面が方形の鉄製品で、器種は不詳である。

第 6 号焼土遺構 (第 65 図)

F 7-B 5 グリッドの区画 AA に位置する。現地調査では第 315 号土壌として調査された。平面形は楕円形で、長軸 0.9 m、短軸 0.55 m、深さ 0.15 mを測る。長軸方位はおおよそ N-62°-E を指す。覆土は上層が下層の炭化物を少量混入する粘質土で、下層は焼土・炭化物主体層である。出土遺物はなく、遺構重複もないため推定廃絶期は不詳である。

(9) 土壌

土壌は282基検出された。各区画の出土遺物の様相を把握するために、土壌については原則区画ごとに掲載し、区画施設と重複する遺構は北の区画に帰属させた。

特徴的な土壌は抽出し、遺構図及び掲載遺物については先行して図示した。掲載遺物は区画ごとにまとめたうえで、全種の遺物を一括掲載した。

非抽出とした土壌については、遺構図を区画ごとにまとめ、出土遺物は陶磁器・土器類、土製品、瓦、木製品、金属製品、銭貨、石製品、硝子・骨製品の順で各種別に分けて掲載した。

なお、各土壌の最新期の陶磁器と推定廃絶期の詳細については、第252表「遺構時期推定一覧表」を参照されたい。また、遺構と出土遺物については特徴的なものを記載していく。

①区画 AA の土壌

区画 AA は第1号杭列より北に位置し、『絵図』にみえる「荒物屋 / 忠助」、『営業便覧』にみえる「米穀肥料店 / 吉岡善六」の区画である。

本区画は栗橋宿跡第9地点から続く区画であり、遺構の大半は第9地点に帰属する。検出された土壌の詳細は『栗橋宿跡VII』(埤埋文2022b)を参照されたい。

第8地点では現地調査で第315号土壌が検出されたが、第6号焼土遺構に振り替えたため欠番である。また、第1号杭列と重複する土壌が4基確認されているが、区画 AA と AB は『営業便覧』段階では一つの区画となっているため、例外として区画 AB に帰属させた。

②区画 AB の土壌 (第68～91図)

区画 AB は第1号杭列より南、第32号溝跡より北に位置し、『絵図』にみえる「青物屋 / 要右衛門」、『営業便覧』にみえる「米穀肥料店 / 吉岡善六」の区画である。『営業便覧』の時期には隣接する区画 AA を含めた一つの区画となっている。

土壌は30基検出された。うち第7・8・23・

24号土壌は第1号杭列と重複する。遺構は調査区の東側に比較的大型の土壌が集中し、西側には小型の土壌が分布する。平面形態はおおむね長方形を呈するものが多く、長軸方向は日光道中と直交する方向に向く傾向がある。

本区画で抽出した土壌はなく、第17表に位置・規模等の基本的な情報、第68～71図に遺構図、第72～91図に出土遺物を図示した。

第7号土壌 (第68・90図)

F7-B5グリッドに位置し、第1号杭列と重複する。平面形は楕円形で、長軸1.25m、短軸0.95m、深さ0.4mを測る。長軸方位はN-7°-Eを指す。

上層は炭化物を含むしまりが強い層で、最下層の第4層に炭化物が薄く堆積する。出土遺物は少なく、第90図1・2に石製品を図示した。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第90図1は白色流紋岩製の砥石である。砥面は2面遺存する。裏面には段をもつノコギリ状工具痕、側面にチョウナ状工具と推定される刃幅の広い工具痕が残る。2はホルンフェルス製の砥石で、下端面に細密なノコギリ状工具痕がみられる。

第8号土壌 (第68図)

F7-B5グリッドに位置し、第1号杭列と重複する。平面形は円形に近い楕円形で、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。長軸方位はN-7°-Wを指す。

上層は白色粒子を多量に含む灰色砂、下層は粘質土である。出土遺物は少なく、図示し得るものがなかった。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第9号土壌 (第68・82図)

F7-B7グリッドに位置する。第10号土壌より新しく、第11・100・180号土壌と重複する。平面形は四隅が遺構の重複で失われているが、隅丸方形と推定される。検出長軸0.9m、短軸1.1m、深さ0.07mを測り、長軸方位N-70°-Eを指す。

第 17 表 第一面区画 AB 土壌一覧表

単位：m

番号	グリッド	形態	長軸	短軸	深さ	方位	備考	挿図
7	F7-B5	楕円形	1.25	0.95	0.40	N-72° -E	杭列 1 と重複	68
8	F7-B5	楕円形	0.75	0.60	0.30	N-7° -W	杭列 1 と重複	68
9	F7-B7	隅丸方形か	(0.90)	1.10	0.07	N-70° -E	SK10 より新 SK11・100・180 と重複	68
10	F7-B7	隅丸長方形	1.45	1.10	0.45	N-67° -E	SK9 より古 SK11 と重複	68
11	F7-B7	長方形	2.75	2.20	0.50	N-67° -E	SK12 より古 SK9・10・122 と重複	68
12	F7-B7	不明	1.10	(0.85)	0.40	N-16° -E	SK73 より古 SK11・122 より新	68
13	F7-C6	楕円形	2.10	1.10	0.50	N-73° -E	SK14 より新	68
14	F7-C6	不整楕円形	(1.70)	0.95	0.30	N-72° -E	SK13 より古	68
15	F7-C6	楕円形	1.20	0.85	0.30	N-17° -W		69
18	F7-B・C6	隅丸長方形	0.75	0.60	0.25	N-74° -E		69
19	F7-C6	不明	0.70	0.65	0.25	N-18° -W	SD32 より古 SK22 より新	69
20	F7-C6	隅丸方形	1.05	0.90	0.20	N-6° -W		69
21	F7-B・C6	不整隅丸方形	2.35	2.25	0.65	N-72° -E	SK22 より古	69
22	F7-B・C6	不明	2.25	(0.75)	0.22	N-68° -E	SK19 より古 SK21 より新	69
23	F7-B6	隅丸方形	1.90	1.85	0.60	N-25° -W	SK24 より古 杭列 1 と重複	69
24	F7-B6	楕円形	(2.55)	2.15	0.45	N-74° -E	SK23 より新 杭列 1 と重複	69
25	F7-C6	隅丸方形	0.60	0.50	0.05	N-14° -W		69
26	F7-B・C6	楕円形	0.70	0.45	0.10	N-30° -W		68
45	F7-B6	隅丸長方形	0.90	(0.50)	0.10	N-20° -W	SK46 より新	69
46	F7-B6	隅丸長方形	1.15	0.85	0.10	N-19° -W	SK45 より古 SK47 より新	69
47	F7-B6	隅丸方形	0.65	(0.55)	0.20	N-41° -W	SK46 より古	69
72	F7-B6	不整形	2.30	1.00	0.35	N-23° -W	SK73・75 と重複	70
73	F7-B6・7	隅丸長方形	(3.65)	2.30	0.30	N-72° -E	SK75 より古 SK12 より新 SK72 と重複	70
75	F7-B6・7	不整形	1.70	1.50	0.40	N-86° -E	SK73 より新 SK72 と重複	70
95	F7-B6・7	隅丸長方形	1.30	1.10	0.60	N-71° -E		70
100	F7-B7	隅丸長方形	[2.15]	1.50	0.60	N-62° -E	SK180 より古 SK9・182 と重複	71
122	F7-B7	隅丸長方形	1.60	(0.90)	0.30	N-65° -E	SK12 より古 SK11 と重複	68
180	F7-B7	不整形	(2.00)	1.80	0.50	N-70° -E	SK100 より新 SK9・181 と重複	71
181	F7-B7	隅丸長方形	1.70	1.00	0.80	N-72° -E	SK182 より新 SK180 と重複	71
182	F7-B7	不明	(3.50)	(1.60)	0.40～ 0.55	N-24° -W	SK181 より古 SK100 と重複	71

覆土は砂を主体としており、上層は炭化物を多量に含む。出土遺物は少なく、第 82 図 2・3 に土製品を図示した。推定廃絶期は 19 世紀後半以降である。

第 82 図 2・3 は京都系の鳩笛で、同一個体と推定される。二枚型成形で、透明釉を施釉し、緑・黄色釉で彩色する。

第 10 号土壌 (第 68・72・83・87 図)

F7-B7 グリッドに位置する。第 9 号土壌より古く、第 11 号土壌と重複する。平面形は隅丸長方形で、長軸 1.45 m、短軸 1.1 m、深さ 0.45 m を測る。長軸方位は N-67° -E を指す。

覆土は砂とシルト質土が交互に堆積し、シルト質土には多量の炭化物と種子が含まれる。種子は

モモ 1 点、カボチャ 22 点である。推定廃絶期は 19 世紀後半以降である。

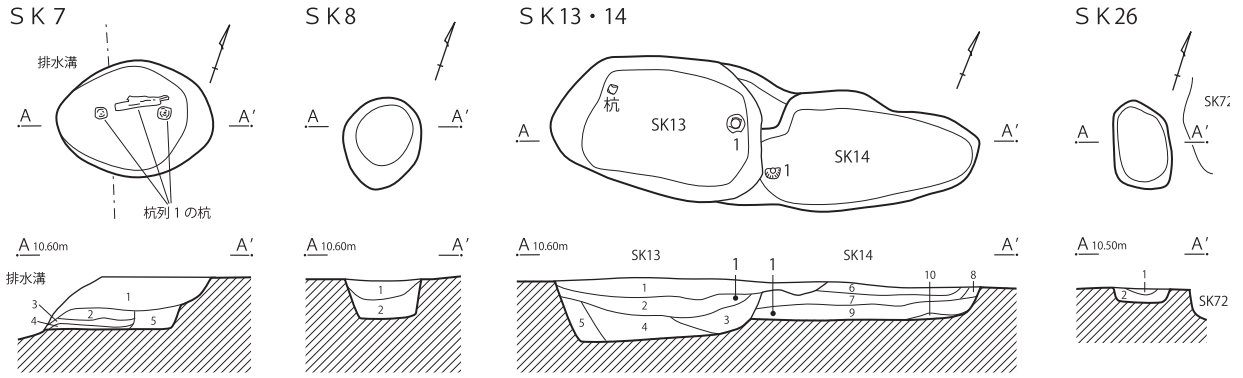
第 72 図 1 に江戸在地系施釉土器の灯明皿、第 83 図 1 に軒棧瓦、第 87 図 1・2 に同一個体の煙管雁首と吸口を図示した。

第 11 号土壌 (第 68・72・87 図)

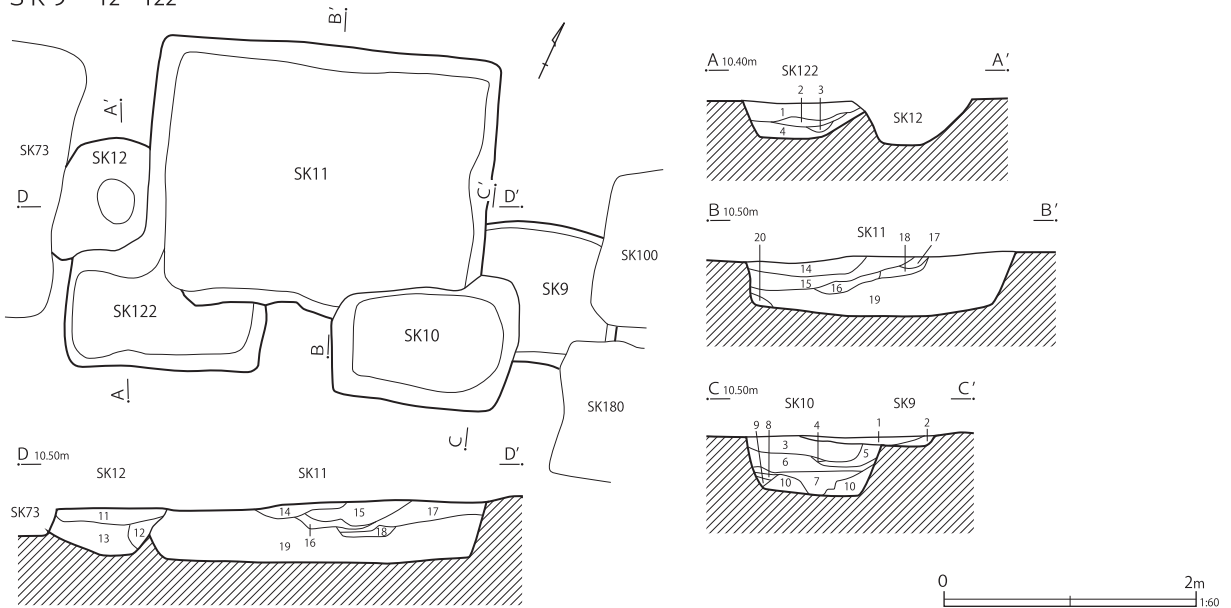
F7-B7 グリッドに位置する。第 12 号土壌より古く、第 9・10・122 号土壌と重複する。平面形は長方形で、長軸 2.75 m、短軸 2.2 m、深さ 0.5 m を測る。長軸方位は N-67° -E を指す。

上層は炭化物を含むシルト質土、下層は白色粒子を多量に含む粗粒砂を主体とし、覆土の大半は砂である。推定廃絶期は 19 世紀後半である。

第 72 図 2～10 に陶磁器類、第 87 図 3～5 に



SK 9 ~ 12・122



SK 7

- 1 灰黄褐色土 炭化物少量 しまり強
- 2 灰褐色土 炭化物少量 しまり強
- 3 暗灰褐色土 しまり強
- 4 炭化物層
- 5 暗灰黄褐色土

SK 8

- 1 灰色砂 白色粒子多量
- 2 暗灰黄褐色土 粘土質

SK 13 (1 ~ 5)・SK 14 (6 ~ 10)

- 1 灰黄褐色土 炭化物粒子少量
- 2 黒褐色土 粗粒 炭化物多量
- 3 灰黄褐色土 黄褐色土含む
- 4 灰黄褐色土 砂質 炭化物粒子少量
- 5 暗灰黄褐色土 砂質 植物質微量
- 6 暗黄褐色土 しまり強
- 7 灰黄褐色土 小礫・砂多量
- 8 灰黄褐色土 砂質 黄褐色土多量 炭化物少量
- 9 黄褐色土 砂質
- 10 黄褐色土 炭化物微量

SK 26

- 1 暗灰褐色土 砂質
- 2 黒色土 炭化物多量 粗粒

SK 9 (1, 2)・SK 10 (3 ~ 10)・SK 11 (14 ~ 20)・SK 12 (11 ~ 13)

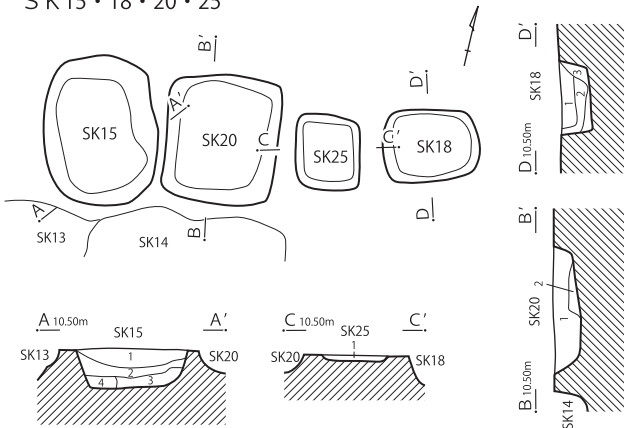
- 1 灰色砂 やや均一 やや淘汰の悪い 二次的なシルト流入層 炭化物(φ2 ~ 3mm)多量
- 2 灰色土 シルト質 やや均一 やや淘汰の悪い 二次的なシルト流入層 砂層
- 3 灰色土 シルト質 やや均一 炭化物(φ2 ~ 5mm)多量 シルトブロック多量
- 4 灰黒色土 シルト質 やや均一 ウリ科の種子を水平に多量
- 5 灰色砂 均一 中粒砂
- 6 灰色土 シルト質 やや均一 やや層理が見える 種子含む 炭化物(φ5 ~ 10mm)多量
- 7 灰色砂 中粒砂(φ5 ~ 10mm)少量
- 8 灰色土 シルト質 やや均一 やや層理が見える 種子含む 炭化物(φ5 ~ 10mm)多量
- 9 灰色砂 やや均一 やや層理が見える 種子含む 炭化物(φ5 ~ 10mm)多量
- 10 灰色土 シルト質 やや均一 やや層理が見える 種子含む 炭化物(φ5 ~ 10mm)多量
- 11 灰黒色土 シルト質 不均一 灰色シルトブロック(φ20 ~ 40mm)・炭化物(φ10 ~ 20mm)・酸化鉄(φ20 ~ 30mm)少量 陶磁器片少量
- 12 灰黒色土 シルト質 均一 灰色シルトブロック(φ20 ~ 40mm)・炭化物(φ10 ~ 20mm)・酸化鉄(φ20 ~ 30mm)少量 陶磁器片少量
- 13 灰色砂 SK11の19層が崩れて流入したもの
- 14 灰黒色土 シルト質 やや均一 淘汰の良いシルト 炭化物(φ2 ~ 3mm)少量 やや粘土質
- 15 灰色土 シルト質 やや均一 淘汰の良いシルト 炭化物(φ2 ~ 3mm)少量
- 16 灰黒色土 シルト質 やや均一 淘汰の良いシルト 炭化物(φ2 ~ 3mm)少量 やや粘土質
- 17 灰色砂 やや粗粒 白色粒子(φ2 ~ 5mm)多量
- 18 灰黒色土 シルト質 やや均一 淘汰の良いシルト 炭化物(φ2 ~ 3mm)少量 やや粘土質
- 19 灰色砂 やや粗粒 白色粒子(φ2 ~ 5mm)多量
- 20 灰色土 シルト質 やや均一 淘汰の良いシルト 炭化物(φ2 ~ 3mm)少量

SK 122

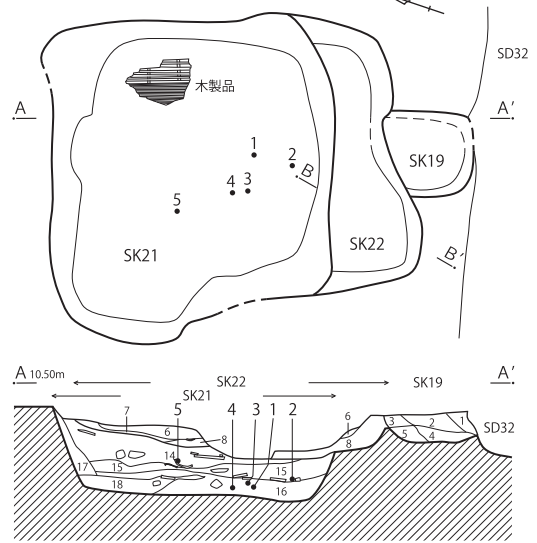
- 1 灰色土 シルト質 やや均一 炭化物(φ5 ~ 50mm)多量 焼土(φ1 ~ 2mm)・木片(φ5 ~ 10mm)少量
- 2 灰色土 シルト質 やや均一 炭化物(φ5 ~ 50mm)多量 焼土(φ1 ~ 2mm)・木片(φ5 ~ 10mm)少量
- 3 暗灰色土 シルト質 均一 炭化物(φ5 ~ 50mm)多量 焼土(φ1 ~ 2mm)・木片(φ5 ~ 10mm)少量 全体に炭化物の微粒を含み、黒色を帯びる上端部にわずかに部分的な砂層あり
- 4 暗灰色土 シルト質 均一 焼土(φ2 ~ 3mm)少量 炭化物(φ2 ~ 3mm)微量

第 68 図 区画 AB 土壌 (1)

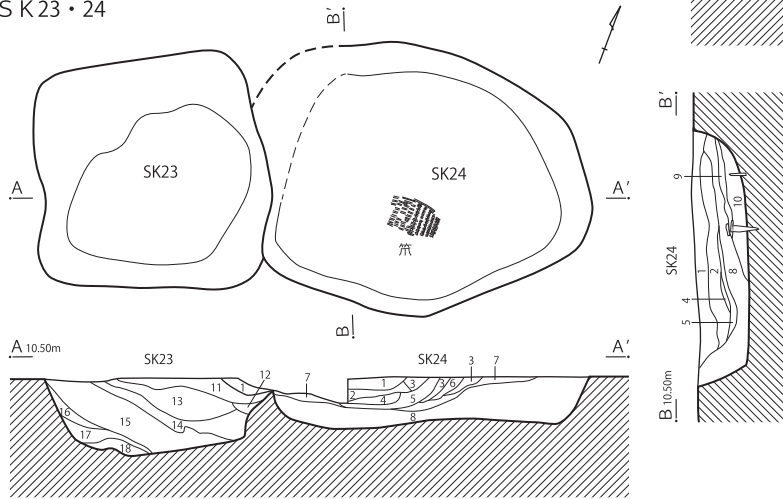
S K 15・18・20・25



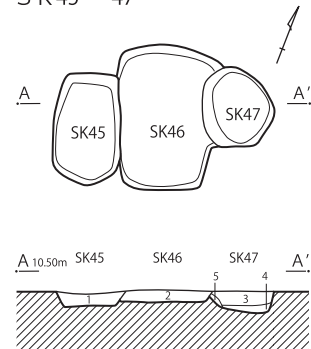
S K 19・21・22



S K 23・24



S K 45 ~ 47



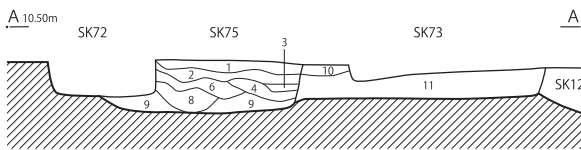
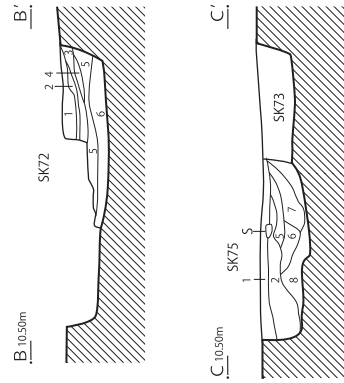
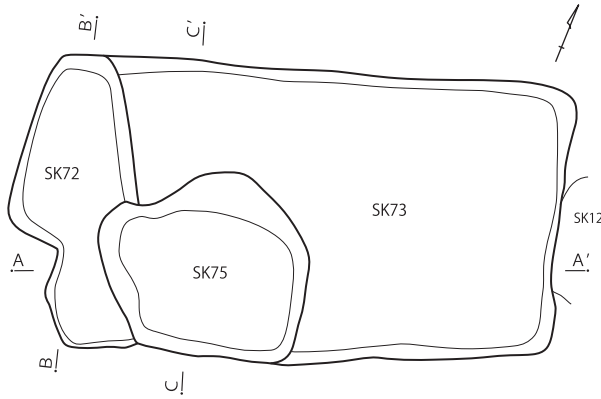
- S K 15
 1 灰色土 橙褐色土 炭化物粒子含む しまり強
 2 暗灰色土 黄褐色土・橙褐色土少量
 3 暗灰色土 砂質
 4 暗灰色土 砂質 橙褐色土多量
- S K 18
 1 黒褐色土 粗粒 小礫・酸化鉄含む
 2 灰黄褐色土 砂質
 3 灰色土 黄褐色土多量
- S K 20
 1 灰黄褐色土 炭化物 鉄分含む
 2 暗黄褐色土
- S K 25
 1 暗灰色土
- S K 19 (1~5)・S K 21 (14~18)・S K 22 (6~13)
 1 灰色土 黄褐色土・橙褐色土多量 砂質
 2 灰色土 橙褐色土少量
 3 灰色土 植物質少量
 4 黒褐色土 橙褐色土少量
 5 暗灰色土 極硬質(基盤層か)
 6 黄褐色土 砂質
 7 灰色土 砂質 炭化材含む
 8 暗灰褐色土 植物質少量
 9 灰黄褐色土
 10 炭化物層
 11 暗灰黄褐色土 炭化物粒子・黄褐色土少量 黒褐色土含む
 12 灰褐色土 粗粒
 13 褐色土 黄褐色土極多量
 14 黒褐色土 粘土質
 15 灰色土 板材多量

- 16 暗黄褐色土 しまり強
 17 黒褐色土
 18 灰黄褐色土 やや粘土質
- S K 23 (11~18)・S K 24 (1~10)
 1 灰色土 橙褐色土含む
 2 黄褐色土 砂質
 3 灰白色砂
 4 黄褐色土 砂質
 5 灰色土 橙褐色土多量
 6 黄褐色土 砂質
 7 灰色土 橙褐色土多量
 8 灰褐色土 砂質 しまり強
 9 灰褐色土 植物質多量
 10 暗灰色土 しまり強
 11 灰色土
 12 灰色土 橙褐色土多量
 13 橙褐色土
 14 明灰色土 粘土質
 15 暗褐色土 砂質 暗灰色土ブロック含む
 16 黒褐色土 粘土質
 17 暗褐色土 砂多量
 18 黒色土 粘土質
- S K 45 (1)・S K 46 (2)・S K 47 (3~5)
 1 灰黄褐色土 砂質 黄白色土含む しまり強
 2 灰黄褐色土 砂質 しまり強
 3 灰褐色土 砂質 炭化物粒子微量 しまり強
 4 暗灰黄褐色土 貝類多量
 5 灰黄色土 砂質 しまり強

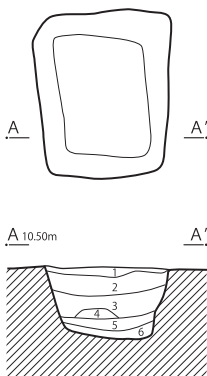


第 69 図 区画 AB 土壌 (2)

S K 72・73・75



S K 95



- | | | | | |
|--------|--------|------|----|----------------------|
| S K 95 | 1 灰色土 | シルト質 | 均一 | カンナくず状の木片多量 |
| | 2 灰色土 | シルト質 | 均一 | 木片少量 |
| | 3 灰色土 | シルト質 | 均一 | カンナくず状・チップ状の木片多量 粘性弱 |
| | 4 灰色土 | シルト質 | 均一 | 木片少量 粘性強 |
| | 5 暗灰色土 | シルト質 | 均一 | 地山由来 粘性強 |
| | 6 暗灰色土 | シルト質 | 均一 | 地山由来 粘性強 |

S K 72

- | | | | |
|--------|------|----|----------------------|
| 1 灰色土 | シルト質 | 均一 | 炭化物 (φ2~3mm) 少量 |
| 2 炭化物層 | やや均一 | | パイプたばこ状の木片からなる |
| 3 灰色土 | シルト質 | 均一 | 炭化物 (φ2~3mm) 少量 |
| 4 炭化物層 | やや均一 | | パイプたばこ状の木片からなる |
| 5 灰色土 | シルト質 | 均一 | 炭化物 (φ2~3mm) 少量 木片含む |
| 6 黒色土 | シルト質 | 均一 | 炭化物 (φ2~3mm) 少量 やや暗色 |

S K 73 (10、11)・S K 75 (1~9)

- | | | | |
|---------|------|-------|--|
| 1 灰色砂 | シルト質 | やや不均一 | 炭化物 (φ3~5mm)・木片 (φ10mm)・酸化鉄少量 |
| 2 灰色砂 | シルト質 | やや不均一 | 炭化物 (φ3~10mm)・木片 (φ10mm)・酸化鉄少量 一層より砂層 |
| 3 暗灰色砂 | シルト質 | やや不均一 | 炭化物 (φ2~3mm) 少量 木片少量 |
| 4 暗灰色砂 | シルト質 | やや不均一 | 木片多量 炭化物含む 礫 (φ30mm) 少量 廃棄層 |
| 5 暗灰色砂 | シルト質 | やや均一 | 炭化物 (φ2~5mm)・木片少量 |
| 6 暗灰色砂 | シルト質 | やや均一 | 炭化物 (φ2~5mm)・木片少量 やや粘土質 |
| 7 灰色粘土 | シルト質 | 不均一 | 炭化物 (φ3~5mm) 多量 木質 (φ2~5mm)・酸化鉄 (φ5~10mm) 少量 |
| 8 灰色粘土 | シルト質 | 不均一 | 炭化物 (φ3~5mm) 多量 木質 (φ2~5mm)・酸化鉄 (φ5~10mm)・炭化物少量 |
| 9 暗灰色砂 | シルト質 | やや不均一 | 木片多量 炭化物含む 礫 (φ30mm) 少量 廃棄層 |
| 10 灰色土 | シルト質 | 不均一 | やや砂質 炭化物 (φ3~5mm)・瓦片・木質少量 |
| 11 暗灰色土 | シルト質 | 不均一 | やや砂質 炭化物 (φ5~10mm)・酸化鉄・木質少量 最上位に薄い砂粒 (φ1mm) 層が蓄積 |



第70図 区画AB土壌(3)

金属製品を図示した。

第12号土壌(第68図)

F7-B7グリッドに位置する。第73号土壌より古く、第11・122号土壌より新しい。平面形は遺構の重複により不詳である。検出長軸1.1m、短軸0.85m、深さ0.4mを測り、長軸方位はN-16°-Eを指す。

上層はシルト質土で、下層の砂は第11号土壌の第19層から流入したものである。出土遺物は少なく、図示し得るものがなかった。遺物は上層から出土している。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第13号土壌(第68・72・89図)

F7-C6グリッドに位置する。第14号土壌より新しい。平面形は楕円形で、長軸2.1m、短軸1.1m、深さ0.5mを測る。長軸方位はN-73°-Eを指す。

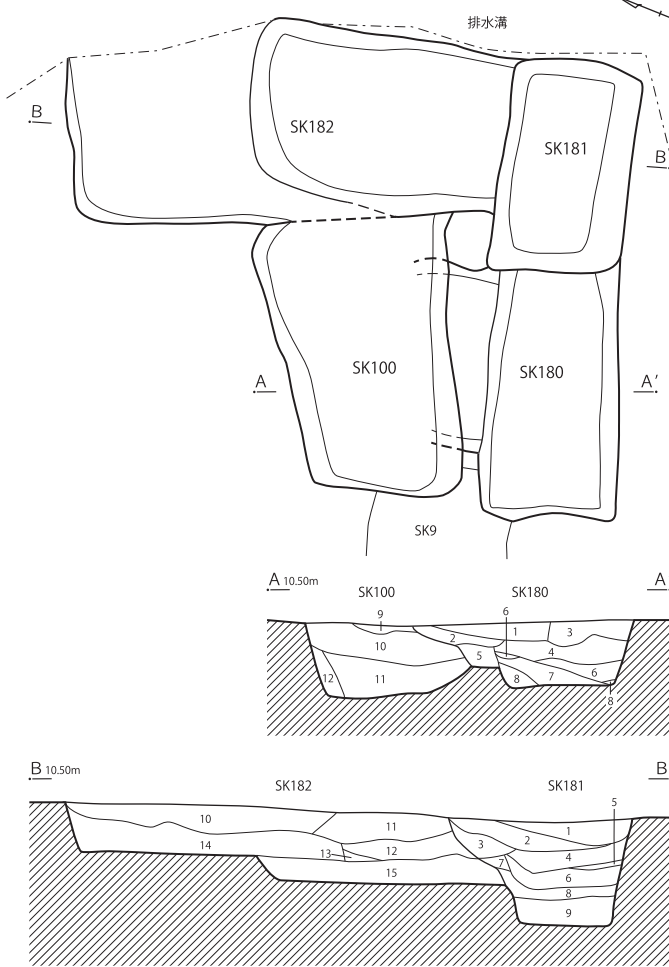
上層は炭化物を多く含み、下層は砂質土である。第5層には植物質が含まれる。推定廃絶期は19世紀後半以降である。

第72図11~13に陶磁器類、第89図1に銭貨を図示した。

第14号土壌(第68・72・89図)

F7-C6グリッドに位置する。第13号土壌

S K 100・180～182



- S K 100 (9～12)・S K 180 (1～8)
- | | | |
|----|----------|-------------|
| 1 | 灰褐色土 | 炭化物多量 |
| 2 | 灰黄褐色土 | 黄褐色土多量 |
| 3 | 暗黄褐色土 | しまり強 |
| 4 | 灰褐色土 | 黄褐色土含む しまり強 |
| 5 | 黒褐色土 | |
| 6 | 灰黄褐色土 | シルト質 |
| 7 | 灰褐色土 | 木質少量 しまり弱 |
| 8 | 炭化物・灰混合層 | |
| 9 | 灰黄褐色土 | 炭化物多量 |
| 10 | 灰褐色土 | 砂質 炭化物多量 |
| 11 | 灰褐色土 | しまり弱 |
| 12 | 黒褐色土 | 木質片多量 しまり弱 |

- S K 181 (1～9)・S K 182 (10～15)
- | | | |
|----|-------------------|---------------|
| 1 | 灰黄褐色土 | |
| 2 | 黒褐色土 | |
| 3 | 黒色土 | 樹枝含む 碎礫含む |
| 4 | 黒褐色土 | 橙色土 炭化物・灰多量 |
| 5 | 炭化物・灰混合層と黄白色粘土の互層 | |
| 6 | 黒色土 | 碎礫多量 |
| 7 | 黒褐色土 | 砂質 |
| 8 | 黄白色粘土層 | |
| 9 | 黒褐色土 | 板材・植物質少量 |
| 10 | 灰黄褐色土 | 炭化物多量 砂質 |
| 11 | 灰黄褐色土 | 橙色土極多量 砂質 |
| 12 | 灰褐色土 | 炭化物・灰含む しまり弱 |
| 13 | 灰黄色土 | シルト質 |
| 14 | 灰褐色土 | 橙色土多量 小礫少量 砂質 |
| 15 | 灰褐色土 | |

第71図 区画AB土壌(4)

より古い。平面形は不整楕円形で、検出長軸1.7m、短軸0.95m、深さ0.3mを測る。長軸方位はN-72°-Eを指す。

最上層はしまりが強い土層で、その直下に小礫と砂を多量に含む。下層は少量の炭化物を含む砂質土である。水平堆積で、基礎状遺構に類似する土層である。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第72図14～17に陶磁器、第89図2に銭貨を図示した。

第15号土壌(第69図)

F7-C6グリッドに位置する。平面形は楕円形で、長軸1.2m、短軸0.85m、深さ0.3mである。長軸方位はN-17°-Wを指す。

上層に炭化物を含み、下層は砂質土である。出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかつ

た。推定廃絶期は19世紀後葉である。

第18号土壌(第69図)

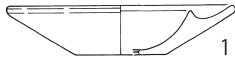
F7-B・C6グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸0.75m、短軸0.6m、深さ0.25mを測る。長軸方位はN-74°-Eを指す。

最上層は粗粒な土で、小礫を多量に含む。中層は砂質土で、最下層は黄褐色土を多量に含む灰色土である。出土遺物は極めて少なく、図示し得るものがなかつた。推定廃絶期は不詳である。

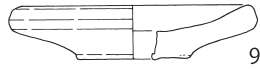
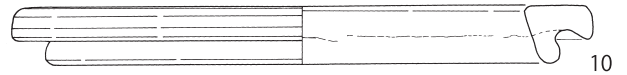
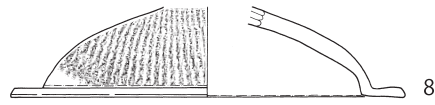
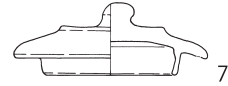
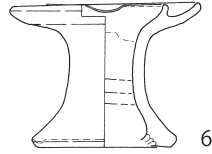
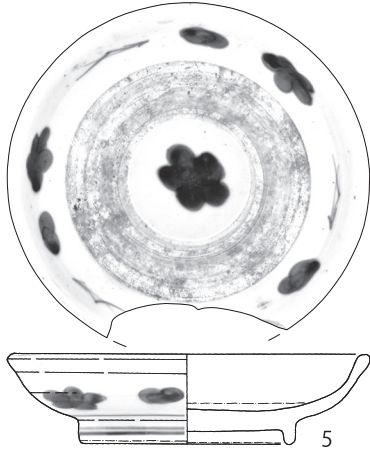
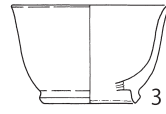
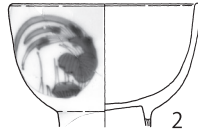
第19号土壌(第69図)

F7-C6グリッドに位置する。第32号溝跡より古く、第22号土壌より新しい。平面形は遺構の重複により不詳である。検出長軸0.7m、短軸0.65m、深さ0.25mを測り、長軸方位はN-18°-Wである。

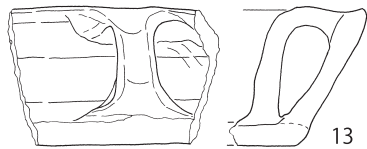
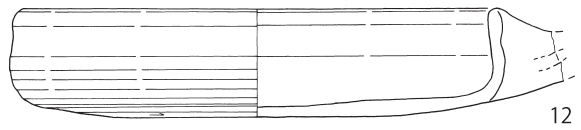
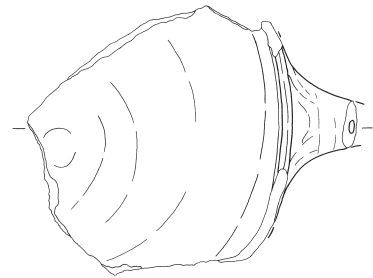
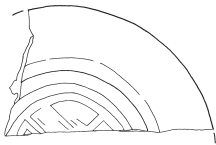
SK10



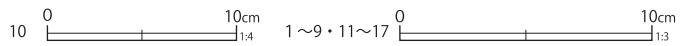
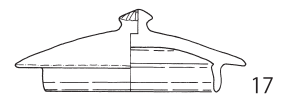
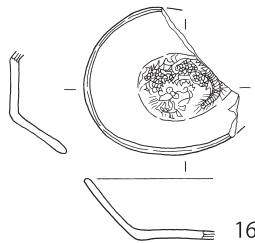
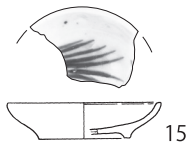
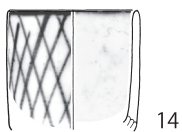
SK11



SK13

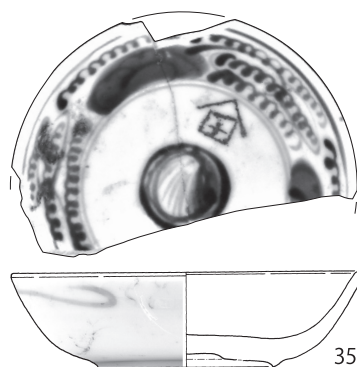
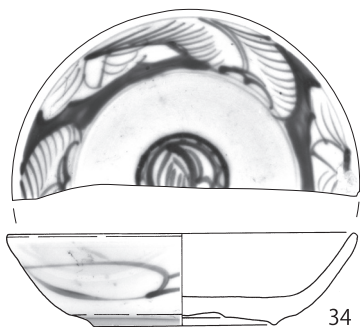
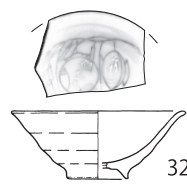
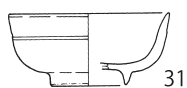
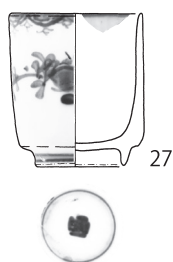
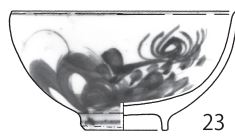
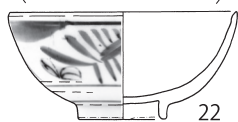
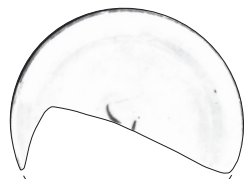
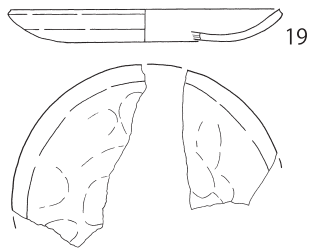
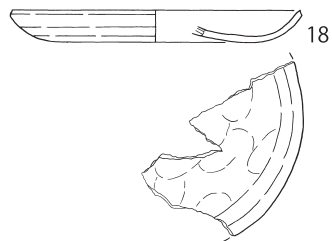


SK14



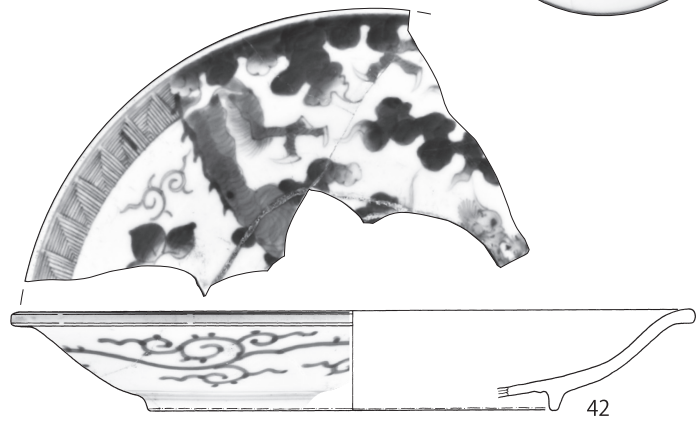
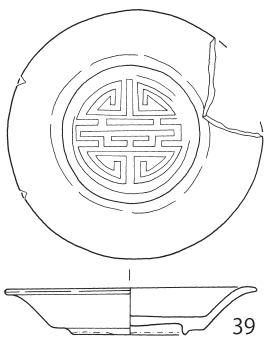
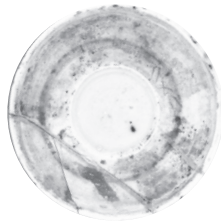
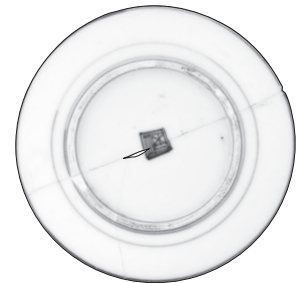
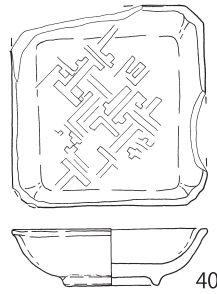
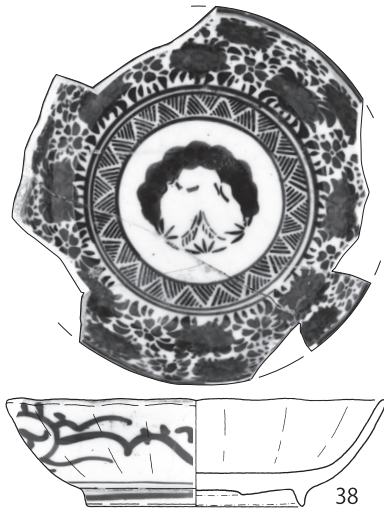
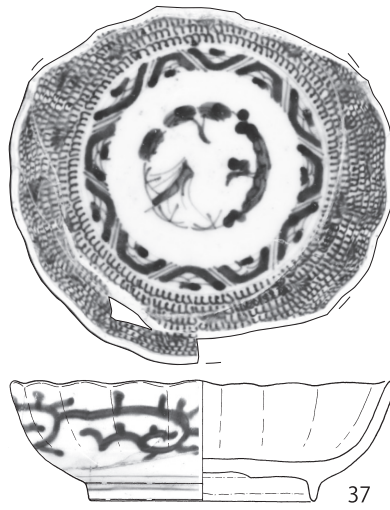
第 72 图 区画 AB 土壙出土遺物 (1)

SK20



第73図 区画AB 土壇出土遺物(2)

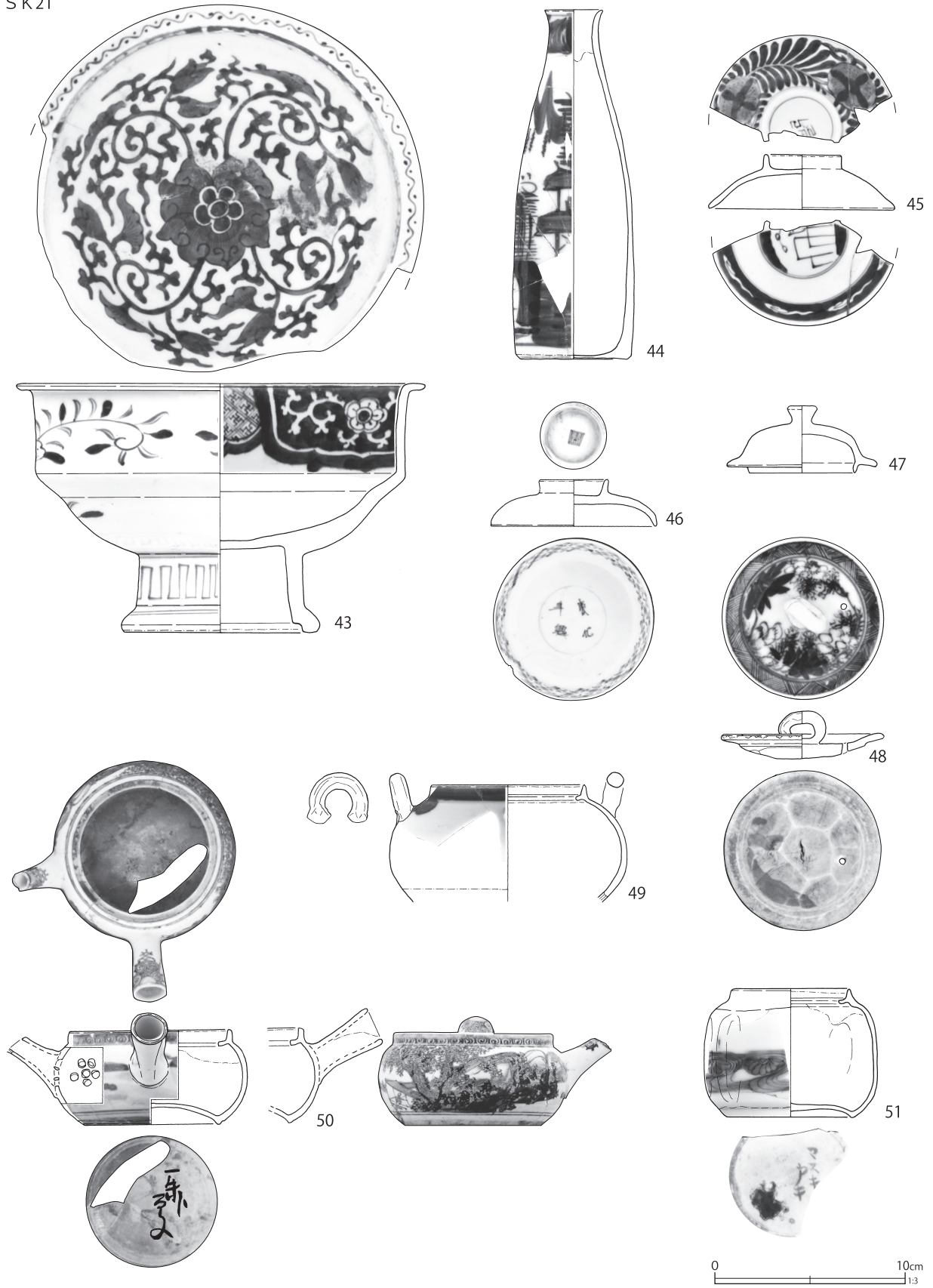
SK21



0 10cm
1:3

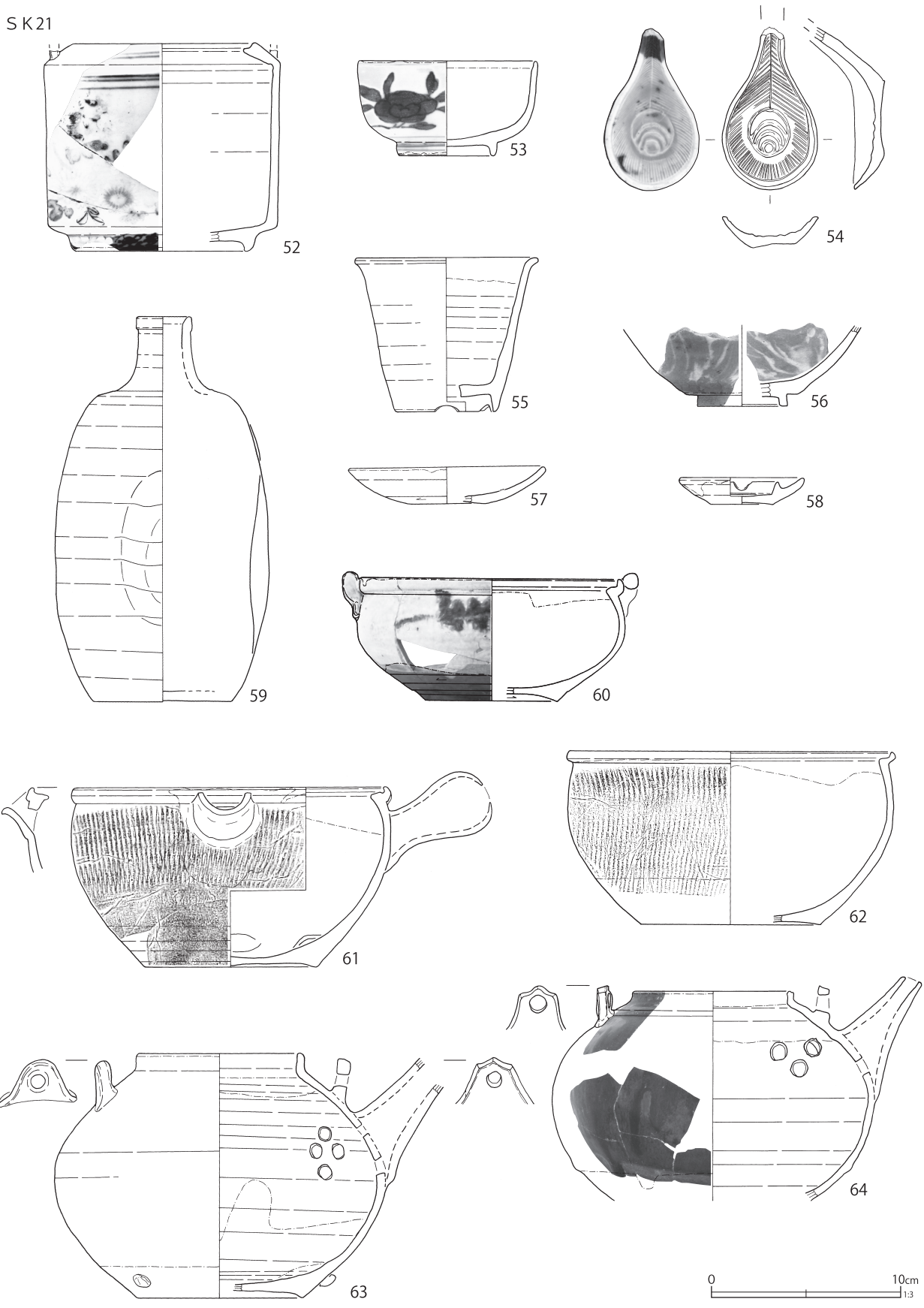
第74图 区画AB土壙出土遺物(3)

SK21



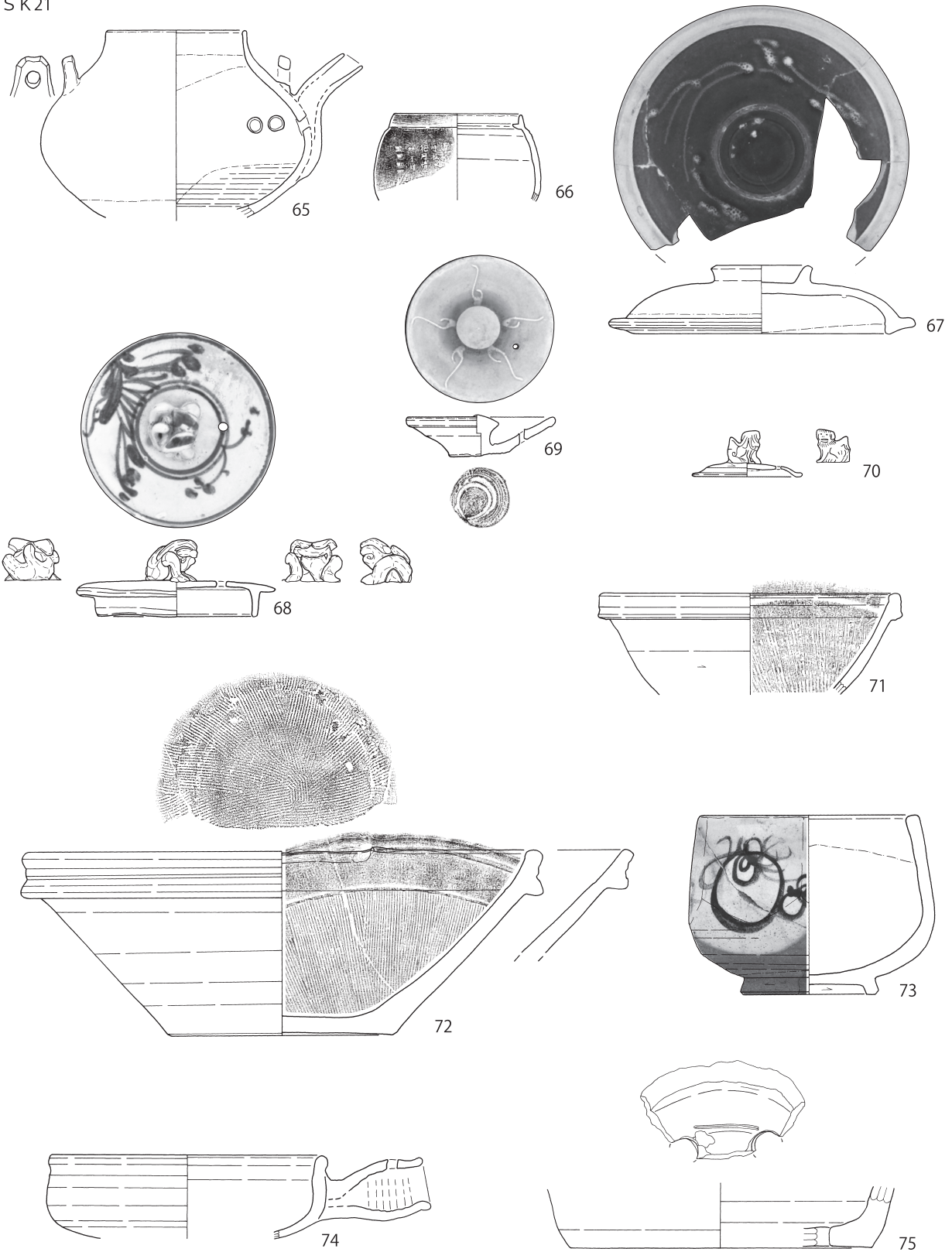
第75图 区画AB土壤出土遺物(4)

SK21



第76图 区画AB土壤出土遺物(5)

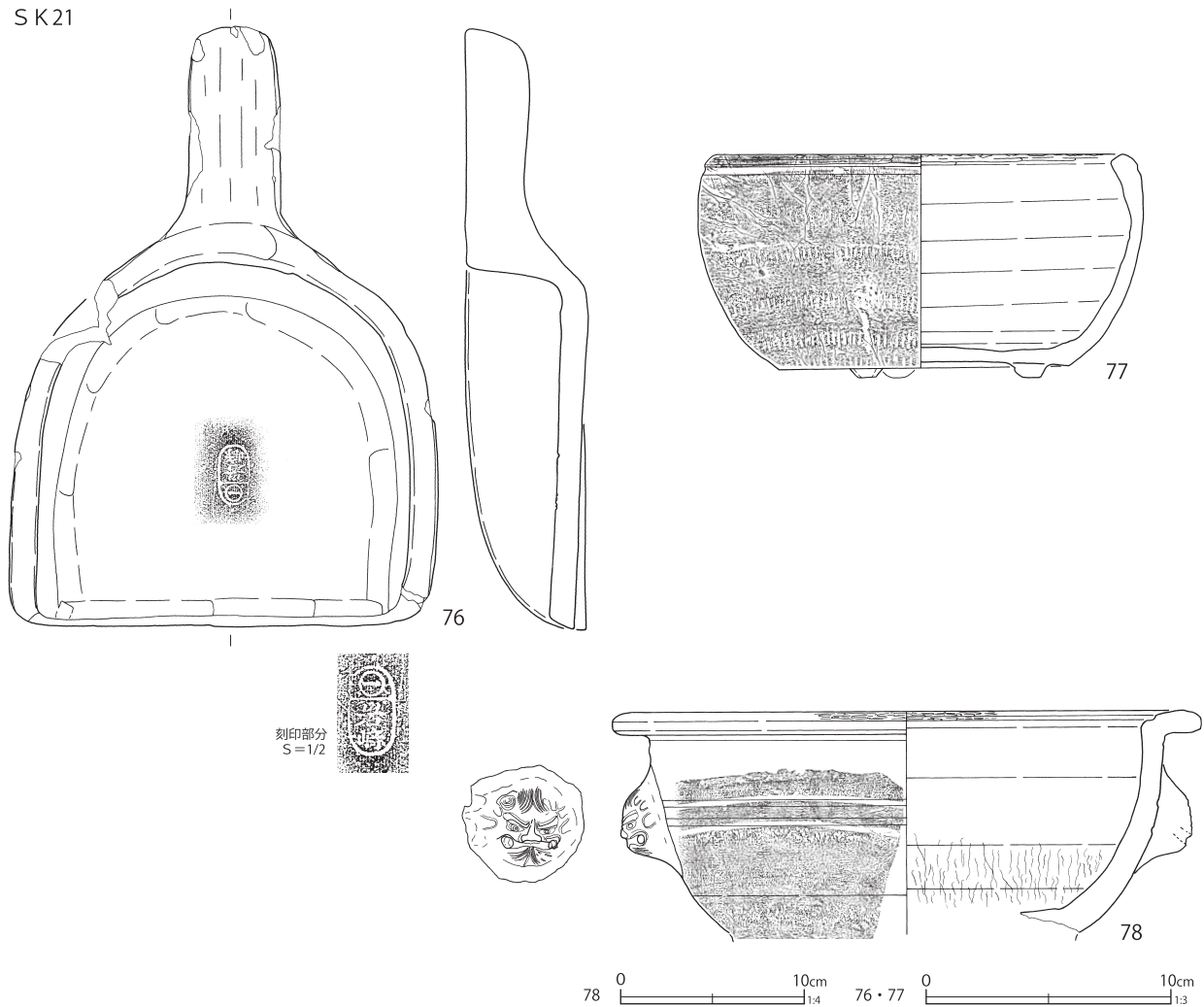
S K21



71・72 0 10cm 1/4 65~70・73~75 0 10cm 1/3

第77図 区画AB土壇出土遺物(6)

SK21



第 78 図 区画 AB 土壇出土遺物 (7)

橙色土を多く含む土層である。第 5 層は硬質な土で基盤層の可能性はある。出土遺物はないが、遺構の重複関係から推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 20 号土壇 (第 69・73 図)

F 7 - C 6 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、長軸 1.05 m、短軸 0.9 m、深さ 0.2 m を測る。長軸方位は N - 6° - W を指す。

土層の大部分である第 1 層には炭化物が含まれる。出土遺物は少なく、推定廃絶期は 19 世紀後葉である。

第 73 図 18・19 に出土遺物を図示した。18・19 はかわらけ小皿である。手捏ね成形で下面に指頭痕、体部上位にナデがみられる。胎土中心部

は灰白色で、石英を含む特徴がある。18 は第 24 号土壇出土のものと同接合関係にある。

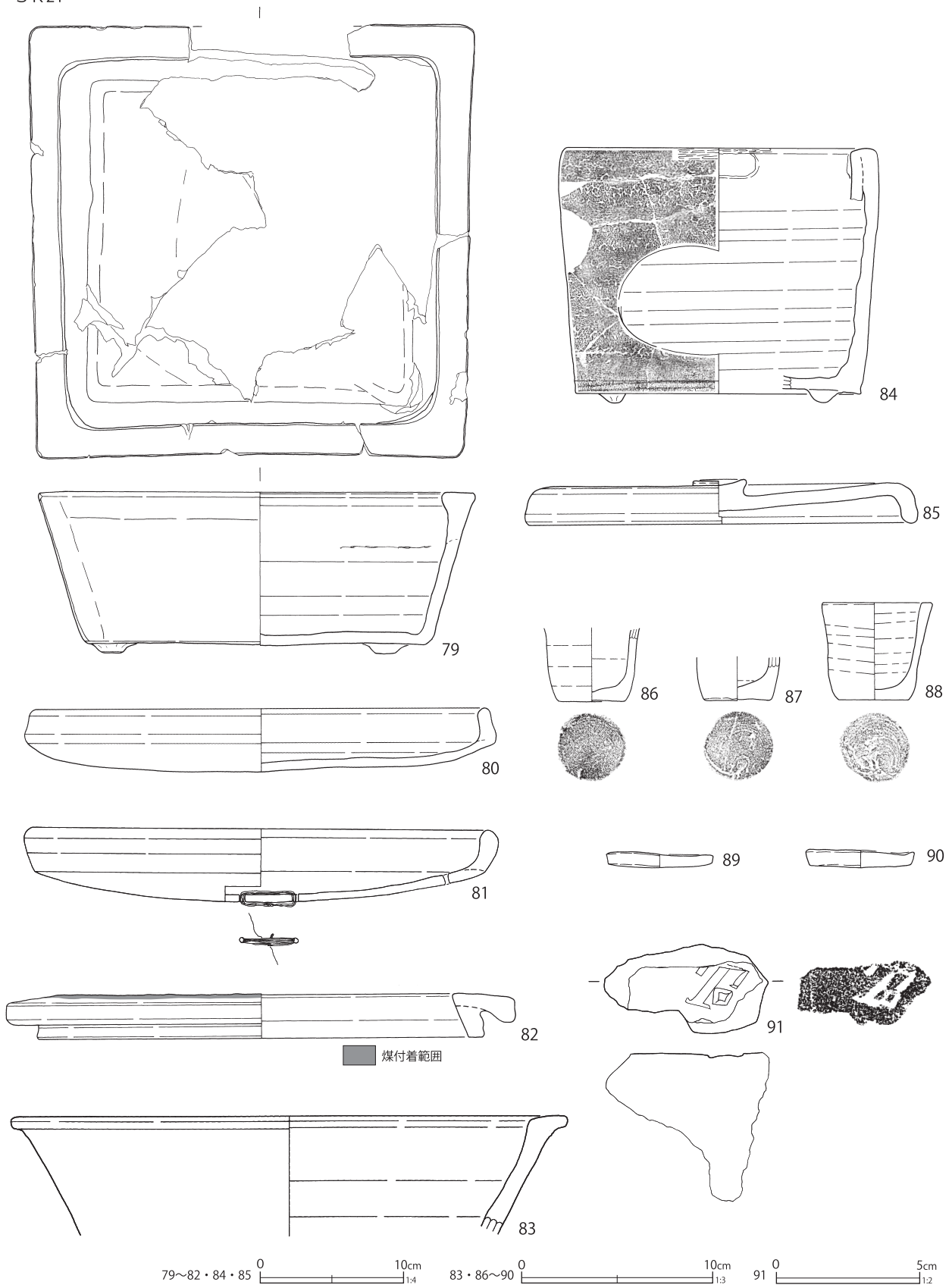
第 21 号土壇 (第 69・73 ~ 79・82 ~ 87・90・91 図)

F 7 - B・C 6 グリッドに位置する。第 22 号土壇より古い。平面形は不整隅丸方形で、長軸 2.35 m、短軸 2.25 m、深さ 0.65 m を測る。長軸方位は N - 72° - E を指す。

第 15 層には板材が多量に廃棄されている。その直上に厚く堆積する第 14 層は、板材等の植物質の腐植作用によるものであろうか、黒褐色粘質土となっている。

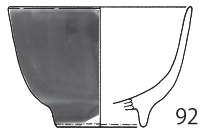
遺物は陶磁器類や木製品等が多量に出土しているが、近代の遺物が混在している。第 22 号土壇と大きく重複しているため、第 22 号土壇からの

SK21

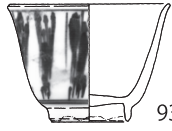


第79図 区画AB 土壇出土遺物(8)

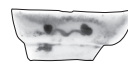
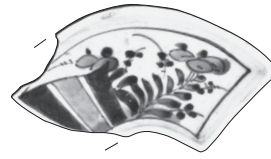
SK22



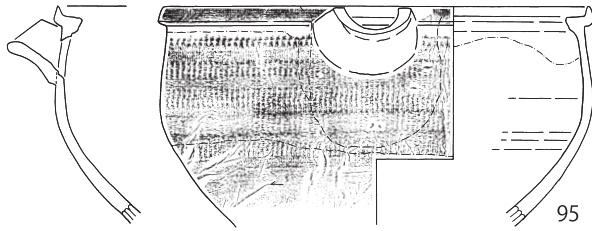
92



93



94



95

SK23

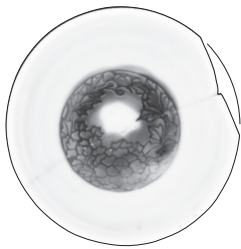


96



97

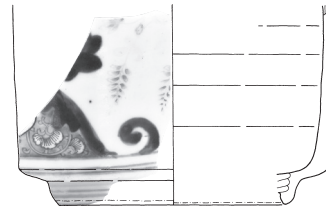
SK24



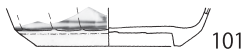
98



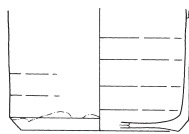
99



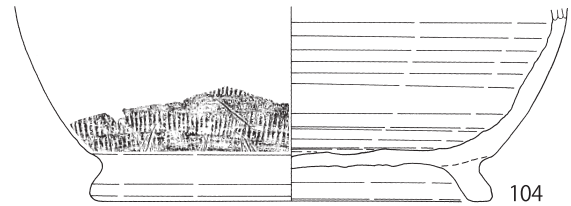
100



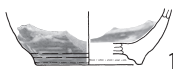
101



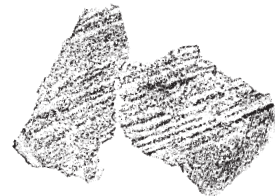
103



104



102

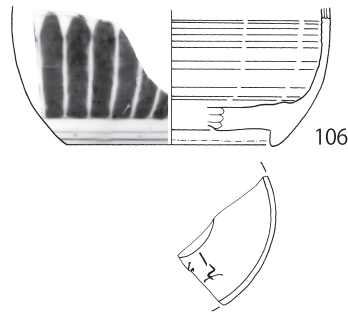
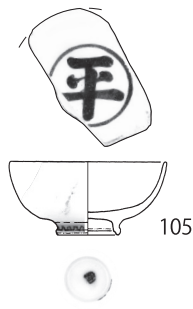


0 10cm 1:4

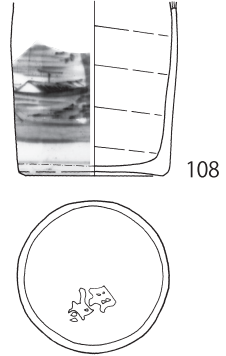
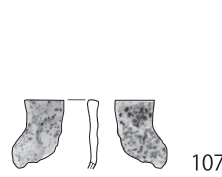
0 10cm 1:3

第80图 区画AB土壙出土遺物(9)

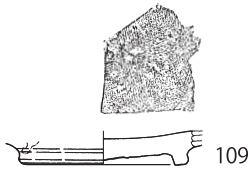
SK72



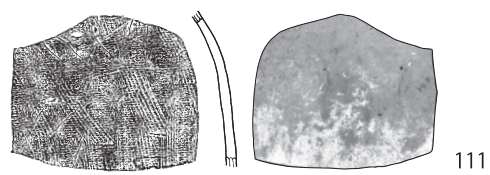
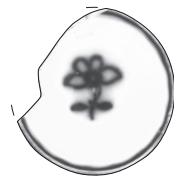
SK73



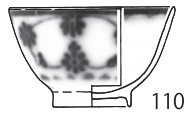
SK95



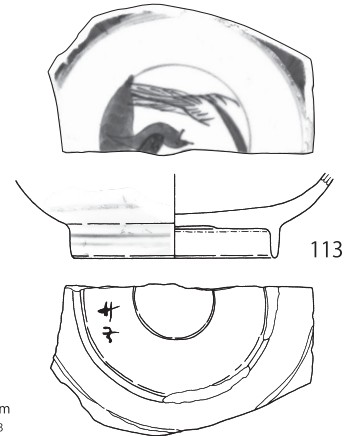
SK180



SK181



SK182



第81図 区画AB 土壇出土遺物(10)

混入である可能性が高い。なお、重複遺構と接合関係にある遺物は下層遺構からの巻き上げを考慮すると、下層遺構に帰属すると考えられる。そのため、酸化コバルト染付磁器については第21号土壇に伴うものと考えられる。また、常滑系甕の破片が第二面第337号土壇(第456図)と接合しており、下層遺構の遺物を巻き込んでいる。推定廃絶期は遺構の重複関係と出土陶磁器から19世紀後葉である。

第73図20～35、第74～79図に出土陶磁器類、第82図1・4に土製品、第83図2に瓦、

第84・85図、第86図24～29に木製品、第87図6～23に金属製品、第90図3～8に石製品、第91図に骨製品を図示した。以下に特徴的な遺物について記述する。

第73図20～35は瀬戸美濃系磁器である。20・21は端反形碗である。20は口縁の反りが弱く、21は小法量で口縁の反りが強い。いずれも弱く被熱する。22は色絵丸碗で、外面に赤・青・緑の上絵付を施す。高台内は深く削り込まれている。23は丸碗で外面と口唇部に酸化コバルト染付が施される。第22号土壇出土製品と接合する。26

第18表 区画AB土壌出土遺物観察表(1)(第72~81図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
1	施釉土器	灯明皿	(8.8)	1.9	(3.6)	IK	20	普通	橙	SK10	江戸在地系 胎土粉質 内外面施釉 釉剥落激しい	
2	磁器	碗	7.3	[4.8]	—	—	45	良好	白	SK11	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 焼継痕 底部焼継印(透明)	
3	磁器	坏	(6.2)	2.8	(3.6)	—	20	良好	白	SK11	瀬戸美濃系 内外面施釉	
4	磁器	坏	(6.1)	3.0	(2.6)	—	45	良好	白	SK11	肥前系 内外面施釉 内面上絵付(赤・黄・緑・青・黒)	
5	磁器	皿	13.8	3.5	8.1	—	90	良好	白	SK11	肥前系 内外面施釉・染付 見込み蛇ノ目釉剥ぎ 被熱	
6	陶器	灯火具	4.6	5.7	5.3	HIK	90	普通	灰白	SK11	京都信楽系 内外面施釉 被熱(釉剥落) 最大径7.6cm	
7	陶器	蓋	—	2.8	5.0	EHIK	95	良好	赤灰	SK11	松岡系 上面海鼠釉 下面重焼痕遺存 最大径7.6cm	66-1
8	陶器	蓋	—	[3.5]	(15.5)	HIK	15	普通	灰黄	SK11	内面黄~緑褐色系釉 上面柿釉・トビガンナ施文	66-2
9	土師質土器	目皿	(9.0)	2.1	4.4	EHIK	50	普通	橙	SK11	底部糸切痕 内面被熱(白色化)	
10	瓦質土器	竈罏	(24.4)	3.1	(26.4)	CHIK	50	良好	にぶい橙	SK11	燻す 上・内面煤付着	
11	磁器	皿	(12.2)	2.3	(7.0)	—	30	良好	白	SK13	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
12	瓦質土器	焙烙	(18.6)	4.2	(10.2)	AHIK	25	普通	橙	SK13	底部ヘラケズリ ほぼ酸化焰焼成 内面煤付着	
13	瓦質土器	焙烙	—	5.4	—	CHIK	5	普通	にぶい橙	SK13	底部ケズリ状の筋状痕 ほぼ酸化焰焼成	
14	磁器	坏	(4.9)	[4.7]	—	—	20	良好	白	SK14	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付	
15	磁器	皿	(6.0)	1.4	(3.1)	—	25	良好	白	SK14	肥前系 内外面施釉 内面染付 口縁歪む	
16	磁器	蓮華	長さ[5.7] 幅5.8 高さ[2.4]			—	30	普通	白	SK14	淡路珉平焼 内外面緑釉 内面型押陰刻文 底部ピン痕2遺存	
17	陶器	蓋	—	3.3	(6.8)	K	45	良好	灰白	SK14	京都信楽系カ 上面鉄釉(黄色系) 胎土緻密・硬質 最大径9.1cm	
18	かわらけ	小皿	(11.4)	1.3	(7.0)	EH	25	普通	にぶい橙	SK20	手捏ね成形 胎土中心部灰白色 SK24 接合	66-3
19	かわらけ	小皿	(10.6)	1.3	(5.6)	EHI	25	普通	橙	SK20	手捏ね成形 胎土中心部灰白色	66-4
20	磁器	碗	10.5	5.7	3.7	—	70	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱(弱)	
21	磁器	碗	7.7	5.3	3.8	—	90	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 被熱(弱)	
22	磁器	碗	9.1	4.7	3.6	—	50	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・色絵(赤・青・緑)	
23	磁器	碗	9.0	4.7	3.2	—	70	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面・口唇部酸化コバルト染付 SK22 接合	
24	磁器	碗	6.8	5.0	3.0	—	60	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
25	磁器	碗	6.8	4.8	3.1	—	90	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付	
26	磁器	碗	11.3	4.7	3.9	—	95	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・銅版転写染付	
27	磁器	坏	5.2	6.0	3.4	—	90	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 同文別個体2あり	
28	磁器	坏	6.2	4.5	2.8	—	95	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内面・高台内施釉 外面酸化クロム青磁釉・多色彩(緑・黒・茶) 高台内酸化コバルト染付 同文別個体1あり	
29	磁器	坏	6.9	4.3	2.6	—	100	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 同文別個体1あり	
30	磁器	坏	(6.6)	4.7	(3.6)	—	50	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付	
31	磁器	坏	6.4	2.9	2.8	—	45	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 体部中位隆線	
32	磁器	坏	6.8	2.6	2.4	—	30	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 口唇部金彩 内面上絵付(青・金)「くりはし/鯉こく」	
33	磁器	坏	5.8	2.3	2.2	—	45	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 内面上絵付(青)「玉川屋/秋葉」	71-11
34	磁器	皿	13.8	3.6	7.1	—	50	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台・輪状重焼痕	
35	磁器	皿	13.8	3.8	6.9	—	65	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台・輪状重焼痕 内面釘書「甞」被熱(弱)	71-12
36	磁器	皿	13.6	3.1	9.2	—	90	普通	灰白	SK21	肥前系 内外面施釉・染付 蛇ノ目凹形高台	
37	磁器	皿	15.0	4.7	8.8	—	45	良好	白	SK21	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕 底部焼継印(赤)	71-13
38	磁器	皿	14.8	4.2	8.4	—	30	普通	白	SK21	肥前系 内外面施釉 内面型紙摺絵染付 外面酸化コバルト染付 焼継痕 底部焼継印(赤)	
39	磁器	皿	9.6	1.9	4.4	—	80	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 内面型押陰刻文	
40	磁器	皿	7.0	2.3	3.2	—	90	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉 内面型押陰刻文	
41	磁器	皿	11.2	1.9	6.8	—	95	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・酸化コバルト染付 被熱(弱)	
42	磁器	皿	(26.4)	3.9	(16.0)	—	20	良好	白	SK21	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版
43	磁器	鉢	(21.4)	13.0	10.0	—	45	良好	白	SK21	肥前系 内外面施釉・染付 被熱(弱)	66-5
44	磁器	爛徳利	3.0	18.3	5.5	—	80	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 外面施釉・酸化コバルト染付	
45	磁器	蓋	3.8	2.8	(9.6)	—	30	良好	白	SK21	肥前系 内外面施釉・染付 焼継印(赤)	
46	磁器	蓋	3.5	2.4	8.6	—	100	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 灰色がかる	
47	磁器	蓋	—	3.5	5.6	—	60	良好	灰白	SK21	肥前系 内外面施釉 最大径 7.8 cm	
48	磁器	蓋	—	2.5	—	—	100	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 上面施釉・酸化コバルト染付 最大径 8.5 cm	
49	磁器	土瓶	(8.0)	[6.1]	—	—	25	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付	
50	磁器	急須	8.4	5.9	(7.0)	—	70	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉(白濁) 外面酸化コバルト染付	71-14
51	磁器	急須	(6.0)	(6.7)	6.6	—	15	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 接点のない上下2片から復元	71-15
52	磁器	水注	(9.6)	10.9	(8.6)	—	15	良好	白	SK21	肥前系 内外面施釉 外面染付・色絵(赤・緑)	
53	磁器	蓋物	9.3	5.0	4.9	—	95	良好	白	SK21	肥前系 内外面施釉 外面染付	
54	磁器	蓮華	長さ[8.5] 幅5.0 高さ[3.6]			—	90	普通	白	SK21	瀬戸美濃系 型成形 内外面施釉 内面陽刻文・染付	
55	磁器	植木鉢	(9.6)	8.1	5.2	—	25	良好	白	SK21	瀬戸美濃系 内面上位・外面施釉 高台挟り3	
56	陶器	碗	—	[4.3]	(4.4)	EHIK	10	良好	にぶい橙	SK21	肥前系 内外面刷毛目釉(打)	
57	陶器	灯明皿	(10.2)	1.9	(3.8)	I	30	良好	灰白	SK21	京都信楽系 内面施釉・ピン痕1 遺存 口縁部タール状物質付着	
58	陶器	灯明皿	6.4	1.4	3.2	K	60	普通	灰白	SK21	瀬戸美濃系 内外面柿釉 外面下位・底部釉拭き取り 外面下位輪状重焼痕	
59	陶器	徳利	2.6	20.2	7.2	K	100	普通	明褐灰	SK21	瀬戸美濃系 外面柿釉 底部釉拭き取り 体部凹ます	
60	陶器	鍋	(13.5)	6.7	7.0	I	50	良好	浅黄橙	SK21	内外面施釉 外面白土染付	
61	陶器	行平鍋	16.4	8.9	(9.0)	IK	70	普通	灰白	SK21	内外面柿釉 外面トビガンナ施文 内底面火ぶくれ	
62	陶器	行平鍋	(17.0)	9.0	(9.4)	K	20	良好	浅黄橙	SK21	内外面柿釉カ 外面トビガンナ施文 底部煤付着	
63	陶器	土瓶	(8.6)	(12.8)	(8.8)	K	80	良好	灰白	SK21	大堀相馬系 外面糠白釉 被熱(弱)	
64	陶器	土瓶	(8.1)	[11.0]	—	EIK	40	普通	灰白	SK21	松岡系 外面鉄釉・漆黒釉流し掛け 接点のない同一7片から復元	66-7
65	陶器	土瓶	(7.0)	[9.5]	—	K	70	普通	灰白	SK21	大堀相馬系カ 外面青緑釉 外面露胎部煤付着 被熱(弱)	
66	陶器	急須	(6.4)	[4.4]	—	—	25	良好	褐灰	SK21	萬古系 胎土炆器質 口唇部施釉・金彩 外面漢詩文陰刻	
67	陶器	蓋	4.6	3.4	(12.9)	K	50	良好	淡黄	SK21	内面灰釉 外面胎釉・白釉流し掛け 内面ピン痕5 最大径(15.6) cm	
68	陶器	蓋	—	3.9	7.8	—	100	良好	灰	SK21	上面白土染付・施釉 最大径 10.1 cm	
69	陶器	蓋	—	2.1	3.0	K	100	良好	淡黄	SK21	底部糸切痕 上面施釉・イッチン描き文 最大径 7.6 cm	
70	陶器	蓋	—	2.3	5.2	IK	100	良好	にぶい黄橙	SK21	胎土炆器質 最大径 5.6 cm	
71	陶器	播鉢	(20.0)	[6.9]	—	EGIKM	25	普通	にぶい赤褐	SK21	堺明石系 内面播目	
72	陶器	播鉢	34.7	12.6	15.0	EIK	55	普通	にぶい黄橙	SK21	益子系 内面播目 内外面柿釉	
73	陶器	香炉	11.0	8.1	6.8	DEIK	100	普通	灰黄	SK21	六角形 内面上位・外面白化粧・施釉 外面鉄絵 口唇部釉剥落	
74	瓦質土器	焙烙	(13.8)	[4.2]	—	CHI	75	普通	灰白	SK21	弱く燻す 外面煤付着	
75	土師質土器	目皿	—	[3.1]	(15.4)	CHIK	20	普通	にぶい橙	SK21	底部ヘラナデ 内面被熱(白色化)	
76	瓦質土器	十能	長さ 24.3 幅 17.4 高さ 4.0			CEIK	100	普通	灰白	SK21	下面シワ状痕 燻す 内面刻印「㊦」/「岩崎」	71-16
77	瓦質土器	火鉢	16.4	9.0	11.9	CIK	95	普通	灰白	SK21	底部ヘラナデ 口縁部ミガキ 外面トビガンナ状施文 燻す 口縁部敲打痕	
78	瓦質土器	火鉢	(30.0)	[12.1]	—	CHIK	10	普通	黄灰	SK21	口縁部ミガキ 外面スタンプ施文をナデ消し 燻す	
79	瓦質土器	火鉢	26.0	11.2	23.7	CHI	70	普通	黄灰	SK21	底部・外面シワ状痕 外面一部シワ状痕をナデ消し 燻す	
80	土師質土器	焙烙	(31.3)	4.4	—	CHI	45	普通	浅黄橙	SK21	底部シワ状痕 体部煤付着	
81	土師質土器	焙烙	32.0	5.1	31.5	CHIK	85	普通	にぶい橙	SK21	底部シワ状痕 体部下位ケズリ 補修痕3対(1対銅線付)	66-8
82	瓦質土器	籠鏝	(26.7)	3.1	29.9	CEHI	15	普通	浅黄橙	SK21	燻す 内・上・側面煤付着	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	遺構	備考	図版	
83	瓦質土器	器台カ	(27.6)	[6.2]	—	CHIK	10	普通	灰白	SK21	やや酸化焙焼成		
84	瓦質土器	焜炉	(21.2)	[16.8]	(19.0)	CHIK	60	普通	淡黄	SK21	砂目底 外面スタンプ施文後ミガキ 燻す 窓部は推定中筒欠失		
85	瓦質土器	蓋	—	3.1	26.8	CHI	40	普通	灰白	SK21	上面砂目・端部ケズリ 燻す		
86	土師質土器	焼塩壺	—	[3.8]	3.4	AHI	25	普通	浅黄橙	SK21	底部糸切痕(左) 胎土粉質		
87	土師質土器	焼塩壺	—	[2.2]	3.4	AHI	20	普通	にぶい橙	SK21	底部糸切痕(左) 胎土粉質		
88	土師質土器	焼塩壺	5.5	5.0	3.5	ACEHIK	95	普通	にぶい橙	SK21	底部糸切痕(左)		
89	土師質土器	蓋	5.6	0.8	5.4	AHJ	100	普通	にぶい橙	SK21	胎土粉質 焼塩壺の蓋 被熱		
90	土師質土器	蓋	5.6	0.9	5.2	AHIJ	100	普通	にぶい橙	SK21	胎土粉質 焼塩壺の蓋		
91	煉瓦	煉瓦	縦 [3.1]	横 [5.2]	厚さ [5.1]	重さ 46.5	IK	5	普通	明赤褐	SK21	手抜き整形 刻印あり	66-6
92	磁器	碗	(7.2)	4.7	(3.4)	—	25	良好	白	SK22	瀬戸美濃系 内面・高台内施釉 外面瑠璃釉 口紅		
93	磁器	坏	(6.2)	4.6	3.0	—	35	普通	白	SK22	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付		
94	磁器	皿	—	2.3	—	—	80	普通	白	SK22	肥前系 型成形 内外面施釉・染付 被熱(弱)		
95	陶器	行平鍋	16.9	[8.6]	—	IK	40	普通	灰白	SK22	内外面柿釉 体部中位釉拭き取り 外面トビガンナ施文 体部下位煤付着		
96	磁器	碗	—	[3.6]	—	—	5	良好	灰白	SK23	肥前系 内外面施釉 外面染付文字「板[屋]」	66-9	
97	磁器	碗	(8.2)	[3.2]	—	—	5	良好	白	SK23	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 口紅		
98	磁器	碗	9.2	5.2	3.2	—	90	良好	白	SK24	瀬戸美濃系 内外面施釉・染付 内面陰刻文 同文別個体1あり		
99	磁器	坏	(7.0)	2.7	(2.4)	—	30	良好	白	SK24	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 内面上絵付(緑・赤・金・黄・灰)		
100	磁器	蓋物	—	[7.9]	(8.8)	—	10	良好	白	SK24	肥前系 内外面施釉 外面染付・色絵(赤・金)		
101	磁器	急須	—	[1.5]	(5.7)	—	5	良好	白	SK24	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 焼継痕あり 底部焼継印(赤)	71-17	
102	陶器	坏	—	[2.1]	(4.2)	EIK	10	良好	灰黄	SK24	型成形 外面白土塗・施釉 外面陽刻文		
103	陶器	爛德利	—	[4.8]	(6.2)	IK	5	良好	にぶい橙	SK24	外面灰釉 底部墨痕	71-18	
104	瓦質土器	火鉢	—	[10.2]	(20.0)	CIK	5	普通	褐灰・黄灰	SK24	底部圧痕 体部トビガンナ状施文 燻す 接点のない上下2片から復元		
105	磁器	坏	(6.1)	2.9	2.4	—	40	良好	白	SK72	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面酸化コバルト染付 内面上絵付(青)「㊦」		
106	磁器	香炉	—	[5.4]	(8.2)	—	5	良好	白	SK72	肥前系 外面施釉・染付 高台内焼継印(赤)		
107	陶器	碗	—	[2.7]	—	K	5	良好	灰白	SK72	大塚相馬系 胎土砂鉄含む 内外面施釉 体部凹ます		
108	磁器	爛德利	—	[6.9]	5.4	—	30	良好	白	SK73	瀬戸美濃系 外面施釉・染付 底部釉文字		
109	陶器	香炉カ	—	[1.3]	5.6	EIK	10	良好	褐灰	SK95	内面布目痕 胎土極硬質 外面鉄釉		
110	軟質磁器	坏	6.4	3.9	3.0	—	75	普通	白	SK180	ヨーロッパ系 内外面施釉・銅版転写染付(フロー・ブルー) 高台内円形隆線・マーク 高台畳付に極小窯道具痕3あり	68-11	
111	陶器	土瓶カ	—	[6.1]	—	IK	5	普通	灰黄褐	SK180	外面青緑釉・陽刻文カ 内面櫛歯状工具ナゲ		
112	磁器	坏	—	[1.1]	2.0	—	30	普通	白	SK181	瀬戸美濃系 内外面施釉 外面染付 内面上絵付(青)		
113	磁器	鉢	—	[3.3]	(8.0)	—	15	普通	白	SK182	肥前系 内外面施釉・染付 焼継痕あり 高台内焼継印(赤)		

は銅版転写染付平碗である。最新期の陶磁器であるが、第22号土壙からの混入と考えられる。27は酸化コバルト染付の筒形坏である。非掲載遺物に同文の別個体が2個体認められる。28は酸化クロム青磁釉の端反形坏で、外面に緑・黒・茶の多色釉下彩が絵付けられる。高台内には酸化コバルト染付がみられる。非掲載遺物に同文の別個体が1個体認められる。31は器高が低い丸腰の坏で、体部に隆線が1条巡る。32は小坏で、内面

に上絵付で「くりはし/鯉こく」とみえる。栗橋宿舟戸町にあった鯉料理店「稻荷屋」に関わるものである。33は内面に江戸絵付けが施される薄手の小坏である。高台内側に段が付き、卵殻手坏に類似する。内面に江戸絵付けで「玉川屋/秋葉」がみえる。35は蛇ノ目凹形高台の皿である。弱く被熱し、内面に釘書きで「畚」の屋号が刻まれる。第8地点ではこの屋号が書かれた漆碗等が多くみられる。